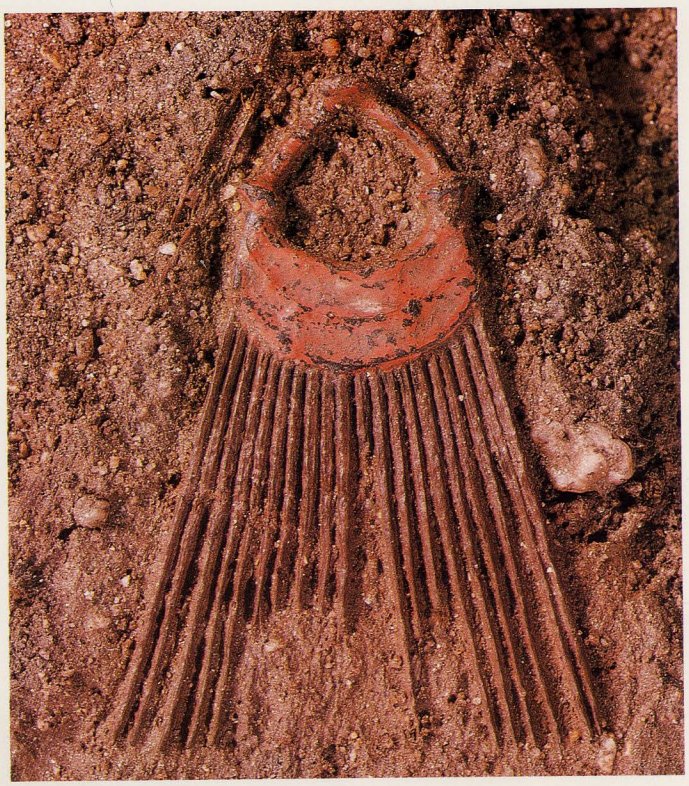
三重県埋蔵文化財調査報告 35-1

納所遺跡

——遺構と遺物——

1980・9

三重県教育委員会



竪　櫛（弥生時代前期）

彩文壺（弥生時代前期）

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が県土木部の執行委任を受けて、昭和48年10月から昭和50年12月にかけて実施した県道雲林院・津線バイパス建設にかかる納所（のうそ）遺跡の発掘調査報告である。

2．調査体制は、以下のとおりである。なお、（　）内は、調査・整理時点の所属である。

調査主体　三重県教育委員会

調査指導　服部貞蔵（三重大学教育学部教授）

調査担当　伊藤久嗣・吉水康夫（三重教育委員会文化課）

調査協力　三重県土木部道路建設課、同用地対策課、同農林水産部津耕地事務所、津市教育委員会中勢ゴム株式会社、春田工業株式会社、地元各位

3．調査を進めるにあたり、検出遺構の実測等には伊藤克幸・谷本鋭次・吉村利男（以上文化課）が随時参加のほか、藤原寛（三重県立博物館）・毛利光俊彦（元県立上野高校教諭）・松本幸夫（愛知学院大学学生）の協力を得た。

4．発掘後の出土遺物の実測および図版作成には、谷本鋭次・大西素行・駒田利治（文化課）・榎本義譲（松阪第四小学校教諭）・森田尚宏（県技術補佐員）・小田泰正（三重大学院生）・芦部公一（同大学学生）のほか、三重大学及び皇学館大学学生の協力を得た。なお、木製遺物の実測の一部については、町田章（奈良国立文化財研究所）・黒崎直（同）の各位の協力を得た。

5．遺物実測図・図版に付した遺物番号は共通し、遺物出土状況実測図と同解説文中の（　）の数字も共通する。なお、図版のみを掲載した遺物については、図版ごとに番号を付し、本文で照合した。

6．方位は磁北を示し、調査の基準としたバイパスセンター杭の直線部の方位はN26°30′Wである。

7．本書の遺構表示は、次のとおりである。

SB；竪穴住居址
SD；溝　　址
SX；方形周溝墓
SK；土　坑　墓

8．本書の弥生時代についての時期区分は、畿内第1様式の時期を前期、第2～第4様式の時期を中期、第5様式の時期を後期と表現した。

9．図版・地図のうち、以下のものは次の機関・個人から貸与を得た。記して謝意を表するものである。

巻頭カラー図版（櫛）　奈良国立文化財研究所平城宮跡調査部

図版1　航空写真　三重県農林水産部津耕地事務所

第1図　遺跡地形図　樋田清砂（三重県文化財保護審議会委員）

10．遺物整理と本文の執筆およびレイアウトは、伊藤久嗣が担当した。

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　次

I　前　　言……1

1．研　究　史……1

2．調査の経過……1

II　位置と歴史的環境……5

III　調査の結果……10

1．層　　位……10

2．遺　　構……10

1）弥生時代前期の遺構……11

2）弥生時代中期の遺構……16

3）古墳時代以後の遺構……32

3．遺　　物……33

1）縄文時代の土器……33

2）弥生時代の土器……33

3）古墳時代の土器……53

4）木 製 遺 物……59

5）石 製 遺 物……67

6）その他の遺物……73

IV　遺物・遺構の考察……75

1．土器について……75

2．木製遺物について……84

3．石製遺物について……85

4．遺構について……87

V　結　　語……92

表 目 次

第１表　納所遺跡の標準層位……10
第２表　竪穴住居址一覧表……22
第３表　広口壺型土器の文様構成(1)……35
第４表　甕型土器の文様構成(1)……37
第５表　広口壺型土器の文様構成(2)……40
第６表　木製遺物一覧表……60
第７表　石製遺物出土地区別一覧表……68
第８表　玉類一覧表……74
第９表　納所遺跡の土器編年表……75
第10表　広口壺型土器の文様構成……76
第11表　甕型土器の文様構成(2)……77
第12表　甕型土器の文様構成……78
第13表　伊勢湾西岸地方における土器の推移……80
第14表　石製遺物地区別出土率一覧表……86

挿図目次

第１図　遺跡地形図……3
第２図　調査地区と遺跡の範囲……3
第３図　安濃川流域の主要遺跡……6
第４図　主要遺構配置図(下層)……11
第５図　Ｂ地区下層杭列出土状況……12
第６図　Ｇ地区落ち込み木製遺物出土状況……13
第７図　Ｄ地区下層木製遺物出土状況……14
第８図　Ｆ地区下層・Ａ地区木製遺物出土状況…15
第９図　主要遺構配置図(上層)……17
第10図　ＳＢ１・２・６実測図……18
第11図　ＳＢ４・８・９実測図……19
第12図　ＳＢ３・５・７・10・11・12・15実測図……20
第13図　ＳＸ１・２～５　実測図……23
第14図　ＳＸ２・４　土器出土状況……24
第15図　ＳＸ３・５　土器出土状況……25
第16図　ＳＫ１・５・７実測図……28
第17図　ＳＫ３・８・９実測図……29
第18図　ＳＫ６・11実測図……30
第19図　縄文土器拓影……34
第20図　弥生土器実測図(第１様式)……36
第21図　弥生土器実測図(第１・２様式)……38
第22図　弥生土器実測図(第１・２様式)……39
第23図　弥生土器実測図(第１様式)……41
第24図　弥生土器実測図(第３・４様式)……44
第25図　弥生土器実測図(第３様式)……46
第26図　弥生土器実測図(第３様式)……47
第27図　弥生土器実測図(第３・４様式)……48
第28図　弥生土器実測図(第５様式)……50
第29図　弥生土器実測図(第５様式)……52
第30図　土師器実測図(古墳時代第Ⅰ期)……54
第31図　土師器実測図(古墳時代第Ⅱ・Ⅲ期)……56
第32図　土師器実測図(古墳時代第Ⅳ期)……57
第33図　土師器・須恵器実測図
　　(古墳時代第Ⅴ期)……58
第34図　木製遺物実測図……61
第35図　木製遺物実測図……62
第36図　木製遺物実測図……65
第37図　木製遺物実測図……66
第38図　石製遺物実測図……70
第39図　石製遺物実測図……71
第40図　Ａ・Ｂ地区遺構実測図・断面実測図　(別添)
第41図　Ｃ・Ｄ地区遺構実測図　(〃)
第42図　Ｅ・Ｆ地区遺構実測図・断面実測図　(〃)
第43図　Ｇ・Ｈ地区遺構実測図・断面実測図　(〃)
第44図　Ｉ・Ｊ地区遺構実測図　(〃)
第45図　土器編年図　(〃)
図版表紙　手焙型土器の特殊文様

図版目次

図版１　納所遺跡全景
図版２　調査前近景・調査中遠景
図版３　弥生時代前期の遺構
図版４　杭列・編篭出土状況
図版５　木製遺物出土状況
図版６　Ａ・Ｂ地区上層全景
図版７　Ｃ・Ｄ地区上層全景
図版８　Ｃ地区上層全景

図版９　B･D地区上層近景
図版10　E･F地区上層近景
図版11　H地区全・近景
図版12　I地区全・近景
図版13　J地区全・近景
図版14　竪穴住居址(弥生時代中期)
図版15　竪穴住居址(弥生時代中期)
図版16　竪穴住居址･土坑･編物(弥生時代中期)
図版17　土坑墓(弥生時代中期)
図版18　土坑墓(弥生時代中期)
図版19　土坑墓(弥生時代中期)
図版20　土坑墓(弥生時代中期)
図版21　木製遺物出土状況(古墳時代以降)
図版22　弥生土器(第１様式)
図版23　弥生土器(第１様式)
図版24　弥生土器(第１様式)
図版25　弥生土器(第１・２・３様式)
図版26　弥生土器(第３様式)
図版27　弥生土器(第３・４様式)
図版28　弥生土器(第３様式)
図版29　弥生土器(第５様式)
図版30　弥生土器(第５様式)
図版31　弥生土器(第５様式)
図版32　古式土師器
図版33　古式土師器・須恵器
図版34　縄文土器・弥生土器(第１様式)
図版35　弥生土器(第１様式)
図版36　弥生土器(第１・２様式)
図版37　弥生土器(第３・５様式)
図版38　木製遺物(琴型)
図版39　木製遺物(農具)
図版40　木製遺物(農具)
図版41　木製遺物(農具･工具･その他)
図版42　木製遺物(農具･工具･その他)
図版43　木製遺物(建築部材)
図版44　石製遺物(石斧)
図版45　石製遺物(石庖丁･石鏃)
図版46　石製遺物(石小刀･刃器)
図版47　石製遺物(石錐･磨製石剣･紡錘車･垂飾)
図版48　石製･土製遺物(砥石･叩石･土錘ほか)
図版49　玉類･鉄鎌･軒丸瓦

Ⅰ 前　言

1．研究史

津市納所町一帯の水田地域から、弥生土器・石製遺物などが出土することが注目されだしたのは、古く大正12年の春にさかのぼる。発見者は、三重県における考古学研究の開拓者の一人である鈴木敏雄氏であった。(「三重県に於ける弥生式土器並びに石器発見の遺跡調査(第２回)」)『名勝旧蹟天然記念物調査報告(第２回)』三重県（1923）

同氏はガリ版刷の私家本『安東村考古誌考』(1929)において、納所遺跡の東北方一帯で採集された弥生土器・土師器・須恵器・石器を紹介し、その挿図に現在の納所遺跡の範囲内に遺物が分布することを示されている。さらに、翌年『考古学雑誌』第20巻４号に、「伊勢に於ける弥生式の系統と分派」を発表し納所町の亀森神社から多量の弥生土器の出土を紹介している（第１図)。その後、当時尾張・三河地方を中心にして精力的に弥生文化研究に取組んでおられた吉田富夫氏は、東京考古学会誌『考古学』第８巻第６号（1936）に、「伊勢国弥生式文化」を発表され、三重県下における弥生土器の編年と分布について、一つの見通しを与えられた。同論文では、図示はされていないが弥生時代中期とされた櫛目式第１種土器のうち、刷毛目と磨消された部分とを交互に重ねる形式のものが、納所にも出土することが紹介されている。

さらに昭和29年、榧本杜人氏によってまとめられた『三重考古図録』(1954）に、納所遺跡出土遺物が紹介されている。同書は、三重県下における明治時代以来の出土品、採集品などの考古資料について、初めて総括的に報告されたものであるが、その３年前に奈良国立博物館で開催された『三重考古展』を契機として出版されたものであり、今なおその学術的価値は高い。この図録では、納所出土品として弥生時代中期の土器７点・磨製石斧１点・石鏃１点・土錘２点が紹介されるとともに、納所遺跡が安濃川流域における低地遺跡であることが広く認識されるに至ったのである。

このようにして認識されだした納所遺跡ではあったが、大正年間以来、連綿として水田が営まれ続け、後述するごとく昭和46年までは、ほとんど破壊されることなく、地中に埋もれていた。この間、昭和37年に県教育委員会が実施した三重県埋蔵文化財包蔵地調査により、周知の遺跡として「県登録番号1362」と付されて『三重県埋蔵文化財包蔵地一覧表』(1964)に登録された。次いで、昭和44年の津市教育委員会による津市遺跡分布調査をまとめた『津市遺跡地図』（1970）に「市登録番号34」として登録された。昭和46年、県教育委員会発行の『中南勢開発地域遺跡地図』(1971）にも記載されているが、それ以前刊行の一覧表・地図と同様に、遺跡の規模・遺構欄には記載がなく、地図上には約100ｍ四方の範囲が、納所遺跡として表示されているのみであった。

しかしながら、納所遺跡の安濃川流域における相当規模の弥生時代低地遺跡としての存在は、既に調査されていた鈴鹿市上箕田遺跡・一志郡三雲村中ノ庄遺跡などの大河川流域の低地遺跡の調査結果に基いて、広く県下の研究者に認識されていたのである。

2．調査の経過

昭和46年の冬、県教育委員会埋蔵文化財整理室をしばしば訪れていた中学生達によって、納所町一帯の排水路工事現場で多量の遺物が出土しているとの通報があった。この工事は県農林水産部耕地課と津耕地事務所による県営圃場整備事業であったが、急拠、県教育委員会事務局社会教育課係員による現地立会調査を実施し、整理箱で約10箱もの遺物が採集された。さらに、遺跡包含層が水田下の約１ｍに及ぶことと、遺構面が２層にわたる可能性があることが確認された。それと同時に、この排水路事業地域の北側一帯の水田部分が、県道雲林院・津線バイパス建設予定地として、県土木部によって既に買収済であることが明らかとなった。この県道バイパスは、

昭和50年に開催が決定されていた三重国体に伴なう道路網整備事業の一環として建設中の近畿自動車道関・久居線に取付く予定の道路であった。

昭和47年に県教育委員会社会教育課から独立した文化課では、以後、県土木部道路建設課・同用地対策課・津土木事務所と遺跡保存を前提とした協議を重ねることになった。この間、あらためて文化課係員による遺跡範囲のパトロールが実施され、バイパス建設予定地を含む、東西約500ｍ、南北約300ｍの地域にわたる遺物の分布が確認された。

この協議の結果、遺跡が広範囲にわたるため路線変更は不可能であり、遺跡北西方の地域において既に着工中であることや、東方の安濃川架橋工事との関連、さらには用地が買収済であるため、既定の建設工程の変更は工期に時間的余裕のないことで無理であることなどが明らかになった。そのため、建設工事に先立つ事前調査の実施が検討されるに至り、調査費用の全額を県土木部で負担し、その執行委任を受けた県教育委員会を調査主体とし、文化課が発掘調査を担当することとなった。

本調査に先立って、２×４ｍのトレンチによる試掘を遺跡をほぼ東西に横断する20箇所で実施し、東方の安濃川堤防に近い部分は遺構・遺物が存在しないことが明らかになった。この結果に基き、道路幅４車線の25ｍ、遺跡東西幅500ｍの面積12,500㎡について調査を実施することとなった。

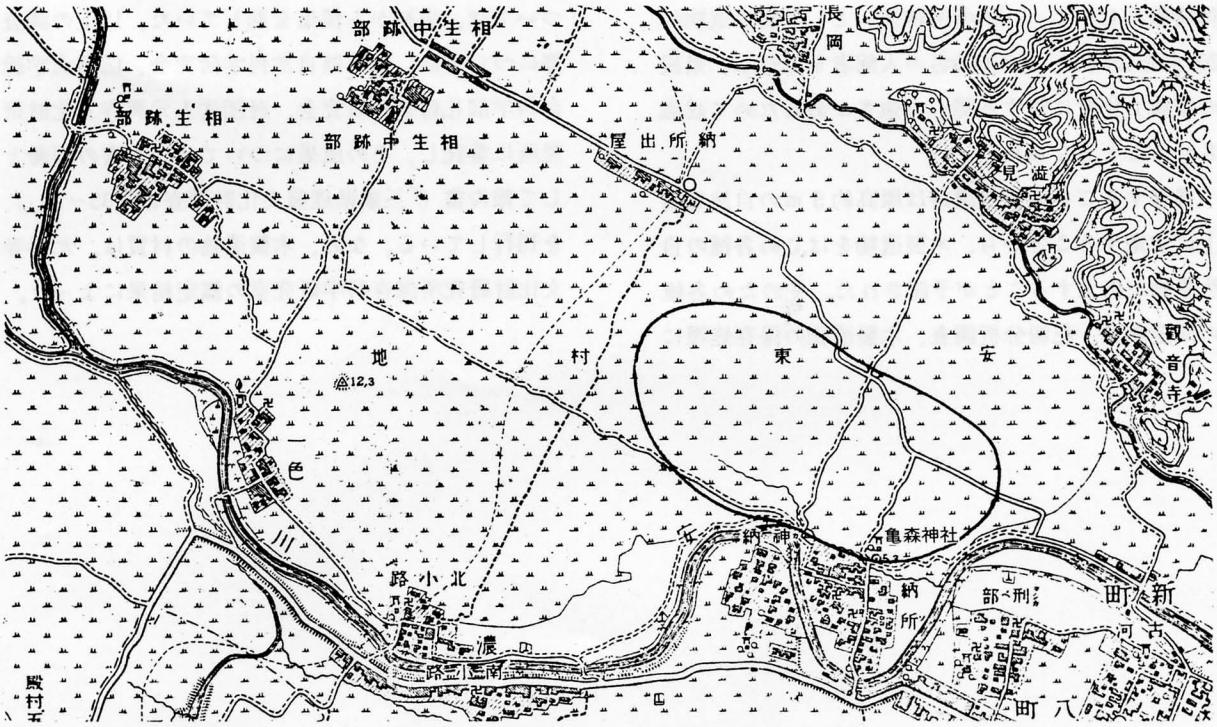
発掘調査計画は、昭和48・49・50年の３ヶ年でバイパス建設予定地を調査することとし、引続きバイパスに直交する取付道路敷（地下道）について調査することになった。ただ、バイパス建設工事との関連で、まず北側２車線部分の調査を先行する必要が生じたため、調査地域がほぼ南北に分断せざるを得ないこととなった。

調査は、バイパス建設予定地のセンター杭No.30～No.60の間について、４×４ｍの方眼で区切った地区を最小単位とし、南北側をアルファベット、東西側を数字で表示したものを組み合わせた。なお、表土及び遺構調査における排土置場は路線内で処置する必要があるため、以上の調査地区を西側から任意の幅でＡ～Ｈ地区としたが、調査途中でＨ地区の東側を再度試掘の結果、遺物包含層は存在したが遺構が認められなかったため、バイパス本線部分についてはＨ地区までとした。なお、調査の後行した南側車線敷については、便宜上、Ａ′～Ｆ′地区として遺構表示し、取付道路の東側に当るＧ・Ｈ地区については、工事の進捗状況を勘案して４車線全域を同時に調査することになった。本書では、この南側車線については、Ａ～Ｆ地区と一括して呼称している。さらに、取付道路部分の北側をＩ地区、南側をＪ地区とした（第２図）。

昭和48年10月16日に開始したバイパス本線部分の調査は、上層の弥生時代中期の遺構面で多数の遺構を確認し、さらにその下層の弥生時代前期の自然流水路から多量の木製遺物が出土したことによって、当初の調査計画から遅延することになり、そのつど文化課と上記関係部局との協議が実施された。この間、昭和49年秋の大雨による調査事務所の床上浸水などにより一部の調査記録に大きな被害を受けたが、昭和50年４月以降にはバイパス本線に直交する取付道路敷の南北両地区（Ｉ・Ｊ地区）に着手し、同年12月初旬に、当初の調査予定地域の12,500㎡の調査を終了した。

調査の進行に伴ない、遺存状態が良好な遺構と遺物が多数確認されたことや、昭和49年９月には、Ｆ地区下層の弥生時代前期の自然流水路中から「琴型木製遺物」が出土するに及び、県内外からの見学者が激増するとともに、バイパス建設地域と周辺の遺跡部分の保護についての関心が急速に高まった。同年12月、三重の文化財と自然を守る会（代表：服部貞蔵・三重大学教授）によって、納所遺跡の保存についての請願書が三重県議会文教委員会に提出され（請願第256号）、12月19日の文教常任委員会で賛成多数によって採択されることとなった。この請願項目のうち、遺跡範囲確認調査の要望を受けた文化課は、同年12月末に文化庁文化財保護部記念物課と協議を行ない、昭和50年度国庫補助金事業として、翌昭和51年１月から３月にかけて納所遺跡範囲確認調査を実施し、その調査報告は既に刊行している。

なお、調査に併行して、数回の現地説明会と遺物展示を行なったが、毎回100～150名もの参加者があり、遺跡の調査と保存問題について貴重な教示を得た。また、昭和49年５月から７月にかけて三重県立



第1図　遺跡地形図(1：20000)　明治25年帝国陸軍陸地測量部(高野尾村・久居町を綴合複製)

第2図　調査地区と遺跡の範囲

博物館において、「納所遺跡展」として出土遺物約200点を公開し、約3,000名の入館者を記録し、県民の埋蔵文化財に対する関心の強さがあらためて認識されることとなった。

後述するごとく、本遺跡は標高約５ｍの自然堤防上に立地することから、木製遺物をはじめ各種の自然遺物が出土することが予測された。そのため各種の同定調査、花粉分析調査、木製遺物の保存処理については、当初から慎重を期していた。以上の調査等については、三重県自然科学研究会、広島大学総合科学部花粉分析研究会、財団法人元興寺文化財研究所に委託し、その成果については、本書の別冊として報告書（「三重県埋蔵文化財調査報告35－２」）を刊行している。なお、木製遺物の材質は、元興寺文化財研究所保存科学研究室の鑑定結果によった。

II　位置と歴史的環境

伊勢平野は、南北90kmにおよぶ弓状に弯曲した細長い沖積平野であり、ほぼ東西に貫流する鈴鹿、安濃、雲出、櫛田、宮川などの大河川によって形成され、北部を揖斐・木曽・長良川の三大河川によって尾張・美濃地方と区切られている。その西側は、鈴鹿山脈、布引山地により近江・伊賀・大和地方と境を接し、とりわけ大和と尾張を結ぶ要衝の地でもあった。

伊勢湾へ注ぐ主要河川のうち、津市西郊に沖積平野を形成した一級河川安濃川は全長約30kmにわたっている。その水源は、鈴鹿山脈錫杖ガ岳付近に発しており、標高820mの経ヶ峰の山峡を形成し、その東麓部を蛇行して安芸郡安濃町を経て津市域を南東に貫流している。その河口には広大な三角州が発達し、中世の日本三津として栄えた安濃津や、近世には藤堂藩によって城下町・宿場町としての津が殷賑をきわめ、現在の津市域の基礎を固めた。安濃川が形成した沖積平野は、ほぼ北西から南東に向って約10km連らなり、その左岸に平行して標高約50mの第3紀鮮新世の奄芸層群からなる見当山低位丘陵と、右岸には標高321mの長谷山から延びる丘陵や、長谷山の東南麓の岩田川で北西部を区切られた半田丘陵にはさまれている。このうち、見当山低位丘陵の裾を流れる美濃屋川、長谷山東麓の穴倉川は安濃川に合流し、納所遺跡の位置する地域では、南北に幅約3kmと最も広い平野を形成している（第3図）。

納所遺跡は、安濃川が津市街地の北西部で大きく蛇行する部分の左岸一帯の自然堤防上に位置し、現地形は標高4.5～5.4mの水田地帯であり、行政上は津市納所町に属している。河口の改修が行なわれていなかった戦前には、満潮時に納所遺跡の上流約2kmの穴倉川との合流地点付近までも、潮が遡っていたと古老は伝えている。明治25年作成の地形図には半折型の条里地割が明瞭に認められるが、条里地割は安濃川上流域の河岸段丘上にも認められ、海岸線に沿う方向でN30°Eに統一されている。[1] 津市四天王寺蔵の平安時代の薬師如来像胎内発見の康平5年（1062）銘をもつ「民部田所勘注四天王寺領田畑事」（『平安遺文』980号文書）によれば、納所遺跡は五条三里の上岡里、六条四里の枚板里に当っている。

奈良・平安時代の条里地割施行以前における安濃川流域の開拓の歴史は、中勢地域でも有数の遺跡群の存在が物語っている。安濃川流域の歴史については、現在のところは縄文時代中期を遡らないが、右岸の半田丘陵の裾を流れる岩田川に沿う津市野田地内と半田地内で数片の縄文中・後期土器が採集されており、晩期の遺跡として納所遺跡の北西約3.5kmの美濃川流域の辻の内遺跡[2]から粗製深鉢が出土しているにすぎない。

奈良盆地から上野盆地を経て伊勢湾西岸へ到達した弥生文化は、伊勢湾に注ぐ一大河川流域に母村（拠点的集落）ともいうべき大型集落をいくつか形成しているが、安濃川流域から約12km南方の一級河川雲出川にほど近い一志郡三雲村中ノ庄遺跡[3]に最初の足跡を残している。弥生時代前期の中段階の頃である。以後、斉一的な遠賀川式土器を携えた弥生人達は伊勢湾岸を北上し、安濃川流域にも足跡を留め納所遺跡を形成していったのである。その展開は後述するごとくであるが、安濃川流域における稲作の開始は、納所遺跡をいわば母村として展開し、半田丘陵の上村遺跡[4]でも若干の遺物が出土している。弥生時代中期にはその流域に多数の遺跡が形成されているが、とりわけ左岸の見当山低位丘陵の裾を流れる美濃屋川に沿って亀井遺跡[5]・辻の内遺跡・北端遺跡[6]が形成され、右岸の半田丘陵域にも上村遺跡など若干の足跡を残している。さらに弥生時代後期に入ると、養老遺跡[7]・竹川遺跡・森山遺跡・桐山遺跡・高松遺跡[8]・平栄遺跡[9]・野田遺跡[10]などの小規模な遺跡が爆発的に増加し、それまで低湿地に占地していた遺跡が比較的高い立地の流域南北の低位丘陵上やその裾部に移動していく。こうした一連の動向はそれまで長い歴史を保有していた木製農耕具に代って鉄製農耕具が使用されることにより、開墾がより進展した結果に外ならないのであるが、その背景に安濃川流域を

第3図　安濃川流域の主要遺跡（国土地理院 1：25000 津東部・津西部）

1. 納所遺跡
2. 養老遺跡
3. 竹川遺跡
4. 森山遺跡
5. 桐山遺跡
6. 亀井遺跡
7. 清水西遺跡
8. 北端遺跡
9. 辻の内遺跡
10. 日余1号古墳
11. 君ケ口古墳
12. 高松弥生墳墓
13. 高松遺跡
14. 上村遺跡
15. 神戸銅鐸
16. 藤谷埴輪窯址
17. 久居古窯址
18. 大ケ瀬遺跡
19. 大ケ瀬弥生墳墓
20. 平栄遺跡
21. 新畑遺跡
22. 坂本山古墳群
23. メクサ古墳群
24. 平田A5号古墳
25. 明合古墳
26. 堂山1号古墳
27. 長谷山古墳群

占めていた遺跡間の動向には、畿内や尾張・三河との頻繁な交流を見逃すこともできない。三重県下には現在まで10個の銅鐸が出土しているが、地理的・歴史的に常に畿内との接触が強い伊賀地方に4個が出土しているのを別としても、この安濃川流域で2個の銅鐸が出土している。弥生時代中期に製作されたと考えられている外縁鈕式銅鐸1個が半田丘陵の神戸地内から出土し、それは大阪府八尾市恩智銅鐸や他の2鐸と合せて同じ鋳型で製作されたものである。さらに、弥生時代後期に製作されたと考えられている地方的色彩の強い三遠式銅鐸1個が神戸鐸の約2㎞北西に当る野田地内から出土している。こうした銅鐸による祭祀が、遺跡間相互の結合を背景として盛行していくとともに、銅鐸の配布元ともいうべき畿内なり尾張などとの政治的な結合関係も振幅をみせていることが推定されるが、これらの動向を背景として平野の集落内に営まれていた方形周溝墓がその占地を丘陵部に移していく。半田丘陵周辺の高松弥生墳墓[11]・大ヶ瀬遺跡[12]における方形台状墓がそれであり、それらを産み出した弥生時代後期の遺跡の実態も最近の調査によって次第に明らかにされてきている。

安濃川流域の開拓は、古墳時代以降も続けられ、後期頃までにはその沖積平野の大半の開拓が了えられていたものと考えられている[13]。鉄製農耕具の普及がもたらした開拓の進展は、古墳時代の遺跡の消長にも認められるが、前代に引続いて遺跡が丘陵部に占地するものと、再び沖積平野に占地する場合の2様相があり、調査面積の少なさから両者の性格の差についての究明はまだ端緒を迎えた段階であるといえよう。既に4世紀中葉から後葉頃にかけて、伊勢湾沿岸の主要河川流域の沖積平野を見降す丘陵部に、古式の前方後円墳・前方後方墳が築造され出していた。安濃川流域では、これら古式古墳の存在は現在確認されてはいないが、おそらく1600年もの深い眠りから醒める日も近いものと思われる。現在のところ、長谷山東麓の津市片田志袋町に所在する坂本山古墳群[14]が安濃川流域で最古の古墳であり、4世紀末葉頃の築造と考えられる。坂本山古墳群は、3基の円墳と5基の方形墳から形成されており、円墳1基の墳麓から供献されたと思われる古式土師器壺・器台が出土し、木棺直葬の主体部から副装された鉄製武器・工具が出土している。

安濃川流域には10数基の前方後円墳が確認されているが、発掘調査されたものはなく、実態は全く不明である。おそらく、大半は古墳時代中期から後期に築造されたものと考えられるが、こうした前方後円墳とは別に、安濃川流域の古墳の中でも形態的に特徴あるものとして、方形墳の存在が多いことが注目される。こうした方形墳の在り方は、この地域の豪族層が独自性を保有していたのではないかとも考えられているが、なかでも安濃川中流域右岸の丘陵上の安濃町明合に位置する国指定史跡の明合古墳[15]は際立った様相を示している。明合古墳は、1辺約60m、高さ約8.5mの大型方形墳で、墳丘は2段築成で南辺と北辺に方形の造り出しをもち、外部施設として円筒埴輪・葺石が認められ、一部に空濠が巡っている。かつて8基あったと伝えられる陪塚は、現在3基しか残っていないが全て方形墳であった。築造は5世紀前葉から中葉頃にかけての時期と考えられるが、おそらく被葬者は安濃川中流域における首長層と推定され、下流域の津市池の谷に位置する全長約80mの池の谷古墳（前方後円墳）の存在とともに安濃川流域における首長権のあり方が注目されるのである。なお、6世紀前半頃に築造されたメクサ古墳群[16]は9基の方形墳で構成された木棺直葬墳であり、日余1号墳[17]も1辺約15mの方形墳で主体部は木棺直葬であり、堂山1号墳[18]も木棺直葬を主体部とする方形墳である。

安濃川の中流域右岸にある標高321mの長谷山周辺には、総数400～500基にも及ぶ径約10mの横穴式石室をもつ小円墳群からなる長谷山古墳群[19]がある。その多くは古墳時代後期の6世紀後半から7世紀前半にかけて築造されたもので、尾根上に数基から数10基で支群が形成されている。なかには、全長約30mの小型前方後円墳も3基あり、盟主的性格をもつものと考えられている。各支群中にはこうした小型前方後円墳とは異なり、他の円墳にくらべてやや大型の小支群の盟主的性格をもつ古墳も調査されている。安濃町妙法寺にある平田A5号墳[20]は、長谷山古墳群中やや東方の安濃川に近い丘陵上に位置しているが直径約18m、高さ約2.5mの円墳であり、大小2基の

横穴式石室が平野を見降す方向に開口していた。両石室はともに羨道部に階段状施設があり、南鮮系石室との類似が指摘されている。同時期の古墳は安濃川左岸一帯には比較的すくないが、津市長岡町の見当山低位丘陵上にあった6世紀前半頃に築造された君ヶ口古墳[21]は、横穴式木芯室であり、周辺に村主・刑部・長岡などの渡来人系の存在を思わせる地名が残ることからも注目されている。

古墳時代後期の集落遺跡の調査例も県営圃場整備事業の進行に伴ない次第に増加しつつあるが、なお断片的な様相が確認されているにすぎない。ただ、この時代の安濃川をはさむ地帯における古墳分布の対象的な疎密の背景には、安濃川中・下流域全体の集落の墓域として長谷山山麓が位置づけられていたことを推定させないでもない。安濃川左岸には現在まで横穴式石室は欠如しており、上述の特異な構造をもつ君ヶ口古墳が目立つ程度である。さらに右岸の半田丘陵においては後期古墳は木棺直葬墳が多く横穴式石室は高松C遺跡[22]で1基確認されたにすぎない。以上の後期古墳のあり方から、6世紀後半から7世紀前半にかけての安濃川流域一帯の集落群において、古墳築造という面で一定の規制が背景に存在していたのではないかとも考えられるのである。[23]

古墳時代の生産遺跡としては、これまで久居古窯址[24]が伊勢湾西岸で最古形式の須恵器窯として確認されていた。近年はさらに安濃川流域に近い丘陵部で藤谷埴輪古窯址[25]2基が調査され、久居古窯址と同時期の須恵器とともに人物・家・鶏・馬・盾(靫か)などの形象埴輪や円筒埴輪が多量に出土した。安濃川流域には須恵質の円筒埴輪をもつ古墳もいくつかあり、今後は集落遺跡から出土する坏・高坏・壺・甕などの日常容器類とともにこうした古墳への埴輪供給の実体を具体的に究明する必要が生じてきている。

安濃川流域一帯は律令制下の旧安濃郡に属し、「建部、村主、内田、英太、跡部、長屋、石田、駅家、片縣[26]」の9郷があり、納所遺跡は建部郷に属したものと思われる。奈良時代以降の集落遺跡についての調査例は乏しいが、安濃町北浦遺跡[27]では奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居址・掘立柱建物址がまとまって確認され、村主郷に属したものと推定している。納所遺跡周辺にも、養老遺跡・森山遺跡・桐山遺跡など弥生時代や古墳時代の遺物を伴なって奈良時代から鎌倉・室町時代にわたる小規模な遺跡がみられる。

平安時代後葉以降、安濃川流域はおおむね伊勢神宮領となり、平安時代末葉には神宮の御薗・御厨として経営され河口の安濃津は隆盛をきわめていった。以後、室町時代には南北町以来蟠踞していた長野氏の擁するところとなり、安濃川流域の丘陵部に多数の中世城館址[28]が存在している。

註

(1) 仲見秀雄「奄芸・安濃・一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』1979
(2) 伊藤克幸・下村登良男『安芸郡安濃村・辻の内遺跡』安濃村遺跡調査会 1975
(3) 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972
(4) 吉村利男『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1972
(5) 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』4 三重県教育委員会 1973
(6) 前掲(2)
(7) 下村登良男・谷本鋭次『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972
(8) 三重大学歴史研究会古代史部会「津市高松弥生遺跡について」『古代学研究』37 1964
(9) 伊藤久嗣・谷本鋭次『近畿自動車埋蔵文化財調査報告』I 三重県教育委員会 1973
(10) 駒田利治『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会 1974
(11) 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会 1970
(12) 前掲(9)
(13) 前掲(2)
(14) 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墳墓群』津市教育委員会 1970
(15) 三重大学歴史研究会古代史部会「三重県安芸郡明合方墳について」『ふびと』23 1965
(16) 三重大学歴史研究会古代史部会『メクサ4号墳発掘調査報告』津市教育委員会 1972
(17) 吉村利男『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告』II 三重県教育委員会 1974
(18) 小田泰正ほか『堂山一号墳』安濃村教育委員会 1974
(19) 小玉道明「津市長谷山古墳群について」『三重の文化』15 1958

(20) 1974年度に安濃町教育委員会調査
(21) 萱室康光『君ヶ口古墳発掘調査報告』津市教育委員会 1974
(22) 1975年度に津市教育委員会調査
(23) 吉水康夫氏の御教示による
(24) 小玉道明・山沢義貴『久居古窯址群発掘調査報告』三重県教育委員会 1968
(25) 萱室康光『津市半田藤谷埴輪古窯址群発掘調査概報』津市教育委員会 1976
(26) 池辺 彌『和名類聚抄郷名考證』吉川弘文館 1966
(27) 伊藤久嗣「安芸郡安濃町・北浦遺跡」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』3 三重県教育委員会 1979
(28) 『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976

III 調査の結果

1．層　位

納所遺跡の層位は、基本的に６層で形成されている(第１表)。ただ、安濃川の自然堤防上に立地しているため、細部については複雑な様相を示している。第１層は、耕作土と床土である。調査地域の西端のＡ地区では標高約4.5ｍ、Ｃ・Ｄ地区では最も高く約5.4～5.1ｍを測り、東端のＨ地区では4.5～4.7ｍである。取付道路の北側のＩ地区北部では標高約４.3ｍ、南側のＪ地区南部で4.7ｍを測るが、Ｊ地区南部は県営圃場整備事業の際に新たに耕作土を盛土したために高くなっている。基本的にＣ・Ｄ地区がやゝ微高地で、戦前には両地区の北側一帯も微高地が続いていたとのことであった。第２層は、少量の古墳時代から中世にかけての遺物包含層で、Ａ地区とＢ地区西側及びＨ地区に分布し、全体に褐色のマンガン粒が沈積している。第３層は、Ａ地区とＢ地区西側を除く全地域にみられ多量の弥生時代中器の土器が出土した遺物包含層であり、層の上半部に水酸化鉄が帯状に沈積している。第４層は、その上面全体にわたって多数の弥生時代中期の遺構面があり、Ａ地区を除いて全地域に分布するが、Ｃ地区北部で標高約4.5ｍと微高地を呈し、Ｈ地区では約3.7ｍ、Ｉ地区北部では約3.5ｍ、Ｊ地区南部では約3.6ｍと緩かに下降している。なお、第４層上面における弥生時代前期の遺構は、Ｇ・Ｉ・Ｊ地区で僅かに検出したにすぎない。第５層は弥生時代前期の落ち込み状の自然流水路で多量の弥生土器・木製遺物が出土し、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ地区と、Ｇ地区の一部で検出した。このうちＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ地区では、上部に酸化した茶褐色砂質土層、下部に有機質を多量に含んだ青灰色粘質土のみが堆積していた。なお弥生時代前期の自然流水路が無い地域は、第４層の下部で、次に述べる地山の第６層に達している。第６層は、灰白色の砂礫層で無遺物層の地山であり、自然流水路に近接した地域では茶褐色を呈している。同層以下は砂礫層が互層をなし、約１～２ｍ下部で青灰色粘土層に達している。

2．遺　構

今回の調査で検出した遺構は、大きく３時期に分けられる。弥生時代前期、同中期、古墳時代以後のものである。そのうち、Ａ～Ｆ地区については、工事の進行上北側と南側の２地域に調査が分断された。調査の先行した同地区の北側では、下層遺構を引き続き調査したため、多量の湧水による南側セクションの崩壊が生じ、南側地区の調査時点でその崩落を防ぐための排水溝を重機で掘削したので、遺構の接続関係が不分明になった部分が相当数ある。この部分の遺構は、点線により推定表示した。（図版１・２・６～13、第４・９・40～44図）

第１表　納所遺跡の標準層位

層　名	色調・土質	層　厚	遺物と特色
第１層	黒色砂質土	30 cm	耕作土・床土
第２層	灰褐色砂質土	20 ～ 30 cm	須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶椀 全体に褐色のマンガン粒が沈着
第３層	茶褐色砂混り粘質土	40 ～ 60 cm	弥生土器の包含層、層の上半部に水酸化鉄が沈着
第４層	灰黄褐色砂質土	30 ～ 50 cm	層上面に遺構検出（第１～４様式）
第５層	青灰色粘土	50 ～ 80 cm	弥生前期の自然流水路（埋積浅谷）
第６層	茶褐色～灰白色砂礫		地山、下方に暗青色含貝の有機質粘土層が堆積

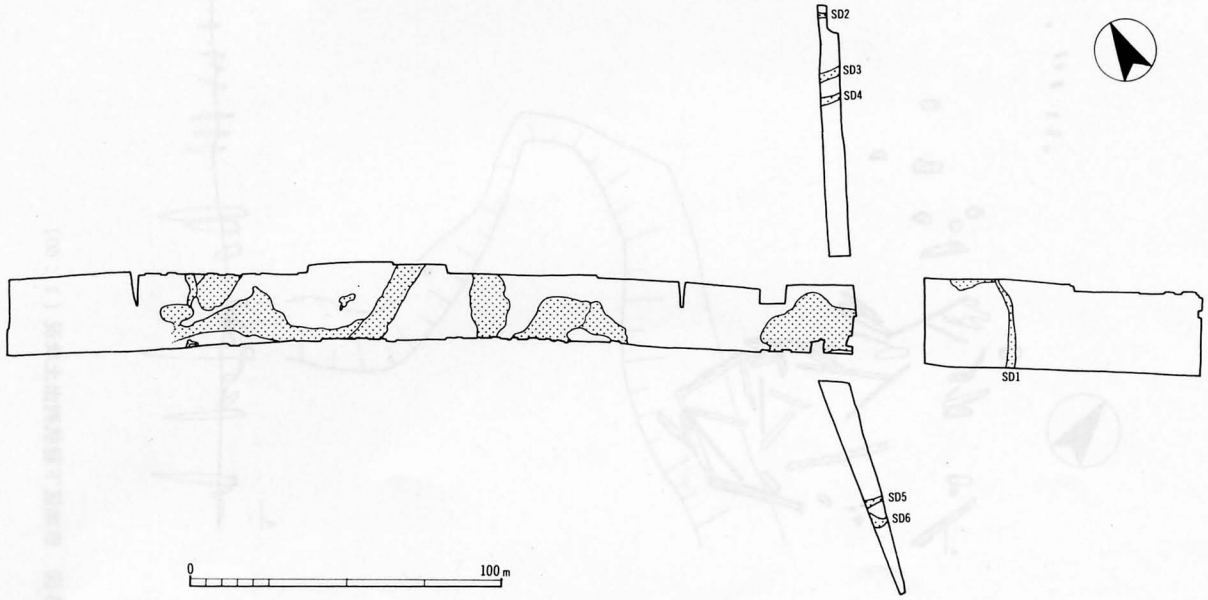
1) 弥生時代前期の遺構

(1) 自然流水路・落ち込み（図版３～５、第５～８図）

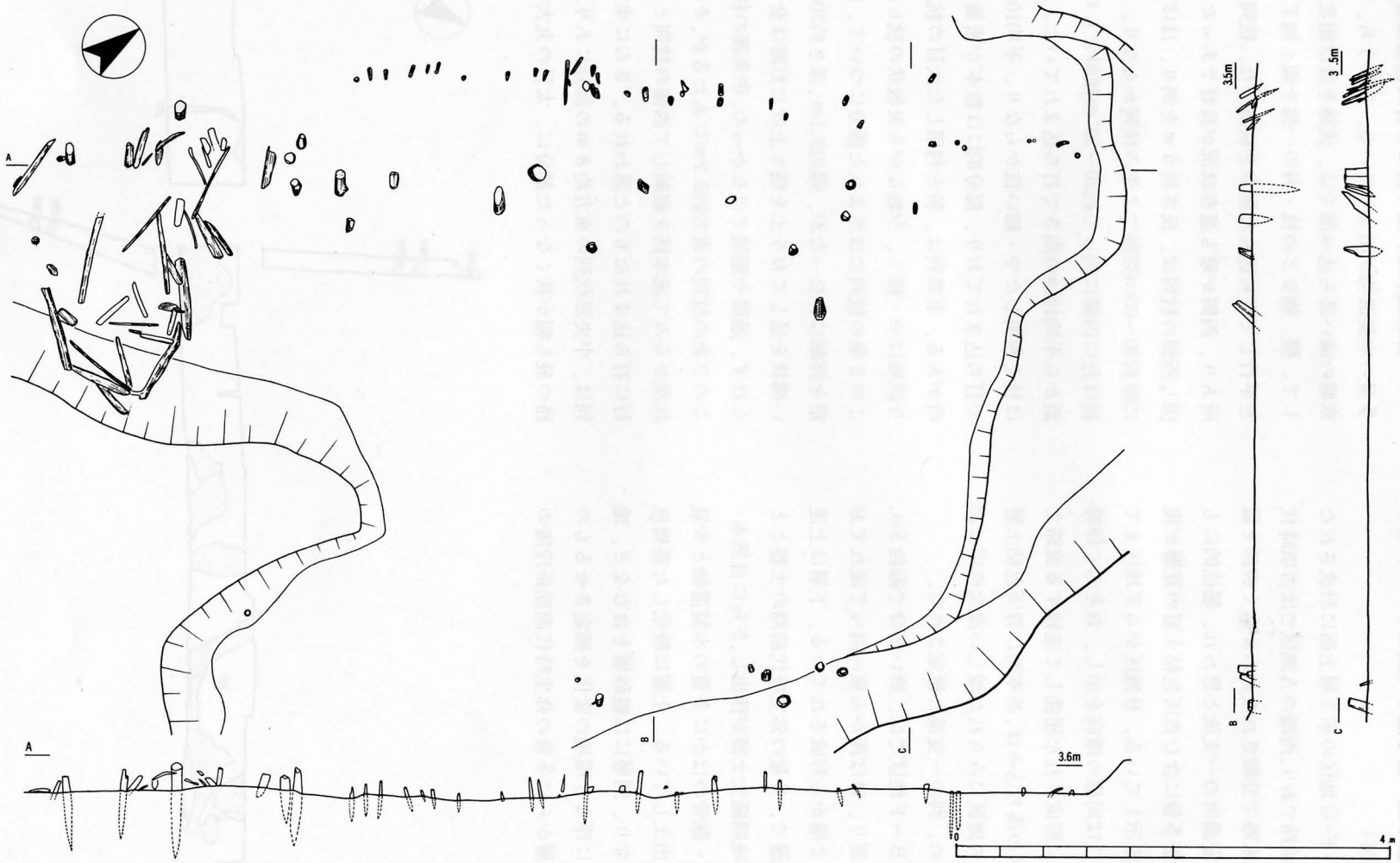
B・C・D・E・F・G地区の第５層上面に形成された不定形の自然流路であり、西端のA地区では古墳時代以後の自然流水路で分断されたためか全く痕跡を留めていない。安濃川の一支流と思われ、層位的にも砂層と有機物を多量に含む青灰色粘土層の互層が複雑な堆積状況を示している。B地区からF地区までは、層位的にほぼ同様の傾向を示し、おそらく伊勢湾の後背湿地に形成された屈曲して連続する流路であろう。G地区の落ち込みは、基本的に青灰色粘土層からなり、他の地区にみられた激しい流水作用は認められないため、別の一支流と推定された。

とりわけ、B～F地区では、狭い部分で幅約５m、深さ約80cmを測り、ほぼ西から東へ向って流れており、基本的に２層から形成されている。下層は上述の青灰色粘土層で、多量の弥生時代前期の土器とともに、少量の晩期縄文土器が伴出し、さらに自然木・木葉・種子・実・獣骨のほかに多量の木製遺物と少量の石製遺物が出土している。上層は酸化した茶褐色砂質土層からなり、間層には粗砂層を含むなど、地下水位の上昇に伴なう環境の変化を推定させるものであった。同層からは多量の弥生時代前期新段階の土器が出土し、明瞭に下層出土の土器群との差異が認められた。

この自然流水路、落ち込みの青灰色粘土層中には多量の木製遺物が出土している。そのうち、B地区東側の深い落ち込み部では、流路をほぼ南北に縦断して、樫、椎などの枝・幹の一端を鋭く加工した杭を平行して打ち込んだ部分を検出した。杭列は３箇所あり、西側が最も遺存状況が良好であった（第５図）。西側の杭列は、長さ約５mを測り、ほぼ直線的に幅約40～60cm間隔で２条の杭列からなり、両条の杭は互に内側に向って約20～30°の傾斜をもち、地山面から平均10cmの高さで打ち込まれていた。西側列は枝を利用したやゝ細い杭からなり、平均10cm間隔で打ち込まれており、部分的には数本が密集する箇所がある。東側列は、幹を利用した太目の杭からなり間隔はやゝ粗く、少数ながら矢板状の杭もあった。この２条の杭列にはさまれた部分について、断面観察を詳細に行なったが、幅約2.1m、深さ約30cmの浅い溝状を呈しており土を盛り上げた形跡は全く認められず、通路や堰堤ではなかった。中央部の杭列は、この２条の杭列の東方約2.2mにあたるが、その遺存状況からみて流水路を縦断して西側の杭列とほぼ平行に打ち込まれたものと思われる。さらに東側の杭列は、中央部杭列の東方約８mの部分にあり、流水路の最も幅が狭くなった部分に、太目の丸太杭が流



第４図　主要遺構配置図(下層)　網目は自然流水路・落ち込み・溝址

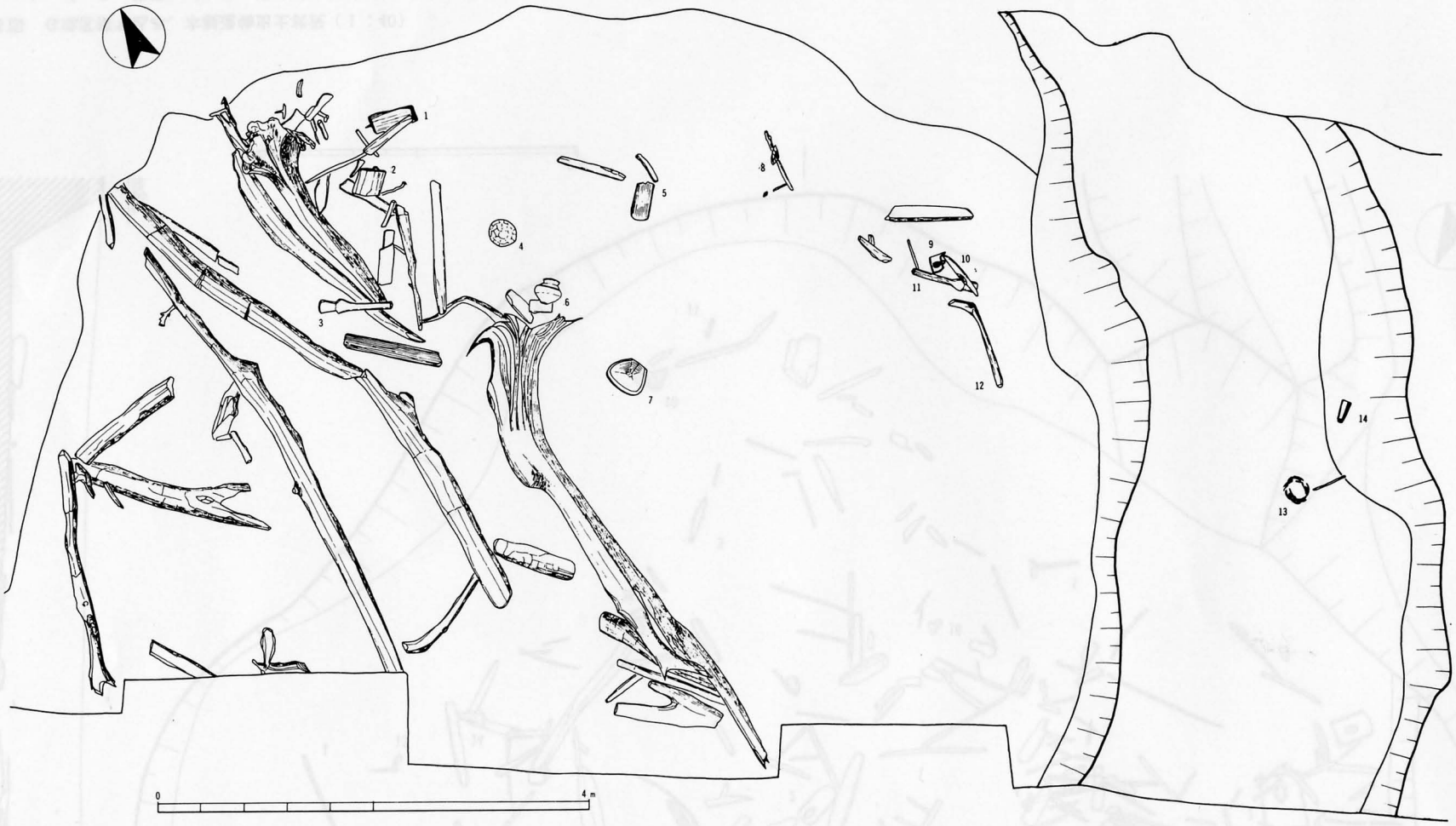


第５図　Ｂ地区下層杭列出土状況（１：60）

第6図　G地区落ち込み、木製遺物出土状況（1：40）

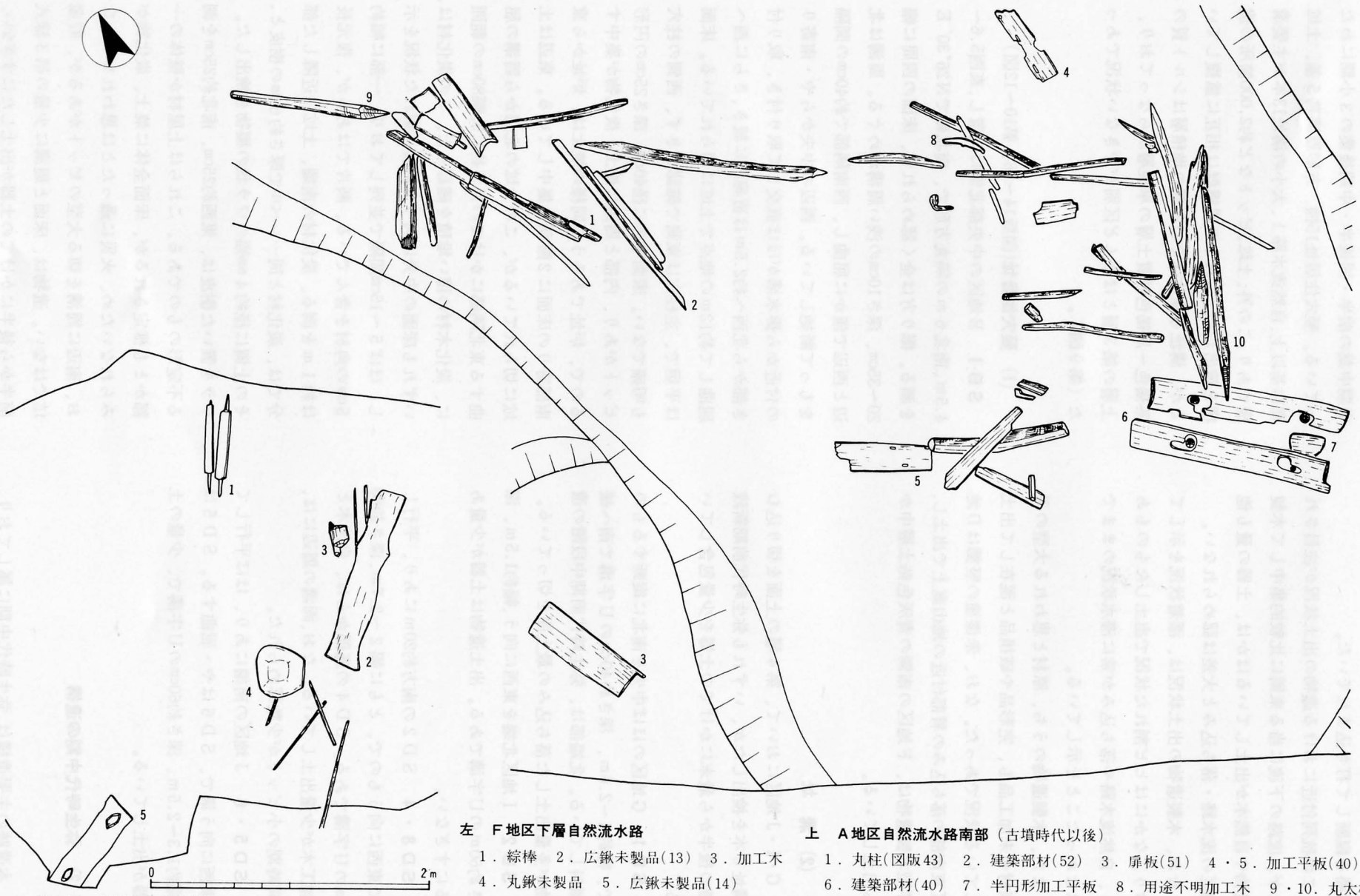
1．弓　2．狭鍬(4)　3．用途不明(28)　4．柄付狭鍬　5．石斧柄(34)　6．着柄鋤　7．広鍬未製品(42)

8．狭鍬(3)　9．広鍬未製品　10・11．矢板　12・13・14・15．獣骨　16．ひょうたん



第７図　Ｄ地区下層(東部)木製遺物出土状況（１：60）

１．把手付槽　２．加工木　３．石斧柄未製品(15)　４．円形加工木　５．鋤(９)
６．広口壺(２)　７．丸鍬未製品　８．鍬破片　９．叉鍬(２)　10．諸手鍬(６)
11．石斧柄未製品(19)　12．踏鋤未製品　13．つる加工品　14．鐸型木製品(21)



左　F地区下層自然流水路

1．綜棒　2．広鍬未製品(13)　3．加工木
4．丸鍬未製品　5．広鍬未製品(14)

上　A地区自然流水路南部（古墳時代以後）

1．丸柱(図版43)　2．建築部材(52)　3．扉板(51)　4・5．加工平板(40)
6．建築部材(40)　7．半円形加工平板　8．用途不明加工木　9・10．丸太杭

第8図　木製遺物出土状況

水路を縦断して打ち込まれていた。

この杭列付近における遺物の出土状況が注目されたが、流路の下流に当る東側に比較的集中して木製遺物や自然木が出土しているほかは、土器の量も他地区の流水路・落ち込みと大差は認められない。

なお、木製遺物の出土状況は、漂着状況を示しており、なかにはヒビ割れた状況で出土したものもあり、自然流水路や落ち込みが常に滞水状況のままではなかったことを示している。

また、木製遺物のうち、原材と思われる大型の平割材や未加工品も、完形品や破損品と混在して出土している状況であった。なお、朱漆塗の竪櫛はD地区東南部の落ち込みの肩部付近の地山直上で出土し、琴型木製遺物は、F地区の南側の青灰色粘土層中から出土している。

(2) 溝　址

G・I・J地区において、第4層の上面を切り込む溝址6本を検出したが、いずれも弥生時代前期新段階の後半から最末にかけての土器を少量包含している。

SD1　G地区のほぼ中央を南北に縦断するもので、幅約1～2.6m、深さ約40cmのU字溝で南へ緩傾斜している。北端部は、弥生時代前期中段階の遺物が多量出土した落ち込みの最上面を切っている。

SD2　I地区北端を東西に向う、幅約1.5m、深さ約60mのU字溝である。出土遺物は土器が少量あるにすぎない。

SD3・4　SD2の南方約20mにあり、平行して東西に向うもので、ともに幅2～2.7m、深さ約80cmのU字溝である。SD4の底部からは、自然木と加工木が少量出土している。なお、両溝の周辺には、同時期の小ピットが少数認められた。

SD5・6　J地区の南端にあり、ほぼ平行して東西に向う溝で、SD6はやゝ屈曲する。SD5は幅約1.3～2.5m、深さ約60cmのU字溝で、少量の土器が出土している。

2)　弥生時代中期の遺構

本遺跡の主要遺構は、弥生時代中期に属しており、中期中葉の前半・同後半・中期後葉の3小期にわたっている。竪穴住居址15棟、方形周溝墓5基、土坑墓14基以上、自然流水路1、大小の溝址13本が主要遺構であり、この外、土坑、ピットなど約2,000箇所の遺構を検出した。これらの遺構群は相互に重複しているが、溝址を除けばその内部の堆積層はシルト質の茶褐色～黒褐色砂質土層の単純層からなっており、上層の第3層とほとんど区別ができない状況であった（第9図）。

(1)　竪穴住居址(図版14～16、第10～12図)

SB1　B地区の中央部北側に位置し、東西5.6～4.5m、南北6mの隅丸方形で、南北軸でN26°30′Eを測る。掘り方は全く認められず、床面の四周に幅20～35cm、深さ10cmの浅い周溝がめぐる。周溝は北辺と西辺で僅かに屈曲し、西南隅部で約40cmの間隔をもって断絶している。西辺の中央からやゝ南寄りの付近から排水溝がほぼ直交して取り付き、取り付き部から北西へ約2.5mは直線的に続き、さらに西へ屈曲して約12mの地点で土坑に切られている。床面は平坦で、主柱穴は東側で確認できず、西側の柱穴も明確でない。床面中央に径40cm、深さ25cmの円形ピットがあり、内部と周辺に焼土・炭化物が集中するので、炉址であろう。同様の焼土は、炉址から東南部寄りの床面に2箇所に集中している。東辺は土坑に切られているが、この土坑の北辺から周溝の屈曲する東北隅部にかけての長さ約1.5、幅80cmの範囲に、炭化木材の薄い堆積を確認した。この炭化材は、いずれも床面の中央に向って斜目に倒れた状況を示し、ほぼ5～15cm間隔で並列しており、一部に幅約5cmの角材を含んでいる。断片ではあるが、復元長は約1mを測る。炭化材の南端、土坑に近隣した部分では、炭化材と同一レベルで厚さ約6mmの樹皮と、その上側に径約4mm幅のワラ状の編物を検出した。ワラを置いた樹皮は、東西約25cm、南北約25cmを測る不定形のものである。これらは上屋材か壁体の一部かとも推定されるが、床面全体に焼土、炭化物がみられないため、火災に遇ったとは思われない。なお、南辺に周溝を切る大型のピットがあるが、貯蔵坑ではない。遺物は、床面と周溝に少量の第3様式前半から後半にかけての土器が出土したにすぎない。

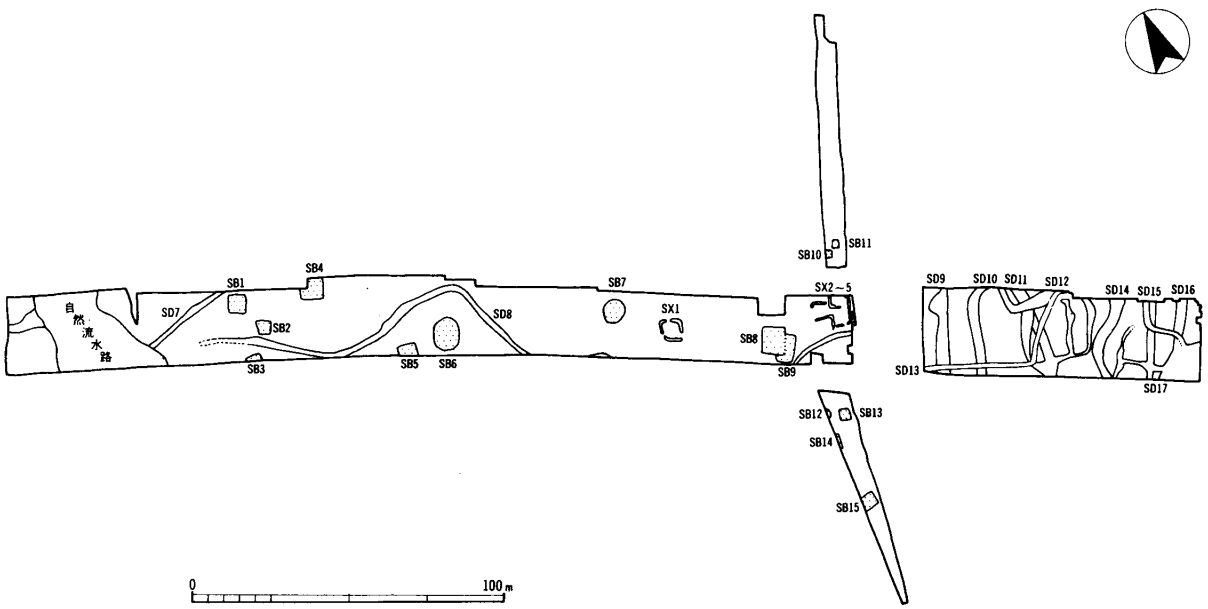
ＳＢ２　ＳＢ１の南方約４ｍに位置する隅丸方形の住居址で、南北軸はＳＢ１と同じである。南辺よりやゝ短い点はＳＢ１に類似した形態をもったもののである。東西4.3～5.2ｍで、掘り方は約10cmを測り、周溝は認められない。北辺の掘り方は、東西でやゝ屈曲している。主柱穴は４本あり、いずれも掘り方に平行しているため、全体の規格はやゝいびつである。主柱穴は、東側のみで確認したが径約30～40cm、深さ約20cmを測り、間隔は約3.0～3.8ｍであある。床面に焼土・炭化物の集積は全くなく、床面上の多数のピットの大半は時期が下るものである。遺物は少量で、ＳＢ１と同時期の土器片が出土している。

ＳＢ３　ＳＢ２の南西約６ｍに位置する隅丸方形の住居址で南北軸でＮ３°Ｗを測る。南側の約３分の２は調査地域外にあり、東西約4.7ｍ、南北の現長は約2.9ｍである。掘り方は約15cmで、幅約30～50cm、床面からの深さ約10cmの周溝がめぐる。全体を完掘していないため、主柱穴は不明である。床面には、焼土・炭化物は全くなく、周溝内と床面上の小ピットから少量の第３様式前半の土器片が出土している。

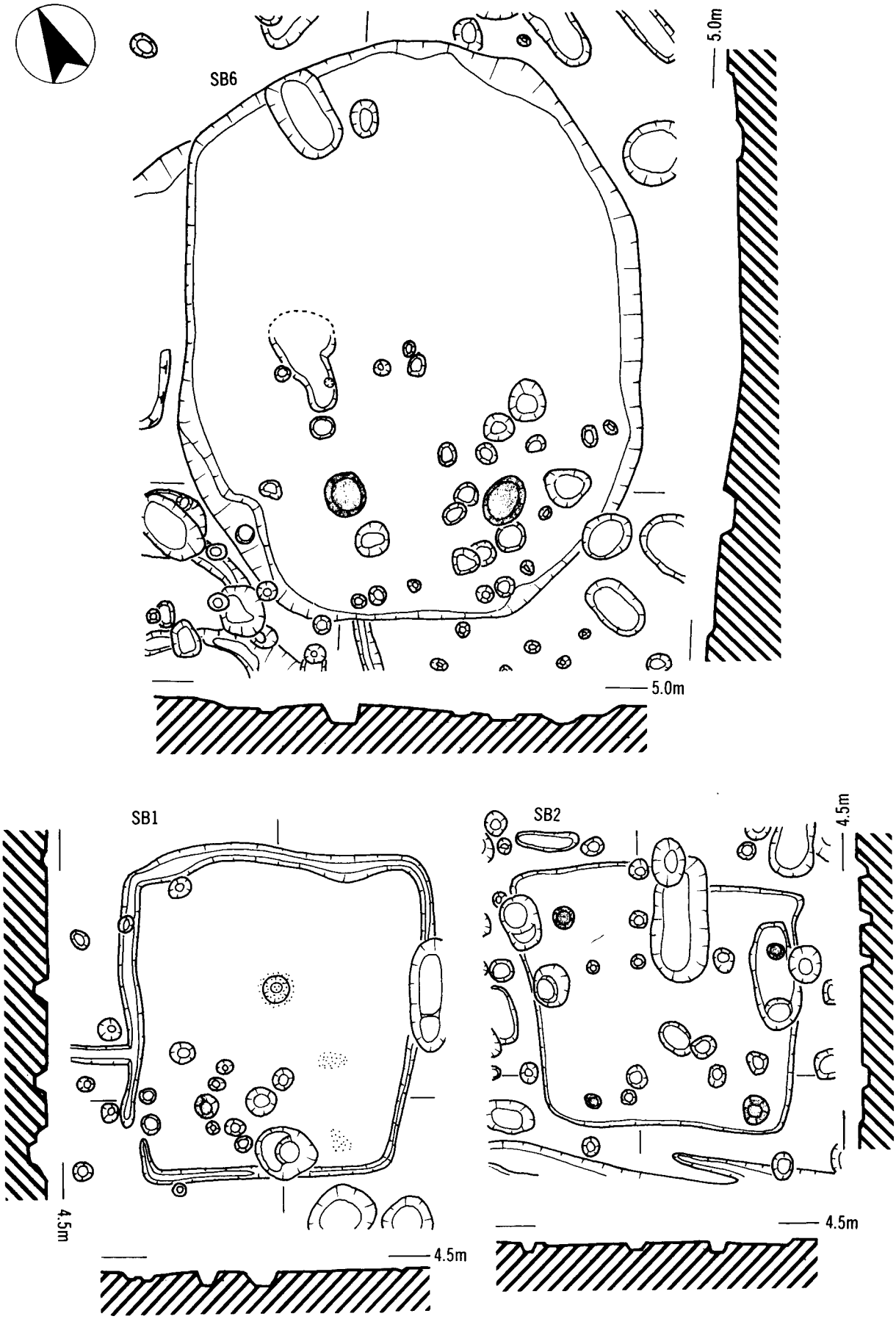
ＳＢ４　ＳＢ１の東方約18ｍに位置し、Ｂ・Ｃ地区の境にあたる部分にある。平面は隅丸長方形で、南北軸でＮ28°Ｅを測る。東西8.0ｍ、南北6.0ｍで、掘り方は約25～30cmとやゝ深い。北隅部は、水田の取水溝、西隅部は測量基準杭を残していたため一部未調査である。主柱穴は東側列の２本を確認し、径約50～70cm、深さ約15～55cmで、間隔は約3.5ｍである。床面には焼土・炭化物は全くなく、少量の第３様式前半の土器が出土している。

ＳＢ５　Ｃ地区東南部に位置し、ＳＢ３の東方約4.3mにある隅丸方形の住居址で、南北軸でＮ11°Ｅを測る。南側２分の１は調査地域外にあるが、東西5.9ｍ、南北の現長は約4.2ｍである。掘り方は約18cmで、主柱穴は不明である。床面に焼土などは認められず、新しい土坑や溝が重複している。床面の堆積土中から第３様式前半でもやゝ新しい段階の土器小片が僅かに出土しているが、簾状文や凹線文のものは皆無である。

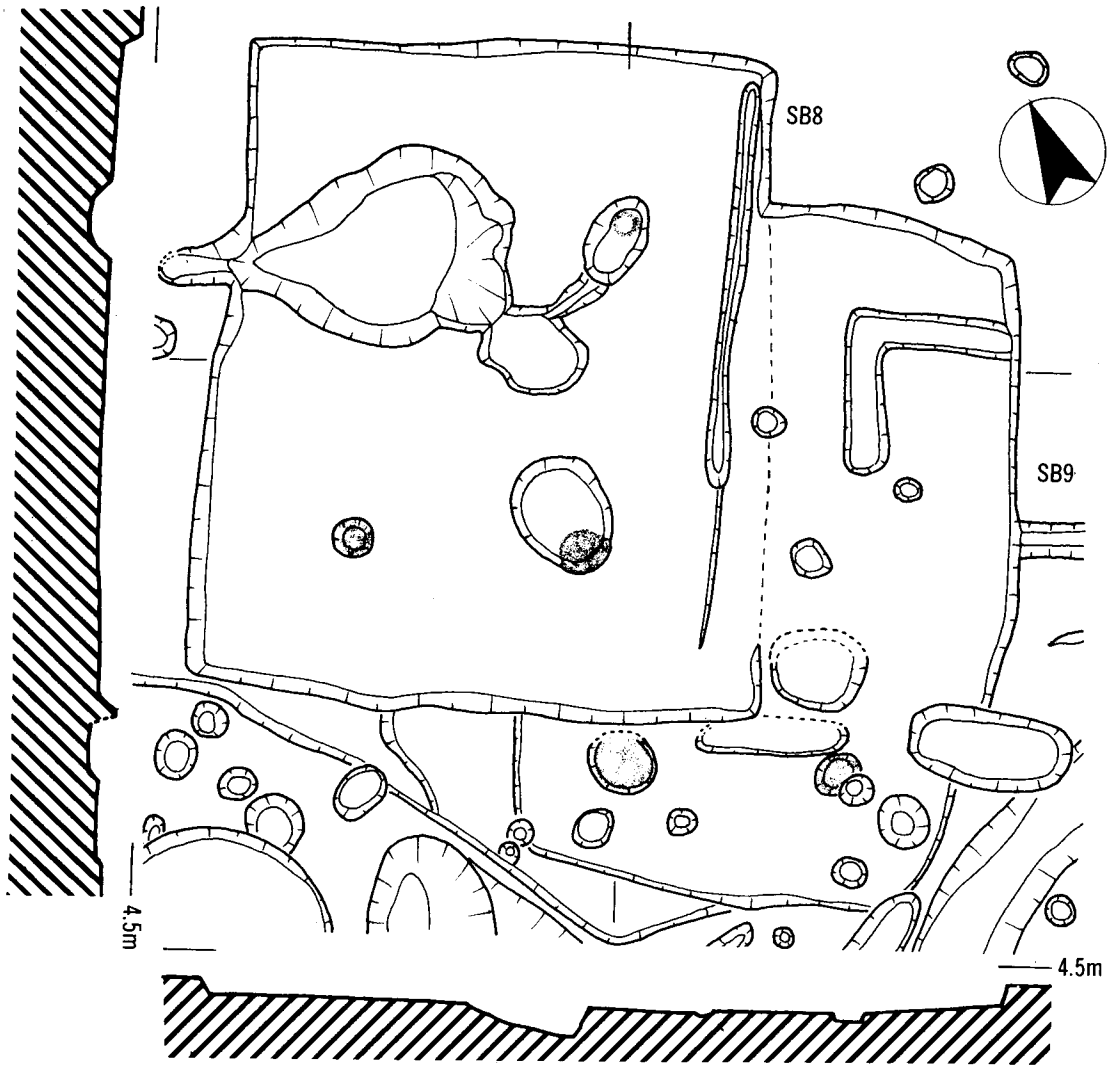
ＳＢ６　ＳＢ５の東方約１ｍに位置し、Ｃ・Ｄ地区境にあったため分断した状態で調査したものである。平面形は南北に長く、ほぼ八角形を呈しており、南北軸でＮ28°Ｅを測る。東西8.4ｍ、南北11ｍの大型住居址であり、掘り方は約20cmであるが、北側では約40cmの部分もある。床面は全体に南から北・西から東へ向って緩傾斜し、中央部が最も深い。主柱穴の本数は不明であるが、南辺の東西列の２本は、径約70～80cm、深さ約15～30cmで、間隔は約３ｍである。床面の堆積土は２層に分れ、上層は黒褐色砂質土で凹線文をもつ第４様式の大型壺・甕などが出土し、北側の同層最上部では第５様式土器が出土している。下層は黒褐色砂質土の堆積で、土器はほとん

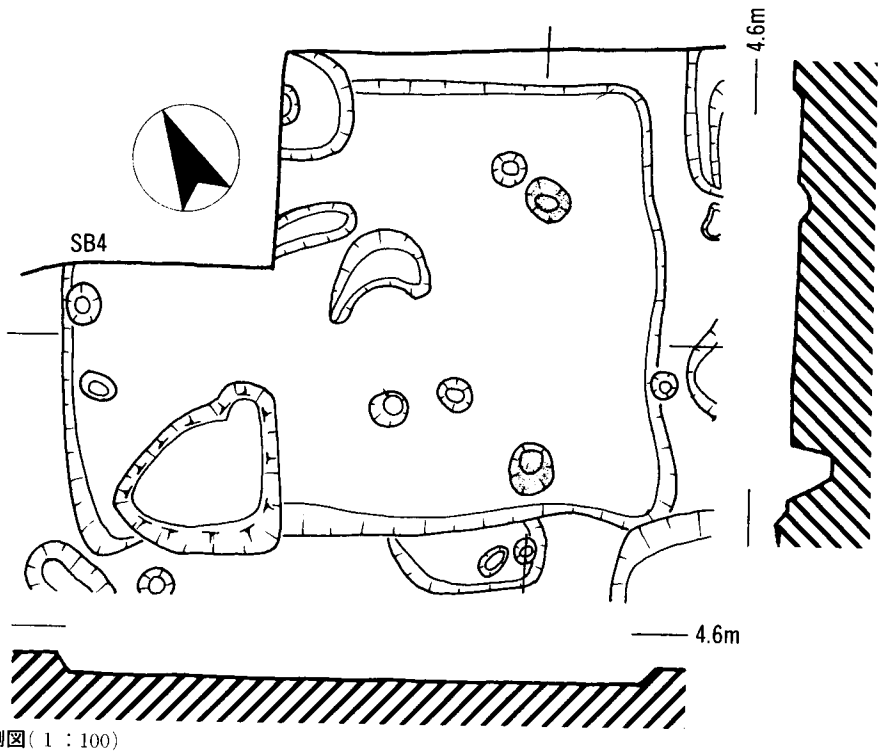


第９図　主要遺構配置図（上層）

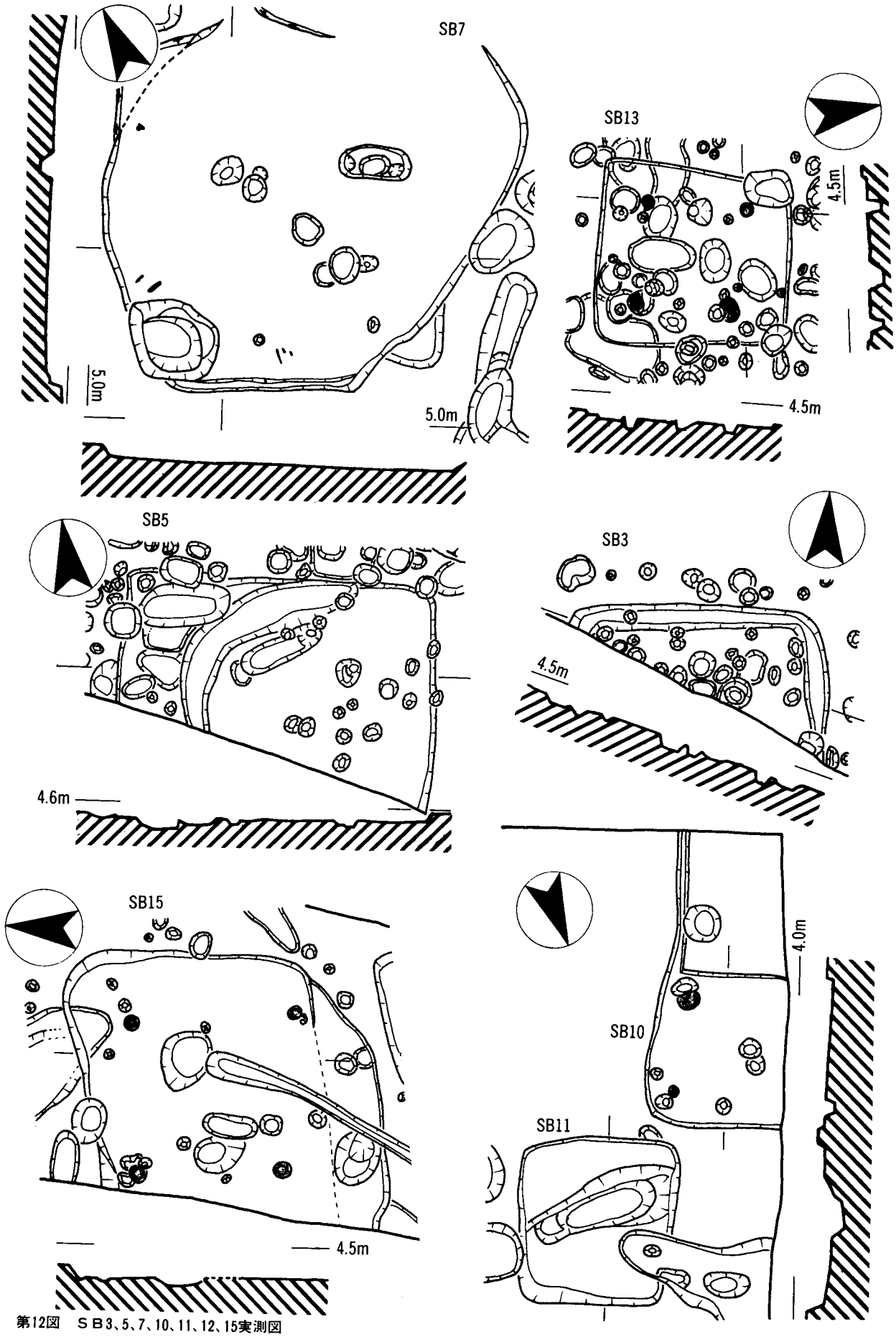


第10図　ＳＢ1、2、6実測図（１：100）





第11図　ＳＢ4、8、9実測図（１：100）



第12図　ＳＢ3、5、7、10、11、12、15実測図

ど含まれていない。床面には炭化物が散在状態で出土しているが、焼土面は認められない。なお、北側壁面に接した土坑は新しい時期のものである。

ＳＢ７　Ｅ地区の北隅に位置し、ＳＢ６の東方約4.7mにあたる。平面形は全体に不整形で、東辺は削平されたためか確認できなかった。南辺はほぼ直線状を呈しているので、あるいは六角形かもしれない。南北軸でＮ27°Ｅを測り、東西約８ｍ、南北約７ｍである。掘り方は西辺で約20cm、南辺で約40cmを測るが、南辺では２段になっている。主柱穴は不明で、西隅の大型土坑は新しい時期のものである。西辺と南辺の壁面に近接する床面に、ほぼ中央に向って炭化材が若干散在するほか焼土は認められない。床面全体にわたって第３様式の前半でもやゝ新しい段階の土器小破片が出土したが、簾状文や凹線文は含まれていない。

ＳＢ８　Ｆ地区西側に位置し、ＳＢ７の東南方約4.5mにあたる。ＳＢ９を切る長方形のもので、南北軸でＮ32°Ｅを測る。この住居址も、２回に分断された状態で調査し、当初の北側の調査時点で東辺におけるＳＢ９との重複関係は不明であったが、南側の調査で東辺の南端がＳＢ９を切ることを確認した。東西7.0～7.6ｍ、南北8.9mを測り、四隅は明確に方形を呈している。掘り方は約25cmあり、東辺のみで壁面直下に幅約30cm、深さ約５～10cmの浅い周溝があるが、北端から約5.4ｍまでは溝状で、以南の約2.2ｍは東縁部のみを確認した。おそらく、当初は南辺の壁面近くまで周溝は続いていたと推定される。主柱穴は４本と思われ、北部では大型土坑があり位置は確認できなかったが、間隔は東西約３ｍ、南北約４ｍである。床面の中央と北部に多量の土器を含む土坑があり、全体に炭化物が集中している。北部の大型土坑は、隅丸の三角形を呈し、西側は西壁面の一部を切って屋外にも約１ｍほど溝状に続いている。この土坑の東西は約3.7ｍ、南北約2.7ｍを測り、摺鉢状の中央部で深さ約20～25cmある。坑内は炭混りの黒褐色砂質土の単純層からなり、第３様式後半から第４様式の簾状文・櫛描文・凹線文をもつ壺・小型壺(**89**)細かい刷毛目をもつ甕・甑などの完形品と大型破片が集積している。土坑と北隅の主柱穴との重複関係は明確にしえなかったが、大型土坑は厨房施設と思われる。なお、床面中央のやゝ東寄りの坑内にも、同時期の土器の集積が認められた。

ＳＢ９　ＳＢ８の東側に重複するもので、南北軸はＳＢ８とほぼ同じである。東西約6.7ｍ、南北約9.4ｍの長方形を呈し、掘り方は約15～25cmを測る。ＳＢ８とくらべて四辺が全体にややいびつで、主柱穴は４本と思われるが、南辺の東西列では径約60～90cm、深さ約15～25cmで、間隔は約３ｍを測る。東辺の中央から幅約45cm、深さ約10cmの小溝が東へゆるやかに下降して約３ｍ続いている。床面と小溝の比高は、約20cmと小溝の底面の方が高いため、随時排水用の溝と推定される。なお、東辺北部に逆Ｌ字状の小溝を床面上で確認したが、用途は不明である。床面上に焼土や炭化物は全く認められないが、浅鉢(**95**)のほか第３様式前半から後半の小土器片が床面の南側に集中して出土している。

ＳＢ10　Ｉ地区の南側に位置し、西辺は調査地域外にあるが、南辺がやゝ短い隅丸方形を呈し、南北軸でＮ24°Ｅを測る。東西の現長は約2.6ｍ、南北約2.9mで、掘り方は約15cmである。主柱穴は、東辺の南北列で径約30～40cm、深さ約20cmで、間隔は約2.0ｍを測る。床面の南隅から同レベルで幅約20cm、深さ約10～15cmの排水溝が直線的に南方へ続き、2.6ｍまでを確認した。床面には焼土や炭化物は認められず、第３様式前半でもやゝ新しい段階の土器片が出土している。

ＳＢ11　ＳＢ10の東北に近接する隅丸方形の住居址で、南北軸はＳＢ10とほぼ同じである。東西2.6～3.0m、南北3.1ｍ、掘り方は約20～30cmを測る。主柱穴はなく、床面中央を斜目に切り込んだ土坑内から、第３様式前半の土器が出土している。

ＳＢ12　Ｊ地区北側の西壁直下に位置した楕円形の住居址で、西側は調査地域外にあるため規模は不明である。掘り方は約20cmを測り、東側では２段のテラス状を呈している。主柱穴は確認していないが、掘り方の東辺に接したピットは全体に赤褐色に焼けており、炉址かとも思われる。床面の堆積土から、第３様式前半の土器が少量出土している。

ＳＢ13　ＳＢ12の東方約2.7mに位置するやゝいびつな隅丸方形の住居址で、南北軸でＮ16°Ｅを測る。東西3.0～3.5ｍ、南北3.6ｍで、北辺がやゝ短い。掘

り方は約10cmと浅く、床面は北から南へ緩傾斜している。床面には多数の土坑・ピットがあり、住居址以前の土坑が西辺と東辺の南部にある。この土坑以外の床面内の土坑・ピットは床面の清掃中に検出したものである。主柱穴は4本あり、径約25～60cm、深さ約20～25cmを測る。床面中央部に炭化物が散在するが、焼土面は認められなかった。床面上から第3様式前半の土器が少量出土しているが、簾状文をもつ土器も少量ある。

SB14　SB13の西南約4mに位置する隅丸方形の住居址であるが、西側の大半は調査地域外にある。東辺は約5.4mで、南北軸でN18°Eを測り、掘り方は約25cmである。堆積土中から、第3様式前半でもや、新しい段階の土器が出土しているが、遠江以東から搬入されたと思われる長頸壺(**64**)が1点ある。

SB15　SB14の南方約1.6mに位置する隅丸方形の住居址で、南北軸でN9°Wを測る。西側約4分の1は調査地域外にあり、しかも南辺が不明瞭で、図の南辺部の点線は西壁断面図によっている。南辺のさらに南側にも低い掘り方があるので、あるいは2軒の住居址が重複しているのかもしれない。東西の現長は約5.0m、南北約4.6mで、掘り方は約25cmを測る。主柱穴は4本あり、南側の東西列は南辺と平行しないが、径約30cm、深さ約15～20cmである。床面には焼土・炭化物は認められず、堆積土中から第3様式でもや、新しい段階の土器が少量出土し、碧玉製の管玉（図版49上－**12**）が出土している。

第2表　竪穴住居址一覧表

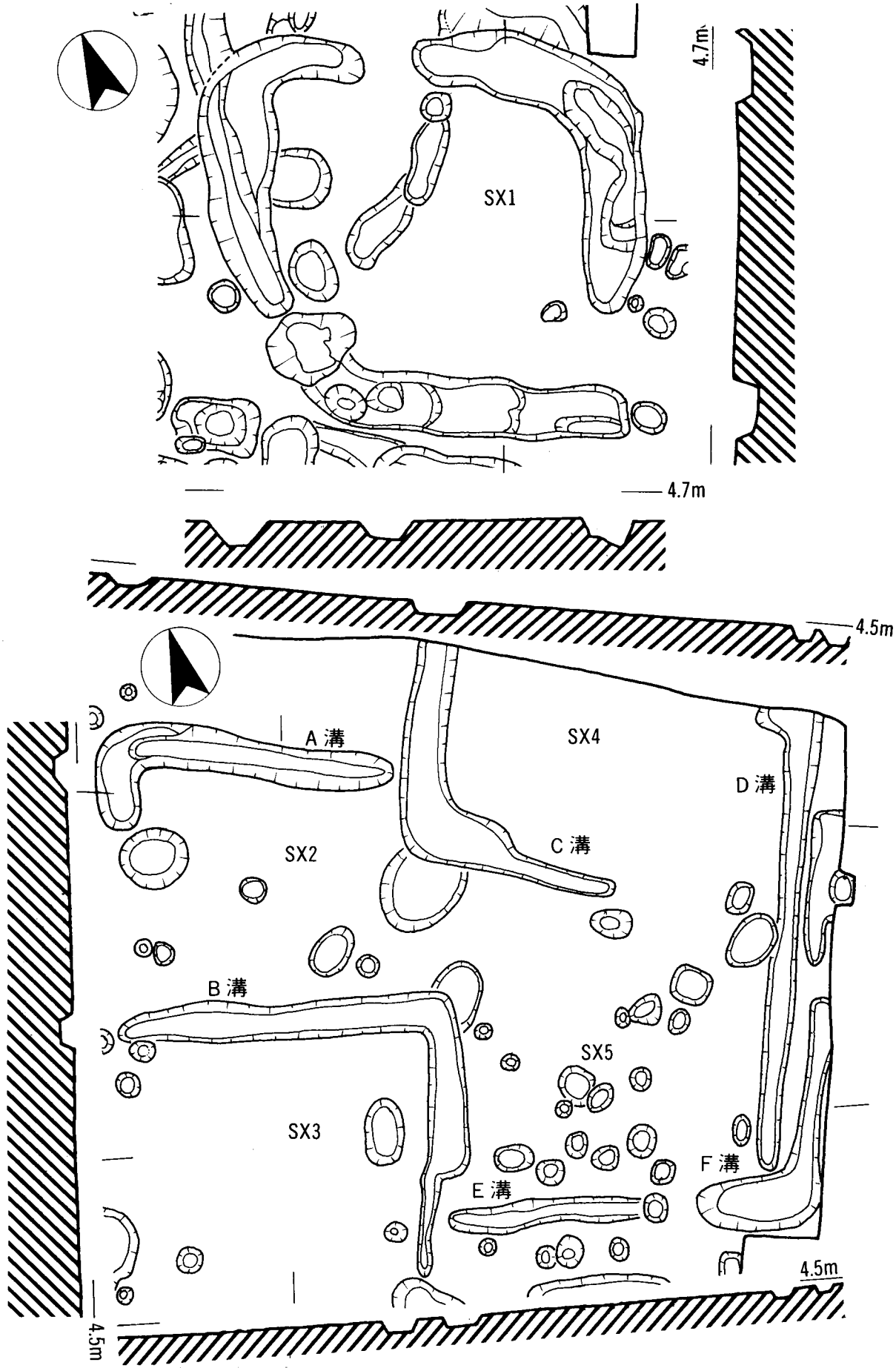
名称	規模(m) 東西	規模(m) 南北	概面積(m)	炉址	周溝	排水溝	南北軸	時期	群
SB1	4.5～5.6	6.0	27.0	有	有	有	N26°30′E	第3様式前半～後半	西群
SB2	4.3～5.2	4.3～4.6	18.5	—	無	無	N26°30′E	第3様式前半～後半	西群
SB3	4.7	(2.9)	—	—	有	—	N3°E	第3様式前半	西群
SB4	8.0	6.0	48.0	無	無	無	N28°E	第3様式前半	西群
SB5	5.9	(4.2)	—	無	—	—	N11°E	第3様式前半～	西群
SB6	8.4	11.0	92.4	無	無	無	N28°E	第4様式～	西群
SB7	8.0	7.0	56.0	無	無	無	N27°E	第3様式前半～	東群
SB8	7.0～7.6	8.9	62.3	有	有	無	N32°E	第3様式後半～第4様式	東群
SB9	6.7	9.4	62.9	無	無	有	N32°E	第3様式前半～	東群
SB10	2.6	2.9	7.5	無	無	有	N24°E	第3様式前半～	東群
SB11	2.6～3.0	3.1	8.1	無	無	無	N24°E	第3様式前半～	東群
SB12	—	—	—	—	—	—	—	第3様式前半～	東群
SB13	3.0～3.5	3.6	10.8	無	無	無	N16°E	第3様式前半～	東群
SB14	5.4	—	—	無	無	—	N18°E	第3様式前半～	東群
SB15	5.0	4.6	23.0	無	無	無	N9°W	第3様式前半～	東群

( )現長、—不明

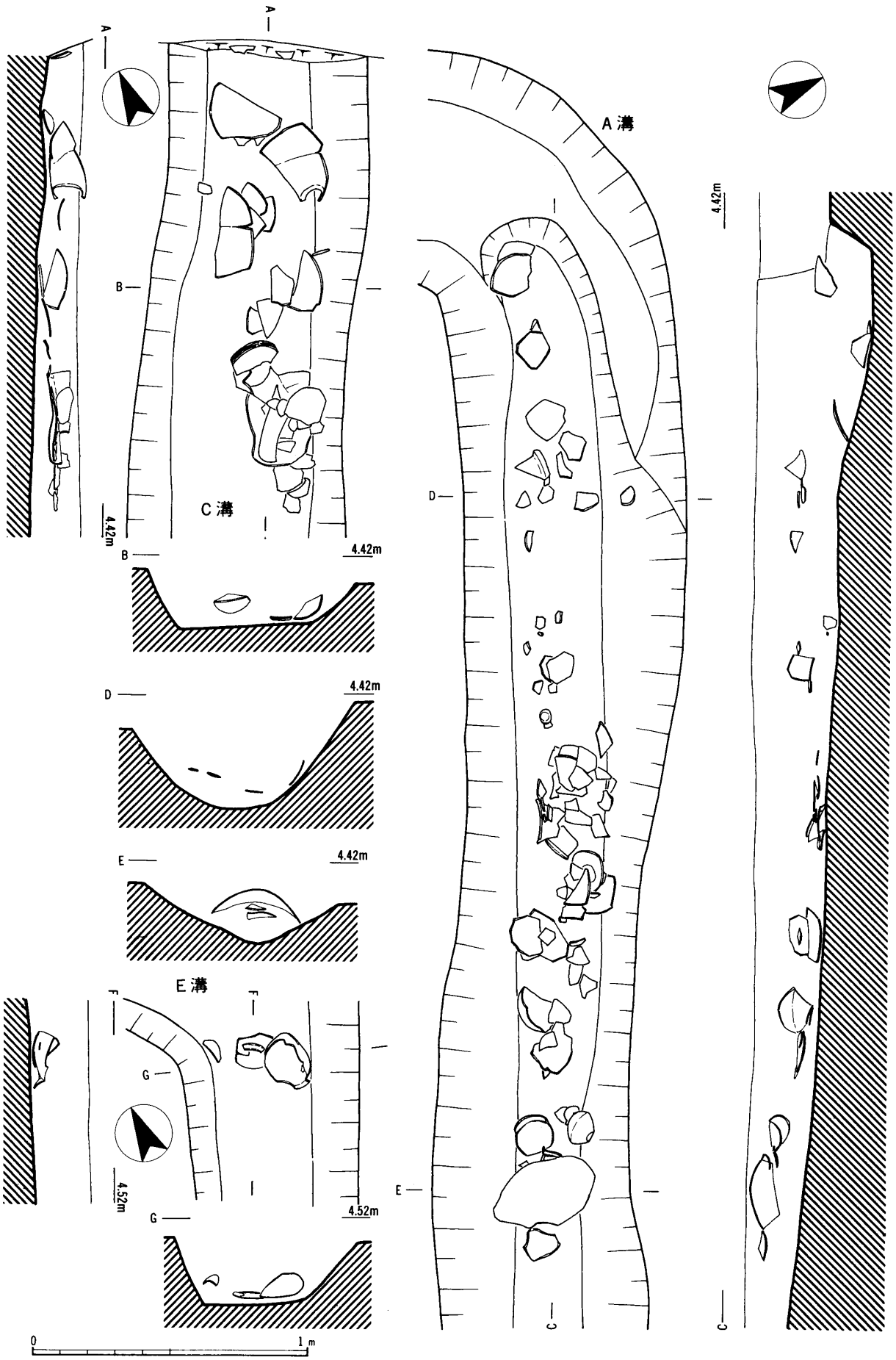
(2) 方形周溝墓（図版10、第13～15図）

SX1　E地区中央に位置し、3本のL字溝で囲まれたもので、北辺・東辺・西辺の3箇所に陸橋部をもつ。全体にや、いびつな方形を呈している。台上部はほぼ平坦で、上部の遺物包含層を除去した第4層上面で周溝を確認し、盛土は認めることはできなかった。台状部中央のや、北側で2個の細長い土坑を検出したが、出土土器が第4様式のものでありSX1の主体部とは考えられない。外径は東西約8.0m、南北約7.3m、内径は東西約5.4m、南北約5.2mを測る。各溝は幅約1.1～1.4m、深さ約40～50cmのU字溝で、全体に中央部が皿状に深く、堆積土層は茶褐色砂質土の単純層である。陸橋部は北辺で約90cm、東辺で約1.3m、西辺は土坑に切られていて不明である。周溝内の遺物は土器小片が全体に散在するが、東辺の北部で溝底から約20cm浮いた状態で第3様式前半の広口壺口縁部と腹部片が少量集中している。

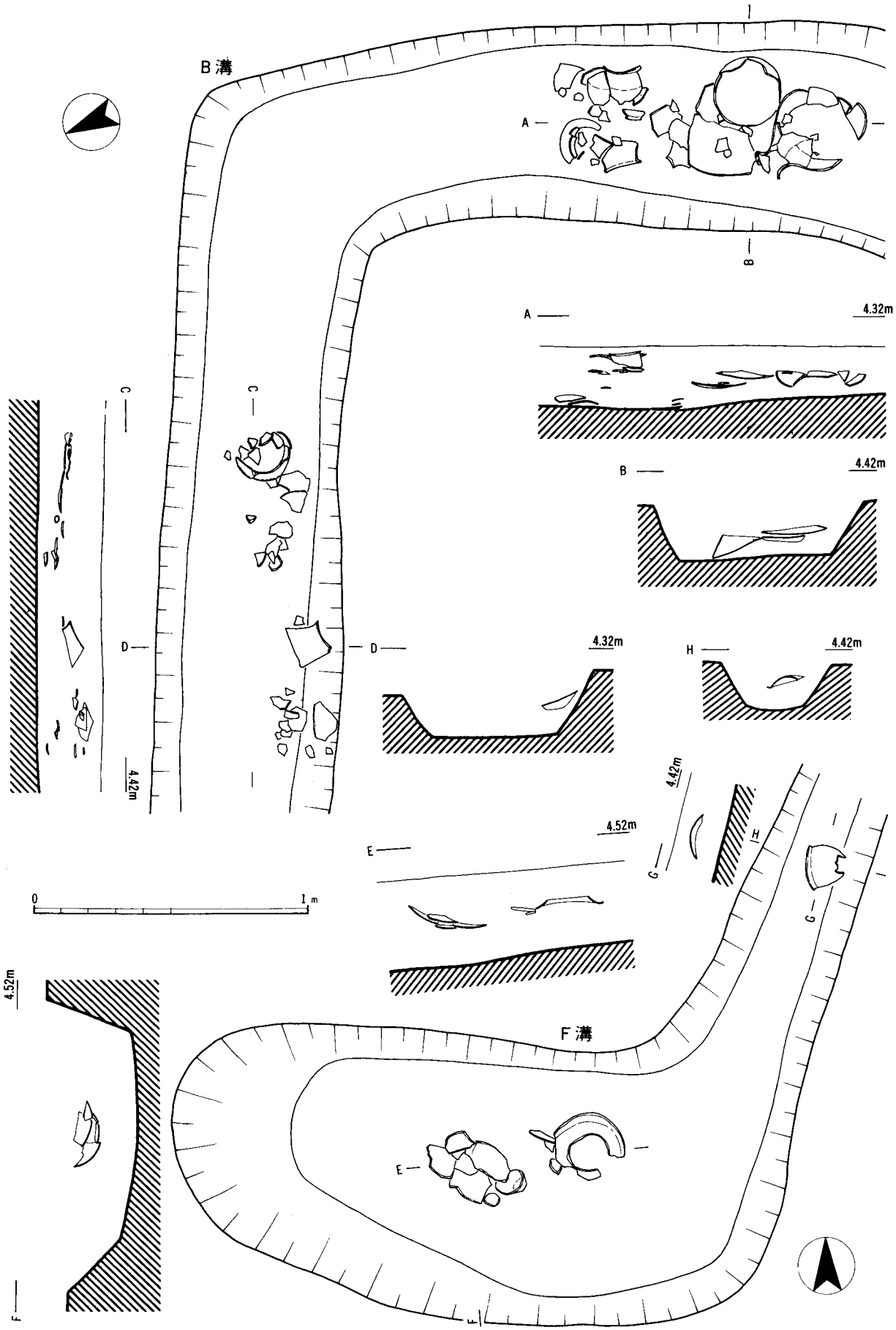
SX2　F地区東側に位置し、L字状のA溝と、南側のSX3のB溝北辺、東側のSX4のC溝の西辺に囲まれ台状部をもつ。台状部の内径は、東西約



第13図　ＳＸ１、２～５実測図（１：100）



第14図　ＳＸ２・４　土器出土状況（１：20）



第15図　ＳＸ３・５　土器出土状況（１：20）

4.6m、南北約3.7～4.1mを測り、上面は平坦である。

ＳＸ２・３・４・５のいずれも、第４層直上から周溝が掘られており、堆積土層は茶褐色砂質土の単純層であり、台状部の土坑、ピットの大半は第３様式前半の土器が出土している。Ａ溝とＣ溝の間隔は約12cm遊離しており、Ａ溝西辺とＢ溝北辺で約 3.2m、Ｃ溝南辺とＢ溝北辺で約2.3mを測る。Ａ溝は西端で南へ短く屈曲するＵ字溝で、北辺で幅約65～80cmあり、東から西へ緩傾斜し、西端では深さ約40cmを測る。Ａ溝北辺には広口壺、下腹部に１穿孔をもつ小型壺、壺蓋、甕10点が列状に出土したが、溝底に接したものとや、浮いた状態のものがある。壺は頸部に簾状文、口縁内面に羽状刺突文をもち、甕は外面に細かい刷毛目と内面を掻き上げたものがあり、凹線文はない。

ＳＸ３　ＳＸ２の南側にあり、北辺と東辺はＬ字状のＢ溝で囲むが、西、南の両辺には溝がみられない。台状部の内径は、東西約5.5m、4.3mを測り、北辺で幅約60～70cm、深さ約20～30cmの台形状溝で東辺では南端部で最大幅を呈し、それより以南では長さ約1.7mの間は幅約20～30cmと狭くなる。溝底はゆるやかに起伏するが、屈曲部はほぼ平坦で、屈曲部に近い両辺で土器が集中して出土している。北辺の土器群は、壺、甕の３点でいずれも溝底から浮いた状態であった。東辺の土器群は、壺・台付壺・小型甕の７点で、壺は口縁部に凹線文をもち、小型甕は腹部に水平と左上りの細い叩目をもち、内面を掻きあげたものがあり、溝底に接するものと浮いたものがある。

ＳＸ４　ＳＸ２の東側にあり、西辺と南辺をＣ溝・東辺は北端でやゝ西へ屈曲するＤ溝が南側のＳＸ５の東辺を共有するかのごとく画している。Ｃ溝の北端は調査地域外にあるが、台状部の内径は東西 6.1m、南北の現長3.5mを測り、Ｃ溝とＤ溝の間は2.9mである。Ｃ溝は幅約7.5m、深さ約20cmの台形状の溝で、南辺端部ではＢ溝の東辺に似て、幅約40cmと細くなり、ゆるやかに上昇している。Ｄ溝は、幅約40～65cm、深さ約10～20cmで南から北へ緩傾斜した台形状の溝である。土器はＣ溝の西辺とＤ溝北側で出土した。Ｃ溝では口縁部に凹線文、腹部に簾状文１条、櫛目文帯をもつ大型広口壺２点が、ほぼ溝底に接して出土した。Ｄ溝ではその北端の屈曲部で、粗い刷毛目文に櫛描波状文をめぐらす薄手の甕１点がほぼ溝底に接して出土した。

ＳＸ５　ＳＸ４の南にあり、Ｂ・Ｃ・Ｄ溝に３方を囲まれ、さらに南辺をＥ溝で画している。さらにＤ溝の東側に近接してＬ字状のＦ溝があり、東辺を画する周溝がＤ溝かＦ溝のいずれかは判然としない。ただ、Ｆ溝が西へ屈曲して南辺のＥ溝との間に約70cmの陸橋部をもつことや、Ｆ溝の北端がＢ溝北辺の東方延長線上に揃うことから、ＳＸ５の東辺はＦ溝と考えておきたい。Ｆ溝の北方延長線上にも同様の溝が続き、おそらくＳＸ５の東側にも方形周溝墓が形成されていたと思われる。

台状部の内径は、東西約６m、南北約5.3mを測る。南辺のＥ溝は、東端をピットで切られているが、幅約40～50cm、深さ約20cmの台形状の溝で、土器は全く出土していない。東辺のＦ溝は、屈曲した南辺部が最も幅が広く約１m、深さ約30cmを測り、東辺では幅約30cm、深さ約15cmと幅が狭くなる部分もあり、南辺にくらべて浅くなる。Ｆ溝では屈曲部をはさんで、北に甕１点、南に壺と甕が２点が、溝底から浮いた状態で出土している。ともに第３様式後半のものである。

(3)　土坑墓（図版17～20、第16～18図）

土坑墓としてここに報告するものは、主として坑内に供献用と思われる土器が比較的まとまって一括出土したものと、微細な獣骨片や玉類が出土した細長い土坑を土坑墓とした。したがって、形態がこれらの土坑墓と類似する土坑で、少量の土器を包含するものも土坑墓の可能性があるが、断定しえないため全て除外した。昭和49年度調査概報で土坑墓と図示した中で、本書から除外したものがあることを断っておきたい。以下は、そのうち主要な土坑墓のみについて報告することにする。

ＳＫ１　Ｂ地区のＳＢ１の西方約６mにあり、長軸でＮ88°Ｗを測る。両端が円形の船底型の土坑で中央部がやゝ広く、長さ2.55m、幅92cmである。溝底は東側で段状になり、中央部で深さ33cmである。堆積土は灰黒褐色砂質土の単純層で、全体に細かい炭化物が散乱している。坑内中央の全体に主として第

3様式後半の大型広口壺・広口壺・小型甕・細頸壺・ミニチュア壺・甕の完形土器、大型破片が11点出土した。そのうち口縁部に凹線文をもつ広口壺と素文の広口壺の腹部に小穿孔がある。これらの土器は、土坑の西側では坑底に接しており、中央部から以東は約10～15cm浮いた状態で出土した。なお、人骨片や玉類は出土していない。

ＳＫ２　Ｂ地区のＳＢ２の西方約2.5mにあり、長軸でＮ４°Ｅを測る。船底型の土坑で、南部はやゝ狭くなり、長さ約2.27m、幅約1.2m、深さ約30cmである。南端は第３様式前半のＳＤ８を切り、堆積土は灰黒褐色砂質土の単純層で、全体に細かい炭化物が混入している。坑内の中央は一段低くなり、第３様式後半の台付壺・甕が３点出土した。土坑の北辺にも、台脚と甕が出土しているが、土坑墓とは別のものである。

ＳＫ３　Ｅ地区のＳＸ１の台状部にあり、長軸はＮ65°Ｅを測る。東端を土坑で切られているが、西側は隅丸方形を呈し、現長は約1.9m、幅約70～80cm、深さ約36cmである。堆積土は灰黒褐色砂質土の単純層で、坑底は平坦であり、ほぼ坑底に近い高さで第４様式の口縁部に２本の凹線文をもつ広口壺・甕・甕蓋の３点が出土した。壺は正位を保ち、逆転した蓋の外面の坑底に接した部分に炭化米が付着していた。なお、壺の下腹部には径約４cmの焼成後の穿孔が１個ある。

ＳＫ４　Ｅ地区のＳＸ１の南辺西部に近接した細長い溝状土坑で、長軸はＮ31°30′Ｅを測る。南端は土坑で切られており、現長約3.5m、幅約95cmで、深さ約25～40cmである。坑底は北端から約１mの地点で皿状に一段低くなり、南へゆるやかに上昇しており、堆積土は砂混りの黒褐色粘質土で全体に細かい炭化物が混じっている。坑底から約10～15cm浮いた状態で、第３様式後半から第４様式の広口壺(**80**)・甕・甕蓋・台付鉢(**90**)・土錘の14点が出土した。

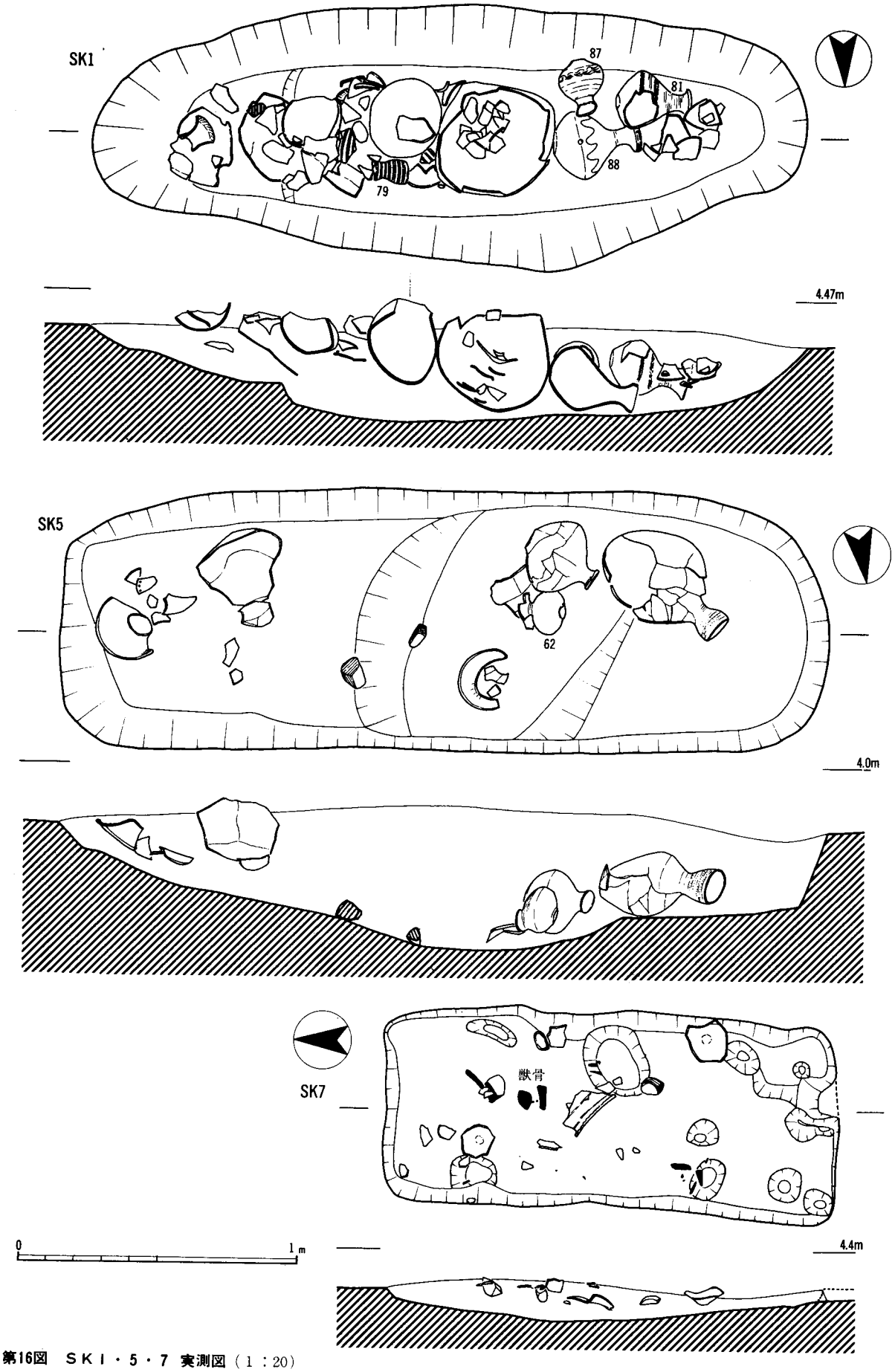
ＳＫ５　Ｇ地区西南部のＳＤ９･10の間に位置し、長軸はＮ81°Ｗを測る。長さ2.75m、幅約93cm、深さ約30～45cmである。東端は方形状であるが、西端は円形を呈している。坑底は中央部が皿状に深くなり、その上下に礫２個があり、全体に細かい炭化物を含む黒褐色粘質土が堆積していた。供献用土器は東西２箇所にあり、東側では大型広口壺・鉢の２点、西側で広口壺(**62**)・細頸壺・鉢の５点が出土し、ともに第３様式後半のものである。

ＳＫ６　ＳＸ５の東西約1.7mに位置し、南側は調査地域外にある。幅2.4mの溝状遺構の屈曲部にあり、東西約1.2m、南北の現長1.3mの楕円形の土坑で、坑底は２段になり土器が集中する最深部で深さ約20cmである。堆積土は全体に細かい炭化物を含む黒褐色粘質土で、第３様式後半～第４様式の大型広口壺・広口壺・鉢の４点が出土し、そのうち広口壺の１点は底部に小穿孔がある。なお、土坑の東縁上部に頸部に簾状文をもつ広口壺１点が横転して出土している。

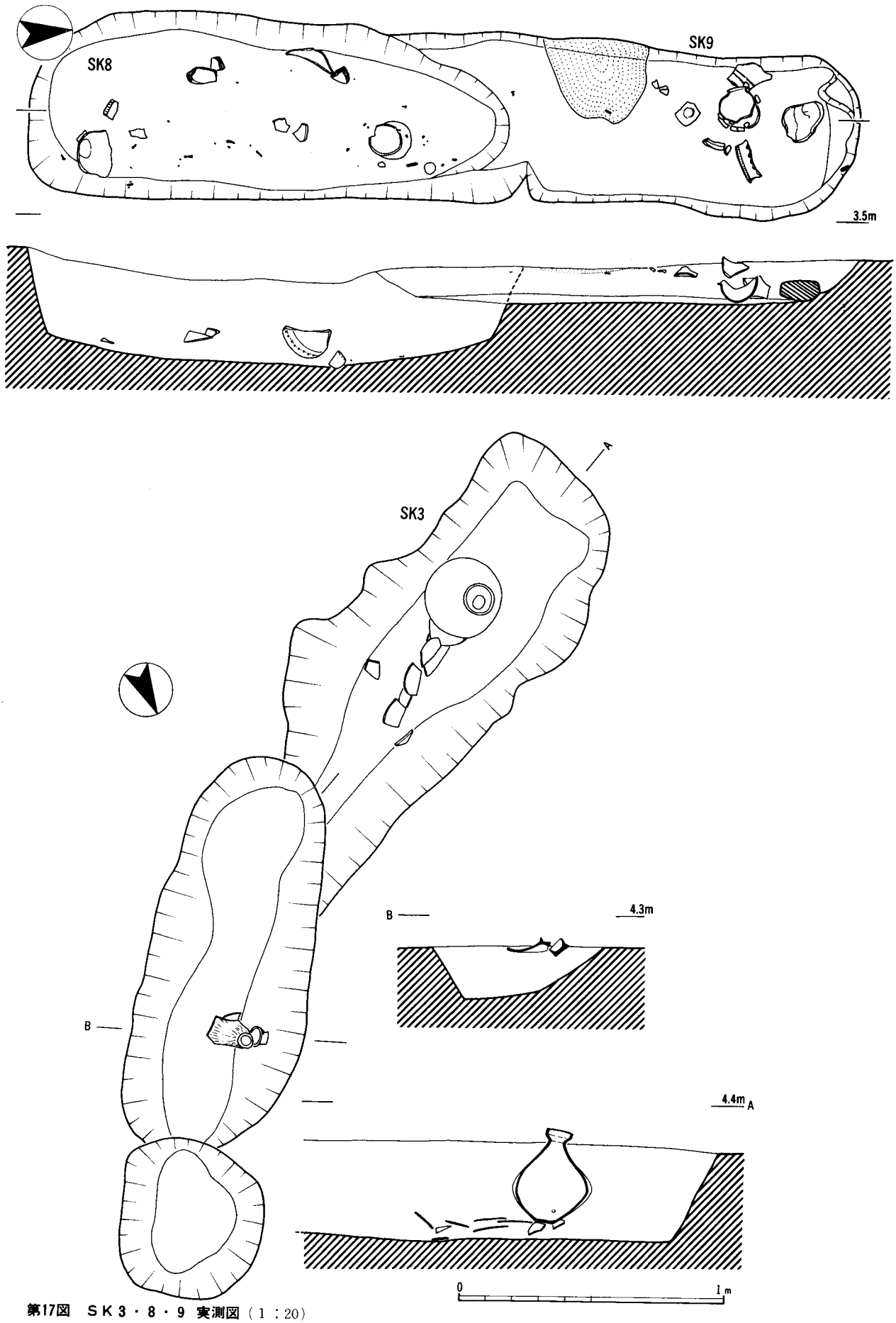
ＳＫ７　Ｉ地区の中央部やゝ北側に位置し、ＳＢ11の北方約36mにある長方形の土坑で、長軸はほぼ磁北を指している。長さ1.63m、幅約70cmで、底面は中央が皿状を呈し、最深部で深さ約12cmを測る。同一レベルで、長さ約10cmの骨片が北部と南西部の２箇所から出土しているが、全て獣骨（猪）である。Ｉ・Ｊ地区の長方形や楕円形土坑には、土器以外に獣骨（猪・鹿の顎骨・長肢骨）の遺存例が多い。そのため狩猟用の陥し穴の可能性も考えられるが、深いものでも約40cmと比較的浅いためこれらの獣骨は死者の埋葬に際して供献されたものかもしれない。

ＳＫ８　ＳＫ７の北方約2.7mに位置する隅丸の長方形土坑で、ＳＫ９の南辺を切っており、長軸でＮ５°30′Ｅを測る。長さ約1.87m、幅約70cmで、南辺は約75°の強い斜面で坑底に達している。底面は中央が皿状を呈し、深さ約40cmを測る。ほぼ坑底に接して壺・甕の破片が５点出土し、同一レベルで細かい獣骨片が坑の東側に集中的に出土している。散在状態であるが、第３様式前半の壺・甕が５点出土している。

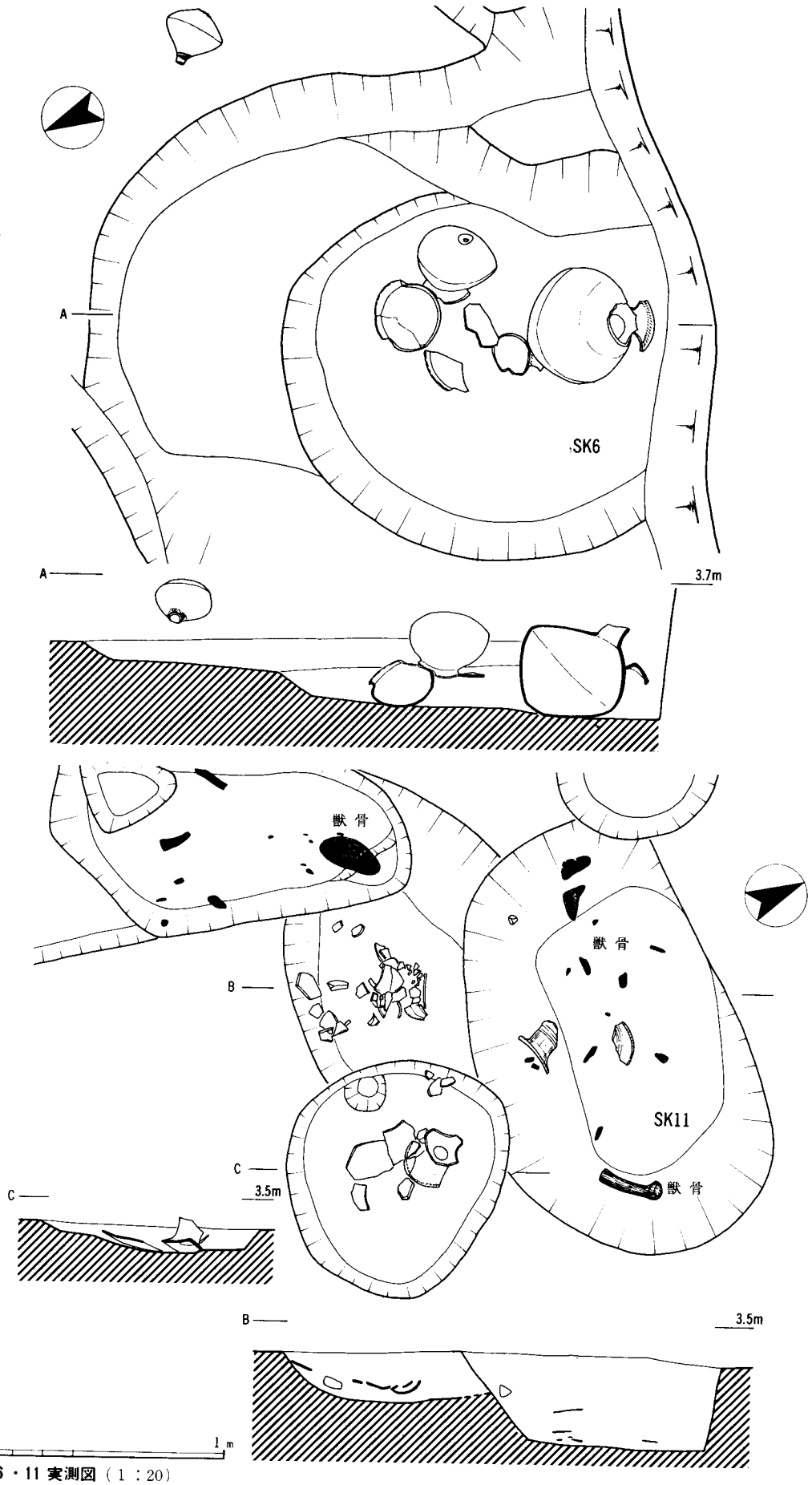
ＳＫ９　ＳＫ８に南辺を切られた隅丸長方形の土坑で、方位はＳＫ８とほぼ同じである。南辺の東部が一部西へ屈曲するので、これを当初の掘り方とすれば、長さ約1.53m、幅約60cm、深さ約19cmの船底型の土坑である。坑底の北部に大型石が水平に置かれ、その南側に第３様式前半の壺・鉢・甕の破片３個体分が集中して出土している。坑内の灰黒色粘質土に微細な獣骨片が少量混入している。なお、土坑



第16図　ＳＫ１・５・７ 実測図（１：20）



第17図　ＳＫ３・８・９ 実測図（１：20）



第18図　ＳＫ６・11 実測図（１：20）

の西南部の最上面で、径30×40cmの範囲に厚さ約2cmの樹皮（杉皮か）の炭化物が坑内に向って皿状に残っていた。

ＳＫ10　ＳＫ７の南方約３ｍに位置する隅丸長方形の土坑で、南側はやゝ不整形であり、方位はＳＫ７とほぼ同じである。長さ約1.87ｍ、幅57～90cm、深さ約20cmを測る船底型を呈している。灰黒色粘質土の単純層からなり、全体に坑底からやゝ浮いた状態で、第３様式前半の壺・甕・鉢の小破片が多量に出土した。なお、土坑の南辺部に猪の下顎骨・牙各１点が集中し、全体に微細な獣骨片が散在している。

ＳＫ11　ＳＫ10の東方約１ｍに位置する楕円形の土坑で、長軸はＮ90°Ｅを測る。長さ約1.46ｍ、幅約86cm、深さ約27cmで、周縁は他の土坑と重複している。坑底はほぼ水平で、北辺は約80°と垂直に近いが、他の３辺はゆるやかな傾斜である。灰黒色粘質土の単純層からなり、坑底から壁面にかけて少量の獣骨(鹿)が散在し、第３様式前半の壺の口縁部破片２点が出土している。

ＳＫ12　Ｊ地区ＳＢ14の東南隅部に位置し、ＳＢ14によって切られた隅丸長方形の土坑で、長軸でＮ20°Ｅを測る。長さ約1.08ｍ、幅約30cm、深さ約20cmの土坑で、坑底はほぼ平坦である。南部に第３様式前半の壺・甕の大型破片が集中して出土し、中央からやゝ北寄りのほぼ坑底から灰緑色の碧玉製と思われる小型の管玉（図版49上－**10**）が出土している。

ＳＫ13　ＳＢ12の南方約1.3mに位置する楕円形土坑で、長軸はＮ88°Ｗを測る。東端は他の土坑で切られており、現長約70cm、幅約45cmとやゝ小型の土坑である。第３様式前半の土器片少量があり、堆積土中から臼玉(図版49上－**7**)の破片が出土している。

ＳＫ14　ＳＢ14の東南方約3.5mに位置する隅丸長方形の土坑で、長軸でＮ36°Ｅを測る。長さ約3.95m、幅約55cm、深さ約50cmで、壁面は全体に急傾斜を呈している。坑底は南から北へ緩傾斜し、底面よりやゝ浮いた状態で、第３様式前半、後半の壺・甕・鉢などが中央部の東辺に集中して出土している。

(4)　自然流水路（図版11）

Ｈ地区西側の下層で確認したもので、ほぼ北から南へ向って緩傾斜し、後述するＳＤ13の第３層以下はこの自然流水路に当っている。上層の古墳時代以後の遺構調査の後、さらに下部を掘り下げたところ、上部に古式土師器を包含するＳＤ13を検出し、下部に第３様式前半の土器・木製遺物を多量に包含する青灰色砂混り粘質土層の広範な堆積を検出した。この流水路は東西約７～８ｍで、西側ではＧ地区の第１様式の落ち込み、溝址（ＳＤ１）、第３様式以降の溝址（ＳＤ９･10･11･12･13）を乗せる黄褐色粘質土の東方への傾斜に沿って皿状に堆積したもので、弥生時代中期における遺跡の東端にあたるものである。灰色粗砂と粘質土の互層からなり、流路の東西の肩は凹凸を呈し、底部から多量の第３様式前半の土器が出土し、少量の第１・２様式を混えている。流水路の底部は流れに沿った支流が形成され、それに平行して杭・矢板列が一部に認められる。木製遺物はすべて漂着したものであるが、直柄鋤(**48**)･丸鍬(**18**)・広鋤(**47**)の未製品、スコップ(**44**))、扁平片刃石斧柄(**35･37**)のほか、種子・実などを多量に包含している。

(5)　溝　址（図版６～12）

ＳＤ７　Ｂ地区のＳＢ１の西方を東から西へ向う幅約２ｍ、深さ約30cmのＵ字溝で、肩部は凹凸が激しい。第３様式前半の土器を少量含み、下層の弥生時代前期の自然流水路と重複するので、あるいは自然流水路かもしれない。

ＳＤ８　Ｂ・Ｃ・Ｄ地区を屈曲して東流し、Ｄ地区とＥ地区の南端を屈曲してかすめ、Ｆ地区のＳＢ９とＳＸ２～５の南方を横切るもので、東方延長部はＧ・Ｈ地区では検出していない。下層の弥生時代前期の自然流水路や落ち込みとほぼ重複しているので、Ｆ地区以東はおそらくＧ地区の北側へ向うものと推定される。西端部はあまり明確にできなかったが、おそらくＡ地区の自然流水路で削平されたものと思われる。同溝は幅約2.5～４ｍ、深さ約60cmのＵ字溝で、部分的に幅は平均していないとはいえ自然流水路とは考えられない。堆積層は基本的に灰黒色砂混り粘質土の単純層からなり、第３様式前半を主とした多量の土器が包含されており、下部には第２様式も若干含まれている。第３様式後半の畿内的な櫛目文・簾状文土器は微量であり、中勢地域の第３

様式前半の編年上にきわめて良好な資料を提供した。

ＳＤ９　Ｇ地区の西側にあり、北から南へ緩傾斜している。北西部の肩が大きく外弯するが、幅約４ｍ、深さ約50～60cmの台形状溝で、堆積層は黒色砂質土の単純層である。遺物は第４様式土器が少量出土し、溝底に接して自然木が若干出土している。

ＳＤ10　ＳＤ９の東方約６ｍにほぼ平行して北から南へ緩傾斜するもので、前期の落ち込みとＳＤ１の間を横切る北端は、東方へゆるやかに屈曲する。幅約2.5～4.0ｍ、深さ約50～60cmの台形状溝で、堆積層は灰黒色砂質土の単純層である。この地域の他の溝址にくらべて、溝底面が段状を呈して起伏している。第３様式後半から第４様式にかけての土器が少量出土している。

ＳＤ11　ＳＤ10の東方約1.3mにあり、北部では２条の溝がほぼ平行して重複し、中央部で東溝と西溝の２条に分離している。東溝の南部ではＧ地区東側とＨ地区西側を南へ向う幅約２～３ｍの２本の浅い溝址が合流し西側の溝内からパイプ型土器(**38**)が出土しているが混入であろう。東・西両溝はほぼ同規模で、幅約２～４ｍ、深さ約50cmの台形状溝で、両溝が重複する北側が最も深い。堆積層は灰黒色砂混り粘質土の単純層で、東溝で第３様式後半から第４様式土器、西溝ではやゝ第４様式土器が多く包含されている。

ＳＤ12　ＳＤ11の北側を東西に横切る大きな屈折した溝で、幅約２～４ｍ、深さ約50cmの台形状溝で、灰黒色砂混り粘質土の単純層である。屈折部西側の溝底面に接して、第３様式後半から第４様式の完形の広口壺(**78**)・台付鉢(**84**)・鉢(**92**・**93**・**94**)が集中して出土したほか、同時期の土器の出土が多い。

ＳＤ13　Ｇ地区の東北隅から西南へゆるやかに蛇行し、ＳＤ11を横切る地点から直線的に西へ向かい西側でＳＤ９・10を横切る溝で、西側延長部は今回の調査地域内では検出していない。ただ、Ｉ地区のＳＢ13の東方の排水路に平行した地点で南北方向の溝の西肩を検出しているが、ＳＤ13の延長部の可能性もある。幅約1.6～2.0ｍ、深さ約30cmの浅い台形状溝で、少量の第４様式土器が出土している。

3)　古墳時代以後の遺構

(1)　自然流水路（図版６、第８図）

Ａ地区の中央部を北から南へ向かう幅約22ｍ、深さ約１ｍの自然流水路で、東端部では近年の県営圃場整備直前まで用水路が同方向で流れていた。東西両肩部はきわめて凹凸に富み、水流の激しさを物語っている。流水路は基本的に上部は灰黒色粘土層、下部は灰黒色粗砂層からなり、弥生時代中期から古式土師器・須恵器など各時代の多量の土器が混在して出土している。とくに西側支流の灰黒色粗砂層と灰黒色粘質土層の堆積した幅約６ｍの流路では、縁辺部に杭と矢板を打ち込んだ箇所もあり、多量の自然木に混在して建築部材(**40**・**41**・**51**・**52**・図版40の柱)や紡織具の榎(**30**)・二又鋤(**7**)・えぶり(**11**)・杓子(**38**)のほか種子・実・加工材が多量に出土し、奈良時代後半の蓮華文軒丸瓦１点と古墳時代の鉄鎌１点（図版46）も出土している。なお、建築部材のうち図示した(**40**)は両側の穿孔部に丸太杭を打ち込んで流路の底面に固定されていた（第８図の上)。

この自然木や木製遺物を多量に包含した支流の東側では、木製遺物はやゝ少なく、最東端の支流では全く出土していない。東側の支流では第５様式から古墳時代前期にかけての土器が多数出土し、直弧文の原単位図形をヘラ描した手焙型土器(**131**)が出土している。なお、Ｊ地区の最南端部において、弥生時代中期の遺構面が北から南へ急激に傾斜し、古式土師器が少量出土しているが、あるいはＡ地区の自然流水路の南側延長部に当るものかもしれない。

(2)　溝　址

古墳時代以後の溝址は、Ｈ地区に集中し、いずれも北から南へ緩傾斜している。ＳＤ14を除く他のＳＤ15～17は、いずれも南側の大きな落ち込みに向っている。この落ち込みは、おそらく旧安濃川に近接して形成されたものと思われるので、以下の溝址もあるいは自然流水路であったかもしれない。

ＳＤ14　下層の弥生時代中期前半の自然流水路が埋没したその上部に、ほぼ重複して形成された溝址で、大きく蛇行している。幅約2.5～４ｍで、古墳時代の遺物包含層の深さは約35cmを測る。堆積層は基

本的に３層からなるが、全体にわたって古式土師器が多量に出土し、須恵器は最上部で小型瓹１点が出土したのみであり、溝址出土とはいえ古墳時代前期の土器編年に完好な資料を提供した。なお、同層からもドングリ、モモなどの種子・実の良好なサンプルがえられた。

ＳＤ15･16･17　ＳＤ14の東方にある幅約2.0～3.5ｍ、深さ約30cmの３条の台形状溝で、南側の落ち込みに向って緩傾料している。ＳＤ17の西方にもその支流と思われる細い溝がほぼ平行している。以上の３溝はいずれも堆積層は灰色粘質土の単純層で、少量の弥生土器・土師器・灰釉陶器・山茶椀が出土している。

(3)　掘立柱建物址

ＳＢ16　Ｈ地区の最上層で確認したもので、下部のＳＤ17西側の支流の痕跡と思われる細溝に重複する東西２間、南北２間の方形建物址であるが、柱筋はやゝ不揃いである。東西約4.1ｍ、南北４～4.4ｍで、南北軸でＮ28°Ｅを測る。柱穴は径20～40cm、深さ15～20cmで、遺物は土師器片が少量出土したにすぎない。Ｈ地区最上層には平安時代の土器を包含する土坑・ピットが散在するので、ＳＢ16は平安時代のものと思われるが、細かい時期決定はできない。

(4)　集石遺構

Ｈ地区ＳＢ16の北方約10ｍに位置し、下部のＳＤ11に合流する東側の支流の残存部東縁にあたる地域にある。ほぼ三角形を呈し、東西2.2ｍ、南北1.5ｍの範囲に径10～25cm大の河原石を集積したもので、規則的な配列は認められない。遺構の底面はほぼ水平で、東西方向の中央部でやゝ溝状に落ち込むが明瞭な掘り方は検出しえなかった。埋土の茶褐色砂粘質土には少量の第１様式新段階の赤焼きのいわゆる「亜式土器」片が包含されていたが混入であろう。全体に少量の炭化物もあるが集中性は認められない。あるいは上層水田の水抜きの施設かもしれない。

(5)　土　坑

Ｇ・Ｈ地区の最上層に散在し、径0.5～１ｍ、深さ約30cmを測る。少量の灰釉陶器・土師器が出土している。

３．遺　　物

整理箱で約3500箱のうち、大半が弥生土器である。このほか晩期縄文土器・土師器・須恵器・瓦・灰釉陶器・山茶椀片と土錘がある。木製遺物は約80点、石製遺物類は約1000点、玉類は17点ある。なお、本稿では平安時代以後の遺物については省略した。

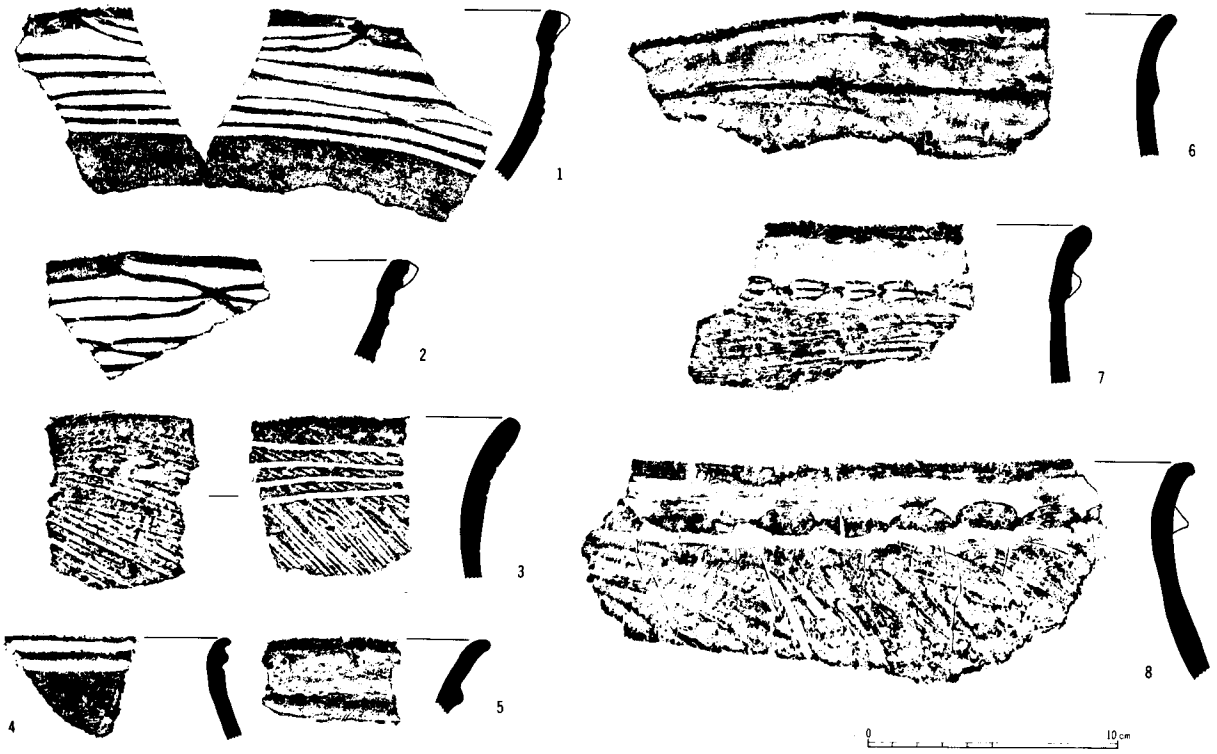
1)　縄文時代の土器（図版34、第19図）

すべて下層の自然流水路の青灰色粘土層から出土したもので、個体数は僅かである。（**7**・**8**）は、太い押圧と押引き突帯をもち以下は削痕と貝殻条痕調整の粗製深鉢である。（**4**～**6**）は半精製の深鉢と浅鉢で、断面三角形の貼付凸帯をもつ（**6**）は口唇の一部に浅い刻み目を配し、凸帯直下に１小孔がある。これら粗製・半精製土器は内面は横なでされ、馬見塚式に比定されるものである。（**1**・**2**）は精製研磨の浅鉢で、口縁部直下に工字状の浮線網状文がめぐり、工字文の集約する部分に小突起がある。内外面をていねいに研磨した黒色の土器で、文様帯が口縁部に集約されるので晩期最末の樫王式より１形式古い馬見塚式に比定されよう。（**3**）は右下りの粗い条痕の上部にヘラ描の４条の沈線をもつ深鉢で、内面にも右下りの粗い条痕があり、口縁部は角ばっている。他に類例を知らないが、晩期でも古い時期のものかもしれない。以上の縄文土器は、多量の弥生時代前期中段階の削り出し凸帯の盛行する段階の広口壺などに伴出したが、頸部か腹部に段をもつ先行形式の広口壺も少量ある。

2)　弥生時代の土器

(1)　第１様式土器（図版22～25･34～36、第20～23図）

下層の自然流水路と落ち込みから多量出土し、広口壺・甕を主体とし他に鉢・注口壺、壺・甕の蓋があり、小型の壺・甕もある。



第19図　縄文土器拓影（1：3）

○青灰色粘質土層出土の土器

広口壺　口縁部がゆるやかに外反する口径10～16cmのもので、灰白色、灰褐色、灰黒色を呈し全体にていねいなヘラ研磨で調整しているが、刷毛目を残すものが多い。段をもつものは少量あるが、主体は削り出し凸帯（**5**）とヘラ描沈線（**1**・**4**）や貼付凸帯（**3**・**6**）をもつもので、前期中段階のものが多い。新段階のヘラ描沈線・貼付凸帯のものは、口径が大型になる傾向が認められ沈線の多条化がみられる。削り出し凸帯上に沈線をもつもののうち沈線が3条以上のものには、下方に削り出しを持たない類例が多く、中段階から新段階前半に位置づけられるよう（**1**・**5**・**6**）。（**3**）は木葉状文と3重弧文を朱彩した新段階の土器である（巻頭図版）。腹部が大きく張った扁平状のもので、頸部と腹部に貼付凸帯をもつ。彩文土器は畿内では中段階に盛行するが、伊勢湾沿岸ではやゝ遅れて新段階に現われており量的にはすくない。ただ、ミニチュア壺には削り出し凸帯のものに類例がある。

第3表は、F地区下層自然流水路下部の青灰色粘土層出土の広口壺施文手法別分類表である。[1] これによると頸部や腹部に段をもつものは僅かに6％で、削り出し凸帯は49％、貼付凸帯は8％、ヘラ描沈線文は37％である。ヘラ描沈線文のうち1～3条のものが約70％を示し、同層の土器群が前期中段階に比定されることを裏付けている。なお、幅広の削り出し凸帯上に沈線をもつものでは、1～2条が約90％を占め、3条以上では凸帯の下側は帯状にならないものが主体となり、口縁部が大きく外反して口径の大型化傾向が認められ、新段階への移行過程を示している。

凸帯や沈線間にヘラ描文様や刺突文をもつものは少量で、幅広凸帯上にヘラ描文と竹管文をもつものが5点あり、沈線間に羽状のヘラ沈線をもつものが1点あるにすぎない。ヘラ描の木葉状文はすくなく、低い幅広の削り出し凸帯をもつ腹部に中心線をもつものがあり、連弧文もすくない。なお、底部周辺に十字形や連弧文をもつものも少量ある。この外、口

唇部に竹管刺突文をめぐらすものや、腹部に蕨手状の隆起帯を貼り付けるものも少量ある。なお、頸部と腹部に半截竹管による4条の沈線をもつものが少量あるが、いずれも灰白～灰黒色である。

甕 口縁部がゆるやかに外反し、口唇部にヘラ刺突文をめぐし頸部にヘラ描沈線を数条めぐらすものが主体を占めている。口径は10～16cmのものが最も多く、20cmを超えるものも少量ある。(**21**)は腹部がやゝ膨れた厚手であるが、横位と斜位の浅い条痕調整のあと腹部下半をヘラで調整している。(**22**)は主体を占めるもので縦位の粗い刷毛目が残るものである。ともに全体に付煤している。

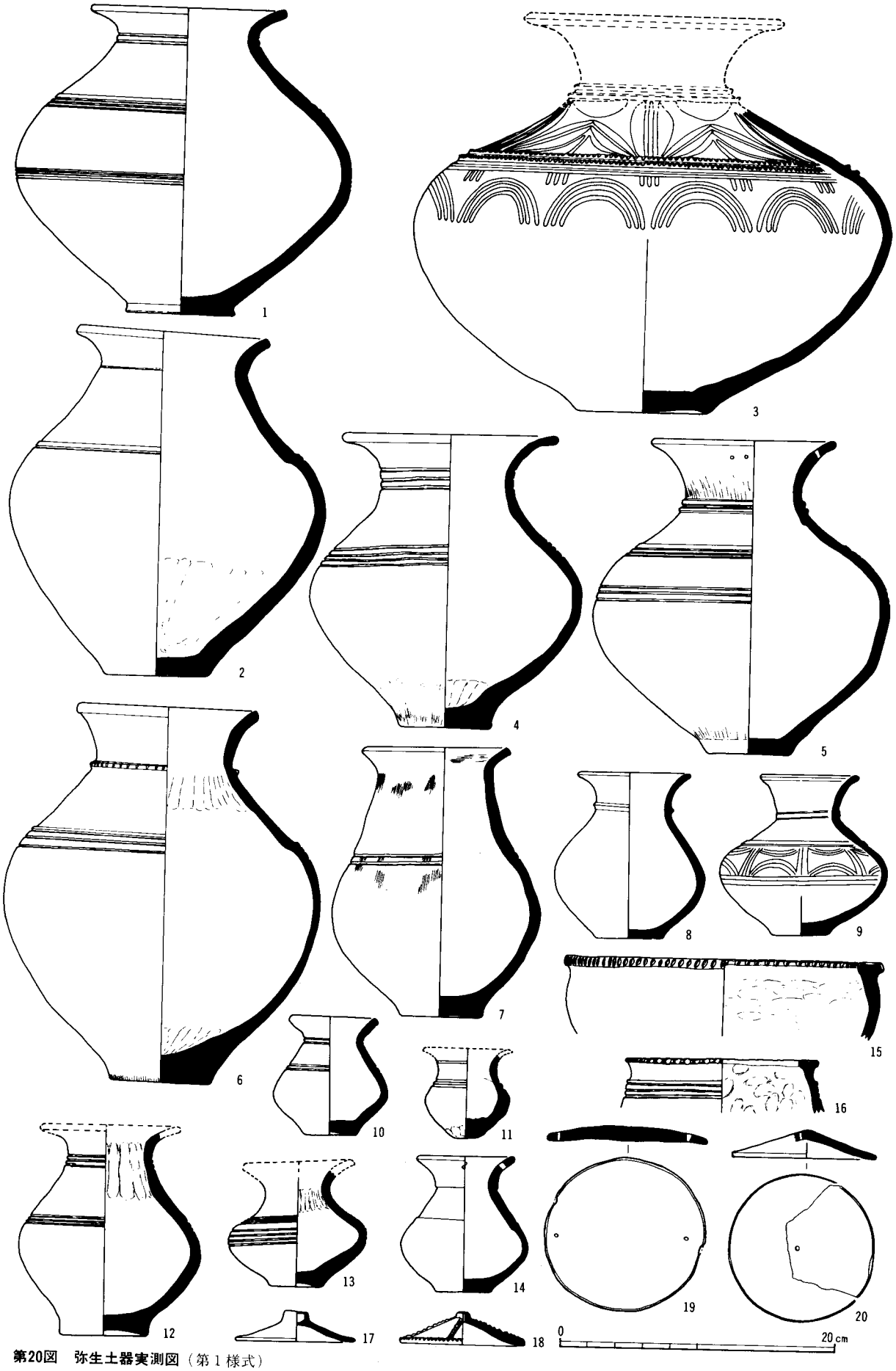
第4表は甕の施文手法別分類表である。これによると口縁部に刻み目をもつものが約95%と主体を占めており、そのうち頸部に沈線をもつものは約72%で他は無文である。このうち、表示はしていないが沈線の条数をみると、2～3条が77%と最も多く、次いで1条が19%を占めている。このうち削り出し凸帯上に沈線をもつものが2点ある。この外4条の沈線をもつものは4%あるが、いずれも半截竹管による沈線で口縁部はゆるやかに外反するもので胎土は赤褐色である。なお、口縁端部の断面を角状に突出した逆L字状の特徴ある甕が2点あり、1点は無文で、他は沈線3条をもつ。類例は四日市々永井遺跡にもあり、播磨地方から搬入されたものであろう。

この外、直口の小型甕が少量ある。口縁部直下に把手を1対もつもので、細かい刷毛目がある。

鉢 口縁部がゆるやかに外反し、腹部が丸味をもつものである。色調は広口壺に類似し、全体をていねいにヘラ磨きしたものが多い。口縁部に刻み目のないものが多いが、刻み目のあるものも少量あり、1対の扁平で小型の把手をつけるものもある。(**23**)は、ヘラ描沈線3条をめぐらし、(**23・40**)は無文である。(**15**)は、内弯した口縁部に高い貼付凸帯をめぐらし、口唇部と凸帯にヘラ刺突文をめぐらし、全体をていねいにヘラ磨きしたものである。(**16**)も同様の口縁部で、内側は素縁である。ゆるやかに外反する腹部に、幅広い削り出し凸帯と、その上に2条のヘラ描沈線をめぐらしたもので、凸帯の上方を横なでするほかはていねいにヘラ磨きしている。

第3表 広口壺型土器の文様構成(1)—F地区下層下部（青灰色粘質土）

文様＼施文個所	頸部		腹部		計
段	17		4		21 (5.9%)
削り出し凸帯					
幅狭帯上無文	14	67	6	109	176 (49.3%)
幅狭帯上ヘラ描沈線					
1～3本	51		100		
4本以上	1		2		
刺突文	1		1		
貼付凸帯					
刻目なし	3	14	5	15	29 (8.1%)
刻目あり	10		9		
布目圧痕	—		—		
刻目凸帯＋沈線文	—		1		
凸帯＋沈線文	1		—		
ヘラ描沈線					
1～3本	31	43	59	88	131 (36.7%)
4本以上	11		23		
沈線文＋竹管文	1		1		
沈線文＋平行斜線文	—		2		
連弧文	—		2		
木葉文	—		1		



第20図　弥生土器実測図（第１様式）

ともに出土量はすくない。

注口壺　内弯する腹部に水平の口縁部をつけるもので、ろうと状の注口部がつく。底部は見当らないが、広口壺の底部と同様であろう。口縁の上端面と上腹部に4条のヘラ描沈線をめぐらし口縁上端面に2孔1対の小孔がある。全体にていねいにヘラ磨きされ、灰橙色を呈している(**32**)。類品は他地区でも数点確認している。新段階のものであろう。

蓋　広口壺用と甕用の2種類がある。広口壺用は7種類あり、笠状の頂部に環口状のつまみをもつもの（**17・18**）、笠状のもの(**20**)が多く円板形のもの(**19**)はすくない。ヘラ描の連弧文や朱彩の木葉状文、外面に朱彩したものも少数ある。頂部に1穿孔をもつものが多いが、縁部に1～2孔をもつものも少数ある。甕用の壺は2種類あり、大きく外へ開く笠型(**30**)と口径が27cmの扁平状のもの(**29**)がある。ともに刷毛目の上をヘラ磨きしている。(**30**)と同形で頂部が凹状のものもある。

小型土器　広口壺と甕・鉢などがある。広口壺には段をもつもの(**16**)、削り出し凸帯のもの（**8・9・10**)、ヘラ描沈線のもの（**11・12・13・14・15**)があり、ていねいにヘラ磨きしたものが多い。(**8**)は全体に燻し焼きされた光沢のある黒色を呈した優品である。頸部と腹部上方に低い削り出し凸帯をもち、ヘラ描きによる対向する連弧文を8個めぐらし、その間を3本の沈線で画して下方に3条の沈線を配している。全体に細かくヘラ磨きされているが、頸部と底部周辺には刷毛目が残り当地方の土器作りの特徴をよく示している。なお、口縁部内面全体に朱の痕跡があり、朱の貯蔵用土器であろう。甕はすくなくないが、頸部にヘラ描沈線、口縁部に刻み目がめぐり、内面に朱の痕跡がある(**27**)。鉢には口縁が外方にひらくもの（**25・28**）と内弯するもの(**26**)があり、後者は口縁部に1対の小孔がある。

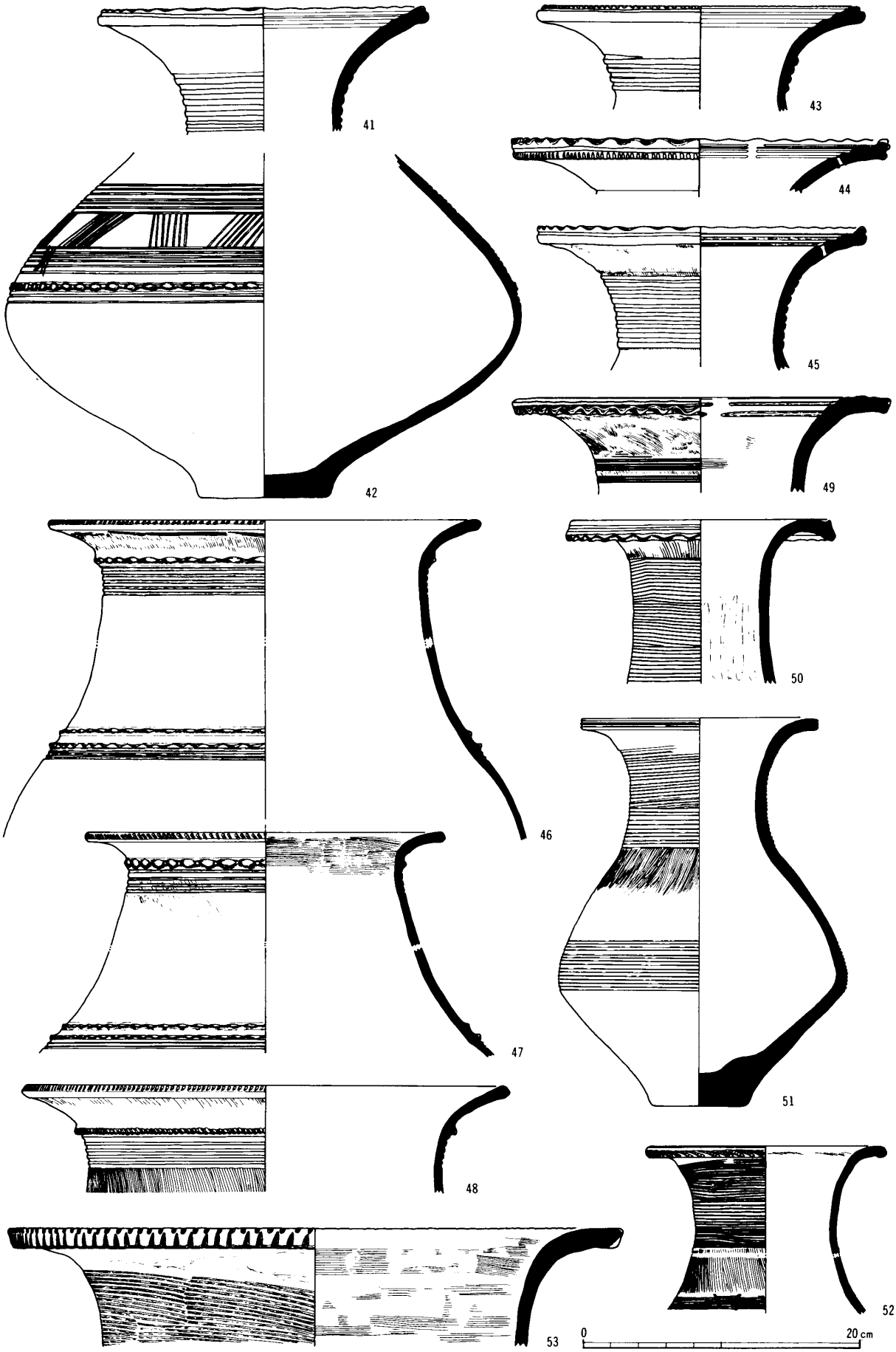
○茶褐色砂質土層出土の土器

広口壺　口縁部が大きく外反する赤褐色の土器で口径は23～30cmのものが多い。口唇部にヘラ描沈線をもち口縁部に刻目や波状の押圧をめぐらし稀に山型の小隆起をつけるものもある。口縁内面に7～10条の太いヘラ描の凹線をめぐらして頸部に丸味をもつ太いヘラ描沈線をもつ。腹部は最大径が下方にある扁平な形式で、太いヘラ描沈線帯を数条配し沈線帯間を羽状文、斜行文で飾るものも少数あり、最下部の沈線帯の上部に押圧文やヘラ刻目をもつ幅広の貼付凸帯をもつ特徴ある器形で、少量ではあるが、貝殻腹縁の圧痕や押し引き文もある。また、蕨手状の隆起文や円形のボタン文を貼付たものもある。従来、後述する甕とセットをなす伊勢湾西岸地帯に主

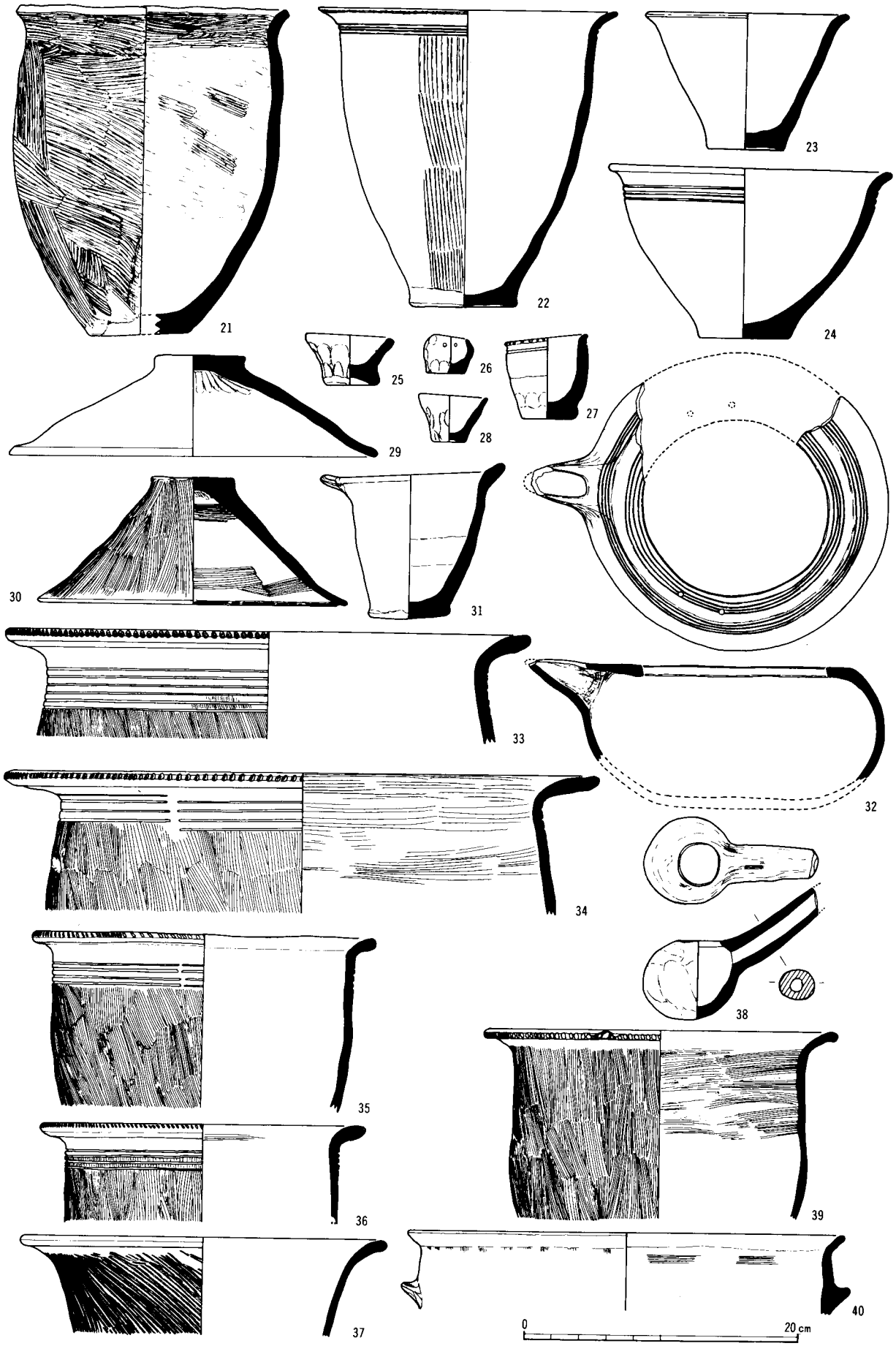
第4表　甕型土器の文様構成(1)—F地区下層下部（青灰色粘質土）

腹部文様＼口縁部文様	刻目あり	刻目なし	計
無文	33	4	37 (28.2%)
ヘラ描沈線			
1本	17※	2	19
2本	37	—	37
3本	31	1	32
4本以上	3	—	3
			91 (69.5%)
貼付凸帯	—	—	—
段＋沈線	1	—	1
貼付凸帯＋沈線	—	—	—
平行斜線	—	—	—
沈線間刺突	2	—	2
			3 (2.3%)
	124 (94.7%)	7 (5.3%)	131 (100.0%)

※ヘラ描沈線1本のうちには、削り出し凸帯上2点を含む。



第21図　弥生土器実測図（第１、２様式）



第22図　弥生土器実測図（第１、２様式）

として分布する遠賀川系亜式土器と呼称されているものである。刷毛目調整のあとをていねいにヘラ磨きしたものが多く、胎土に細かい金雲母を含んでいる。頸部の沈線文帯の上下を刷毛状具で低い段状にしたものが多く、類例は通有のヘラ描沈線多条の広口壺の頸部にも認められ、前期新段階の後半の特徴を示すものと思われる(**41**～**45**)。

亜式広口壺の口縁部施文別分類の結果、口縁内面の凹線が3条で、口唇部の上端を大きく押圧したものが最も多く、口縁内面の凹線は1～2箇所で断続するものが多い。なお、第2様式の広口壺にも同様の凹線が残るものがあり(**24**)、口唇部下端(外側)に波状押圧をもつものが多いので、形式的には口唇部下端(外側)に刻目をもつものが新しいものかもしれない。また、頸部のヘラ描沈線帯の上部や、沈線上に押圧痕のある貼付凸帯をもつものが少量ある。

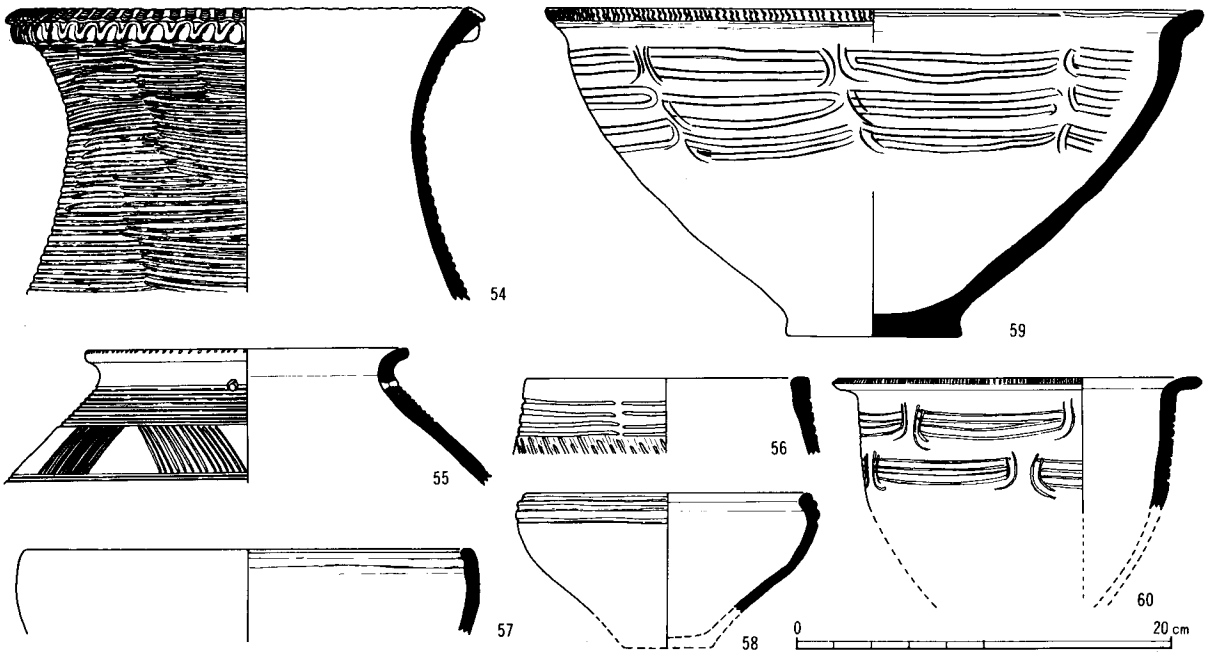
第5表は、F地区下層上部の茶褐色砂質土層出土の広口壺頸部の施文手法別分類表である。

第5表　広口壺型土器の文様構成(2)—F地区下層上部(茶褐色砂質土)

文様＼施文個所	頸部		計
無文	2		2 (0.5%)
段	11		11 (2.8%)
削り出し凸帯			
幅狭帯上無文	10	90	90 (22.0%)
幅狭帯上ヘラ描沈線			
1本	20		
2本	46		
3本	10		
4本	3		
幅狭帯上＋格子目	1		
貼付凸帯			
刻目なし			
1本	7	56	56 (14.0%)
2本	2		
刻目あり	(ヘラ)　(押圧)		
1本	8　13		
2本	16　3		
3本以上	4　3		
ヘラ描沈線			
1本	4	74	74 (18.5%)
2本	11		
3本	17		
4本	20		
5本	15		
6本	4		
7本以上	3		
口縁内凹線(亜式)	166		166 (41.6%)

上述の赤焼の広口壺の腹部は小破片が多いため口縁部のみで集約してみると、半数の約42%が赤焼き土器で、通有の貼付凸帯は約14%、ヘラ描沈線は約19%、削り出し凸帯は約23%、無文と段をもつもので約3%という比率を示す。F地区下層下部出土の広口壺と比較すると、段・削り出し凸帯・ヘラ描沈線の減少傾向が明らかであり、赤焼き土器を上層の貼付凸帯に含めるとその増加が顕著に認められ、新段階の様相を示している。ヘラ描沈線の多条化も新段階の様相を示しているが、赤焼き土器の施文特徴が形式的に第2様式に継続することから、それらを前期新段階の最末に位置づけた中ノ庄遺跡の報告の正当性を示している。ただ、第2様式広口壺の頸部にみられる複帯構成の多条櫛描沈線は、前期新段階の多条ヘラ描沈線から継承されると考えられるので、新段階の後半～最末には特徴ある赤焼き広口壺と通有の多条ヘラ描沈線の広口壺が併行しておこなわれていたと考えられるが、納所遺跡では赤焼き土器が主体を占めている。(**54**)は条痕調整の水神平1式の壺である。口縁部はゆるやかに外反し、肥厚した口縁端部に櫛状具による波状押引文をめぐらし、その直下に1.7cmを計る幅広い押圧痕をもつ凸帯をめぐらす。凸帯以下は横位の刷毛状具による粗い条痕が全面にめぐらされ、内面は指撫による。明橙色で、胎土に小石を多く含んでいる。この外、無頸壺の口縁部と思われる条痕系土器が1点あり、胎土や色調は(**54**)と類以している。

無頸壺　(**55**)は短い口縁部がく字状に外反し、口縁端部に刻目をもち、頸部に1小孔がある。頸部は10条のヘラ描沈線帯をめぐらし、沈線帯間に斜行する14条のヘラ描沈線を交互に配している。内面はて



第23図　弥生土器実測図(第1様式)

いねいにヘラ磨きされており、淡橙灰色を呈している。(**56**)も赤焼きのもので、直立気味に内斜した口縁部が肥厚し、半截竹管による沈線を4条めぐらし、腹部も粗い刷毛目で調整する。類例はすくない。

大型広口壺　口縁部が大きく外反する口径26～32cmの大型壺で、赤焼きである。口縁部にヘラ刻目、押引文や稀に貝殻圧痕文があり、頸部に1条・腹部に2条の押圧文をもつ太い貼付凸帯をもち、凸帯の下部にヘラ描沈線、半截竹管による太い沈線をめぐらしている(**46・47**)。腹部は広口壺と同様に大きく内弯し、腹部以下は完形品がないため不明であるが、少量赤焼きで直径10cm以上の類例があるので大型壺のものと考えられる。全体に刷毛目調整のあとをていねいにヘラ磨きするが、外面に刷毛目をもつものもある。広口壺に比較して個体数はすくない。

甕　赤焼きの土器で、肥厚した口縁部がゆるやかに外反するもの(**33・34**)と逆L字状に外反するもの(**35・36**)があり、半截竹管による左廻りの太い沈線2～6条をめぐらす特徴的なものである。この沈線は連続するものと、僅かな間をおくものの2種類がある。口縁端部にすべてヘラ刻目をもち、貝殻刺突文や押引文もある。外面は浅くて細かい縦位か右下りの刷毛目で調整し、ヘラで磨くものも少数ある。内面はヘラ磨きしたものが多い。口径25cm程度のものが多いが、35～43cmの大型も少量ある(**48**)。このほか、普通のヘラ描沈線をめぐらすものや、無文のものも少量ある。さらに、数点であるが浅い羽状条痕をもつ水神平式の甕がある。

鉢　(**40**)は通有の把手をもつもので、内外面を細かい刷毛目で調整し、ヘラ磨きしている。(**57**)は赤焼きの椀型鉢で、全体をていねいにヘラ磨きする。類例はすくないが、口縁部に太いヘラ描の沈線数条をめぐらしたものもあり(**58**)、縄文時代晩期の精製土器に類似するものが多い。(**59**)はゆるやかに内弯する腹部から、口縁部をく字状に外反した赤焼き系の浅鉢である。口縁部に貝殻腹縁圧痕文を密にめぐらし、腹部上半に半截竹管による4条の沈線の両端を内向する2条の沈線で画したものを1単位として8個連ねた文様帯を3段に配している。単位文様の一端では4条の沈線が連続する箇所もあり、大洞式系の工字文に類似している。口縁部内面には半截竹管の沈線2条がめぐるが大地式の口縁内部の沈線にくらべて細いものである。なお、このほか沈線のないものもある。外面は刷毛目調整のあとをていねいに撫で、内面はヘラ磨きする。(**60**)は小型甕かもしれないが、(**59**)と同様の半截竹管による文様をもつ。ともに類例はすくない。

注口土器　(**38**)はパイプ型のもので、第4様式土

器を主体とする溝址から出土したが、溝址が一部で茶褐色砂質土層を掘り抜いている箇所にあることと、胎土や淡橙色を呈していることなどから第1様式の新段階最末のものとした。長さ約7cmの中央が貫通した注口部に、径6cmの球形腹部からなり、腹部の上側のやゝ注口部へ片寄ったところに径2.8cmの円形素文の口縁をもつ。細かい刷毛目調整のあとを全体にていねいにヘラ磨きする。この外、赤焼き土器で注口部の破片が1点あり、太いヘラ描凹線を口縁部にめぐらすものである。

註

(1) 第1様式の施文分類表は、F地区下層の自然流水路の青灰色粘質土層・茶褐色砂質上層出土の土器（整理箱で約120箱分）を検討した。なお、F地区の土器量は全調査地第1様式土器の約15%に当る。

(2) 第2様式土器（図版25・36、第21・22図）

下層の自然流水路が埋没した部分にほぼ東西方向に重複する溝址（SD8）から多量の第3様式前半の土器に混入して出土したもので、出土量はあまり多くない。また、土坑などから単独で出土したものもない。広口壺と甕があり、少量ながら大型壺もある。壺には右廻りの櫛描沈線文が多用され複帯構成をもつものが主体を占める。第1様式新段階に発達したヘラ描の多条沈線文も僅かに継承されるが、ほとんどが浅いものとなる。色調は灰橙色～灰白色のものが多いが、上述の赤焼き土器と同様の赤褐色のものもある。甕は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部の数箇所に小さな押圧痕をもつものが多く、外面を刷毛状具で浅く右下りに調整したものが主体を占め、中には貝殻条痕風のものもある。他の器種については、現在のところ未抽出である。

広口壺　(**49**)は口縁部に波状の押圧文がめぐり、内面に太いヘラ描凹線もち、頸部に櫛目文がある。第1様式新段階の最末の遺制が認められる土器である。(**50**)は、口唇部に浅い櫛描沈線がめぐり、波状の押圧文をもつもので、頸部は典型的な複帯構成の櫛目文である。大型壺にも同様に口縁部下端に波状押圧文をもつものが多く、稀に小型の瘤状隆起を口縁部内面にもつものがある。(**51**)は第2様式広口壺の典型例である。頸部と腹部に複帯構成櫛目文を配し、頸部が長く腹部が下方で強く張る形式である。なお、頸部櫛描文帯の下側は櫛によって撫で取られて低い段状を呈している。こうした低い段状の類例は余り多くはないが、第1様式新段階でも後半以降の広口壺に多用された技法が継承されたものである。(**52**)は口縁部に櫛状具の浅い押圧文がめぐり、腹部沈線帯の櫛による擬似流水文がみとめられる薄手ののものである。

大型広口壺　(**53**)は口径44cmのもので、口縁部の上下端に櫛状具による刺突文がめぐる。この外、口縁部下端に広口壺にみられた波状の幅広い押圧文をもつものも多いが、形式的に(**53**)が後出のものであろう。なお、口縁部内面の上端を口縁に沿って横撫で調整するのが一般的である。

甕　口縁部に刻目あるもの(**39**)と、刻目のないもの(**37**)がある。第1様式甕にくらべて器壁の薄いものが多く、胎土に長石粒を多く含むものが目立ち、にぶい赤褐色を呈している。

(3) 第3様式土器（図版25～28・37、第24～27図）

第3様式土器は、前半と後半の2段階に明瞭に区別することができ、第3様式前半は東海地方の貝田町式・瓜郷式に併行するもので、広口壺、大型壺・細頸壺、鉢、高杯、甕、蓋などの器種がある。大型壺の肥厚した口縁部に刻目・押圧文をもつものには第2様式の遺制が認められるが、新らたな要素が加えられて第2様式との隔絶は大きく、地方色の濃い様相を示している。第3様式後半は簾状文が盛行するなど畿内的な様相が濃厚で、凹線文もみられる。この第3様式土器については尾張地方では貝田町式を古・新の2期に分け、一方、畿内地方では第3様式を前半と後半の2段階か、古・中・新の3段階に分類されている。両地方の中間にある伊勢湾西岸地域において、貝田町新期を近畿地方のどの段階に対比しうるかは微妙な問題をもっている。その意味から、遺構に伴なう一括資料を重点的に検討したが現状では明確にできないため、当様式の前半を貝田町式古期併行期とし、将来その新古の2様相を抽出することを課題としている。さらに、住居址・溝址出

土の一括土器群においても、貝田町式古期に併行する土器群に畿内地方で盛行した簾状文をもつものが微量ながら含まれており、これらの土器が畿内第3様式のどの段階に属するかは微妙であり、こうした細かい問題を含みながらも、第3様式前半を東海的な土器のおこなわれた段階とし、後半を畿内的なものと区別している。

○第3様式前半

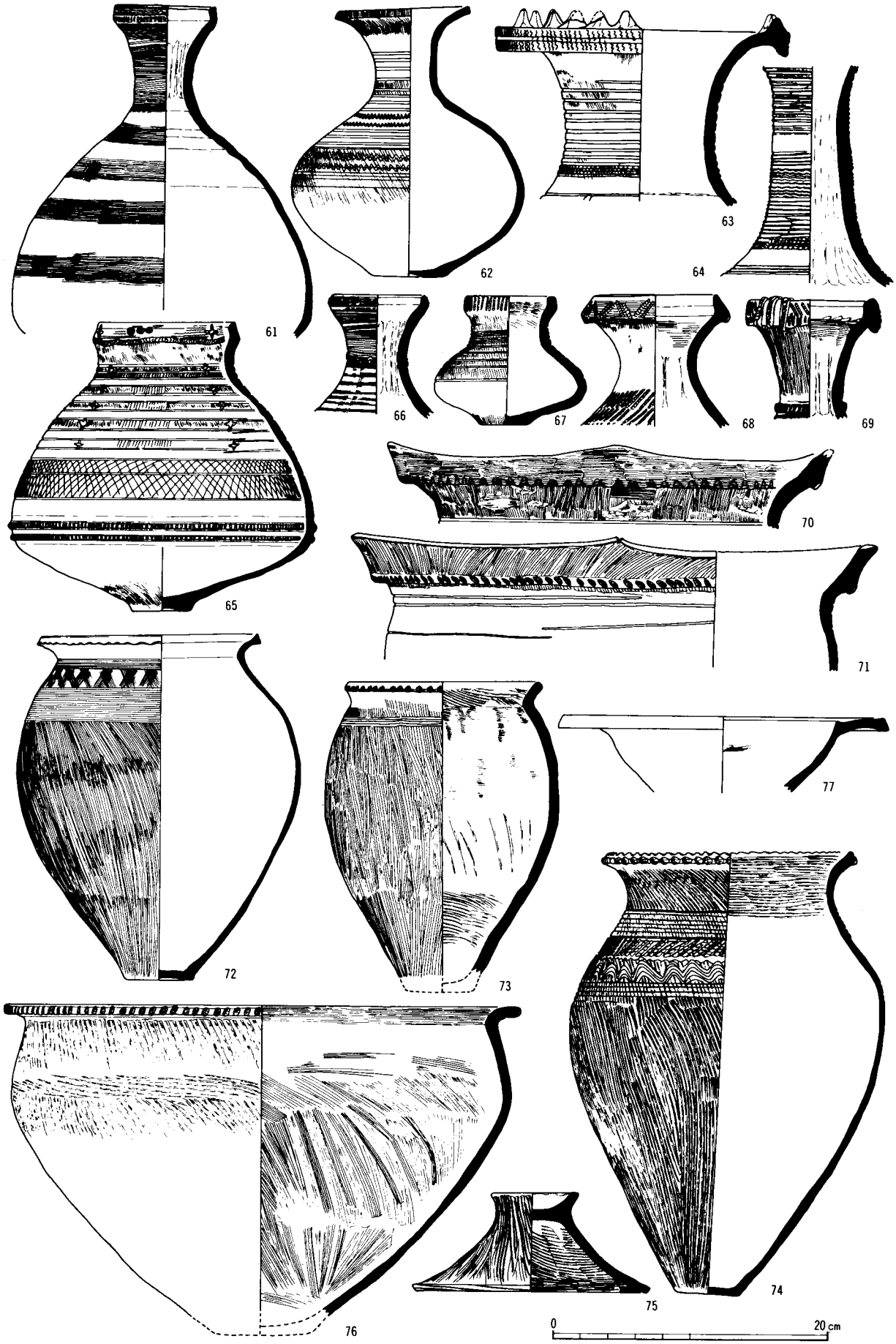
広口壺　頸部全体に細かい刷毛目調整が発達し、特に口縁部内面に瘤状の貼付が顕著にみられるようになり口縁部端面を櫛による波状文、刺突文や刻目をもつ紐貼付が盛行し、内面に刺突文がめぐるものが多い。(**63**)は、口縁部に貝殻腹縁の刺突文がめぐらされている。頸部には主として右廻りのヘラ描沈線帯が多用され、第一次調整の縦位の細かい刷毛目を区切っている。沈線帯の下部はヘラ描の斜行・格子文沈線帯で画すものもあり、この部分が僅かに隆起するものもある。腹部は上半で肩の張る器形が多くなり、東海地方の特徴を備えているが、櫛描沈線文帯間をていねいにヘラ磨きしたものが多いのもこの時期の特徴である。腹部が刷毛目調整のままのものでは、斜格子状に全体を磨いた暗文風のものも少量あり、また、頸部と腹部を左下りの縄文帯で飾るものもある。(**65**)は短く直立気味に内折する口縁部と大きく下方で張る腹部に2重の貼付凸帯をめぐらした明褐色を呈する精良土を用いた薄手の広口壺である。口縁部は細かく浅い波状文をめぐらし、3個1組の竹管による円形浮文と櫛状具で刺突した十字状の貼付文を四方に配し、貝殻腹縁による刺突文がめぐる。細かい刷毛目調整のあと頸部以下は右廻りのヘラ描沈線14条を配し、頸部には口縁部と同様の貝殻刺突文、腹部下方には斜格子状の細かいヘラ沈線文帯2段がめぐり、十字状の貼付文とヘラ沈線を交互に縦位に配している。下部の貼付凸帯は1本の凸帯の中央をヘラで分割し、櫛状具で同時に刺突している。腹部の貼付や沈線をもつ飾られた沈線帯以外の文様帯間はていねいに美しくヘラ磨きされており、凸帯以下もヘラ磨きされている。貝田町式の新段階のものであろう。

小型広口壺　(**67**)は口径6.4cm、高さ9.2cmの腹部下半で大きく張るもので、口縁部は受口状をなす。口縁部に櫛目刺突文がめぐり、以下は縦位の粗い刷毛目の上を、右まわりのヘラ描沈線を配している。腹部下半と底部は、粗くヘラ削りする。

大型広口壺　口縁部の破片が多いが、肥厚した口縁部端面の上下に刻目文、櫛圧痕文をもち、太いヘラ描沈線をめぐらしたものや、刻目をもつ紐を数箇所に貼りつけたものもある。少量ではあるが、口縁部内面に瘤状突起を貼りつけるものや、円形浮文をもつものもあり、小さな三角形文をならべて刺突するものもある。頸部は広口壺と同様に刷毛目調整のあと太いヘラ描沈線帯をめぐらしている。

細頸壺　第3様式前半の特徴的な器形であり、口縁部が内折し大きく内弯する腹部の下方が強く張るもので3種類がある。A類(**61**)は頸部に縦位の刷毛目調整をのこし、数条のヘラ描沈線帯をもつもので、沈線をもたないものも少量あり、口縁部に櫛描波状文、刻目文をめぐらしたものが多い。B類(**66**)はA類と同形態であるが、頸部に主として右廻りの細かい櫛目沈細帯を密にめぐらし、腹部には間をていねいにヘラ磨きした櫛目沈線帯をめぐらしているものが多いが、1沈線帯をヘラ磨きによって分割したものもある。沈線上を頸部から腹部にかけて縦位に櫛原体で小さく区切るように施文したものが多く、研磨帯の幅広のものではヘラ・櫛による横位区切りをもつ擬似流水文風の文様もある。口縁部や頸部～腹部に円形貼付文、十字状貼付文のほか貝殻腹縁の細かい刺突文をもつものが多く、腹部の沈線文を左下りの縄文帯で飾り、ヘラ描沈線で上下を画するものもある。なお、腹部の沈線帯には2～3段を同時に施文したものもあり、波状文と沈線文を交互にめぐらすものもあるが、第3様式後半に含まれるかもしれない。

C類は、く字状に幅広く内折する肥厚した口縁部をもつ特徴ある土器である(**68・69**)。やゝ垂下気味にした口縁部の下側に櫛押圧痕をめぐらすもので、幅広い口縁部端面には粗い櫛目の山型文や列点文をもち、横位の粗い刷毛目のままのものもある。頸部以下は粗く刷毛目調整するが、刻目をもつ太い貼付凸帯をもつものもあり、腹部は粗い刷毛目に櫛目か刷毛目の沈線がめぐらされ左下りの粗い櫛状具によ



第24図　弥生土器実測図（第３、４様式）

る刺突文帯をもつものもある。口縁部内面には粗い刷毛目があり、これはA・B類には全くみられない特徴である。後述する甕C類とセットになるもので、少量ではあるが第3様式前半にみられる。

甕　全体に粗い刷毛目調整が盛行し、腹部に櫛目による幅広い沈線文帯や列点状の刺突文帯をもつものが主体を占め、底部中央に焼成後に穿孔した甑も多い。形態上3種類がある。

A類(**74**)は、口縁部がゆるやかに外反し、口縁部の下端に櫛・ヘラによる押圧痕、押引文がある。頸部以下に櫛描沈線を数帯めぐらし、口縁部内面は頸部にかけて粗い刷毛目が入り、木葉の圧痕をもつ底部も多い。B類(**73**)は、く字状に短く外反する口縁部をもつもので、頸部に櫛描沈線がめぐる。A類にくらべて少量である。C類(**70・71**)は口径30cm以上の大型例が多く、波状に隆起した口縁頂部に刻目をもち、大きく肥厚した口縁端面には横位の刷毛目調整と下端に櫛状押圧痕、押引文をもつ特徴的な土器である。腹部には浅い櫛目文がめぐらされたものが多い。以上のうちB類はほぼ第3様式前半に盛行する器形で、次代にほとんど継承されない。C類は壺C類とセットをなす特徴的な土器で、第4様式には薄手となり山型の隆起口縁が僅かに肥厚して残るが量的にはさらにすくなくなる。A類は当地方の中期甕の主体を占めるもので、以後、第3様式後半から第4様式にかけて腹部を櫛目列点文・波状文で飾る薄手のものになり、同時期に少量みられる受口状口縁部をもつ甕にも継承されている。なお、少量であるが厚手で直立気味の高台が当時期に認められる。

鉢　(**76**)は口径約38cmの大型例で、口縁部に刷毛状具の刺突文がめぐり、口縁部内面に粗い刷毛目調整があり、当時期の典型例である。腹部外面に浅い刷毛目をもち、短い高台をもつものもあるが、口縁部内面に刷毛目を残す以外はていねいに撫でつけられている。

高杯　完形品がすくないが、(**77**)はゆるやかに外反する口縁部をさらに幅広く外延させた器形のもので、口縁部内面に三角形の凸帯を貼付けている。脚部は細長い筒状のものや、中空状でゆるやかに裾が外反するものがある。また杯部の口縁部に刻目がめぐるものもある。

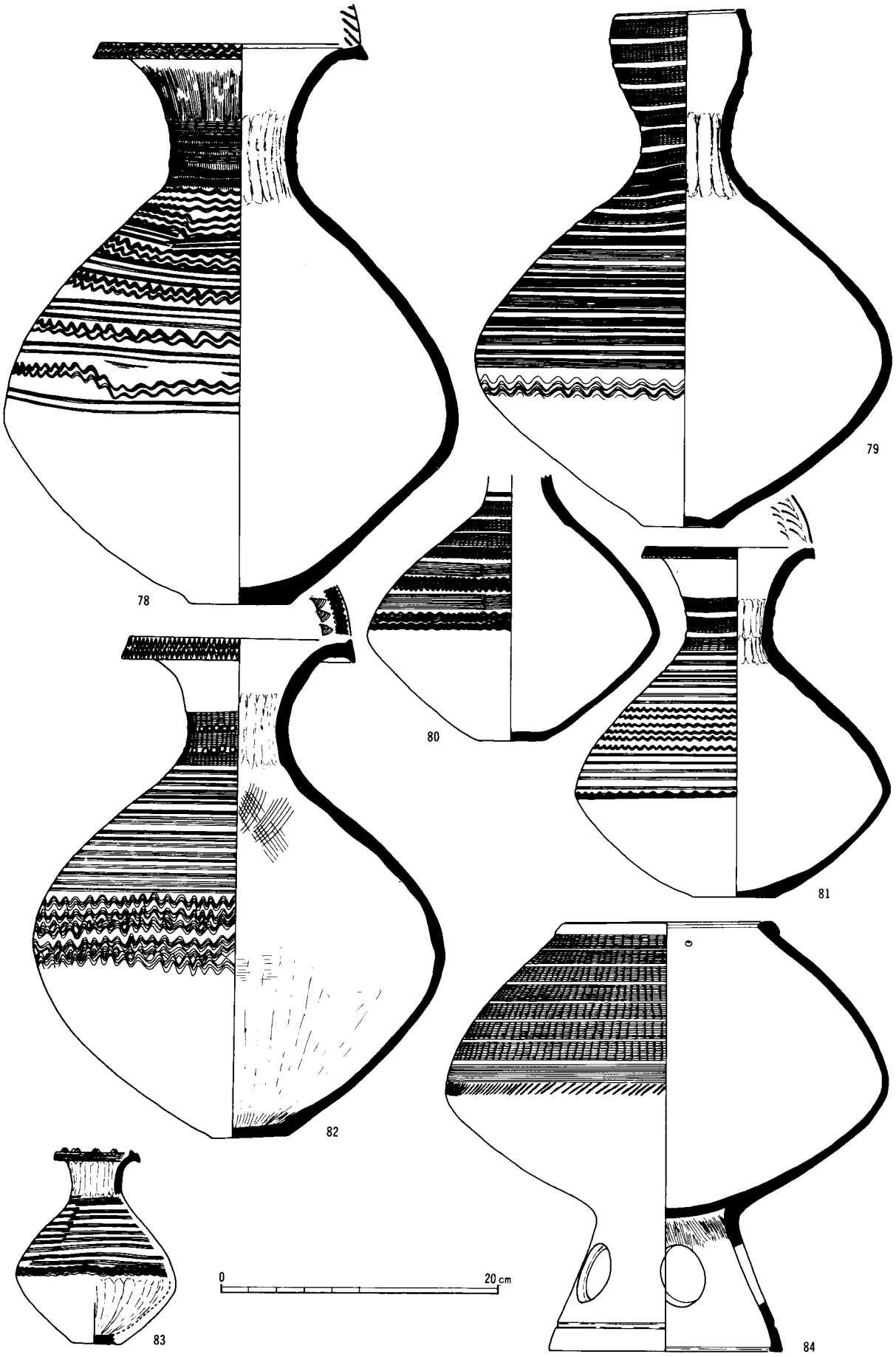
蓋　(**75**)は甕用のもので、内外面に粗い刷毛目調整があり、口縁部内面の端部全周が付煤している。

○第3様式後半

第3様式後半の土器には、広口壺・大型広口壺・台付無頸壺・細頸壺・鉢・高杯・甕などがあり、器種が前半にくらべて豊富になる。さらに簾状文・流水文や凹線文・扇形文など畿内地方で盛行している櫛描技法や甕・鉢・高杯などに横撫の調整が採用され、胎土も前代のものにくらべて細かい金雲母を含む精良土が用いられ、茶褐色～淡褐色を呈した類型時な色調のものが多くなるなどきわめて畿内的な様相が濃厚になる。広口壺の器形にみるように腹部がソロバン玉型に似た強く張るものは当地方の特徴をよく示している。

広口壺　形態上4種類がある。A類は大きくゆるやかに外反する口縁部に引き締った頸部から下半で強く張る腹部からなるもので、口径は約12cm～20cmである(**78・80・81・82・83・85**)。施文はきわめて類型的で、口縁部に細かい波状文、頸部に3～4帯の右廻り簾状文、腹部にたばねた櫛による沈線文・波状文を配し、強く張った腹部の文様帯の下段は波状文をめぐらすものが多い。口縁部内面に波状文・扇形文・刺突文をもつものが多いが、第3様式前半に盛行した内面の瘤状隆起は大型広口壺にはみられるが、その他の広口壺では余りみられなく、むしろ消滅する傾向にある。(**83**)は、口径6cm、高さ13.7cmの小型土器で、口縁内部に12個の瘤状隆起を貼りつけている。(**78**)の頸部は6条の簾状文帯にみえるが、2条が2つの櫛をたばめた原体で右廻りに施文されているとともに、同一原体で口縁部の波状文と内面の刺突文を施文している。さらに腹部以下では別のたばねた櫛を用い、順次上から下にかけて施文するが、波状文は右廻り、沈線は左廻りと施文方向が異なっている。腹部下半はていねいにヘラ磨きされている。

(**85**)は簾状文と流水文をもつ広口壺である。腹部上半の5帯の簾状文は右廻りで幅約1.3cmを測る。最下段の簾状文の終結部から連続して流水文帯が始り、以後流水文帯は対向して右廻りで上から下へめぐらされる。流水文帯は11箇所あるが、10番目のものは施文部が狭くなり、11番目の施文後にその右側に施



第25図　弥生土器実測図（第３様式）

文されている。

(**96**)は、ＳＢ８の土坑の土器群に１点共伴した三河地方から搬入土器である。口縁部は欠失しているが、腹部上方に肩をもち、腹部が下方で強く張る三河地方独特の器形で、頸部と腹部に細いヘラ描の沈線を左廻りでめぐらし、沈線間を異なる原体で右下りの斜線、次いで左下りの斜線をいれて斜格子状文を配している。縦位の沈線間は、右下りの斜線、次いで左下りの斜線をいれるが、一方向のみの部分もある。胎土に粗い砂粒を多く含み、暗褐色の土器で、下長山式併行期のものである。

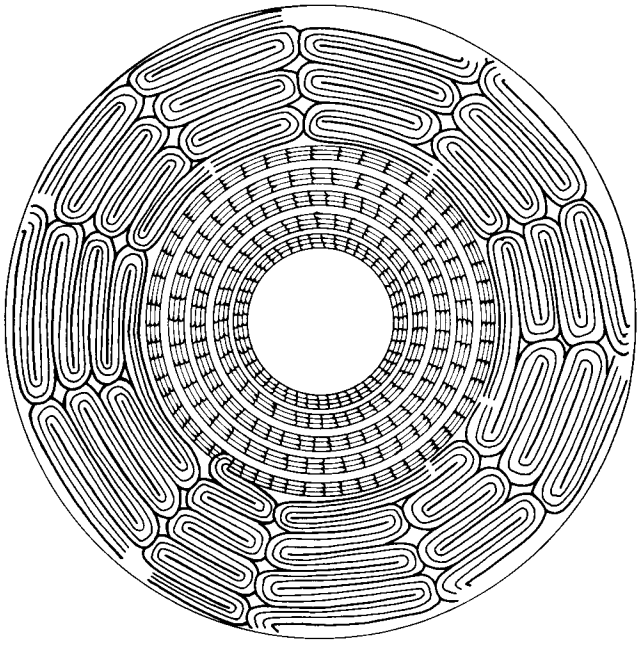
Ｂ類は形態的にはＡ類に似たものであるが、頸部に一条の櫛描沈線文帯をめぐらす以外は全く無文の壺で、浅い刷毛目を全体にていねいになでつけて消しており、腹部下半はヘラ磨きしている。類例はきわめてすくない。

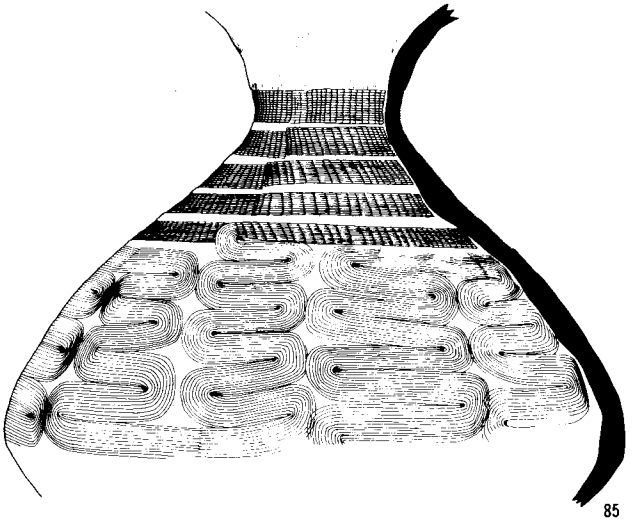
Ｃ類(**88**)は受口状の口縁部に凹線文をめぐらすもので、大小の２種類がある。大型例は口径15～20cmのもので頸部以下に簾状文・沈線文帯をめぐらす装飾の多いものがあり、小型例では簾状文はみられなく頸部に太い櫛描沈線文や波状文のみになる。腹部に櫛描の双頭渦文状をもつもので、(**79**・**81**・**82**・**87**)と共伴したものである。

Ｄ類(**87**)は短く内折する受口状のもので、口縁部下側に刻目がめぐり、腹部に櫛描沈線文帯と波状文をもち、腹部上半に肩をもつ第３様式前半の形態を継承したものである。なお、短く直立する高台をもつものもあり、頸部に櫛描沈線と簾状文をめぐらしている。

大型広口壺　図示していないが、口径約30cm、高さ約60cmのものがある。広口壺と同形態で施文も類似するが、強く張る腹部に２～４条の櫛による斜格子文をめぐらすものが多く、口縁部内面に瘤状隆起文をもつもの、頸部や口縁部に竹管文をもつ円形波文を貼るものなど装飾性豊かな土器である。

台付無頸壺　(**84**)は内弯する口縁部を折り返して肥厚するもので、腹部は強く張り、大きく外へ踏んばる脚台部は円孔４個をもち、下部に太い凹線１本がめぐる。口縁部以下には簾状文７帯と沈線文、櫛刺突文を配し、底部はていねいにヘラ磨きし、脚台は撫でつけている。口縁部直下に４個の紐孔がある。





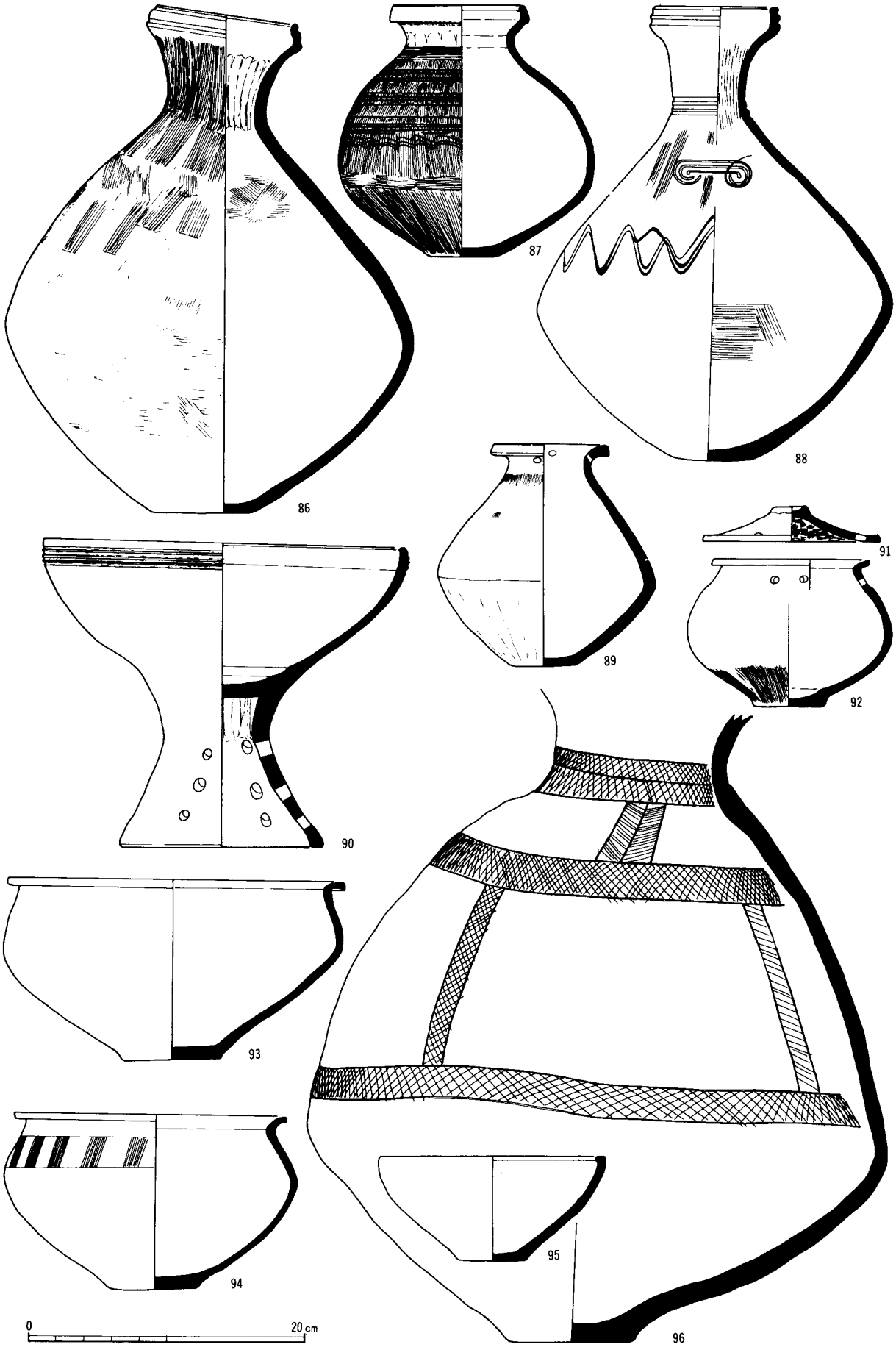
第26図　弥生土器(流水文壺)実測図（１：３）上段は模式図

細頸壺　(**79**)は、ゆるやかに内弯する頸部に11帯の簾状文をめぐらし、腹部に８帯の同一原体による沈線文と波状文１帯を配したもので、土坑墓（ＳＫ１）から（**81**・**82**・**87**・**88**）と共伴したものである。

鉢　口縁端部を折り返しておさえて肥厚するもので、２～３帯の簾状文や波状文、沈線文をめぐらすものがある。同形態で口縁部を短く外反する無文のものもあるが、ここでは第４様式として取扱った。

なお、台付鉢の脚部で透し孔を多数めぐらすものには、内面をヘラ削りしたものも少量ある。

高杯　完形品がなく少量であり、第４様式との区



第27図　弥生土器実測図（第3，4様式）

別は困難である。杯部はゆるやかに外反した口縁をさらに外延してその端を垂下したものが多い。脚部は2種類あり、第3様式前半にみられた中実の円筒状のものはなくなり、中空状で裾がゆるやかに外反し小孔を2段に数個めぐらすものと、中空の円筒の下方を外反させた無孔のもので脚端部を肥厚して「く」字状に内折させるものがある。後者は第4様式のものかもしれない。

甕　第3様式前半のA類・B類が主体を占めるが、前半にくらべて器壁が薄くなりはじめることと櫛による刺突文・波状文で飾るものが増加する傾向がある。さらに少量であるが受口状の甕があり、第4様式にも継承されていく。畿内的な無文の甕が増加するのもこの時期からであるが、外面を細かい刷毛目調整し、内面は撫つけたものが多く、稀に底部から上方に削るものがある。大型甕では、口縁部をく字状に強く外反し端面を上方に引き伸すものと、伸ばさないものがあり、刻目がめぐるものがある。

(4) 第4様式土器（図版27、第24・27図）

基本的に第3様式後半の器種構成や胎土、色調も大差はなく、広口壺では凹線文が盛行する一方で簾状文は次第に消滅するようである。

溝址（SD12）、住居址（SB8）、土坑から出土したものであるが、第3様式後半と第4様式を明確に区別することはきわめて困難であり、納所遺跡ではこの段階の一括資料には恵まれていない。当遺跡の北西約2.5kmに所在する安濃町亀井遺跡のSK1出土資料は、若干第3様式を混入しているようであるが、現在のところ比較的まとまったものである。

広口壺　口縁部が受口状で凹線文をもつもの(**86**)が主体を占める。頸部以下を細かく刷毛目調整し、腹部下半はていねいにヘラ磨きする。(**89**)は小型のもので、2個1対の紐孔をもつ全体をていねいに磨いたものである。

細頸壺　図示していないが、受口状の口縁部に3～4条の凹線文をもつもので、頸部に櫛刺突文と太い櫛描沈線、腹部に太い沈線文を相互に配している。

鉢　大小の2種類がある。大型例(**93・94**)は口径20cm以上のもので、口縁部は短く外反する。小型例(**92**)は2個1対の紐孔をもち、笠状の蓋(**95**)がつく。全体にていねいにヘラ磨きされた土器である。(**95**)は、口縁端部が僅かに内折する浅鉢で、茶褐色のていねいにヘラ磨きされたものである。

台付鉢　(**90**)は内弯する口縁部に3条の細くて浅い凹線をめぐらし、台脚部は大きく外反し、下端は僅かに内弯し、3段の透し孔がめぐっている。この外、脚部の裾に太い凹線が数本めぐるものもある。

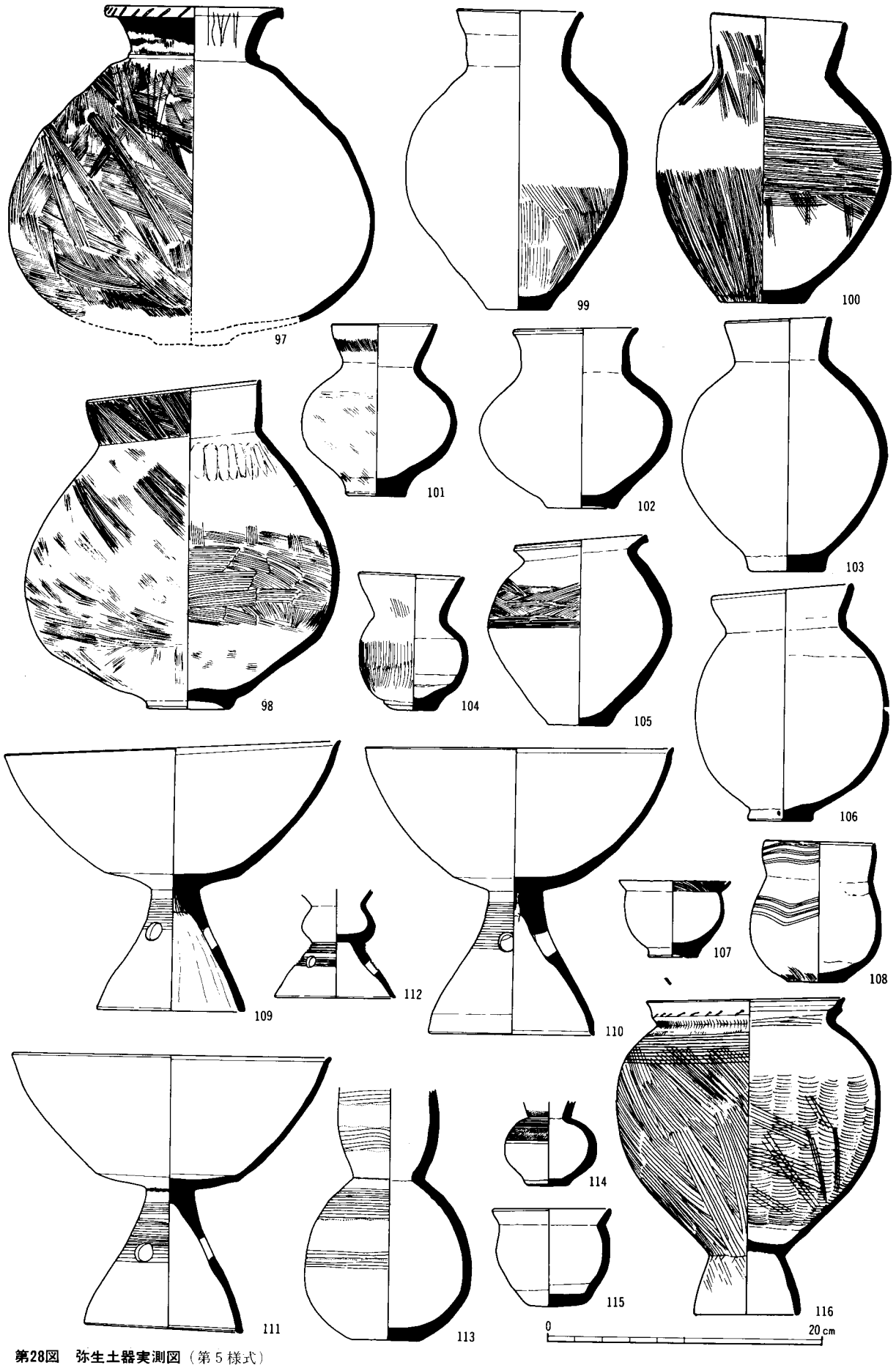
甕　第3様式前半のA類・B類が継承されるが、器壁はきわめて薄くなり、腹部が大きく内弯するものが主体を占める(**72**)。図示していないが受口状の甕も施文はこれらと全く同じである。畿内的な甕では小型例が多い。短く外反した口縁端部を上方につまみ出したものもあり、外面を細かい刷毛目で調整し、内面は刷毛撫でや底部から上方に刷毛で削り上げたものも多くなる。少量ではあるが、腹部上半は横位・下半を右下りの長目の叩目をもつものが少量あり、叩目のあとを細かい刷毛目で調整したもので、内面は下部を削り上げている。

(5) 第5様式土器（図版29～31・37、第28・29図）

調査地区西端の自然流水路から各時期のものと混在して出土したもので、他の遺構からまとまって出土していない。これまで伊勢湾西岸地方の第5様式土器は、上箕田Ⅳ式期→西ヶ広期→高松期の3段階に編年されているが、地域的な差もみられるようであり、また必ずしも器種構成が明確になっていなはい。基本的には櫛描文が一貫して盛行し、畿内的な特色をもつものも認められる。さらに中頃から後半には再び地方色が濃厚になり、古式土師器に移行するが、分類が明確さを欠いたまま敷衍されているきらいがないでもない。上述のごとく、自然流水路からの抽出資料であることと器種が揃わないなど不充分であるが、いちおう3段階に分けて図示したもののみについて紹介する。

○第5様式前半

上箕田Ⅳ式に併行するもので、広口壺・小型広口壺・甕があり、量的にはすくない。小型広口壺類は畿内的様相が強い。



第28図　弥生土器実測図（第５様式）

広口壺　(97)は、ゆるやかに外反する口縁部をさらに外延するもので、頸部に凸帯1条を貼付け腹部は下半が強く張る。口縁部に櫛刺突文をめぐらし、腹部は細かく刷毛目調整した明橙色を呈し、口縁部内面と腹部上半にヘラ描記号文が各1箇所にある。(98)は口縁部がゆるやかに直立気味に外反し、腹部下半が強く張り、全体を細かい刷毛で調整する上げ底のものである。

小型広口壺　A類(99・100・103・106)は胴長のもので、腹部外面をていねいにヘラ磨き・ヘラ削りしたものが多いが刷毛目のものもあり、(104)も刷毛目のある小型例である。B類(101・102)は腹部が強く張るもので、調整はA類と同じである。なお両類とも内面はていねいに撫でつけたものが多い。

甕　(105)はく字状に短く外反する口縁部に細い沈線1条をめぐらすもので、外面は縦位の粗いヘラ削りのあと、上半を刷毛目調整する。下腹部は全体に付煤している。

○第5様式中頃

西ヶ広期に併行するもので、広口壺・小型広口壺・台付壺・鉢・甑・甕・手焙型土器がある。

広口壺　(117)は口縁部がゆるやかに外反し、腹部が前段階にくらべて丸味をもつもので、全体を細かく刷毛目調整する平底のものである。(120)は短く外反した口縁端部を上方につまみ出し、口縁部に櫛刺突文をめぐらすもので、頸部に低い貼付凸帯をもつ。上腹部に左廻りの櫛描沈線を3帯配し、下方に櫛刺突文を密にめぐらしている。

小型広口壺　(119)は口縁部が前段階のものにくらべて長くなり、上底になるなど次期に盛行する瓢壺に近似するものである。腹部下半を細かく刷毛目調整する。

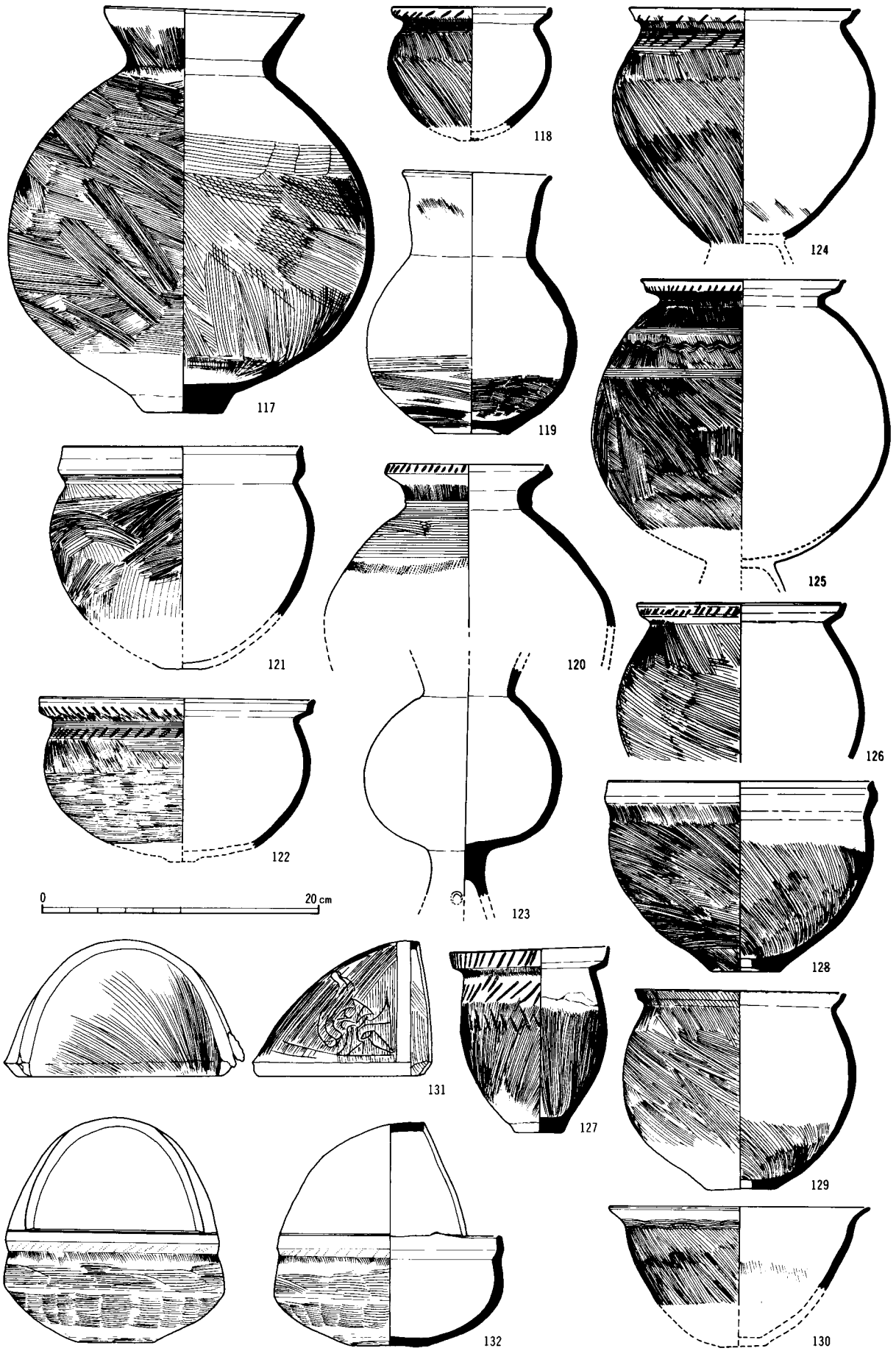
台付壺　上箕田Ⅳ期には、ゆるやかに外反する短い口縁と丸味を持つ椀型の台付無頸壺もみられるが、(123)は小型広口壺に外反する脚部をもつものである。腹部は縦位でていねいにヘラ磨きする。

鉢　口縁部が受口状を呈するが、端部は丸味のものが多い。(122)は、頸部に細かい櫛描沈線がめぐり口縁部と頸部に櫛刺突文をめぐらし、腹部は刷毛目調整で小さい平底をもつ。上箕田Ⅳ式期にも多いが、まだ明確に区分できない。(118)は小型例である。(130)は口縁部がゆるやかに外反する浅鉢で、頸部にゆるやかな細い櫛波状文がめぐり、腹部は粗く刷毛目調整している。(127)は口縁部と上腹部に櫛刺突文をめぐらす受口状のもので、口縁部内面にも同様の刺突文が左廻りにめぐらされている。全体に刷毛目で調整する。

甑　受口状の口縁部が内折するものと、口縁端部をつまみ出して小さな面をつくるものの2種類がある。(128)は腹部が丸味をもつ灰白色を呈したもので、全体を細い刷毛目調整し、内面下部にもみられる。(121)は底部を欠くが同類であろう。(129)は口縁部以外は両面とも下から上へ細い刷毛目調整した上げ底の淡褐色のもので、内面を撫でつけている。2種類とも、底部穿孔は焼成以前のものである。第5様式の甑は、津市高松遺跡・竹川遺跡・名張市蔵持黒田遺跡で出土しているが受口状ではない。他にこの時期の類例は現在では見当らず、古式土師器にもないので口縁部の形態や刷毛目調整が甕と類似することからこの時期のものとした。

甕　受口状で、短く外反する脚台をもつものと思われる(124・125・126)。口縁部と頸部に櫛刺突文がめぐり、頸部と上腹部に細い櫛描沈線や波状文をもつもので、外面の刷毛目調整は細かい。

手焙型土器　下腹部が張る受口状浅鉢に、覆部を付けた完形品である(132)。鉢の口縁部に当る箇所に櫛刺突文をめぐらし、以下は浅く刷毛目調整した上げ底のもので丸味をもつ、覆部は細かい刷毛目の上をていねいに撫でつけている。内面はていねいに撫でつけてあり、覆部と鉢部との接合は内面からである。胎土は精良土で淡橙色を呈した焼成良好のもので、付煤痕跡はない。(131)は覆部のみで、鉢部との接合方法は(132)と同様であり、内面から接合のために付加した部分が受口状鉢の口縁の曲線に沿う形で残っている。覆部の内外面を粗く刷毛目調整し、縁部に沿って横撫でした後に両側に浅い押圧をもつ紐を取り付けるが、片側にその上端が遺存している。開口部を正面に据えた場合、その左側に当る外面の開口部に近接した箇所にヘラ描の文様がある。文様は奈良県纒向遺跡の石塚古墳周濠から出土した弧文円板の文様に類似したものと、その左側に接して上



第29図　弥生土器実測図（第５様式）

部は剝落しているが３本の曲線でＳ字状の蛇に似た文様を配しており、両文様の下側の基底に弧状の沈線を２本入れるが下段の方は途中で消えている。両文様の切り合いから、左側の蛇様部から描き始め、順次右側へ移動していったことが判明する。右側の文様はすべて単線で構成され、中心線をもつ部分もある。直弧文の原単位図形に類似し、刺状突起をもち、反転すれば相似形になる部分があるなど、石塚古墳出土の弧文円板の文様に類似している。宇佐晋一・斎藤和夫両氏より観察の結果についてご教示いただいたが、この文様は直弧文原単位図形の意識が強く、各図形はかくされない。４個の原単位図形の変化したもので構成されるが、組み合わせなく法則性がみられない。原単位図形をかなり自由に変形する許容度が高く、纒向遺跡出土の弧文円板を通らない原単位系の直弧文であって、そういう作者の一群の存在が予想される。左端の長いＳ状図形は直弧文的でないとのことである（図版37、表紙拓影）。

○第５様式後半

高松期に併行するもので、小型壺・瓢壺・高杯・甕がある。壺・高杯は精良土を用い、淡橙色を呈するものが多い。

小型壺　(**114**)は櫛描沈線と細かい櫛刺突文をめぐらすもので、全体をヘラ磨きする。(**108**)は口縁部と腹部に細い櫛描沈線帯をめぐらし、口縁端部に面をもつ。(**107**)はく字状に短く外反する口縁部で、薄手の上底のものである。

瓢壺　(**113**)は瓢壺としては古い形式のもので、腹部の張りはまだ強くない。口縁部と腹部に浅い櫛描沈線を各２帯めぐらし、貝殻腹縁による刺突文をめぐらしている。口縁部内面と外面全体をていねいにヘラ磨きしている。

高杯　この時期に至って杯部の深い高杯の出土量はきわめて多くなる傾向がみられるようである。大きくゆるやかに外反する口縁部の端に斜目の面をもつもので(**109・110・111**)、円板充塡された脚部は長く下方で内弯する特徴的な器形である。脚部上方に数帯の櫛描沈線をもつものは後期前半からであるが、後半に至ると上方に集約されるものが多い。脚部の透し孔は、３孔のものが普通である。全体に薄手で精良土を用いたものが多く、ていねいにヘラ磨きされている。

甕　(**116**)はＳ字状口縁のもので、口縁部に櫛刺突文がめぐり、上腹部と口縁部内面に刷毛目状の粗い櫛目がめぐる。内外面を粗い刷毛目で調整した薄手のもので、ゆるやかに外反する脚部内面の折り返しはない。安達・木下分類の第Ｉ類に当るものと思われる。なお、以下の記述中、Ｓ字口縁甕の安達・木下分類は「　」に示した。

3)　古墳時代の土器

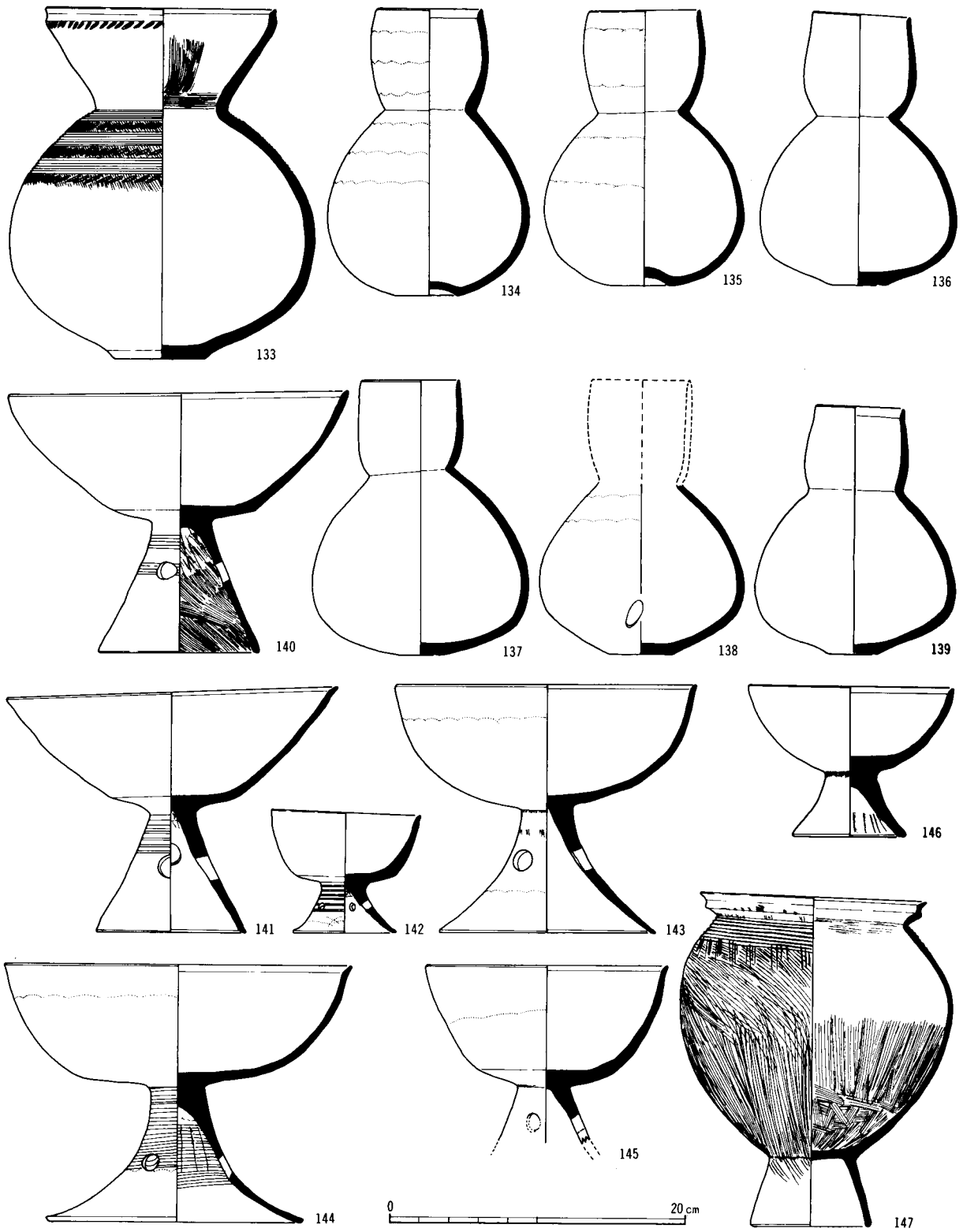
納所遺跡における古墳時代の土器については、須恵器出現以前の古式土師器と、それ以後の段階のものがある。これらは西端のＡ地区自然流水路から前代の土器群と混在して出土したものと、東端のＨ地区ＳＤ12の第２層出土土器である。なお、ＳＤ12の土器は、古墳時代のみであったが、各期のものが混在している。

(1)　第Ｉ期（図版32、第30図）

弥生時代後期に出現した瓢壺が盛行し、高杯も前代の形式を継承するが脚部に退化傾向がみられる段階で、小型精製土器は共伴しない。広口壺・瓢壺・高杯・甕がある。

広口壺　(**133**)はゆるやかに外反する口縁端部が僅かに内弯し、端部が面をもつもので球形の腹部に平底をもつ完形品である。口縁部に櫛刺突文、腹部に右廻りの櫛描沈線と刺突文がめぐる。口縁部は指撫し、外面全体と口縁部内面はていねいにヘラ磨きし、腹部内面は刷毛目調整である。精良土を用いた焼成良好なもので、淡橙色を呈している。

瓢壺　下腹部が大きく張る特徴的な器形で、口縁部はゆるやかに内弯して丸く終るもの（**135・136・137**）と、端部内面に斜目の面をもつもの(**134・139**)の２種類がある。ともに小型の上げ底が多いが、腹径が口径の２倍以下で腹部の張りが弱いものには、口縁部と腹部に貝殻腹縁の刺突文がめぐらされ、上げ底例が多い。腹部の張りの強いものは、底部が小型化し、丸底に近くなるとともに、口縁部も下方で内弯するものが多く、前者から後者への移行が推定



第30図　土師器実測図（古墳時代第Ⅰ期）

される。後者は第Ⅱ期に含まれるかもしれない。器壁はきわめて薄く、精良土を用いた焼成良好なもので、淡橙色を呈した器面には焼成前に化粧土を上掛けしたかと思わせるものもある。全体をていねいにヘラ磨きしたものが多い。

高杯　杯部に段をもち直接的に外反するもの(**141**

・142)と、ゆるやかに丸味をもって外反するもの(143・144・145・146)の2種類があり、ともに口縁部に斜目の端面がある。前者の脚部は直線的に外反し、上部に櫛描沈線文がめぐる。後者の脚部はゆるやかに裾が外反するもので、上部に櫛描沈線をもつものもある。両者ともに脚部は3～4孔のものが多い。口縁部と脚部に貝殻腹縁の細かい刺突文がめぐらされたものが多く、瓢壺にもみられるこの段階の特徴である。全体をていねいにヘラ磨きしたものが多い。(142)は小型例であるが、類例はすくない。

甕　S字口縁は外反した屈曲部が鋭く稜をなすもので、口縁端部は内側に面をなして尖る(147)。外面全体は脚部を含めて粗く刷毛目調整し、頸部直下にやゝ粗い櫛描沈線がめぐり、口縁の屈曲部に僅かであるが櫛刺突文の痕跡がある。口縁部内面は刷毛目のあとを雑に横撫している。「II類」に当るものであるが、その中でも古い形式に当るものと思われる。

(2)　第II期　(第31図)

小型精製土器3種のうち、小型丸底壺が共伴しない段階で、H地区SD12第2層出土土器の一部である。瓢壺は前段階の2種類のうち下腹部の張りが強い形式のものかもしれない。広口壺・小型広口壺・高杯・小型器台・小型鉢・甕がある。

広口壺　口縁部の形態に2種類がある。(148)は大きく外反する口縁端部が丸く終るもので、下腹部が強く張る上げ底のものである。口縁部内面に櫛刺突文を2帯めぐらし、上腹部に櫛描沈線と波状文をめぐらすもので、頸部に刷毛目が残る以外はていねいにヘラ磨きする。(151)は複合口縁のもので、鋭く屈曲した段から立ち気味に外反する口縁端部を上方に短くつまみ出した形式のもので、腹部は下部で張るものと思われる。

小型広口壺　口縁部の形式で2種類ある。(149)は肥厚気味に外反した口縁端部が丸みをもつもので下腹部が強く張り、腹部は細かく刷毛目調整する。(150は鋭く外反した口縁端部を上方に短くつまみ出したもので、下腹部で強く張り僅かに上げ底のものである。口縁部にヘラ刻目をめぐらすものもあり、口縁部内面全体をていねいにヘラ磨きする。

高杯　杯部に丸味をもつものはすくなく、杯部の接合部に段をもち口縁部が大きく外反する形式のもので(157・158)、脚部は短目で裾が大きくひろがる(159・160)。前段階までみられた脚部の櫛描沈線は消滅する。精良土を用いた淡橙色のものが多く、全体をていねいにヘラ磨きしたもので、第III期にも継続する。

小型器台　(154)は口縁部が欠失しているが、椀型の台が乗るものと思われ、脚部は直線的に大きく外反し、外面はていねいにヘラ磨きし暗文風にみえる。内面はていねいに撫つけている。

小型鉢　(153)はゆるやかに2段に屈曲して大きく外反する口縁部のもので、端部は丸味をもつ。内外面をていねいにヘラ磨きし、ゆるやかにひらく腹部内面は下から上方へ向って暗文風に磨かれている。

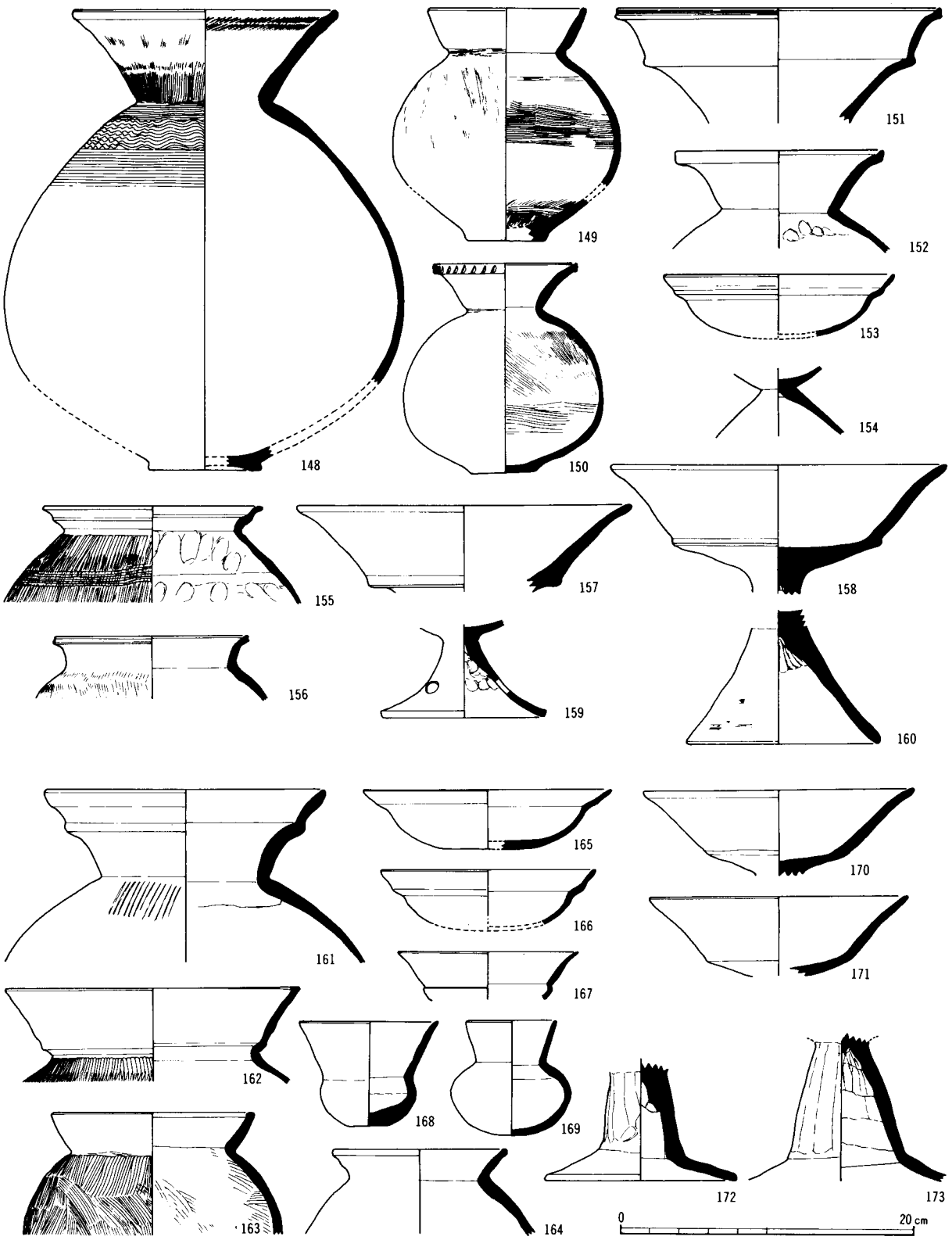
甕　(155)はゆるやかに外反するS字状口縁で、外面は粗い刷毛目調整のあと上腹部に浅い櫛描沈線をめぐらしている。脚部は内面下部に折り返しのある形式のものである。口縁部は横撫し、櫛刺突文はなく、屈曲部内面の刷毛目を消え内面は指で撫つけている。「IIIA類」であるが、この段階では(147)のような「II類」も伴なうと思われる。(156)は、口縁部が短く外反するもので、端部が僅かにつまみ出されており、外面は刷毛で縦位に細かく撫つけられている。

(3)　第III期　(第31図)

3種類の小型精製土器が揃う段階である。小型丸底壺は口縁部が大きく外反し、腹部が扁平のものが多い。広口壺・小型壺・高杯・小型丸底壺・小型鉢・甕があるが、小型器台は小破片のみであるので省略した。

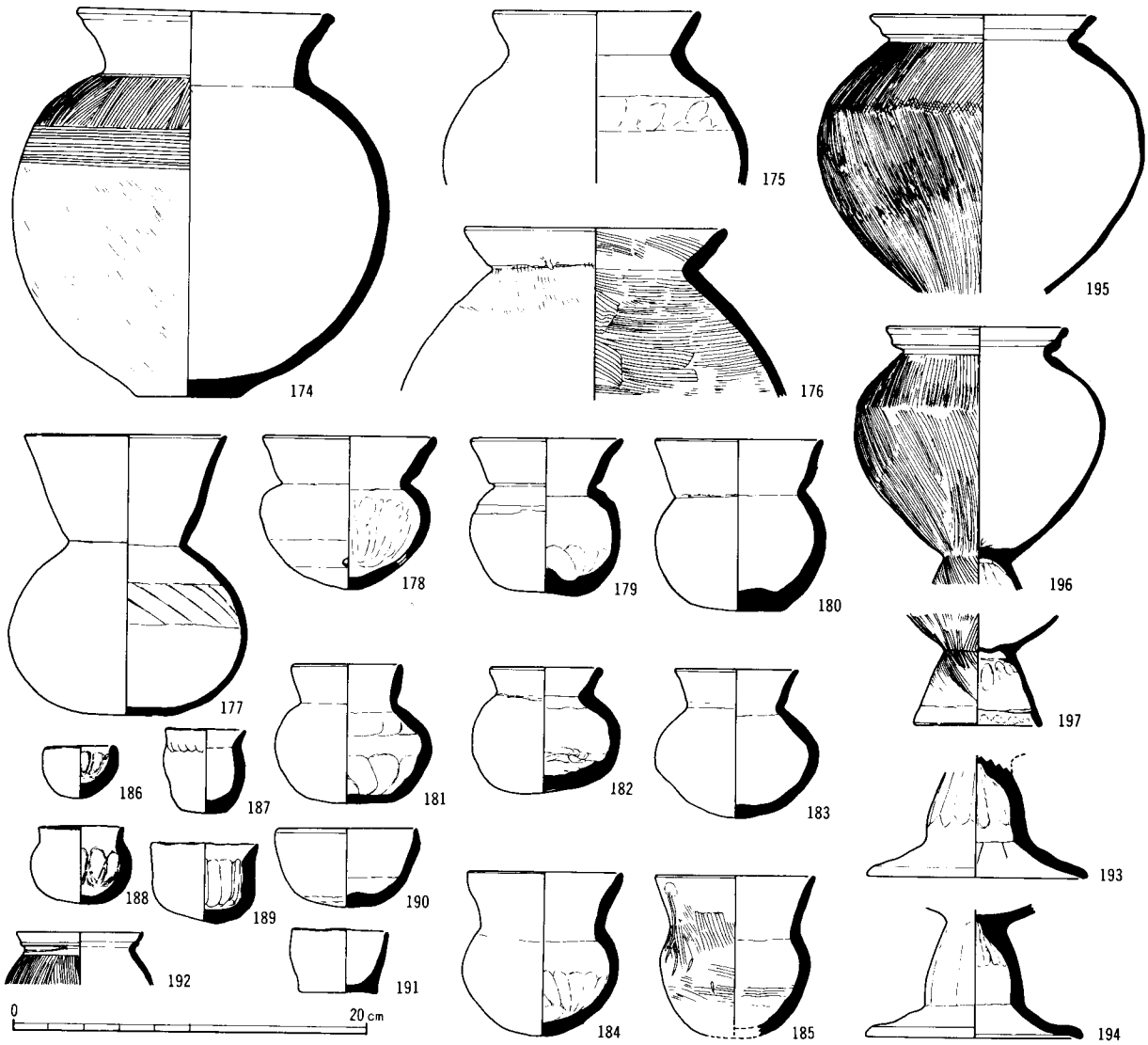
広口壺　(161)は複合口縁のもので、第II期にくらべて全体に退化し、端部は丸く終る。口縁部の段は丸味をもち、形式的には当期の後半かあるいは第IV期に含まれるかもしれない。上腹部は横なでされているが、粗い刷毛目が1箇所につく。

小型壺　(169)はやゝ扁平な球形の腹部に、ゆるやかな稜をもって大きく外反する口縁部をもつ薄手のもので、小さな上げ底である。全体に磨滅しているが下腹部にヘラ磨きがあるので、全面におよんでいたと思われる。胎土精良で淡褐色を呈している。



第31図　土師器実測図（上段―古墳時代第II期、下段―同第III期）

高杯　第II期の杯部に段をもつものも継続されるが、主体を占めるものは明瞭な段が消えて口縁部が大きく外反するものであり、口径は前期にくらべて小さくなる(**170・171**)。脚部は前期と同形式のものが多いが中膨み気味のものもある(**172・173**)。全体にヘラ磨きされるが、指なでのものもある。



第32図　土師器実測図（古墳時代第Ⅳ期）

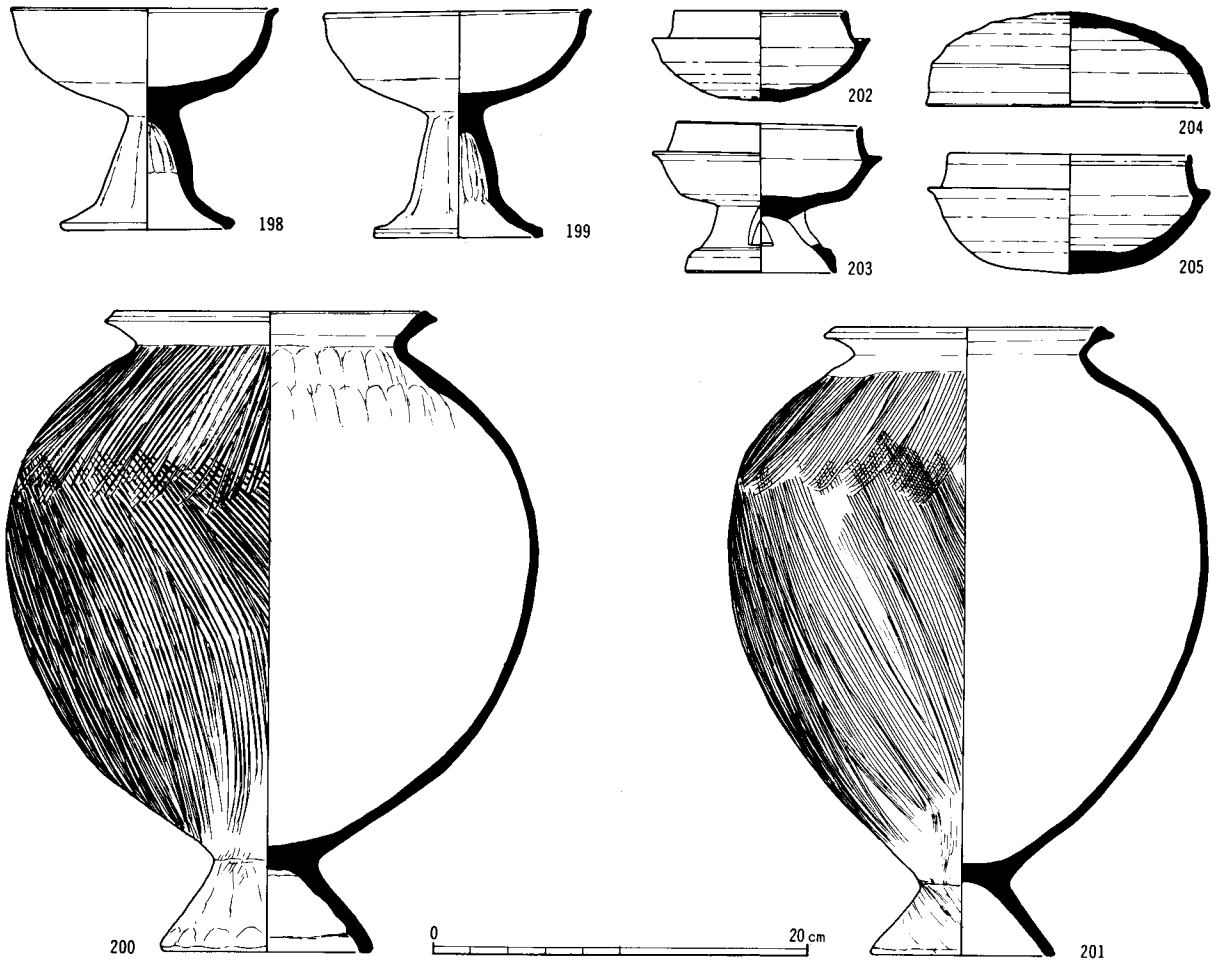
小型丸底壺　(**168**)は扁平な球状の腹部に、口径の大きく直線的に外反した長い口縁部をもつもので、下腹部を左廻りにヘラ削りされ、器面はなでつけられている。形式的にはや、後出のものであろう。(**167**は当期の典型的なもので、腹部は極端に扁平状を呈し、全体をていねいにヘラ磨きするが、腹部内面はなでつけられている。

小型鉢　(**165・166**)は形式的には第Ⅱ期のものであるが、口縁の段がさらにゆるやかになるもので、両面をていねいにヘラ磨きし、暗文風のものもある。

甕　S字口縁甕は第Ⅱ期の「ⅢA類」が主体を占める。この他、当期には特徴ある甕が出現する。(**162**)は、口縁部の下部に僅かに稜をもち、直線的に長く外反する口縁端部を内側に肥厚させたもので、腹部は右廻りで粗く刷毛目調整する。口縁部の内外面はていねいに横なでし、胎土は緻密で淡褐色を呈し外面全体に付煤している。(**163・164**)は短く外反する口縁端部を内側に肥厚させたもので、口縁部内外面を横撫し(**163**)は腹部外面を右まわりで粗く刷毛目調整し、内面は粗い刷毛で撫つけているが指撫で刷毛目が一部消えている。ともに胎土は緻密で、淡橙色を呈し、外面は付煤している。

(4)　第Ⅳ期　(図版33、第32図)

当期に至って前段階に盛行したヘラ磨き技法が衰退しはじめ、ヘラ削りが盛行する傾向がみとめられる。器形的にも前段階までにみられた定形化が崩れ出し、全体に粗雑な作りのものが増加しはじめ、特



第33図　土師器・須恵器実測図（古墳時代第Ⅴ期）

に小型土器に顕著にみられる。H地区ＳＤ12の第２層でも上部から出土したものである。Ｓ字口縁甕は「ⅣＡ類」が主体を占め、その前後の形式が混在しているので将来は２期に細分しうる可能性がある。広口壺・高杯・小型丸底壺・ミニチュア土器・甕があり、小型器台・小型鉢は良好な資料がないため図示していない。

広口壺　(**174**)は短く外反した口縁端部が僅かに肥厚するもので、腹部は球形となり平底である。上腹部は粗く刷毛目調整し、櫛描沈線をめぐらし、以下は底部まで刷毛目の上を下方から上へ向って粗くヘラ削りする。内面は全体に撫でつけられており、胎土に砂粒を含み茶褐色を呈している。

高杯　杯部は第Ⅲ期の段のないものが主体となり、脚部(**193・194**)も中太りで裾が大きく外反する形式のものが多い。

小型丸底壺　口径と腹径が同じか、口径がより小さいものばかりとなり、丸底のものや平底のものもある(**178～185**)。下腹部全体を粗くヘラ削りしたもの(**178・179**)には、口縁部にゆるやかな稜をもつものが多く、あるいは当期でも古いものとして細分できるかもしれない。口縁部は横撫でし、内面は指圧痕や成形時の紐積み痕をのこすものがある。胎土に砂粒を多く含み、灰褐色・淡橙色を呈し、外面に付煤したものが少量ある。

ミニチュア土器　丸底のもの(**186・188・189**)と平底(**187**)の２種類があり、当期から古式須恵器の伴なう第Ⅴ期にかけての出土が多い。いずれも手捏で撫つけたものが多く、砂粒を多く含んでいる。

甕　Ｓ字口縁甕は、口縁部がやゝ肥厚して丸味をもつもので、腹部中央が張り器壁は薄い。脚部も薄手で折り返しがある(**195～197**)。口縁部は横撫し、外面は粗く刷毛目調整し前段階までみられた櫛描沈線が消える。(**192**)は小型例で、口縁部が短く外反し、

端部は丸く終っている。

(5) 第Ⅴ期（図版33、第33図）

納所遺跡において古式須恵器を伴なう段階のものを一括した。H地区ＳＤ12の最上部で須恵器瑳１点が出土したのみで、Ｓ字甕も「ＶＡ類」を数点含むにすぎない。この段階のものは西端のＡ・Ｂ地区自然流水路で混在したものから抽出した。土師器には高杯・椀・甕があり、須恵器は陶邑編年のＩ期中頃から末頃に比定される、５世紀末頃から６世紀前半のもので、胎土は精良で暗灰色を呈したものが多く、久居古窯址群の製品であろう。杯・蓋杯・高杯がある。なお、第Ⅳ期を細分すれば、須恵器を共伴する段階のものも含まれている可能性がある。

○土師器

高杯　(**198・199**)はゆるやかに丸味をもって外反する口縁部端面を平たく外につまみ出した杯部に、中太で裾が大きくひらいた脚部をもち、端面は内側へ僅かに肥厚するものである。杯部は横撫し脚部は縦にヘラで面取りしたあとを撫ており、内面に絞り目がある。砂粒を含み、灰茶褐色を呈する。

椀　高杯に似た口縁部のもので、全体に指おさえのあと撫でつけている。砂粒を含み赤褐色である。

甕　Ｓ字口縁部の退化形式のものである。(**201**)は口縁部が肥厚し、強く張った腹部は下方ですぼまり鋭く外反した脚部内面には折り返しがない。外面を細かく刷毛目調整し、淡褐色を呈する「ＶＡ類」のものである。(**200**)は球形の腹部にするどく外反した折り返しのある脚部からなり、外面は太目の粗い刷毛目調整し、内面の屈曲部には２段の指頭おさえがめぐり、脚部にも痕跡がある。灰褐色を呈し、「ＶＢ類」のものである。

○須恵器

杯　(**202**)は短く垂直気味に立ち上る口縁内側に段をもつもので、外面をひろく左廻りでヘラ削りしたもので底部にヘラ描の十字文がある。(**205**)は口縁部内側の段が不明瞭になり、外面のヘラ削りも底部周辺に限られるもので、火膨れがある。

蓋杯　(**204**)は垂直気味の口縁部内側に浅い段をもち、天井部は右廻りでひろくヘラ削りする。

高杯　どっしりとした短脚に１対の三角形の透し孔をもつもので、口縁部内側に段をもつ。杯底部のみ浅くヘラ削りがみられる。他に脚部に小円孔３個をもつものがある。

4) 木製遺物

弥生時代前期・中期と古墳時代以降の３時期にわたる木製遺物が出土した。弥生時代前期のものは、Ｂ～Ｆ地区下層の自然流水路下部およびＧ地区下層の落ち込みの２箇所において青灰色粘質土層中から出土し、伴出の土器から前期中段階を中心とする時期のものである。

弥生時代中期のものは、Ｈ地区下層の青灰色粗砂層から中期（第３様式前半）の土器を共伴した。古墳時代以降のものは、Ａ・Ｂ地区の自然流水路から出土し、それ以前の時代のものも混入するが、一括して取扱うことにした。

(1) 弥生時代前期（図版３・４・５、38～42、第34～37図）

○農　具

鍬・鋤・スコップ槌・竪杵があり、鋤・鍬には未製品もあり、カシ材が多い。

鍬　形態別に５種類がある。幅10cm以上のものを広鍬としたが、側縁が内弯するものと直線の２形式があり、いずれも完成品はない。(**13・14**)は３連式の未製品で、原形段階のものである。(**16・42・45・46**)は切断された段階のもので、(**46**)は側部に樹皮を残している。

狭鍬は、刃部の形態で２種類ある。(**3**)は直線刃で側縁が大きく抉られたもので、長円形の低い突起をもち、柄装着角度は60°である。(**4**)は曲線刃で断面はやゝ弯曲し、船型突起をもつもので、柄装着角度は70°である。

又鍬も身頂部の形態で２種類ある。(**1**)は半円形を呈し船型突起をもち、使用時の手前側の刃基部に補強用の段を削り出している。柄装着角度は110°である。(**2**)は方形で両端の刃はやゝ外反し、長円形

の突起をもち、柄装着角度は110°である。柄の角度からみて引鍬であるが、(**2**)は柄つぼが退化し、刃部の段がないなど(**1**)にくらべて退化形式であり、すでに前期段階で叉鍬に退化現象がみられるが、刃部を外反させるなど引鍬としての機能の拡大に工夫がみられるものである。

丸鍬(**5**)は木目が横に走る薄手のもので幅18.6cmと小型である。柄装着角度は約140°である。A地区自然流水路から出土しているので、中期前半のものかもしれない。この外、前期の未製品をみると幅25、cm以上の大型例が多い。

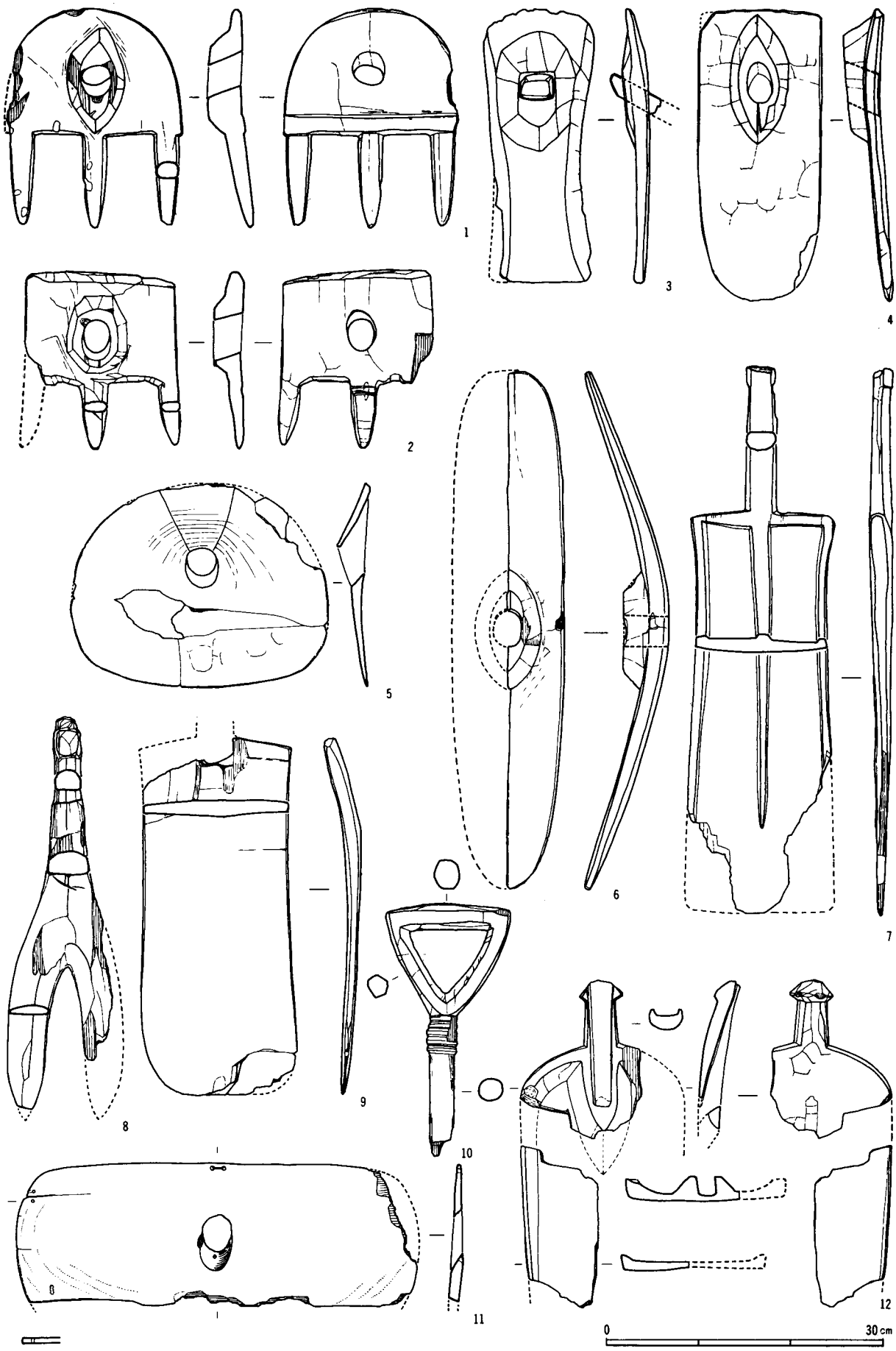
諸手鍬(**6**)は身の半分が欠失したもので、刃は大きく反り、手前に船型突起をもつ。柄装着角度は90°である。1点のみ出土している。

鋤 (**7**)は着柄鋤で、方形の刃部は裾でやゝ外反するものと思われる。中央に段を削り出して耐久度を高めており、両側縁を僅かに段状に作るなど土をすくい上げるための工夫をこらしている。着柄部は、上部を平坦にし頂部に抉りを入れて緊縛し易く工夫している。(**9**)は基部が僅かに内反するもので、柄部は折れている。(**10**)は三角形の柄の把手部で、握り部分が幅6cmで現行のシャベルにくらべても幅が狭い。基部に4条の沈線をていねいに削り出すが、こういった加工文様をもつ柄の類例は知見にない。唐古遺跡では竪杵の把握部に接して数本の刻線がめぐるものがあり、土器にみるヘラ描沈線文と共通した点は時代性を表している。(**8**)は二叉の着柄鋤で、刃部は薄い。基部はやゝ厚く、柄は下側で緊縛される。A地区の自然流水路から出土したもので、あるいは中期以降のものかもしれない。

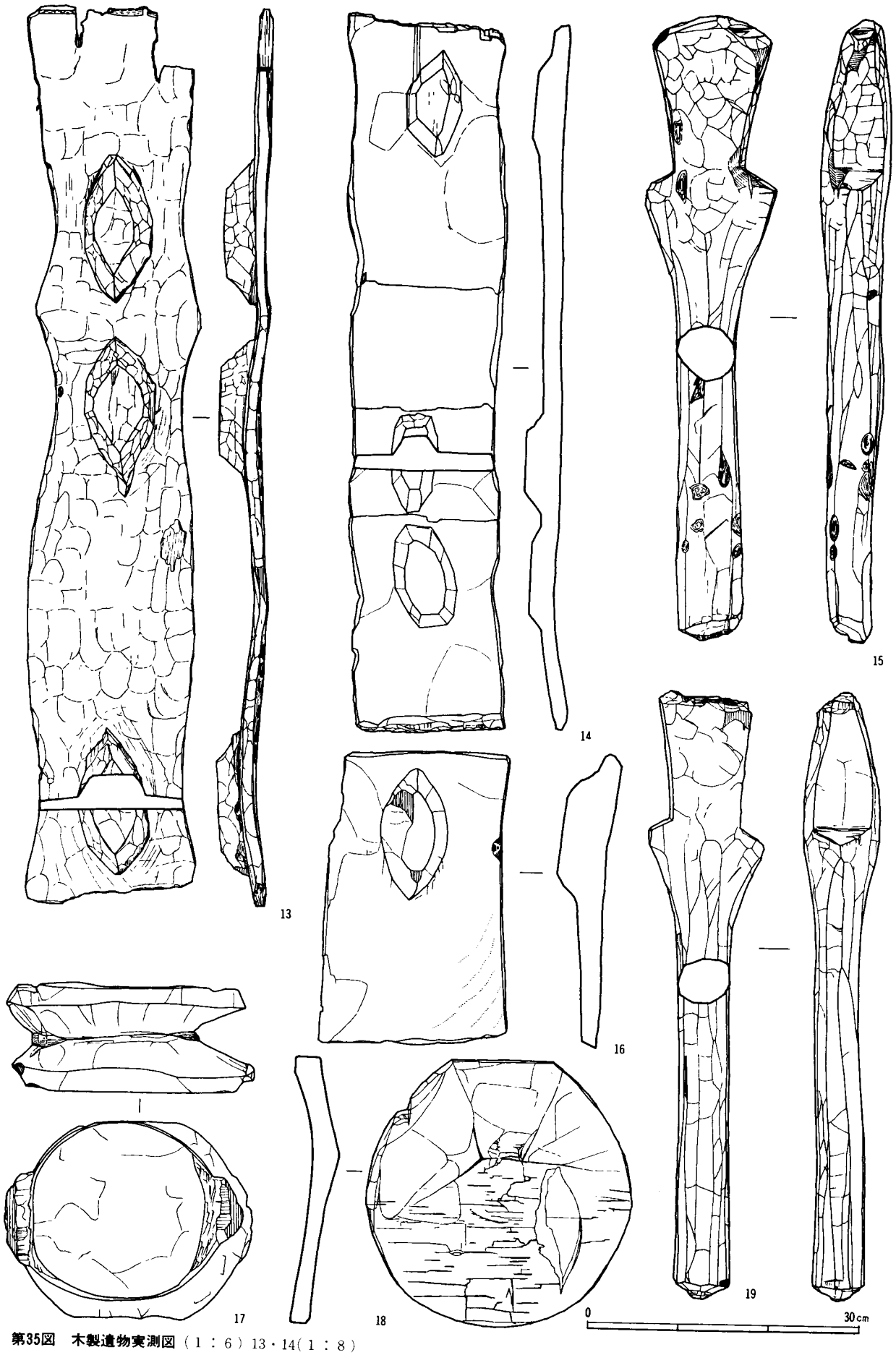
スコップ状木器 (**12**)はかなり破損しているが、特徴ある形態をもつものである。着柄部は背面が欠失しているが、着柄溝が貫通したものであろう。ていねいに抉り込みを作り柄の挿入に工夫がみられる。頂部も算盤玉型に削り出し、緊縛に工夫をこらしている。基部は中央に船型突起を削り出し、側線を斜

第6表　木製遺物一覧表

種類	時期	弥生時代前期	弥生時代中期	古墳時代以降	小計
農具	鍬	16	2	—	18
	鋤	7	3	—	10
	えぶり	—	—	1	1
	槌	1	—	—	1
	竪杵	1	—	0	1
工具	斧の柄	7	2	—	9
容器	鉢	2	—	—	2
	高杯	1	—	—	1
	槽	1	—	1	2
	杓子	1	—	1	2
	匙	1	—	—	1
漁猟具	手網	1	—	—	1
	弓	3	—	8	11
紡織具	榎	—	—	1	1
	綜棒	2	—	—	2
建築部材	扉	—	—	1	1
	柱	—	—	1	1
	その他	—	—	3	3
装身具	櫛	1	—	—	1
その他	琴型	1	—	—	1
	鐸型	1	—	—	1
	編篭	1	—	—	1
	編物	1	—	—	1
	不明	4	—	—	4
杭・板・加工木		多量	少量	少量	
合計		53	7	18	77



第34図　木製遺物実測図（1：3）



第35図　木製遺物実測図（1：6）13・14（1：8）

目に削り出している。

槌 (29)の1点のみである。柄部は円形で基をやゝ膨ませ、身部は使用のため扁平に摩耗している。

竪杵 (27)の1点のみである。把握部は欠失するが、搗部は楕円形で頂部は丸味をもちよく摩耗している。

○工　具

斧の柄 太型蛤刃石斧、小型蛤刃石斧に用いられたもので、用途に応じた形態をもっている。太型蛤刃石斧用はカシ、他はサカキ、ヤブツバキを用いている。

蛤刃石斧の柄 (15・19)は未製品で全体に粗い加工痕がある。基部は原材を周囲から抉り引きちぎっている。(36)は小型の蛤刃石斧用のもので、破片のため推定復元したが、全体に朱彩され、三角形の台部上縁に1条の沈刻線、握部の上部両側縁に刻目とその直下に1条の突帯を削り出すなど全体に装飾を加え、欠失する握部下端が曲線状を呈するなど祭祀具の様相が強い。(33)も(36)と同形のもので小型の蛤刃石斧用のものである。

柱状片刃石斧の柄 (32・34)は枝分れの部分を利用している。台部に着装溝を穿ち、末端を丸くふくらませ緊縛の際のすべり留めを作る。(32)は台部も着装溝も長く、(34)は全体に小型で台部の下側にL字形の抉りを作るなど、石斧の規格に応じた工夫をもっている。着柄角度は約70°である。

○容　器

鉢・匙・杓子があり、図示していないが高杯・槽もある。

鉢 (17)は未製品である。横木取りの原材を鼓胴型に加工したもので、上下の台状部両側に把手部を粗く削り残しており、中央のV字形の抉りで切断して二個の鉢を製作するものである。唐古遺跡（第69図−26）に類例がある。(49)は底部の破片で、下部に段を削り出し、段上に細い沈線1本を彫り込んでいる。

匙 (22)は、楕円形の身に断面台形の短い基部を作り出したもので、身の刳り込みは浅い。

杓子 (50)は未製品で、身部の側縁を粗く削り、把手の上部に握りをもつものである。

○漁猟具

手網 (39)は柄の上部破片で、枠部は欠失している。枠部は分れた枝を利用するが、柄に対してほぼ直角に網がつくものと思われる。柄頂部は丸く面取りし、全体に樹皮を巻きつけている。樹皮は柄頂部で4重にまわし、次いで枠部を2重で8字掛し、枠部以下の約4.5cmにわたって巻きつけているが、端部の納め方は不明である。

弓 (25・26)は丸木弓で、中途で折れている。断面は中央部が円形で、端では扁平に削り、弓筈は短いものと、長目に削るものがある。

○装身具

櫛(巻頭図版) 長さ9.4cmの竹製の竪櫛である。歯は20本で、U字状にたばねた頂部を縛りつけたものと思われ、薄板2枚を歯の頂部で貼り合わせた基部から上側に円形環状の把手をつけており、把手の3箇所に瘤状の小さい隆起がある。基部と把手の全体を朱漆で塗り固めている。

○その他

琴型木製品 (20)は下端幅53cm、厚さ3.3cm、台形のクスノキ柾目の1枚板で、中央から両側に向けて翼状に反り、側部からみるとやゝ弯曲している。下端は4箇所を刳り込むが、上縁は破損しているため対称的に刳り込みがあったかは不明である。彫刻文様をもつ面を上面としてみると、文様が左右対称的に配され、両端の外縁に上下から刳り込んで貫通した三角孔を配し、5条の斜行沈線をはさんだ内側に内向する三角孔を刳っている。右外側の三角孔は一部上下端が破損しているが6孔であったと推察され、最上孔から上部は外縁はなく屈曲して上端に至っている。この三角孔のうち、上から1〜2番目と、4〜5番目に両孔を通して樹皮が2重に巻きつけられているが、上面の中央が引っ張られたためか僅かに隆起しており、補修用のものでないことは明らかである。右側の2列6個の三角孔は、外側2孔の中間部の延長線上に内側の三角孔が位置し、規則的に配列しているが、左側では互に平行した配列をとって

いる。なお、左側の三角孔は現状では4個あり、左右対称に配置されているとすれば6個となる。ただ6個とすれば三角孔の配列がさらに上方にあることになり、左側の残る2孔はさらに上方に位置するので、右側の三角孔とは正確には、対称的にならない形態が復元される。三角孔の間にある5条の沈刻線のうち、右上部では格子状にみえるが、この部分は他にくらべてやゝ不鮮明である。下面は中央部を鎬状に削り出すほかは全体にていねいに成形されていて、木目が平行に走っている。なお、彩色は認められない。他に全く知見のないものであるが、農具や建築部材とは考えられず、いちおう弦鳴楽器でもチター系の琴の一種と想定しておきたい。

鐸型木製品 (**21**)は、化学実験用のメジャーグラスに似たもので、高さ14cm、下幅7cmをはかり、高さ約3cmの頂部は扁平円頭状に作り出し、底部を約5cmの深さで台形に刳り込んでいる。頂部を下にした容器にしては不安定であり槌としても底部の刳り孔は不自然であるので、打楽器の一種ではないかと想定している。類例は東大阪市瓜生堂遺跡で1点出土しているが、高さ19.7cm、下端径9.8cmの截頭円錐状のもので、頂部は高さ約3cmをはかり、底部に径4cm、深さ2.4cmの刳り孔をもち「砧形木製品」とされている。ただ砧とすれば把手部がきわめて狭く握り難い。底部の刳り孔の深浅によって音律を変化させたものとすれば、頂部を紐でつるし並べて棒状具で打ち叩いたものではないであろうか。

編篭(図版4の下) 全体に破損し、底部はない。現長は口縁部で約26cm、高さ22cmを測る。全体に押し潰された状態で、口縁部は前方と後方が互に密着していた。編み方は、体部は経条が幅0.4cmの条2本、緯条が1本からなり、経糸は緯糸に対して1本超え、1本潜り、1本送りで編まれている。口縁部の口縁から約11cm下方の体部では、緯糸3条を巻き編みにしているが、口縁部では2本、体部では1本である

用途不明品 (**23**)は樹枝の一端を鋭く尖した鉤状のもので一端は丸く削る。基部は方形截頭状に削り残し、全体に細かい加工がみられる。(**24**)は長さ34cmで、円頭を削り出し、基部は丸く削る。琴型木製品に近接して出土したもので、あるいは関連あるかもしれない。(**28**)は船底型で、中央に楕円形の浅い刳り込みを作る。(**31**)は縦長の三角形の薄板で、先端を六角形に面取りした中央に小孔をもち、下端は両側から斜目に抉り込んで2本の細い突起を削り出すが下部で欠失している。身部上面に左右に横走する細かい擦痕がある。(**43**)は板材の両端上面を五角形に削り出したもので、三角形の頂部が内対する。

(2) 弥生時代中期 (図版39・40・42、第35～37図)

○農 具

鍬・鋤・スコップがあり、全てカシ材である。

丸鍬 (**18**)は頂部が平坦で、樹皮が一部残っている。厚さは約3cmで、全体を粗く削り、周縁部は細かく横位で削っている。

広鍬 (**47**)は側縁上部を斜目に下から上へ向って粗く削られて抉り込む中期特有の形態をもつもので、刃部は表裏から截ち切られている。中央に細長く船型突起をもつ形式と思われるが、この加工段階では明瞭でない。

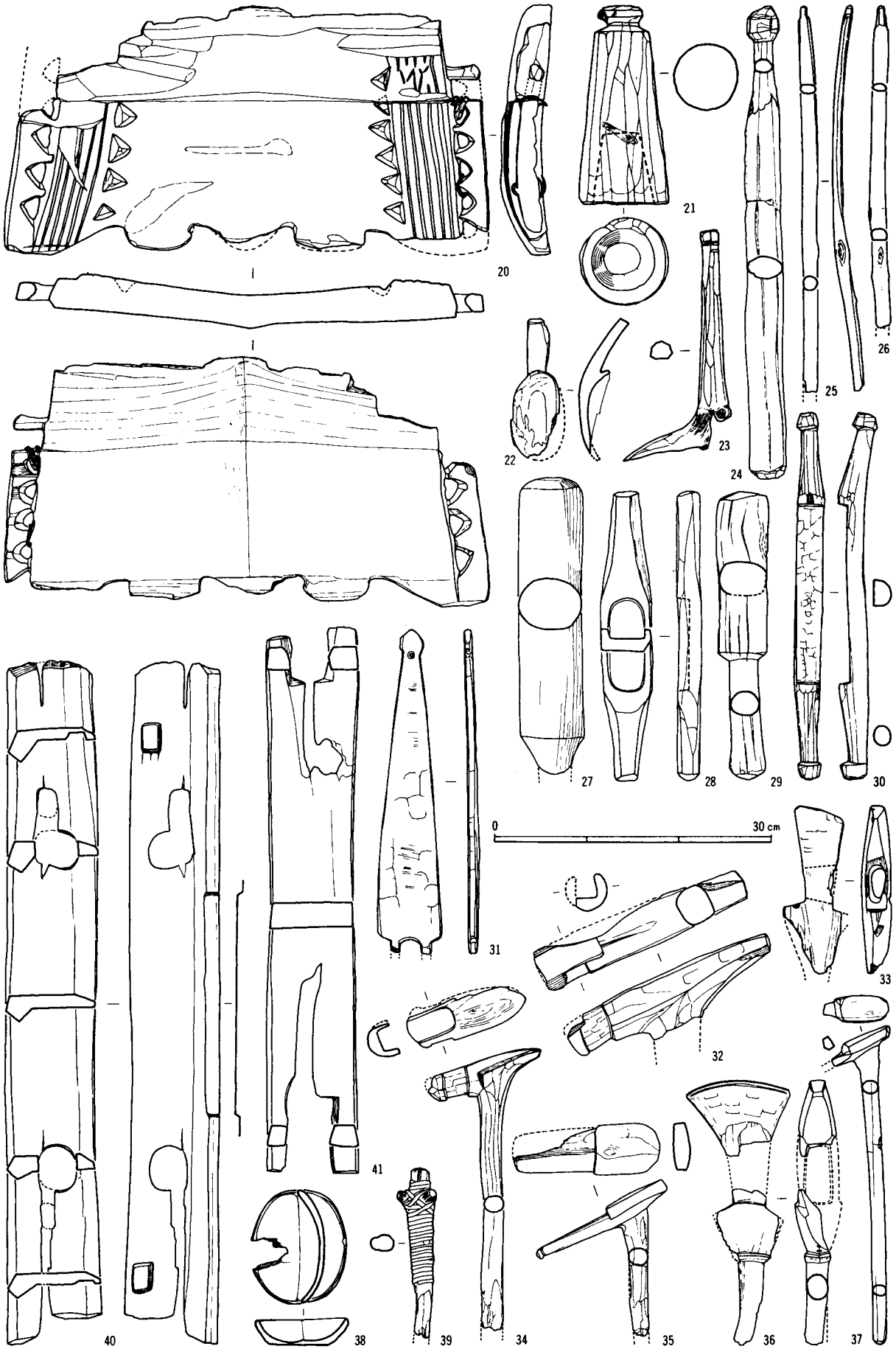
直柄鋤 (**48**)は一木作りで全長1.30m、身部は長さ約45cm、幅約18cmをはかり、身部の先端は柄に対して約6°ほど反っている。把手は、現用のシャベルのごとき形態のものである。全面に手斧による細かい加工痕が明瞭に残るが、刃幅からみて太型の柱状片刃石斧によって加工されたことが推定される好資料である。

スコップ (**44**)は着柄溝が、短いもので前期の(**12**)にみられた補強用の船形突起はみられない。薄手作りで、土受部がやゝ内弯している。

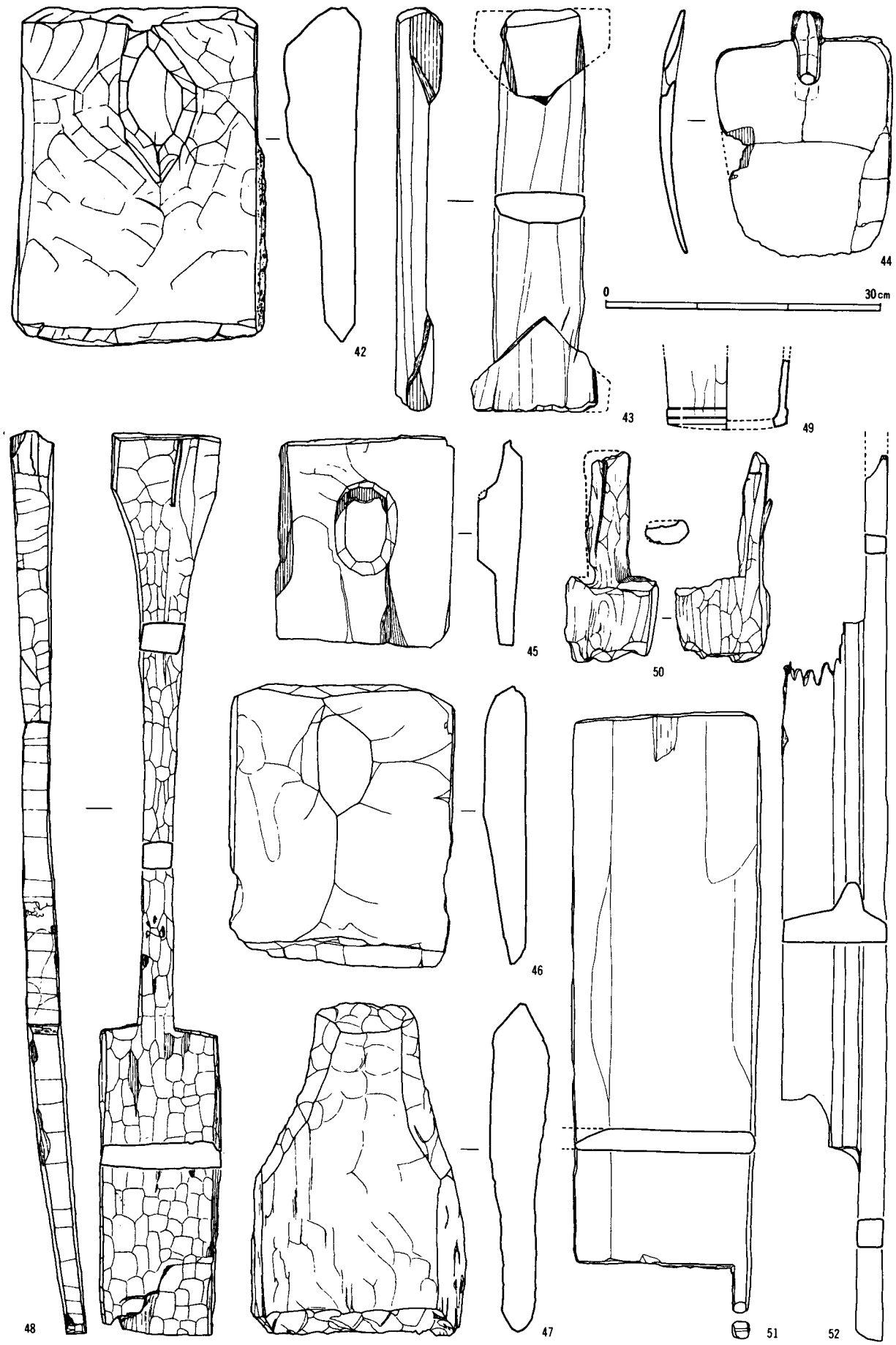
○工 具

扁平片刃石斧の柄があり、材質はサカキ、ヤブツバキである。

扁平片刃石斧の柄 枝分れの部分を利用したもので、柱状片刃石斧の柄にくらべると台部が薄く、着柄角度も僅かに急である。(**35**)は握部下端は欠失しており、台部の先端はやゝ丸味をもっており、先端の裏側は半円形に削り出して紐かけを作っている。着柄角度は、65°である。(**37**)は台部の先端が欠失しているのみで、握部は39cmを測る。(**35**)にくらべて小型のもので、着柄角度は65°である。



第36図　木製遺物実測図（1：6）　40・41(1：12)



第37図　木製遺物実測図（1：6）　48・51・52(1：8)

(3) 古墳時代以後（図版21・42・43、第34・36・37図）

○農　具

えぶり　(**11**)は側縁の一部と刃部は欠失しているが、幅43.5cm、現高15.3cm、厚さ1.2cmの薄手のもので、両側縁は丸味をもっている。中央に柄孔があり、着柄角度は約40°である。柄孔の下側に1小孔があり木釘などで柄を固定したかとも思われる。周縁部のヒビ割れた箇所に対になった小孔があり下部にも3孔があるが、補修孔である。ただ、上側中央に2小孔があるのは、補修孔とは考えられないので、柄を後方で緊縛したものかもしれない。

○容　器

匙　(**38**)は楕円形で、側縁の一部が欠失しており、あるいは把手がついたものかもしれない。内面中央を鎬状に削り出している。

○紡織具

榎　(**30**)の1点のみが出土している。全長39.6cmで、中央の布巻部は上幅で19.0cm、下幅で19.0cmを測る。両端を円頭状に削り出し、側部と上面の全体は細かくていねいに加工している。

○建築部材

大型の加工材を建築部材として一括したが、いかなる部分に使用されたものかは不明のものが多い。図示したものの他に柱材2本があるが、うち1本は含水保管中に水洩れが生じ、遺憾ながら破砕してしまった（図版21の上段）。

(**40**)は現長約1.47m、幅約20cm、厚さ約3cmの一枚板で、両端に近い部分に径8.6～10.4cmの楕円孔があり、その両外側に長方形の孔が対称的に開けられている。扉板を受ける蹴放材と思われ、外側の孔が方立用、内側が軸釣であろう。下面には、両端に近い箇所に6.6×4.2cm、深さ約1.6cmの長方形の刳り込みがあり、あるいは床束を受けたものかもしれない。図の上面は水平で、下面の一端は約5cm傾斜しており、中央部に幅48cm、深さ1cmの抉りがあり、梯子の取付けを考慮したものかもしれない。

(**41**)は現長1.18m、幅18cm、厚さ5.4cmの一枚板で、両端を長方形に刳り込んだものである。(**52**)は断面T字形の一枚板で、扉板と思われる。現長1.28m、幅15.2cm、厚さ約4cmのもので、T字形部分の厚さは8.8cmをはかる。図の左側部分は全体に腐蝕しているが、下方の弯曲した2つの段は、当初の形態を保っているかもしれない。(**51**)は現長80cm、幅27.2cm、厚さ3.2cmをはかる一枚板である。図の右下部には長さ6.4cm、幅2.8cmの突起があるが、右上部にはみられない。なお、左側縁は折れているようである。柱材（図版43の左側）は、現長1.70mで、上方の床上部分は方形である。床下部は径約13cmの丸柱で、約30cmおきに長方形の貫穴がある。破砕した他の柱材は、これとほぼ同形であるが、床下の丸柱部に若干の間隔をもって長方形の貫穴が直交しているので高床建物の隅柱である。[1]

註

1．建築部材については、細見啓三氏（奈良国立文化財研究所）に、御教示を得た。
工楽善通「竪穴住居と高床住居」『日本の建築1・古代Ⅰ』1977

5) 石製遺物

発掘調査地区別の石製遺物出土数を第8表に示したが、総数980点[1]あり、これまでの三重県下の弥生時代遺跡のなかでも最多の出土数である。用途別に分類すると、工具には石斧・石錐・叩石・凹石・砥石、収穫具には石庖丁、狩猟具には石鏃・石槍・石小刀・刃器、紡織具には紡錘車、祭祀具の可能性あるものとしての磨製石剣、装身具には玉類と石製垂飾がある。この外にサヌカイト、各種の片岩、礫などの小石核の剥片も若干あり、集落内で製作が行なわれていたことを示している。（第7表）

○工　具（図版45・47・49、第38図）

打製石斧　(**16**)は全体を粗く剥離し、端部はやゝ尖り、角型の刃縁部は全体に丸く磨滅している。全長19cmで、緑泥片岩である。

太型蛤刃石斧　大小の2種類がある。(**9**)は全面敲打の後で研磨したもので、基部と中央部に敲打痕が残り、刃部の片側が著しく磨滅する。全長24.5cm。

第7表　石製遺物出土地区別一覧表

名称＼出土地区		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	不明	小計	計
石斧	打製石斧		2(1)	2(1)	1(1)		1(1)		1				7(4)	315(66)
	太型蛤刃石斧	10	30(4)	20(7)	49(17)	12(4)	21(14)	1	22(1)	3	12	15	195(47)	
	扁平片刃石斧	1	11(2)	9(1)	9(3)	3(2)	9(3)	1	11	2	4	5	65(11)	
	柱状片刃石斧	1	1	3	3(1)	1	2(1)		6	1		4	22(2)	
	乳棒状石斧		1		1(1)								2(1)	
	扁平蛤刃石斧								1				1	
	小型円柱片刃石斧			1									1	
	小型片刃石斧											1	1	
	環状石斧	1	1		1			1				1	5	
	不明	3	5(1)	1	4							3	16(1)	
石庖丁	半月型直線刃		5	3(1)	3		2(1)		5		1		19(2)	53(5)
	半月型内彎刃	1			1		2						4	
	半月型外彎刃						2(1)						2(1)	
	大型		1(1)		2(1)	1				2	2		8(2)	
	不明	1	3	1	5	2			3	1	2	2	20	
石鏃	凹基無茎式		2	4	2	2					1	57	68	217(3)
	平基無茎式			2(1)	4〔2〕	1〔1〕					1	35〔2〕	43〔6〕(1)	
	凸基無茎式		1	1	3	1	4(2)		2		1	37	50(2)	
	凸基有茎式		2	4			1		1		3	21	32	
	不明											24	24	
石槍ほか	石槍		1	3		1					1	3	9	86(7)
	磨製石剣								1				1	
	石小刀		1	1	2							7	11	
	刃器		9(2)	2	8(3)		1		1	2	8	8	39(5)	
	石錐			3	1	1(1)	1(1)				1	19	26(2)	
砥石	精砥石	1	19(6)	8(2)	17(6)	9(5)	14(9)		10(1)	10	4	13	105(29)	172(56)
	粗砥石	1	16(8)	5(2)	19(11)	2	7(6)		3	5	3	6	67(27)	
叩石・凹石	叩石	2	13(2)	9(3)	12(2)	3(1)	14(13)		7	3	1	11	75(21)	113(25)
	凹石	5	14(3)	3(1)	1		1			4	2	2	32(4)	
	叩石・凹石の不明		2	2	1		1						6	
紡錘車・玉類	紡錘車			2		2(1)					1		5(1)	24(2)〈5〉
	石製垂飾			1(1)									1(1)	
	玉類	1〈1〉	4		1	1			4〈4〉	1	5		17〈5〉	
	不明											1	1	
計		28	144(30)	90(20)	150(46)	42(14)	83(52)	3	78(2)〈4〉	34	53	275	980(164)〈5〉	

(　)弥生前期，〔　〕磨製石鏃，〈　〉古墳時代

(**8**)は小型のもので、全面を敲打し、刃部と基部、両側面を研磨する。刃部に刃潰れがあり、全長 15.5 cm。ともに砂岩である。

扁平片刃石斧　大小の2種類があり、図示のものは小型例である。(**12**)は上部がやゝすぼまる長方形を呈し、図の左側刃部が磨滅している。全長3.6cmで砂岩である。(**15**)は三角形を呈し、刃部は丸味をもった両刃であるが、細部の加工用である。全長6.1cmで、砂岩である。

柱状片刃石斧　大小の2種類があり、基部に抉入りを作るものは前期で2点(100%)、中期で12点(約50%)を占めている。(**10**)は抉入り式の大型例で、刃潰れが著しい。全長17.9cmで、砂岩である。(**14**)は小型例で、全体によく研磨されている。全長8cmで、粘板岩である。(**13**)は抉りのないもので、身部が細長く、刃潰れがある。全長5.4cmで、砂岩である。

環状石斧　出土数は5点とすくなく、いずれも刃部は刃に直交した角度で刃潰れが著しく、完形例はない。(**17**)は全体をていねいに研磨したもので、砂岩である。(**18**)は大型例で、敲打の後に周縁部を磨いており、溶岩である。

石錐　形態別に四種類がある。Ⅰ類は、頭部が大剝離面をもつ不定形の大きな剝片で、錐部が長く突出するもの(図版47－**1**～**4**)。Ⅱ類は、頭部は小さい三角形を呈するもの(同－**5**～**6**)。Ⅲ類は、頭部がⅠ類よりやゝ小型で、剝片の下部をそのまま錐部として用いたもの(同－**7**～**12**)。Ⅳ類は、棒状のもので小型である(同－**13**～**20**)。Ⅰ類には頭部に原石面を残すものもあり、確実に前期のものは(**1**～**2**)である。

叩石　円形・楕円形の礫の周縁や側面に敲打痕をもつ(図版48)。(**3**)は上面の中央2箇所に浅い凹状の敲打痕がある。(**4**)は円礫の中央から下半全体にかけて敲打痕がある。太型蛤刃石斧や砥石の破損品を叩石に再利用したものもある。

凹石　長方形・楕円形の礫を用いたもので、表裏の2面に円形ないし溝状の幅広い敲打痕があり、長方形の礫では6面全部に敲打痕をもつものや、3面以上に打痕をもつものも多い(図版48)。(**2**)は表裏2面に直径3cm、円形で摺鉢状の敲打痕がある。(**1**)は表裏2面に6×3.5cm、深さ0.8cmの楕円形の敲打痕がある。なお、凹石には砥石の再利用例はない。

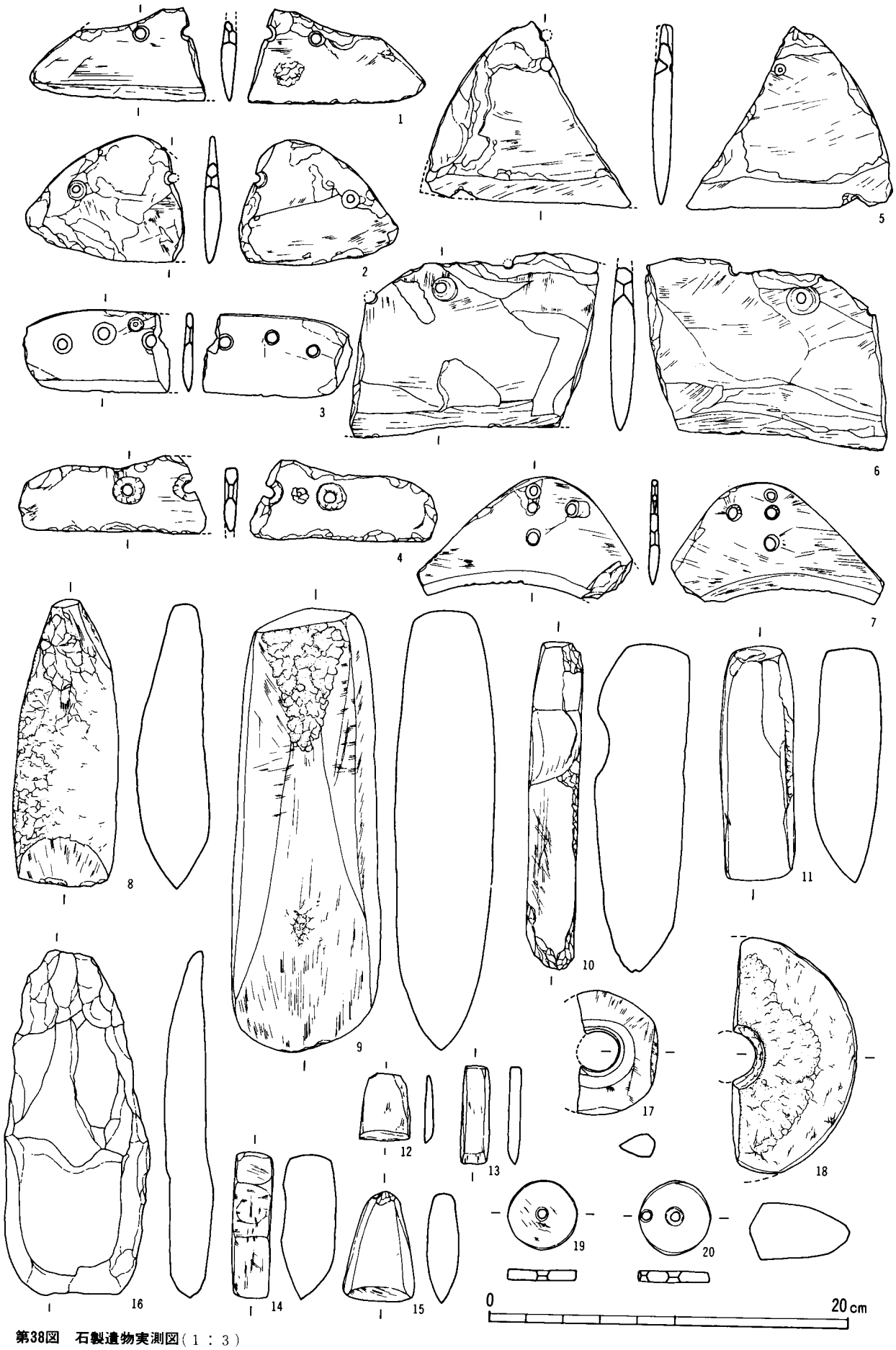
砥石　種々の形態があり、精粗の2種類がある。自然面を残すものは大型例に多く、小型例ではすくない。大半が一志郡に産出する砂岩であるが、シルト・粘板岩・片麻岩も僅かにある。シルト製の長さ約30cmの大型例では、砥面以外の面に手斧による細かい調整痕をもつものもある。大型例では砥面は1面のものが多いが、小型例では2～6面のものが一般的である(図版48)。

(**8**)は長さ約29cmの扁平な片麻岩で、一端は欠失しているが砥面は幅8.6cm、深さ1cmで凹状を呈した精砥である。(**7**)は長辺で23cmの扁平な砂岩で、砥面は全体にひろがり、左側周縁部の数個所に溝状の砥痕をもつ精砥である。(**6**)は長さ7cmの長方形扁平な砂岩の精砥で、砥面は6箇所あり、左側は凹状に磨滅している。同形のもので抉入片刃石斧の破損品を再利用したもの1点がある。(**5**)は長さ7cmの三角形で上部につまみ状の部分がある。4側辺と底部に砥面がある粗砥で、同形例が数点あり、あるいは携帯用のものかもしれない。

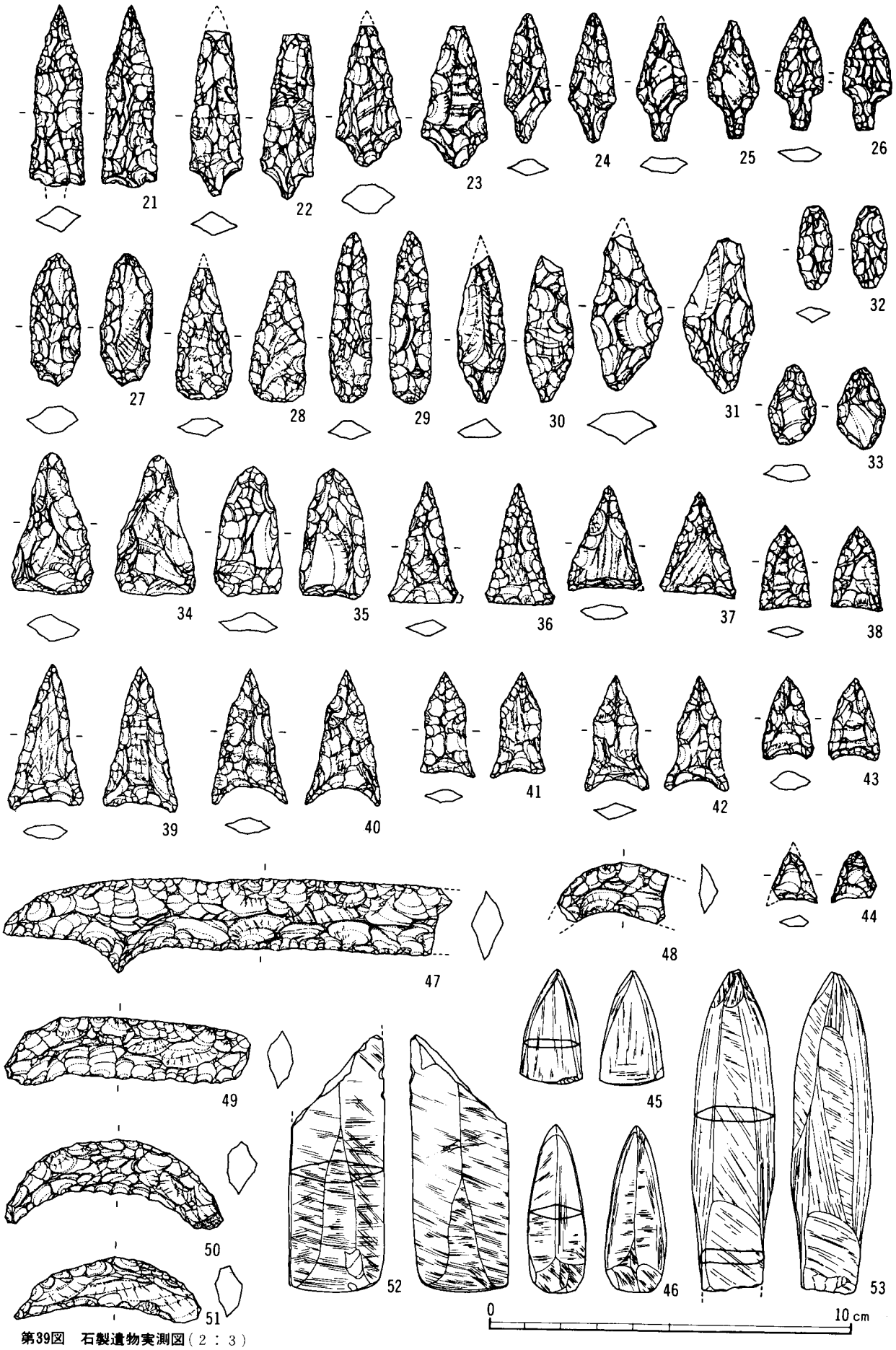
○収穫具(図版45、第38図)

石庖丁　形態別に半月型直線刃、半月型内弯刃、半月型外弯刃、大型の4種類があり、完形品はない。そのうち、弥生時代中期には全種類があり、前期には半月型内弯刃がない。なお、紐孔が2孔以上のものが大半を占めているが、刃部を上にした面(A面)では、穿孔径が裏側(B面)よりもやゝ大きいものが多い。製作工程の上で、刃部を研ぎ出した後に穿孔位置が決定される以上、最初の穿孔が入念に行なわれたことが推定される。2孔以上の例では、原則的に破損して当初の寸法が縮小した結果、穿孔には規測性がみられないようである。上述のごとく完形品は全くなく、紐孔を2個以上をもつものが多く、図示していないものの中には破損品を砥石で擦り切って分割を試みているものがある。素材の入手系路は明らかにし難いが、その入手が困難なためであろうか、破損品を極力再使用する努力がうかがえる。

(**1**・**3**・**4**)は半月型直線刃のもので、全体の約40%をこの形態が占めている。(**4**)は使用が著しく刃潰れが全面にあり、紐擦れが明瞭に認められる。



第38図　石製遺物実測図（1：3）



第39図　石製遺物実測図（２：３）

(**1・4**)には、肩部に背潰れ痕がある。

(**7**)は内弯刃のもので、両端を細く尖しており、両刃である。4個の紐孔は、いずれも上方部が磨滅している。刃部では、図の左側の刃潰れが多い。(**2**)は外弯刃のもので、刃部の断面は丸味をもっている。

(**5・6**)は大型石庖丁で、両刃である。(**5**)は上部の紐孔は貫通していない。(**6**)は肩部にも紐孔2個があり、当初の縦幅はもうすこし大きいものと推定される。ともに刃部に直交した細かい刃潰れがみられる。あるいは穂首を小型の石庖丁で刈り取った後、穂首のない稲束をまとめて刈り取る際に用いられたものかもしれない。

○狩猟具(図版45・46、第39図)

石鏃　形態別に凹基無頸式・平基無頸式・凸基無頸式、凸基有基式があり、総数217点のうち磨製石鏃は6点のみである。破片の24点を除き形態別にみると上記の順序で35%、22%、26%、17%の比率になる。時期別では、確実に前期のものは平基無頸式と凸基無頸式の3点のみで、遺構に伴出したものではこれまで時期の判明したもののうち、第3様式前半の土器を含む溝址から凸基有茎式が出土しているので、その上限をほぼおさえることができる。材質は、乳白色のチャートが3点、黒色片岩が1点の外は全てサヌカイトである。サスカイトは横長剥片を素材とし、大型例には素材の大剥離面を両面に残すものもあり、ていねいな剥離調整が行なわれている。

凹期無茎式は、大小2種類あり、形態的に側辺が直線のもの(**39・43・44**)と、両側に肩を作るもの(**40・41・42**)があり逆刺は鋭い。平基無頸式は、部厚く約6gの重いもの(**28・34・35**)と、薄くて軽いもの(**36・37・38**)がある。凸基無茎式は、基部が丸味をもつもの(**27・29・32・33**)と基部がやゝ尖る縦長で約7gの重いもの(**30・31**)があり、最大幅が基部にあるものと縁辺の中央部にあるものの2種類がある。凸基有茎式は、大型で縦長の約6gの重いもの(**21・22・23**)と小型のもの(**24・25・26**)の2種類がある。後者の茎は前者にくらべてやゝ長いものが多く、しっかりと調整を加えている。

磨製石鏃は6点とすくなく、サヌカイトが5点、黒色片岩が1点である。(**45**)は両面の側片を研磨し、(**46**)は両面の基部を細かく研磨し、中央に鎬が通る。ともに平基無茎式でサヌカイトである。(**53**)は、基部が欠失しているが、両面全体をていねいに研磨し、側片に2本の稜線をもち、下方は茎状にやゝすぼまる。現長8.7cmで、サヌカイトである。他に中央に鎬が通るサヌカイト製の破損品2点があり、うち1点は平基無茎式である。

石槍　断面が菱形で、両面に鎬が通るものと、通らないものの2種類があるが完形品はない。(**47**)は、尖端部で上縁が内弯し、下縁の尖端から3cmの付近に直交した鋭い逆刺をもち、中央に稿が通り、側片に細かい階段状剥離が施されている。なお、鎬をもたない類例には、その基部の側片を研磨したものが1点ある。

石小刀　直線刃と内弯刃の2種類がある。(**49**)は図の右側部を両面とも稿を作らず平坦にし、下縁の右側部と上縁全体に僅かな研磨を加えている。(**48・50・51**)は内弯刃のもので、(**50・51**)では内弯刃の中央付近で断面が最も厚く、図の右側部の断面はやゝ扁平であるが、上縁に研磨はみられない。一端を扁平に加工するのは、柄の装着を考慮したものか。

刃器　サヌカイトの横長剥片に、貝殻状剥離によって刃部を加工したもので、前期から外弯刃と直線刃の2種類がある。不定形刃器とも呼ばれているように、全体の形態は多様であるが、刃部以外の周縁に風化した原石面をもつものが多く、稀に原石面側に刃部を加工したものもある。周縁に原石面をもたないものは、小型例が多い。刃部の加工は、ほとんどが表裏2面を剥離したものであるが片面のものも少量ある(図版46)。(**1～6**)は外弯刃のもので、(**6**)は上部につまみを作る石匙である。(**7～14**)は直線刃のもので、(**8**)には上部につまみがある。(**9・12**)は小型例であるが、周縁全体が一辺を残して加工が行なわれている。なお、刃部に著しい磨滅を残すものはない。

○紡織具(図版47、第38図)

紡錘車　片岩系の石材を使用し、両面と周縁をていねいに研磨したもので、石庖丁の破損品の再利用もある。(**19・20**)は中期のもので、径3.7～3.9cm、厚さ0.5～0.7cm、重さ16～19g。(**20**)は石庖丁を再

利用している。

図版47の下段右から２番目は粘板岩で前期新段階に属し、他は中期である。上段右端の大型例は、石庖丁の破損品を再利用すべく、周縁を円形に研磨しはじめた加工途中のものである。

○祭祀具（図版44、第39図）

磨製石剣　上部は欠失しているが、現長７cm、幅2.6cm、厚さ0.6cmで、サヌカイトである(**52**)。基部はやゝ外弯し、菱形の断面中央に鎬が通り、基部では２本の稜に分かれている。全体にていねいに研磨されるが、両側辺は１mm幅で端面を作る。中期中葉。

○装身具（図版47・49）

石製垂飾　扁平な珪化木の上・下辺を外弯状に研磨し、左右の短辺を直線的に研磨したもので、長さ7.7cm、幅5.2cm、厚さ1.7cm、重さ約88ｇ。(図版47下)四隅の内側の上下辺を浅く溝状に研磨し、両辺を短く突出している。彫刻文様は両面にあり、仮に鮮明な方を上面とすると、下面のほぼ中央に短辺に直交して１本の浅い溝を入れている。溝の端部は、元来短辺の側面に貫通していたらしく、内側と外側からの石錐による穿孔痕が残るが、両短辺とも貫通部が欠失している。文様は細い線刻文様で、鋭い刃をもった石材で擦り切るようにして施したものと思われる。上面では、上下の弯曲の頂点を中心として縦に５本の細刻線があり、それをはさんだ両側の弯曲に沿って２本の直線を配しているが、写真の右上側だけは３本である。さらに短辺に平行して２本の直線があるが、右側ではそのうち内側の１本が上下の隅から続く溝で消滅している。下面は、上面にくらべて凹凸があり、上面から連続した中央の５本線は不鮮明である。短辺では、上面とは不整合に連らなる２本線があるが、中央線と同様に不鮮明である。なお、下面の短辺の一部に石錐による穿孔痕１個が、中央の溝からやゝ離れてある。Ｄ地区の東南部下層の青灰色粘土層から出土したもので、前期に属する。短辺をめぐる溝と、下面中央の溝に紐を掛けて石錘として使用したものかとも思われるが、多重の線刻文様を規則的に配しているので、垂飾であろう。

玉類　総数17点が出土しており、弥生時代に属するものは碧玉製の管玉、滑石製の臼玉とガラス製の丸玉がある（第８表）。

古墳時代のものは、Ｈ地区ＳＤ14の第２層から多量の古式土師器に伴出したもので、蛇灰岩製の匂玉碧玉製の管玉・ガラス製の平玉のほか、Ａ地区の自然流水路から滑石製と思われる平玉が出土している。以上のうち、(**3**)の大型管玉は第３様式前半の土坑墓と推定される個所から出土したものである。他に管玉は第３様式前半の土坑墓や住居址からも出土している。

註

1．石製遺物の数量は、本書分冊所収「納所遺跡から出土した石器類の材質」の報文中では917点であるが、その後の遺物整理中に抽出したものを追加し、一部の種類については数量が減少したものもある。
この他、用途不詳で不定形の浮石（軽石）と溶岩が約40点ある。なお、本書Ⅳ－３の材質による比率は、上記報文の同定結果による。

6)　その他の遺物

○金属製品（図版45・49）

銅鏃　Ｆ地区の包含層から出土した三角形凹基有茎式のもので、現長2.7cm、同幅2.8cm、厚さ0.2cmある。鋭く外反した逆刺の先端は欠失し、茎も鏃身の基部で折れている。茎と逆刺が接する箇所には、浅い三角形の抉部が上面のみにある。三角形の側辺に沿って研磨された稜線が両面ともにあり、頂部から0.9cmの中央に径0.2cmの１小孔がある。茎の折損部表面は、一部は折れたままであるが残りは上下両面から研磨痕がある。

鉄鎌　Ａ地区の自然流水路の灰黒粗砂層から出土し、細長い鉄板の一端を斜目に約70°に折り曲げて着柄部としたもので、先端部はゆるやかに内弯する。刃部全体に細かい刃こぼれがあり、上辺にはゆるやかな起伏がある。全長18.2cm、先端部近くで幅2.3cm、中央で幅2.8cm、厚さ0.4cmをはかる。着柄部は高さ1.2cmで、内側に0.5cm幅で浅い溝が通り、たがねによる敲打痕が認められる。５世紀後半から６世紀前半頃のものと思われる（図版49－２）。

○土製品（図版48・49）

投弾　紡錘型で中実の土製品が2点出土している。(**2**)は長さ4.7cm、径3.0cm、重さ約38g、(**3**)は長さ4.7cm、径2.5cm、重さ約25gを測り、全体に滑らかに作られている。唐古遺跡で第1様式土器に伴なうものとみなされているが、(**3**)は第3様式後半の土器とともに土坑から出土したもので、中期にも存在することが明らかとなった。

土錘　大半が包含層出土のもので、形態別に2種類ある。球形のもの(**4**・**5**)は、径3.4～2.7cm、重さ22～36gをはかり径0.6～1.0cmの貫通孔を穿っている。不整円筒形のもの(**6**・**7**)は、長さ3.2～3.4cm、径2.3～2.8cm、重さ25～29gをはかり、長軸に沿って径0.6～0.9cmの貫通孔を穿っている。この外、破片であるが、大型例も少量ある。

紡錘車　(**1**)は直径4.9cm、厚さ1.3cmを測る円盤状の中央に径0.8cmの貫通孔を穿ったもので、表面採集品である。全体に滑らかで、胎土に細かい金雲母粒を多量に含んでいる。

蓋　円盤状で、2孔1対の紐孔をもつもので、(**12**)は前期新段階の自然流水路から出土し、直径7.5cm、厚さ1.9cmをはかり、全体に表面は磨滅している。(**11**)は包含層から出土し、中期に属するものであるが、直径5.7cm、厚さ1.4cmをはかり、表面は滑らかである。ともに中央が最も部厚く、周縁部がやや薄く作られている。

軒丸瓦　A地区自然流水路の中位に当たる灰黒色粘質土層から1点出土した(図版49－3)。瓦当面の一部が破損しているが、直径16.5cm、中房径5.5cm、弁区径11.7cm、外区幅2.8cmで、外縁高は約1cmである。内区は複弁8弁蓮華文で、中房の蓮子1＋8である。外区内縁に珠文を密にめぐらし、傾斜した外縁は凸鋸歯文を配している。同種の軒丸瓦は、当遺跡の東北約800mの渋見町字東垣内所在の渋見廃寺址で出土しており、おそらく同寺のものであろう。

円板　1点が出土している。(**9**)は、径3.7×3.2cmで、第3様式後半の土器片の周縁を粗く打ち欠いている。

用途不明　(**8**)は第3様式前半の特徴をもつ櫛描文を表裏と左右の側縁にめぐらしたもので、上・下端は欠失している。中央部に焼成前の1穿孔がある。長さ5.7cm。あるいは鳥か魚を象ったものかもしれない。(**10**)は第3様式前半の自然流水路(H地区)から出土したもので、細部は欠失しており、下部に直交する焼成前の2穿孔がある。人か獣を象ったものかもしれない。最大現長3.8cm。

第8表　玉　類　一　覧　表

図版番号	名　称	出土地区	遺構・層位	時　代	計測値	色　調	材　質	備　考
図版49－2	勾　玉	H	SD14第2層	古　墳	3.3×	灰黒色	蛇灰岩	
〃　－1	勾　玉	H	SD14第2層	古　墳	3.0×	淡灰緑色	不　明	
〃　－13	管　玉	H	SD14第2層	古　墳	0.8 φ0.2	緑　色	碧　玉	
〃　－17	丸　玉	H	SD14第2層	古　墳	0.2 φ0.5	淡青色	ガラス	
〃　－16	平　玉	A	自然流水路	古　墳	0.2 φ0.4	灰　色	滑石か	
〃　－3	大型管玉	J	土　坑	弥　生	2.7 φ1.3	緑　色	碧　玉	
〃　－5	管　玉	B	SD8	弥　生	1.7 φ0.5	黒　色	碧玉か	
〃　－4	管　玉	J	包含層	弥　生	1.9 φ0.5	緑　色	碧　玉	
〃　－6	管　玉	D	SB6	弥　生	0.9 φ0.5	淡灰色	不　明	
〃　－10	管　玉	J	SK12	弥　生	0.9 φ0.3	灰緑色	碧玉か	
〃　－12	管　玉	J	SB15	弥　生	0.9 φ0.3	緑　色	碧　玉	
〃　－9	管　玉	J	包含層	弥　生	1.1 φ0.2	淡緑色	碧　玉	
〃　－11	管　玉	E	包含層	弥　生	0.9 φ0.2	淡緑色	碧　玉	
〃　－15	平　玉	B	包含層	弥　生	0.3 φ0.4	灰　色	滑石か	表面採集
〃　－14	臼　玉	B	包含層	弥　生	0.5 φ0.5	灰　色	滑　石	中央に稜あり
〃　－8	丸　玉	B	土　坑	弥　生		淡青色	ガラス	破　片
〃　－7	臼　玉	J	SK13	弥　生	0.5	淡緑色	不　明	破　片

Ⅳ　遺物・遺構の考察

1．土器について

伊勢湾西岸地方における弥生土器と古式土師器の編年については、既に骨格がまとめられ[(1)]、それ以後はそれぞれの地域ごとの編年が行なわれてきた。納所遺跡においては、弥生時代各期の土器がほぼ揃うとともに、数量的にも豊富であることと、地理的にも同時代の遺跡分布のほぼ中間に当ることから、弥生土器を前期から後期までの第1様式～第5様式に分類した。古墳時代の土師器は5期に細分し、そのうち須恵器出現以前のいわゆる古式土師器をⅠ～Ⅳ期とし、隣接地方との対比を便宜上第9表のごとく編年した。上述したごとく、弥生土器、古式土師器の編年作業が先行している畿内と尾張・三河地方の中間に当たるため、明確に両地域の編年と併行関係に置くことは今後に多くの問題を残すものと思われるが、当表はあくまで一試案として提示しておきたい。以下、簡単に各期についてまとめてみることにする。

1)　弥生時代前期

伊勢湾西岸における初期農耕文化の伝播とその発展過程については、遠賀川系土器の分布により、中勢の中ノ庄遺跡[(2)]から北上して北勢の上箕田遺跡[(3)]を経て永井遺跡[(4)]に至る系路が指摘されている。納所遺跡

第9表　納所遺跡の土器編年

畿内	伊勢湾西岸 納所	伊勢湾西岸 関連遺跡	尾張・三河
第1様式（古） 第1様式（中） 第1様式（新）	1（古） 1（中） 1（新）	中ノ庄 上箕田・永井・金剛坂	五貫森式 貝殻山式　馬見塚式 西志賀式　樫王式 水神平Ⅰ式
第2様式	2	中ノ庄 東庄内B	朝日式　水神平Ⅱ式 水神平Ⅲ式
第3様式（古） 第3様式（新）	3（前半） 3（後半）	東庄内B 上箕田 永井	貝田町式(古)　瓜郷式 貝田町式(新)　下長山式 外土居式
第4様式	4	亀井	高蔵式　長床式
第5様式 庄内式（古） 庄内式（新） 布留式（古） 布留式	5 古墳時代Ⅰ期 古墳時代Ⅱ期 古墳時代Ⅲ期 古墳時代Ⅳ期 古墳時代Ⅴ期	上箕田 西ヶ広 中楽山・高松 中楽山・竹川 竹川・辻の内 大畑・坂本山6号墳 地蔵僧・新畑・中蔦 新畑・久居4号窯・伊奈富	寄道式・瑞穂式・山中式 欠山式(古)・瑞穂式・山中式 欠山式(中)・東牧式 欠山式（新） 元屋敷式（古） 元屋敷式（新） 石塚式 上条式 荒新切式

纒向1式
纒向2式
纒向3式
纒向4式

における最古式の土器形式は、広口壺型土器における段をもつものであり、第10表で永井遺跡の報告に基づき広口壺型土器の文様構成を上記の遺跡と対比して検討してみた。その結果、段をもつものは中ノ庄遺跡では18.9%、納所遺跡では5.9%を示し、調査面積の多少を別にしても、上記の系路に沿って遠賀川系土器が中勢から北勢へ北上していったことがあらためて立証された。周知のごとく、遠賀川系土器の分布圏における東端は尾張・三河地方であり、晩期縄文土器との併存関係が初期農耕文化の社会的本質と絡み合って展開してきているが、当地方では晩期縄文土器の出土遺跡がきわめてすくなく、なお本格的な検討が進められるには至っていない。いま、編年問題に限定すれば、前期古・中段階に併行して尾張地方の縄文晩期後半に位置づけられている馬見塚式の存在が明らかとなった。当地方の遠賀川系土器の最古段階に馬見塚式が併行することは既に予測されていたが[5]、本遺跡の調査によってその予測を立証することになった。

浮線網状文をめぐらした精製研磨の浅鉢型土器は、伊勢湾西岸地方で初めて出土したものである。口縁直下に文様帯がある馬見塚式の特徴をもつものであり、大洞A式の中段階に比定される[5]。尾張の西志賀貝塚、貝殻山貝塚の最下層では、口縁下に無文帯をおく浮線網状文の浅鉢型土器が出土し、形式的に馬見塚式より一形式新しい樫王式とされている。これら馬見塚式土器が、弥生時代前期の古・中段階の土器群と併存しているのであるが、出土地点が自然流水路という性格上、厳密にいえば果してどちらの段階に属したものであるかは直に決定できない。ただ、西志賀貝塚、貝殻山貝塚の最下層では、弥生時代前期中段階の土器（貝殻山Ⅰ類）に樫王式が共伴関係にあるので、相対的に馬見塚式に共伴して遠賀川系土器が存在することは確実となった。ただ、貝殻山貝塚第4地点[6]でも、頸部に段を削り残した形式的に古い遠賀川系土器が数点出土しているが、このことは従来の貝殻山式第1類を形式的に細分できることを示唆するものであり、共伴する晩期縄文土器の形式についてさらに細かい究明が待たれるものである。

納所遺跡では、馬見塚式に後続する樫王式土器は、今のところ確認していないが、後述するごとく弥生時代前期新段階の後半から最末段階に共伴して、樫王式より一形式新しい水神平Ⅰ式土器が出土している。このことは、樫王式土器の分布圏、とりわけ条痕系土器の分布圏が問題となるのであるが、納所遺跡では水神平Ⅰ式は数点出土したにすぎない。永井遺跡・上箕田遺跡・中ノ庄遺跡でも少量の条痕系土器が弥生時代前期に共伴するが、永井遺跡を除いて厳密に層位的な共伴関係は明らかではない。

当地方の前期新段階に赤焼きの土器が盛行し、遠

第10表　広口壺型土器の文様構成

単位（%）

文様＼遺跡	中ノ庄	納所A	上箕田	永井	納所B
段	18.9	5.9	—	0.3	2.8
削り出し凸帯	13.2	5.6	10.2	2.9	2.8
削り出し凸帯＋ヘラ描沈線少条	13.2	42.5	14.3	11.5	19.0
削り出し凸帯＋ヘラ描沈線多条	—	1.1	—	3.4	0.7
ヘラ描沈線少条	28.3	25.2	30.6	18.5	3.8
ヘラ描沈線多条	13.2	11.3	22.5	9.7	14.8
貼付凸帯	—	8.2	16.3	39.4	55.6※
無文	13.2	—	6.1	14.3	0.5
資料数	(53)	(357)	(49)	(300)	(399)

納所A—F地区下層、自然流水路下部（青灰色粘質土）
納所B—F地区下層、自然流水路上部（茶褐色砂質土）

※垂式壺を含む、納所Bは頸部文様のみ

賀川系土器に対して「亜流の遠賀川式土器」として位置づけられているが[7]、今回の調査でその編年的位置づけが明確になったことも一つの成果であった。このいわゆる「亜式土器」については、従来前期新段階の後半～最末に編年されていたが、層位的にみてもその編年観を立証した結果となった。ただ、本遺跡では自然流水路からの出土であるため、厳密にいえば新段階の前半のヘラ描沈線が多条化した土器群と併存状況にあり、これら相互の出土率と「亜式土器」が形式的に中期前半の第2様式土器に整合的に推移していくことから新段階の後半から最末に比定できるのであり、細分については若干の問題を将来に残している。しかしながら、土器の形式変化を大きくみるならば、この位置づけは誤りないものと思われる。

なお、「亜式土器」については、暫定的に金剛坂式として、正統な遠賀川系土器をもつ集落群に対して別の系譜をもつ集落群の並存関係の存在が考えられていた[8]。これに対して、立地の差[9]か年代差[10]であるとする反論がある。これについては、層位的にも形式的にも前期新段階における遠賀川系土器の系譜にスムーズに関連することが今回の調査で明らかとなり、別の系譜と考えることはできない。立地の差についても、従来丘陵、台地部や比較的山間部に分布が片寄ることが注目されていたが、低地の上箕田遺跡や納所遺跡にも分布するので、立地の差とは考えられない。むしろ初期農耕文化の展開過程において、海面の相対的上昇による各集落の自然環境への対応の中で、立地の差が生じたものと考えておきたい[11]。

この「亜式土器」に、三河地方における最初の弥生土器であるとされる条痕系の水神平Ⅰ式が共伴している。従来、当地方の水神平式については、中ノ庄遺跡・上箕田遺跡・大谷遺跡[12]・永井遺跡からも少量出土しているが、永井遺跡では前期「新」段階の前半に属する溝址から出土している。以上のことから、当地方の前期新段階と水神平Ⅰ式との併行関係がさらに明確になったといえる。

さて、遠賀川系土器における地方色の芽生えは、この前期新段階に生じたと指摘されているのであるが、次にその具体的な様相をみることにしたい。

第11表は、F地区下層上部の茶褐色砂質土層出土

第11表　甕型土器の文様構成(2)—F地区下層上部（茶褐色砂質土）

口縁部文様 ＼ 頸部文様	刻目あり	刻目なし	計	
無　　文	22	23	45 (11.2%)	
ヘラ描沈線				
1本	7	2	9	85 (15.2%)
2本	27	1	28	
3本	29	7	36	
4本	9	1	10	
5本	1	−	1	
6本以上	1	−	1	
半截竹管沈線				
2本	1	−	1	393 (73.6%)
4本	372(51)※	−	372	
6本	20(18)	−	20	
	489(93.5%)	34(6.5%)	523(100.0%)	

※( )は、逆L字状口縁

の甕型土器の文様構成表である。これによると赤焼きで半截竹管による沈線をもつものが約74%と過半を占めており、前述した赤焼きの広口壺（約42%）が占める比率と若干の差が認められる（第5表）。こうしたことは、赤焼きの甕の2形式のうち、口縁部がゆるやかに外反するものが逆L字状口縁の約2倍あることや、同地区下層下部において前者が若干出土していることを併せると、前者から後者への2形式の移行が前期新段階の中でおこなわれたのではないかと考えられる。さらに同下層の上部と下部における壺と甕との比率は、下部でほぼ7：3、上部で4：6と逆転している。このことは前期遠賀川系文化の派及の東限地域に近いこの地方で、前期段階で特徴的な赤焼き土器を成立させた地方色の展開は、その成立に当って煮沸形態の甕に先ず地方色が芽生えたことを示していると考えられるのである。尾張・三河地方における条痕系深鉢・甕と遠賀川系広口壺の併存関係はこのことについてきわめて暗示的である。さらに、前期における甕型土器の特徴についてみることにしたい。

第12表に甕型土器の文様構成を対比したが、口縁部刻目の有無の比率をみると本遺跡では口縁部に刻目のあるものが圧倒的多数を示している。こうした遺跡ごとの対比は、調査面積や資料数の多少にもよるものとも思われるが、一つの地域色を示している

ものと考えられよう。畿内における甕型土器の文様構成については、最近、池上遺跡の出土資料で詳述されているが、前期中段階から新段階にかけて次第に文様をもたない飾らぬ甕が主体を占めていることが報告されている。[13] 一方、畿内に西接する播磨地方については口縁部に刻目をもつ甕が主体を占めていることや、第2様式には半截竹管文が盛行していることが指摘されている。[14] こうした事実から直ちに播磨地方との密接な交流を想定することは短絡的ではあろうが、畿内をはさむ東西両地域に共通した展開が認められることは興味深い。

さて、「亜式土器」の成立は、当地方における前期の地方色の形成であることは明らかであるが、こうした地方色の形成の要因が、晩期縄文土器の系譜に関連することは既に推定されている。[15] 壺型土器における口縁部の貝殻押引文・押圧文、甕型土器における半截竹管文などは、尾張・三河地方の晩期縄文土器にみられるものであり、おそらく馬見塚式土器かそれ以前の土器形式に関連する要素が多い。

しかしながら、上述のごとく形式的には遠賀川系土器の系譜に関連することは明らかであり、遠賀川系土器に対峙する別の系譜とするならば、甕型土器は尾張・三河地方と同様の条痕系が主体を占めなければならないであろう。おそらく、当地方に遠賀川系土器を用いた集団が定着し、農耕文化が一定の段階に達した時点で、尾張・三河地方ではなお条痕系土器がそれ以降もその伝統を濃厚に継承していったように、一時的に土器形式の一部に縄文晩期の遺制が復活再生したものと考えたい。

上述のごとく、「亜式土器」にみる壺と甕の比率の逆転も、こうした動向と密接な関連をもつものと思われるのであり、伊勢湾西岸における一地方色とみなしうるのである。その意味から、この「亜式土器」をもって、遠賀川系土器文化に社会的に対峙する全く別の系譜であるとは断定し難いのではあるまいか。それ故、尾張・三河地方における縄文時代晩期から弥生時代前期～中期中葉にかけての、各土器形式の組成についての数量的な比率の抽出が、さらに厳密に行なわれることを期待したい。

2) 弥生時代中期

中期前半の第2様式土器の出土量はきわめてすくなく、広口壺型土器における頸部の櫛描沈線は複帯構成を示している。広口壺には大小の2種類があり、その比率は大型3：小型1を示している。当地方における第2様式の良好な資料は、東庄内B遺跡[16]と中ノ庄遺跡にみられるが、本遺跡のものと内容的にほとんど変化がみられない。ただ、中ノ庄遺跡出土の大型無頸壺は本遺跡では出土していない。これらの土器は、尾張の朝日式[17]に併行するものであるが、現状では当地方における分布からみて、近江地方を含む畿内からの櫛描手法の影響によって成立したものか、尾張地方からの伝播かについては明確にし難い

第12表　甕型土器の文様構成

単位（%）

文様＼遺跡		中ノ庄	納所A	上箕田	永井	納所B
口縁部刻目	無	42.2	5.3	29.4	34.6	6.5
	有	57.8	94.7	70.6	65.4	93.5
腹部文様（ヘラ描沈線）	無	20.7	28.2	35.9	43.8	11.2
	有	67.2	69.5	64.1	54.3	15.2（ヘラ） 73.6（半截竹管）
	段	1.8	0.8	—	1.3	—
	沈線＋刺突文	10.3	1.5	—	1.0	—
		資料数（58）	（131）	（39）	（289）	（523）

が、おそらく畿内からの伝播であろう。

中期中葉の第3様式前半の土器は、地方色の濃い特徴的な様相を示し、尾張地方の貝田町式古期[18]、三河地方の瓜郷式期[19]に併行するものである。器種構成ごとの文様比率などについては、現段階では未検討である。当期の土器施文法のうち壺型土器についてみると、ヘラ描沈線文と櫛描沈線文（櫛目文）の2者が併存している。ヘラ描沈線文は広口壺の頸部と細頸壺の頸部・腹部に多用されているが、いずれも右廻りで、器面を数回にわたって断続して施文されている。この断続は原体が明瞭に器面から遊離したものではなく、静止状態を示すものが圧倒的に多い。しかも、原体は1本であり、器面を一周し終ると、下方の別の沈線の施文に入るという一回性を示すものが原則的であるが、稀に広口壺の頸部において、上から下に向ってラセン状に施文したものもある。

櫛描沈線文は帯状を呈したもので、細頸壺の口縁部・頸部・腹部と広口壺の腹部に多用されているが、ヘラ描沈線文と同様に右廻りで、断続して施文されるものが多い。この断続も櫛原体が器面から遊離したものではなく、静止状態であり、このことは沈線文が数回にわたって小さな孤状を描いて器面を一周することからも理解されるのであり、この時期の土器底部に木葉圧痕がしばしば認められるところからも、木葉が回転台と考えられよう。第2様式の朝日式大型壺の頸腹部にある櫛描文も、原則的には第3様式の櫛描文と同様であるが、貝殻腹縁による幅広い沈線文帯も右廻りで、静止状態の断続が認められる。

以上の櫛描沈線文は、畿内型櫛描文[20]の範疇に入るものであるが、ヘラ描沈線文の系譜はどこに辿ることができるであろうか。おそらく、その系譜は第2様式の大型広口壺に求めることができるものと思われる。愛知県朝日遺跡の中央地区出土資料や東庄内B遺跡にも若干このヘラ描沈線文は見受けられる。その淵源は、第1様式の前期新段階に盛行したものであり、畿内からの櫛描文の強い影響を受けながらも、中期中葉の土器に再生したものと考えられるのであり、一つの地方色の存在として位置づけられるものである。

当期における地方色は、きわめて東海的な土器が盛行したことが最も特徴的であり、壺型土器には尾張、三河地方の貝田町式古期や瓜郷式期の特徴を持つ土器が多い。おそらく伊勢湾における海上交通がかなり頻繁に行なわれていたことを暗示している。一方、甕型土器は尾張、三河で盛行した条痕系土器は全くみられない。このことは東海的な大きな地方色の中で、伊勢湾西岸地方が独自の地域圏をもっていたことを示している。さらに、特徴的な形態をもつ細頸壺C類・甕C類は、近江・伊賀・北勢地域に分布することが判明していた[21]が、当遺跡でも少量ながら出土している。近江との交流は、第2様式にその萠芽がみられるが、第4様式以降はS字口縁甕の祖形となった受口状甕に親縁性が認められ、その基盤は中期中葉に既に確立していたのである。

第3様式後半の土器は、きわめて畿内的な影響の強いものであり、流水文、簾状文などの櫛描文土器が盛行している。しかしながら、原体をたばねたものを複数用いた複帯構成の施文や、広口壺型土器にみられる算盤玉状の腹部の形態は、当地方の特徴をよく示している。さらに、畿内において当期から第4様式に盛行した把手付の水差型土器は未検出であり、それがどのような理由に基づいたものかは興味あるところである。ただ、こうした大きな地方色の中にあって、北勢の永井遺跡では広口壺の口縁部内面に三角形の瘤状隆起もつ簾状文土器があるのに対して、当遺跡では瘤状隆起をもつものはむしろ少量である。おそらく、北勢部においては、第3様式前半の遺制が畿内的な土器の施文が流入してからも継承されたものと思われる。

さて、当期の広口壺A類は、簾状文、沈線文、波状文、列点文で器面全体を飾ったきわめて装飾性豊かな土器である。これらの施文が類型的であることは、例えば簾状文は頸部と上腹部に限定されていることで明らかである。さらに、腹部の文様帯を波状文で終結させることも原則的なようである。こうした類型的な施文法は、当期における一つの段階を画しているものと思われるが、腹部の施文をみると、沈線文帯を主とするものに一部波状文を入れるものと、沈線文と波状文を交互に繰り返すものとがある。後者の施文は前者にくらべて簾状文の間隔が粗くなり、波状文、沈線文も粗くなるなど退化傾向が認め

られる。これらの広口壺とセットをなす他の器種を現状では明確に抽出しえないが、こうした段階をもって、第3様式後半から第4様式にかけての時期を将来細分しうる可能性があると思われる。強いていうならば、尾張の高蔵式期[22]、三河の長床式期[23]に若干先行する段階と考えておきたい。

第4様式については、かっては凹線文手法の土器が指標とされていたが、近年では凹線文が第3様式にさかのぼることが明確になり、第3様式から当様式にかけての細分はあらためて苦慮されているようである[24]。ただ、亀井遺跡のＳＫ１出土資料にみられるように、甕型土器についてはなお第3様式の系譜を辿れるものが多数継承され、近江地方に特徴的な受口状のものも次の第5様式に継承されている。こうしたなかで畿内的な無文の甕型土器や、叩目をもつ例[25]の分布を総合的に検討するにはなお資料が不足しており、この点については将来の課題である。

3) 弥生時代後期

第5様式を3小期に細分したが、土器編年が錯綜する感がある尾張・三河地方との併行関係は第9表に示すところである。

基本的に当地方の第5様式の推移は、前半に畿内的影響の強い土器群で構成され、中頃以降は再び東海系土器が盛行していくのであり、櫛描文は東海型櫛描文[26]とされる左廻りのものが多い。

第13表は当地方における第5様式から古式須恵器の出現期に至る特徴的な土器の推移を概観したものであるが、手焙型土器は畿内的な土器であり、Ｓ字口縁甕・瓢壺やパレス式壺は東海的な特徴をもつ土器である。本表は充分な検討を経ずに作成しているので、遺漏があると思われるが一つの傾向を示すものである。これらの東海的な土器の構成は、その形成と消滅が同時進行的でない点に一つの特徴が認められる。このことは、個々の土器の性格が充分に把握されていない当地方の研究動向の未成熟さにもよろうが、逆にいえばそれぞれの遺跡における出土状況の詳細な検討を経ることによって、改めてその性格が究明され、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての社会動態の復元にアプローチしうる可能性を残こしているものである。この点については、今後の研究を待つものである。

後期中頃に比定した手焙型土器の一つにヘラ描の直弧文の原単位図形を記したものが出土している。こうした特殊な文様をもつ手焙型土器は知見にないが、編年的に後期中頃に比定しうるかはきわめて問題のあるところであり、後期後半から古墳時代前期に下る可能性もある。本例は、名張市蔵持黒田遺跡[27]の手焙型土器の成形技法による分類に基くとＡＩ類に当り、受口状の浅鉢に覆部を取り付けた最も古い手法のものである。西ヶ広遺跡[28]出土例は覆部のみであ

第13表　伊勢湾西岸地方における土器の推移（弥生後期～古墳前期）

納所編年＼器種	Ｓ字口縁甕	手焙型土器	瓢壺	パレス式壺	小型精製土器 壺	小型精製土器 器台	小型精製土器 鉢
弥生5（前半）							
弥生5（中頃）							
弥生5（後半）							
古墳Ⅰ期	Ⅰ類（大参ａ）						
古墳Ⅱ期	Ⅱ類						
古墳Ⅲ期	Ⅲ(A)（大参ｂ） Ⅲ(B)						
古墳Ⅳ期	Ⅳ(A) Ⅳ(B)						
古墳Ⅴ期	Ⅴ(A) Ⅴ(B)						

註：Ｓ字口縁甕は、安達・木下編年による。

り、接合部に２条の突帯がめぐるが、共伴の土器は後期中頃に比定されている。手焙型土器は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて畿内を中心として西は山陰瀬戸内地方、東は東海、関東地方にかけて広範囲に分布する祭祀的様相の濃い土器である[29]。出土状況が明らかな例はすくないが、大型住居址内の隅部、集落に近いテラス状部・大型土坑・溝址・自然流水路内などがある。蔵持黒田遺跡では、２個の手焙型土器が斜面をテラス状に加工した箇所に約３ｍの間隔を置いて向いあって出土し、また、斜面に配列された壺、甕、高杯、器台などに混って出土している。こうした出土状況が、一連の祭祀の過程を示すものか、独立した祭祀形態を示すものかは直に判断しえない。祭祀の実態は不明であるにしても、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての畿内を中心とした広範な地域に、普遍的に一つの祭祀が行なわれていたことは事実である。そうした性格を持つ手焙型土器に、直弧文の原単位図形が描かれていることは重要である。この文様の左側には、３本線で構成された蛇状の文様があるが、こうした文様は畿内第５様式前半の長頸壺に描かれた動物文様に通じるところがあり、手焙型土器を介して新旧の呪的文様が表現されている点に、当遺跡の畿内に対する地理的、歴史的環境の親縁性が窺える。しかしながら、宇佐晋一・斎藤和夫氏のご教示によれば、この文様が纒向遺跡[30]の弧文円板を通らない原単位系の直弧文であるとの指摘にみられるように、当地方の独自性もまた認められる。

纒向遺跡における弧文円板の所属時期については、異論もあるところであり[31]、本例の編年的位置づけも問題があることは上述した。纒向遺跡の弧文円板の性格については、こうした特殊文様が吉備と畿内の前期古墳に伴なう展開をみせた「特殊埴輪」に継承されていく事実から、葬送儀礼に関連したものと想定されている。このことから手焙型土器の保有する祭祀的性格を、直ちに葬送儀礼に結びつけるのは短絡的であろうが、すくなくとも葬送儀礼に関連していく要素を内包していることは推定できるのではないであろうか。畿内北西の大阪府池田市茶臼山古墳出土の形象埴輪の一部について、手焙型土器を燈火具としての形象化したものと推定[32]されているが、燈火具とする積極的な根拠は稀薄であるにしても、古墳祭式の場に手焙型土器が継承されているように思えるのは興味あるところである。ただ、この手焙型土器は古墳時代前期の段階で消滅していくように、基本的にはあくまで弥生時代後期社会の産物であり、その分布範囲の中で社会を律するような祭祀として位置づけられたものではなかったことは誤りないであろう。

4)　古墳時代前期

三重県下の古式土師器の編年については、これまで系統的な報告がなかった。その理由として地理的に畿内と尾張・三河地方の中間に位置する関係上、両地域の編年が交錯し個々の資料の抽出が困難であったことと、良好な一括資料に恵まれていないことから器種構成を充分把握しきれなかったといえよう。しかしながら、これらの問題を含みながらも編年の大筋がほぼ形成される途上にある段階である。現状では南勢部の伊勢市中楽山遺跡[33]ＳＸ１出土資料の形式から、鳥羽市大畑（おばたけ）遺跡[34]ＳＫ１出土資料の形式への移行が提示されているが、報告者が提示した、この中間期に尾張の元屋敷期を挿入した方がよりスムーズと思われる。周辺地方での編年の細分化の進展により、個々の形式内における細分が将来可能であることはいうまでもない。さらに古墳時代集落址の調査資料も増加しつつあり、大畑遺跡ＳＫ１式期以降の編年についても、すでに津市新畑遺跡[35]・中蔦遺跡[36]出土資料により編年案が提示されている。ここでは基本的に上述の各遺跡の出土資料から、古墳時代の土器を５期に編年し、第Ⅰ～Ⅳ期を古式土師器の段階とした。ただ、こうした細分とは別に、土器にみる胎土の精良化・無文化に伴なうヘラ研磨技法の盛行、器壁の薄くなる傾向などを土器の斉一化現象とみるならば、本書で「弥生時代後期後半」とした高松式期に併行する段階から顕著にみられるのであり、こうした傾向は古式土師器の第Ⅰ～第Ⅲ期に一貫して認められるものである。この点を重視するならばこれらの土器は「古式土師器」と呼んでも差しつかえないといえるであろう。

Ｓ字口縁甕については、東海地方の資料により編

年されて以来、近年は奈良県を中心に古式土師器との良好な共存関係が確認され、編年的に整備されつつある[37]。本書ではS字甕I類（a類）の上限を、弥生時代の後期後半を含むところまで引き上げたが、これについて若干の補足をしておきたい。飛鳥地域の資料によりS字甕I類は、欠山式の新しい段階（欠山3式）に属するものとされていたが、伊勢市中楽山遺跡の方形周溝墓（SX1）の北辺周溝内から出土した一括土器群中のS字甕I類は、共伴した多量の欠山式新段階の土器からみても併存関係にあることは明らかである。S字甕I類の指標とされた津市竹川遺跡[38]では、包含層からの出土資料であるため共伴関係は明確にし難いが、津市高松遺跡のB地点[39]では主体を占める欠山式中段階（欠山2式）にS字甕I類が共伴している。中楽山遺跡の住居址（SB1）出土の一括土器群は、欠山2式に比定されているが共伴するS字甕は、頸部直下の6条の沈線が粗いヘラなでである以外はI類に極似している。以上のことから定形化したS字甕I類の出現時期は、これまでの編年から若干さかのぼるものと考えることができるであろう。以下、簡単に各期の特徴と編年関係について述べることにする。

古墳時代の第I期は、前代の欠山式期（中）の様相を濃厚に残す段階であり、欠山式期[40]の後半（新）に併行するものと思われる。上述の中楽山遺跡SX1出土の土器が指標となる。

第II期は、尾張、三河地方の元屋敷式期[41]に併行し、畿内的様相が再び濃厚になり始める時期である。複合口縁の壺をはじめ、小型器台・小型鉢が新しく加わり、高杯も前代まで盛行した欠山式期系は消滅し、瓢壺も消滅する。小型器台については、既に弥生時代後期の山中式期に中空の例があるが、この時期のものとはおそらく別系統であろう。こうした組み合せをもつ土器群は、近年の当地方の調査例ではまだ良好な一括資料にめぐまれていないが、布留式期[42]に特徴的な小型丸底壺を含まない時期が設定できそうである。当期の具体的様相の究明も、将来の課題である。

第I・II期は、畿内の庄内式期[43]に併行するものであり、上野市北堀池遺跡[44]では庄内型甕が出土しているが、伊勢湾西岸地域には庄内型甕は未発見である。当地方では、腹部に平行か右上りの太い叩目をもつ畿内の弥生時代後期に盛行した甕が、古墳時代前期にも少量ながら搬入されており、納所遺跡でも微量出土している。

第III期は、小型丸底壺・小型器台・小型鉢の3種の精製土器が共存する段階である。これらは畿内の布留式期、尾張の元屋敷式期から石塚式期にかけての時期に併行するもので、鳥羽市大畑遺跡・津市中蔦遺跡で良好な一括資料が出土している。坂本山6号墳[45]麓出土の土器も当期に属するものであるが、複合口縁壺は口縁がやや外反し、中空の小型器台があるなど、当期でも後半のものである。

第IV期は、定形化した小型精製土器に崩れがみえる段階である。器面のヘラ磨きが衰退し、ヘラ削りが多用されるようになる。大和の上ノ井手遺跡SE030下層土器[46]や、尾張の石塚式期に併行するものと思われる。亀山市地蔵僧遺跡[47]、津市新畑遺跡・中蔦遺跡で類例が出土している。なお、小型丸底壺は形態的にさらに細分が可能であり、S字口縁甕とあいまって将来は当期を2段階に細分しうる可能性がある。

第V期は、和泉陶邑古窯址[48]のI期末の段階に併行し、当地方における古式須恵器を伴なう5世紀末から6世紀前半の段階を一括した。前段階まで盛行した小型土器は、ほとんど消滅したものと思われるが、手捏ねのミニチュア土器は若干残るようである。小型精製土器による祭祀が、ミニチュア土器による祭祀に変質していったものかもしれない。また、S字口縁甕も、退化形式を示すものばかりとなる。土師器高杯は、丸味をもつ椀に中太りで裾がひろがる脚部をもつ形式であるが、類例は四日市々永井遺跡・鈴鹿市伊奈富遺跡[49]。安濃町清水西遺跡[50]で出土している。地蔵僧遺跡でも同時期の住居址から類例が僅かに出土しているが、なお前代の稜をもつ形式の高杯が多用されているようである。当地方においては6世紀代の集落遺跡の調査例が全くない現状ではあるが、須恵器の流入と同時に旧来の土師器の形式が急速に変化し始め、竪穴住居址内の炉が作り付けのカマドに変化するとともに、把手付甑や胴長甕が新らたに増加している。高杯にみる変化も、こうした動向と関連するものかもしれない。

以上、簡単に弥生時代・古墳時代の土器についてまとめたが、本書に報告できなかったものは余りにも多い。編年的にも弥生時代後期から古墳時代については多くの問題が残されているが、第9表にまとめた弥生土器編年の納所1～5については、当遺跡が伊勢湾西岸地域におけるほぼ中央部に位置する地理的な関係を考慮して、伊勢湾西岸第1様式～第5様式と概括することにしたい(第45図)。

註

(1) 吉田富夫・杉原荘介「東海地方先史時代土器の研究」『人類学先史学講座』第13巻 1939
久永春男「東海」『日本考古学講座4』 1956
同上 「東海」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』 1966
佐原 真・田辺昭三「近畿」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』1966
紅村 弘「東海地方Ⅰ」・杉原荘介「伊勢湾地方」『弥生式土器集成 本編2』 1968
大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集48』 1968

(2) 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972

(3) 仲見秀雄・真田幸成・大場範久『上箕田』 1961
同 上 『上箕田―弥生式遺跡第二次調査報告』 1970

(4) 小玉道明・伊藤 洋『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会 1973

(5) 紅村 弘「水神平式の諸問題」『東海先史文化の諸段階』(資料編Ⅱ) 1978

(6) 澄田正一・柴垣勇夫ほか『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会 1972

(7) 紅村 弘『名古屋市西志賀貝塚』 1958

(8) 前掲(5)、なお、尾張・三河系土器については、紅村 弘・伊藤禎樹氏と朝日遺跡調査事務所の方々のご教示をえた。
紅村 弘「弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階』 1975

(9) 山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 1971

(10) 前掲(4)

(11) 伊藤久嗣「三重県における弥生時代の諸問題」『三重考古』第2号 1978

(12) 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告』四日市教育委員会 1966

(13) 井藤暁子・藤田雅子ほか『池上遺跡 第2分冊 土器編』財団法人大阪文化財センター 1979

(14) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』15巻4号 1969

(15) 前掲(5)・(8)

(16) 小玉道明・谷本鋭次ほか「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1970

(17) 田中 稔「尾張における中期弥生式土器の研究1―朝日式土器について」『古代学研究』 1966

(18) 澄田正一・大参義一ほか『朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会 1975

(19) 後藤守一・八幡一郎ほか『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

(20) 佐原 真「弥生式土器製作技術に関する二三の考察―櫛描文と回転台をめぐって」『私たちの考古学』5－4 1959
笹沢 浩「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会 1978

(21) 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』4 三重県教育委員会 1973

(22) 田中 稔ほか『高蔵貝塚』瓜郷遺跡調査会 1954

(23) 前掲(1)

(24) 前掲(13)

(25) 第4様式の叩目の甕は、きわめてすくない。他に、安濃町亀井遺跡(註21)で1点出土している。

(26) 前掲(20)

(27) 水口昌也・門田良三『蔵持黒田遺跡』名張市遺跡調査会 1978

(28) 小玉道明・谷本鋭次「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1970

(29) 江谷 寛「手焙形土器の再検討」『古代学研究』59 1971

(30) 石野博信・関川尚功ほか『纒向』桜井市教育委員会 1976

(31) 木下正史「奈良県『纒向』」『考古学雑誌』第64巻第1号 1978

(32) 春成秀爾氏のご教示による。

(33) 下村登良男「伊勢市上地町・中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1973

(34) 下村登良男・村上喜雄『おばたけ遺跡発掘調査報告』鳥羽市教育委員会 1972

(35) 吉村利男『新畑遺跡発掘調査報告書』津市教育委員会 1973

(36) 萱室康光『中鳶遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1978

(37) 大参義一 前掲(1)、同「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』13 1967
安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻

(38) 下村登良男・谷本鋭次『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972

(39) 三重大学歴史研究会古代史部会「津市高松弥生遺跡について」『古代学研究』37 1964

(40) 久永春男 前掲(1)
飯尾恭之「尾張における後期弥生式土器の編年的研究1」『古代人』27・28 1973

(41) 大参義一 前掲(1)

(42) 末永雅雄・小林行雄・中村春寿「大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』第9巻第10号 1938

(43) 田中 琢「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号

1964
(44) 吉水康夫・駒田利治・山田　猛『北堀池遺跡発掘調査概要Ⅰ』三重県教育委員会　1978
(45) 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墳墓群』津市教育委員会　1970
(46) 安達厚三・木下正史　前掲(37)
(47) 倉田直純『地蔵僧遺跡発掘調査報告』亀山市教育委員会　1978
(48) 田辺昭三『陶邑古窯址Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966
(49) 小玉道明「伊奈富遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』1966
(50) 谷本鋭次「安芸郡安濃村・清水西遺跡」『昭和47年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』5　三重県教育委員会　1973

2．木製遺物について

木製遺物は、所属時期が比較的明確であり、種類も豊富である。従来、当地方における弥生時代の木製遺物は、鈴鹿市上箕田遺跡から鋤未製品２点のほか若干出土しているにすぎなかった。その意味からも、尾張の朝日遺跡群、三河の篠束遺跡・瓜郷遺跡の類例とともに、畿内と関東との間隙を埋める資料的価値は高い。数量的には弥生時代前期のものが圧倒的多数を占めているが、いずれも最下層の自然流水路や落ち込みから出土し、出土状況に一定のまとまりを認めることはできなかった。農具、工具、容器類には未製品も多く、集落内で自給自足的に製作されたことが明らかである。

調査時点で最も関心を集めたものは、琴型木製遺物としたものであったが、以下若干、「琴」と想定した根拠について述べておきたい。

想定の根拠は、次の通りである。

(1)　台形で共鳴函を持つ「洋琴（ヤングム）」（韓国）、「揚琴（ヤンチン）」（中国）と呼ばれる弦楽器が存在する。

(2)　両側縁の２列の対称的な配置をとる三角孔は、機能的にみて弦を張る構造に適している。

(3)　長辺の断面が中央で翼状に反る形態は、人間の膝に乗せるにふさわしい。

以上が想定の根拠であるが、(1)の「洋琴」は、西南アジア地方のアラビア・ペルシャに起こり、以後ヨーロッパへ伝播したものは、民俗楽器として「ツィター」・「ツィンバロン」・「カンターラ」・「カンテーラ」と呼ばれて現代でも残っている。東方へは、明代に中国へ伝播し、中国本土南部から台湾で漢族の民俗楽器として普及し、朝鮮半島にもその後伝播している[1]。その起源はササン朝ペルシャ期以降に成立したものと考えられており[2]、本例と時代的にも合わないが、台形の弦楽器が存在したことは興味深いものである。

(2)については、右側外縁の三角孔に巻きついていた樹皮は、補修用とは思われない。したがって、弦または弦を巻きつける元紐と推定し、内側の三角孔はあるいは琴柱を立てる箇所ではないかと推定したい。

(3)については、断面の反りは、上面では弦と本体との間隔を保つにふさわしい。

以上の根拠は、まことに薄弱なものであるが、弦を張るとしたら、おそらく６弦であったと思われる。

日本の古代琴は、出土品、伝世品のほかに人物埴輪にも弾琴像があり、最古例は弥生時代後期のものである[3]。

形式的にみても、静岡県登呂遺跡・千葉県菅生遺跡出土の１枚板のものと、「槽」または「甲」や、表板または裏板で函を作る組合せ式の３種類がある。後者の源流は、中国胡南省長沙市の馬王堆２・３号墳から出土した前漢代の琴や瑟[4]に求めることができるのであり、中国殷、周代の五弦琴にその系譜を辿ることができるであろう。１枚板のものについては、一部に琴否定説もあり[5]、琴としてもその系譜は現状では不明であり、あるいは函型の一種かもしれない。

ヤマト琴と呼ばれている日本の古代琴は、『隋書』倭国伝には「楽に五弦の琴・笛有り」とあって、５弦琴もあったが、６弦琴（正倉院以後の和琴）もあった。その実例は古墳時代の滋賀県服部遺跡琴[6]（６弦）、７世紀代の福岡県沖の島祭祀遺跡出土の小型金属製琴[7]（５弦）、北九州市野田遺跡琴[8]（６弦）などである。埴輪は多く５弦であるが、４弦もある。青森県八戸市是川遺跡出土の箆状木製品[9]が琴であるならば、２弦もあったことになり、これを加えると我国の原始・古代の琴は４種類となる。

納所遺跡出土の「琴」は、上述のいずれの琴とも

推定した弦数を除いて共通した要素を認めることはできない。しかも、琴と想定する根拠はまことに薄弱である。しかしながら、原始的な楽器がすべて一元的に発生し、各地へ伝播したものではないと考えることも可能ではあるまいか。もし、こうした発想が許されるならば、中国文化の影響下にヤマト琴の祖形が我国に伝播し、発展する段階以前に、形式的にきわめて原始的な1枚板作りの琴の自生的な成立を全く否定し去ることはできないであろう。いずれにしても「納所琴」の類例の出土を期待したい。

註

(1) 中野輝雄「民俗学器1、弦鳴楽器」天理大学付属天理参考館 1969

(2) 東京大学名誉教授 岸辺成雄氏の御教示による。なお、琴についての文献収集、考察について全面的な御教示を得た。記して謝意を表する次第である。
岸辺成雄「長沙漢墓二・三号の楽器と津市納所遺跡の〝こと〟と」『東洋音楽研究彙報』第41・42号 1977

(3) 水野正好「『琴歌譜』以前のコト」『季刊邦楽』18号 1979

(4) 『長沙馬王堆一号漢墓』上集 湖南省博物館・中国科学院考古研究所編 1973

(5) 佐瀬 仁「弥生時代古代和琴のResonator（共鳴器）について」『国立音楽大学研究紀要第13集』 1979

(6) 大橋信弥「服部遺跡発見の琴」『波登里』第7号 1976
兼康保明「古代の琴—森浜遺跡出土などの遺品をめぐって」『月刊文化財』 1977年10月号

(7) 『宗像沖ノ島Ⅰ・本文』第三次沖ノ島学術調査隊編 1979

(8) 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集』 1979

(9) 鈴木克彦「縄文琴について」『青森県立郷土館だより』19巻2号 1978年8月
清水潤三『是川遺跡』中央公論美術出版 1966
（4版1978）

3．石製遺物について

石製遺物の大半は弥生時代中期に属しているが、出土地点や層位により明確に前期に属するものは163点と約17%を占めている。中期に属するものとしては、遺構別の詳細な検討が未了のため細分できないが、それに包含層出土のものを加えた。後期に属するものは明らかでないが、同期の土器が出土した地点がA・B地区の自然流水路のみであることと、包含層から後期の土器が若干出土しているのみであることから、存在していたとしても微量であろう。なお、玉類のうち古墳時代に属するものは3点である。

前期のもののうち扁平短冊型の打製石斧が4点あるが、下層の自然流水路下部の青灰色粘土層から出土している。あるいは微量ながら出土している晩期縄文土器に共伴した可能性も考えられるが、類例は中ノ庄遺跡にもあり、いちおう前期中段階に属すものとしておきたい。打製石斧では中期中葉の第3様式前半期の土器を共伴する遺構から出土した局部磨製のものがあり、使用痕があり未製品ではない。

石製遺物の材質については別に報告[1]しているが、以下簡単に時期別の傾向を指摘してみることにする。

石鏃、石錐、石小刀、刃器などはサヌカイト、石庖丁では片岩系の石材がそれぞれ約98%を占めるなど、機能や加工に応じた石材が用いられており、前期・中期を通じて全く変化はなく、中期に属する環状石斧にも、硬質の砂岩、溶岩、安山岩が用いられている。叩石、凹石は、前期・中期に属するが、中生代の硬質の砂岩が約50%用いられ、他は花崗岩、斑粉岩、閃緑岩、片麻岩が用いられている。

磨製石斧類のうち、太型蛤刃石斧では硬質の砂岩が多用され、前期では約60%、中期では66%と漸増し、扁平片刃石斧でもほぼ同様の傾向を示している。柱状片刃石斧の前期出土数は2点とすくないが、硬質の砂岩が用いられ中期では84%の高率を占めるようになる。中期の打製石器に多用されているサヌカイトは、打製石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧にも少量用いられているが、奈良県二上山産出の黒色で緻密なものとはやや異るのではないかと報告されている。石庖丁に用いられた片岩類は紀伊半島に広く分布しているものであるが、いかなる系路で当地方へ搬入されたかは不明である。

石製遺物の地区別出土率一覧表（第14表）によると、遺構との対応関係が明瞭に認められた。たとえば、G地区は前期・中期を通じて住居址はなく、数条の大型の溝址が検出されている。これらの溝はおそらく集落を乗せる低平な自然堤防の東側縁辺部を

画したものと推定されるが、こうした地域に石製遺物の出土量が僅少なことは偶然とは考えられない。この東側のH地区では、とくに第3様式前半のものが多いが、これらは層位的にみてG地区の溝址群よりもレベルが低位にあり、青灰色の粗砂礫層の堆積状況から旧美濃屋川の一支流に面していたことが想定される。したがって、河川に面した環境下で、石製遺物を用いた生活が行なわれていたことが推定されよう。以後、安濃川による自然堤防が形成され、G地区にみられたごとき大型の溝が集落の東部を画して掘られていったと思われる。発掘区西端のA地区でも石製遺物の出土量はすくないが、弥生時代前期・中期・後期から古墳時代以降の土器が多量に出土し、攪乱状況を示しているので、生活の反映をみることはできない。一方、B～F地区、I・J地区では調査面積比に対して石製遺物の出土量をみた場合、平均した出土率を示している中で、住居址の存在する地域の出土率はやや高い傾向を示している。E地区は約3分の1が最近の攪乱で遺構が消滅していたために出土率はすくないし、I・J地区は調査面積が他地区にくらべて狭いためであったが、B～F地区よりはやや出土率はすくない。ただ、約100m離れたD地区とJ地区で出土した扁平片刃石斧片が接合する例もあるので、こうした地区別の出土率を個々の遺物の廃棄状態として直ちに使用（消費）状態を反映したものとは断言しえないにしても、住居址を中心とした居住空間に出土率が集中する傾向は指摘できそうである。

尾張・三河地方において、稲刈用の道具である石庖丁の出土数がきわめてすくないことはしばしば述べられている[(2)]。納所遺跡では53点が出土し、遺跡全体ではおそらくこの数倍の出土量が予測される。東海地方における当地方と尾張・三河とのこうした石庖丁の量的格差が、そのまま両地域の農耕形態の格差を示しているかは不明な点が多い。おそらく、石庖丁の原材となった紀伊半島産出の片岩類の原材としての供給量が、当地方の弥生集落の消費を満たすにも充分な量ではなかったため、尾張・三河への原材の移動が量的にも限定されざるをえなかったのではないであろうか。当地方においても、これまで石庖丁の出土量はすくない。こうしたことは調査面積の多少にもよろうが、もしこれが一つの傾向として将来明確になれば、石器原材の供給と需要の一面からも、弥生時代における集落間相互の交流の解明に深くかかわる問題になるであろう。

註

(1) 荒木慶雄・北村治郎「納所遺跡から出土した石器類の材質」『納所遺跡―その自然環境と自然遺物―』三重県教育委員会　1979

(2) 澄田正一・紅村　弘『篠束第一次調査報告』小坂井町教育委員会　1960
澄田正一・大参義一ほか『朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会　1975

第14表　石製遺物地区別出土率一覧表

地区別 出土数 ＼ 出土率	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計
	28	144	90	150	42※	83	3	78	34	53	705
出土率 ①	4.0	20.4	12.8	21.3	6.0	11.8	0.4	11.0	4.8	7.5	100（%）
面積率 ②	11.3	14.5	11.6	13.7	10.6	7.5	13.7	5.3	5.3	6.7	A～F地区は上下2層
①/②　（X）	0.35	1.41	1.10	1.55	0.43	1.57	0.03	2.07	0.90	1.11	105.2（Y）
X/Y	**3.3**	**13.4**	**10.5**	**14.7**	**4.1**	**14.9**	**0.3**	**19.7**	**8.6**	**10.5**	**100（%）**

※E地区は、一部攪乱のため出土数がすくない。

4．遺構について

今回の調査の結果、納所遺跡は主として弥生時代前期から古墳時代前期にかけての複合遺跡であることが明確になった。昭和51年に実施した範囲確認調査では、今回の調査地域の西側一帯にひろがる青灰色粘土層からなる可耕地と推定される低湿地をも含めると、東西約1,000m、南北約450m、面積約450,000m²の伊勢湾沿岸でも有数の大型集落遺跡であることを確認し、三重県以西の大型遺跡と遜色のない規模である。さらに弥生時代、古墳時代の遺物包含層の分布範囲を合せて約280,000m²あり、今回の調査総面積12,500m²はその約20分の1に相当する。

以下、簡単に各時代の遺構をまとめることにする。

1) 弥生時代前期

調査地域のほぼ全域で、自然流水路と落ち込みと7条の溝址を確認した。この時期の住居址は未確認であるが、旧安濃川の支流と推定されるこの自然流水路（埋積浅谷）より、さらに上部の調査地域北側一帯に埋没している可能性が強いと思われる。

B地区では、自然流水路を横断して杭、矢板列を3箇所で確認したが、とくに中央部では、幅約2mの溝状遺構の肩部に内向する杭列、矢板列があり、調査時点では水田址の可能性を想定していたが、土器の出土量が多いことからむしろ否定的であり、シガラミ的な機能をもった施設と考えておきたい。

I地区のSD2～4は、ほぼ平行して東方へ向っているが、範囲確認調査の結果、その東方延長部一帯に小範囲ではあるが低湿地が分布することを確認したので、あるいは水田址が埋没しているかもしれない。G地区の落ち込みの東端を切るSDIも、自然流水路かこの低湿地からの導水か排水のために掘られた可能性があると思われる。

2）弥生時代中期・後期

(1) 集落構成

前期に形成された自然流水路・落ち込みが沖積作用の結果埋没し、中期にはその自然地形に制約された形で多くの遺構が形成されている。とくに中期中頃の溝址であるSD8は前期の埋積浅谷とほぼ重複して掘られており、同溝をもって集落の南北を区画する機能を見い出し難い。なお、SD7は下部の自然流水路とは逆に東から西に向かうが、調査地域の北側一帯に東西方向に形成された自然堤防の高みから派生したものと思われる。

H地区西側一帯に当る中期中頃の南流する自然流水路において、杭列、矢板列が一部残存し、農工具などの木製遺物が集中して出土している。おそらく北東部の低湿地を含めて、遺跡の北側を東流する美濃屋川の旧支流によって形成されたものであろう。弥生時代中期においては、西側を旧安濃川が形成した低湿地、東側を旧美濃屋川の支流によってはさまれた自然堤防上に集落が形成されていくのであろう。

○広　場

約2,000箇所の遺構のうち、現時点では住居址、方形周溝墓、土坑墓、溝址などの主要遺構の年代が判明しているにすぎないが、中期前半から後半にかけての集落構成の一斑を垣間見ることができる。これら多数の遺構が分布する中期にあって、とくにD地区の東側地域には、ほとんど遺構が認められない円形で面積約130m²の空白部分がある。北側と南側の未調査地域は別としても、こうした空白部分は集落内の広場としての機能を持つ空間である可能性が強いと思われる。この地域をはさむ東西両側に遺構が密集するが、この両地域において墓地形態が異るとともに竪穴住居址の分布が2分されるかのようである。

○竪穴住居址

竪穴住居址は、中期中頃（第3様式前半）において平面形態が円形に近いもの（SB7、12）と隅丸方形のもの（SB1・2・3・4・5・10・11・14・15）の2種類がある。中期前半（第2様式）から中期中頃（第3様式前半）にかけての住居址の類例は東庄内B遺跡で8棟が検出されているが、小型の長方形のものを除くといずれも円形であった。前期の四日市市大谷遺跡の住居址2棟も円形であり、住居址平面の円形から方形への変遷がいかなる事情によるものかは直に決し難いが、納所遺跡では中期中頃にその

変化が始まっている。

上述したD地区東側の「広場」を境にして、中期中頃には東側では円形と隅丸方形、西側では隅丸方形の住居址のみで形成されており、中期後半では全て隅丸方形でも隅部がほぼ直角に近い平面形を呈するようになり、ＳＢ６は大型の八角形を呈する特異な形態をもつ。いま、仮にこの「広場」を境にして、東群と西群と呼ぶことにするが、両群の住居址の面積構成にも若干の格差が指摘できる。

中期中頃においては、西群ではＳＢ４が面積48m²と大型であり、ＳＢ１・２・３・５は20～30m²とやや小型である。東群ではＳＢ７が56m²と大型で、その他の住居址にやや不明な点もあるが20～30m²と思われるＳＢ15・12・14がＳＢ７に続き、さらにＳＢ10・11・13は10m²前後である。最も小型であるＳＢ10・11が住居址以外の機能を持つ施設である可能性を残しているが、住居址とするならば東群と西群は住居址の構成の上で格差を認めることができるであろう。弥生時代の集落内における生産と消費に要する協業の最小単位を「単位集団」[(1)]として概念規定されているのに従うならば、東西両群における１棟の大型住居址と数棟の小型住居址群を「単位集団」と想定することも可能である。東群においては「単位集団」を形成する個々の住居址における階層分化が西群にくらべてより進化した状態が、ＳＢ10・11・13のごとき小型住居址の形成に反映したものとも想定できるのではあるまいか。ＳＢ10・11・12が住居址以外の施設であったとしても、それらを形成する条件を東群の「単位集団」が保有した結果に外ならないのである。おそらく弥生時代中期における納所遺跡は、複数の「単位集団」群によって構成され、相互間の格差が階層分化を反映したものと想定されよう。

しかしながら、竪穴住居址の規模については検出例が僅かであるとはいえ、両群の見かけ上の格差は中期後半において消滅するようである。

西群では、ＳＢ６が掘り方の深い８角形の平面をもつ面積約93m²と今回の調査地域内では最大の規模をもっている。東群では、ＳＢ９・八が約63m²となり、前代のＳＢ７の約56m²からやや大型化する。ただ、他の住居址は調査地域内では全く確認できなかった。中期後半における住居址の大型化については、県内の他遺跡と比較する資料に恵まれていない。当遺跡においても、この時期の住居址は未調査地域に埋没していることが当然予測され、大型化が全ての住居址にみられるか否かは興味ある点であり、これについては将来に問題を残しているといえよう。このように中期後半における住居址の大型化は、東西両群の「単位集団」における見かけ上の格差が消滅したかに思えるが、次に述べるごとく方形周溝墓は東群のみに継続して形成されており、東群の優勢さは維持されている。

こうしたことと関係があるかは不明であるが、この東群の住居址のみから、明らかに伊勢湾東岸以東の地から搬入された土器が若干出土していることは興味深い。なお、以上の竪穴住居址以外にも、住居址とする可能性がある大型の方形・円形の土坑が、D地区東北部、E地区南部、F地区東部、I地区南部に存在するが、主柱穴や炉址が不明確のためここでは住居址としては取上げなかった。さらにC地区ＳＢ４の南方にも方形の掘り方が認められたが、住居址として取上げなかった。仮にこれらが住居址とすれば、大半が東群にあり、同群の優勢さを示すものとなるかもしれない。

○方形周溝墓

住居址構成にみられた両群の格差は、方形周溝墓の分布にもみることができる。中期中葉においては東群にＳＸ１が形成され、次いで中期中葉から後葉にはＳＸ２～５が順次形成されている。なお、他の地区でも細長い溝が方形を呈する箇所が認められたが、溝内に土器群が出土していないことから除外している。

ＳＸ１は独立して存在し、台状部の面積は約28m²と大型である。ＳＸ２～５は近接しているとはいえ周溝は重複することなく、相互にその存在を認識した上で規則的な周溝の配置がみられるが、形成の順序は明確にしえなかった。台状部の面積はＳＸ５が約28m²と大型で、他は20～24m²と小型である。これまで、県内における弥生時代の方形周溝墓は、16遺跡で46例が確認され[(2)]、中期中頃の東庄内Ｂ遺跡の４基中の２基が最も古いものであった。当遺跡のＳＸ１は周溝内から同時期の土器が少量出土しているの

で、平野部の集落にあっても方形周溝墓の形成が時期的に併行することが明らかになった。

さて、これら5基の方形周溝墓は全て東群に偏在しているが、住居址と隔絶した地域をとくに占地しているとは考え難い。ただ、東群に偏在する事実は、住居址の構成にみられた「単位集団」における格差を反映したものと考えることも可能であろう。[3]

○土坑墓

土坑墓については、墓地と断定する肝心の人骨が全く遺存していないため、供献用と思われる完形土器群や穿孔をもつ土器の有無を判定の基準としたが、これらの土坑に形態が類似する土坑は調査地域全体に散在している。さらに、土坑墓として報告した土坑の中には、あるいは墓地でないものも含まれている惧れもある。このような条件の下で、分布を論じることは誤りが生じるかもしれないが、以下簡単に述べることにしたい。

土坑墓についても、中期中頃から中期後半にかけて時期差が認められるが、上述の条件を加味すると東西両群において数量的な格差はほとんど認められないようである。ただ、中期中頃では住居址に比較的近接して形成されるという共通した特徴があるのに対して、中期中頃から後半には住居址からやや離れた地域に偏在する傾向が指摘できそうである。ただ、東群の土坑墓には、碧玉製と思われる管玉が出土する例もあり(ＳＫ12)、竪穴住居址（ＳＢ15）や、土坑（Ｊ地区）からも管玉が出土しており、いずれも中期中頃に属している。この時期におけるこれら玉類の保有が東群に偏在することは、上述した竪穴住居址や方形周溝墓における格差と併せて、西群に対する東群の格差の実態を、あるいは西群に対する東群の優勢さを示すものといい換えられるかもしれない。ただ、同時期の玉類はＢ地区を貫流するＳＤ９内から管玉１点、中期後半のＳＢ６の堆積土から管玉１点の他、中期の土坑（Ｂ地区）からガラス玉１点が出土しており、玉類の保有のみで両群の格差を積極的に論じることはできない。あくまで、方形周溝墓の有無が一つの基準とみなしうるであろう。

○大型の溝址

中期前半から中期後半にかけて、Ｇ・Ｈ地区に相次いで大型の溝址が集中して形成されている。そのうちＨ地区のＳＤ14の下部に重複して南流する自然流水路は、中期前半から中頃における遺跡の東端を画しているものである。その埋没後、この地域は一貫して溝址が集中し、２基の土坑墓（ＳＫ５、６）が形成されることと、若干の中期前半の土坑が存在する程度で住居址は全く形成されていない。これらを反映するかのごとく、石製遺物の分布も他地区に比較して激減している。さて、これら溝址の集中は、この地域で当遺跡の東側を画するためであることと思われるが、幅約２～４ｍで、深さ約50～60cmである。溝内の堆積層からみても常に滞水していたとは思われないが、溝の片側に残土を盛り上げれば防禦的な機能は充分果しうるものである。調査地域外の南北両側にどの程度延長するものであるかは不明にしても、中期後半を中心とする時期に集中して形成される大型の溝址を、防禦的な環濠の一部とみることも可能である。県内の他遺跡における集落を画する溝址の類別は、現在のところ前期の永井遺跡・大谷遺跡で検出されているのみであるが、ともに舌状の丘陵上に集落が占地されている。平野部の集落では他に類例がなく、納所遺跡が安濃川流域を擁した前期以来のいわば拠点的集落としての性格上、中期後半の凹線文土器の広範な分布を背景としたゆるやかな戦闘状態の過程で、[4]防禦的な環濠の形成が集落をあげての共同作業として頻繁に行なわれていたのであろう。まさにこの中期後半において、安濃川流域に竹川遺跡・亀井遺跡・辻の内遺跡・北端遺跡などの小遺跡が形成されだしていく。これら小遺跡の形成は、納所遺跡からの分村の結果と考えられるが、住居址や墓地については全く不明である。納所遺跡においては、この時期に住居址の大型化がみられ、「単位集団」ごとの成長を窺わしめるが、おそらく人口の自然増加や生産物の需要と供給のバランスが「単位集団」間の優劣を前代に比して一層促進することにより、弱小な「単位集団」の分村として表出していったものであろう。

(2) 周辺遺跡との関連

弥生時代後期の遺構は、調査地域内でも西群に若

干の土坑が存在するにすぎない。A地区の自然流水路からは後期から古墳時代前期にかけての多量の土器が出土しているが、この時期の遺構の欠如は、とりもなおさず拠点的集落としての分解を暗示している。それと同時に、中期後半から微増し始めた周辺の小遺跡が、安濃川左岸のとりわけ美濃屋川流域に爆発的に増加していく。大御堂遺跡・竹川遺跡・市場遺跡・宮代遺跡・森山東遺跡・コウゼンジ遺跡・森山遺跡・桐山遺跡・清水遺跡・松ノ木遺跡・養老遺跡がそれである。安濃川右岸においても前・中期以来の小規模な丘陵上の上村遺跡が後期にも引き続くが、柳谷遺跡・大ヶ瀬遺跡・平栄遺跡・宮前遺跡・高松A・B遺跡などの諸遺跡が形成され出していく。これらの諸遺跡は低台地や丘陵上部と小河川流域の平地に占地し、狭小な谷水田を可耕地として成立しているが、以後古墳時代を通して継続し、なかには古代・中世まで連綿として継続する遺跡もある。とりわけ美濃屋川流域における小遺跡の形成は、納所遺跡の分解と表裏をなしており、おそらく全国的に進行していた鉄製農耕具の普及による水田経営の低湿地からの脱脚が最大の要因であったと思われる。弥生時代の低湿地を背景とした水田経営を基盤として形成された集落において、灌漑、排水やその他の土木事業に集落構成員全体の共同参加が必然的に要求され、余剰生産物をめぐる確執を経て「単位集団」間で階層分化が生じて階級が発生していくと考えられている。上述のごとく、こうした過程は弥生時代中期における納所遺跡の消長にも認められるが、後期における拠点的集落の分解と小遺跡の出現について明確な展望を与えることは難しい。ただ、すくなくとも美濃屋川という同一水系に占地しているとはいえ、鉄製農耕具の普及による水田経営形態の変質による乾田化した谷水田経営にとって、前代の共同作業の枠をはるかに縮少した規模でもってしても経営が可能であったことが想定される。おそらく、そこでは前代の拠点的集落で形成されていた「単位集団」間の格差は急激に縮少されていき、均質化したゆるやかな統合関係が個々の集落間に維持されていったものであろう。

上述のごとく納所遺跡における後期の住居址は不明であるが、美濃屋川流域の北端遺跡での中期末頃の類例（ＳＢ１）では、面積約42m²であり、辻の内遺跡の中期末から後期にかけてのＳＢ１は約24m²、後期末から古墳時代前期のＳＢ２では約23m²で、いずれも床面に周溝をもち方形を呈している。安濃川右岸では、後期前半の柳谷遺跡・大ヶ瀬遺跡・平栄遺跡においても、大半が周溝をもつ方形の竪穴住居址が12棟確認されており、一部に拡張がみられるが、面積約15～35m²（平均面積約26m²）と小型である。

これらの各遺跡間で、住居址の規模に多少の差はみられるが、中期後半から住居址が小型化する背景には、一時的ではあるが「単位集団」内の格差の縮少とともに、「単位集団」間の格差の縮少をも示しているようである。後期においても、一集落(遺跡)が複数の「単位集団」で構成される場合があり、西ヶ広遺跡・半田高松C遺跡・地蔵僧遺跡など丘陵斜面や台地上に占地する類例が多い。後期における納所遺跡の分解に伴なって新らたに形成されていく美濃屋流域の個々の小遺跡が、どの程度の住居址数で構成されていたかはほとんど不明である。おそらく数個の「単位集団」で構成されていたと想定されるが、安濃川左岸の小遺跡群にあっても高松遺跡を除けば同程度の構成であったと思われる。しかしながら、後期初頭の丘陵上の小集落を背景として、高松遺跡[5]や大ヶ瀬遺跡[6]の丘陵頂部に方形台状墓が形成されている。現在のところ、時期的に後期初頭に限定されているが、その成立に当っては、一時的に縮少されつつあった「単位集団」間の格差を破る一部の「単位集団」内の家父長層の前代からの優勢さの遺制が推定されよう。平地と丘陵との立地の相違がみられるとはいえ、これらの方形台状墓と方形周溝墓の間に、規模、副葬品、供献土器の上にほとんど質的な差を認めることはできない。

瀬戸内・近畿地方とは異り、伊勢湾西岸地域においては弥生時代中期から後期を通じて卓越した高地性集落は形成されていない。ただ、後期においては上野盆地西南の名張川流域の丘陵上と鈴鹿市北部の鈴鹿川流域の台地上に小規模な遺跡が増加するが、後者の場合は平野部にも多数の遺跡が存在している。両地域はともに畿内と尾張へ通じる要衝の地でありながら、戦闘に備えた防禦的な高地性集落としての発達はほとんどみられず、平野部の遺跡においても

防禦的な環濠集落は形成されていない。これらについて将来発見される可能性もあるが、こうした要衝の地からやや離れた安濃川流域においても２～３世紀の交における諸遺跡の動向を通して、この時期の西日本を中心とした古墳成立前野の緊張の過程に、主体的に対応していったとは考えられない。現在、安濃川流域では２個の銅鐸が出土しているが、それらの位置づけについてもなお不明な点が多く、その解明を含めて将来に問題を残しているといえよう。[7]

3) 古墳時代以後

弥生時代後期に分解した納所遺跡は、それ以後の遺構は急激に減少する。Ａ地区の自然流水路、Ｊ地区最南端の自然流水路の一部、Ｈ地区のＳＤ14の上部堆積層において、古墳時代前期の遺物が出土しているが、全て攪乱されており、Ａ地区の自然流水路出土の建築部材などもあるいは奈良時代に属する可能性もある。昭和51年に実施した範囲確認調査において、古墳時代以後の遺物包含層の分布は、東西約560ｍ、南北約500ｍ、面積約280,000㎡にわたり、弥生時代の遺物包含層の約２倍に及んでいることを確認した。遺物は須恵器、土師器、円筒埴輪、灰釉陶器、山茶椀の小破片ばかりであったが、それらの包含層（灰褐色砂質土）は全体に褐色のマンガン粒が沈着し、長期にわたって乾田ないし畑地であったことが想定される。古墳時代の住居址は調査地域内で確認していないが、Ｈ地区の最上層で１棟のみ確認した掘立柱建物址（ＳＢ16）も、周辺に散在する土坑からほぼ平安時代のものと思われる。

安濃川流域の沖積平野のほとんどが、古墳時代後期頃にほぼ開拓されたと考えられている[8]が、古墳時代以降の集落の実態はなお不明な点が多い。第Ⅱ章で略述したごとく、安濃川流域における古墳時代以降の歴史的変遷は、大小の古墳と古墳群とそれらを形成した諸集落の有機的な関係の解明に待つ点が多く、奈良時代以後についても将来の調査の進展が期待されるところである。

註

(1) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』６－１ 1959

(2) 小玉道明「三重県の調査例」『日本考古学協会第40回大会研究発表要旨』 1974
山岸良二「一方形周溝墓研究その３「研究史編」中一」『原始墓制研究３』 1975
同　上「三重県の方形周溝墓」『三重考古』創刊号 1975

(3) 伊藤禎樹「伊勢湾地方の弥生時代の集落」『考古学雑誌』59－３　1973

(4) 春成秀爾「倭国乱」の歴史的意義」『日本史を学ぶ』１ 1975
都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20－４　1975

(5) 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会 1970

(6) 伊藤久嗣・谷本鋭次『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告』Ⅰ　三重県教育委員会　1973

(7) 伊藤久嗣「三重県における弥生時代の諸問題」『三重考古』第２号　1978

(8) 伊藤克幸『安芸郡安濃村・辻の内遺跡 一付一北端遺跡』安濃町教育委員会　1975

V 結　語

三重県における弥生時代の遺跡は、現在約300箇所であり、なかでも納所遺跡は安濃川流域の標高約5mの自然堤防上に形成された面積約450,000m²の三重県最大の大型集落である。時期的には弥生時代前期から古墳時代を経て室町時代に至る複合遺跡であり、今回の調査では主として弥生時代前期から中期後半にかけての遺構が上下の2面において多数確認された。遺構は、弥生時代前期の自然流水路(埋積浅谷)の埋没した後も旧地形の制約を受けた多数の溝址が形成されるが、弥生時代中期には遺跡の東側に防禦的な環濠が集中して形成されている。今回の調査範囲は、弥生・古墳時代以降の遺物包含層が分布する範囲の約20分の1の面積であったが、竪穴住居址、方形周溝墓、土坑墓などがほぼ東西2群に分けられ、弥生時代中期の集落構成の一斑を垣間みることができた。当地方における弥生時代の集落構成の復元は緒についたばかりであるが、納所遺跡の集落構成は今後県内各地域の調査と研究に基礎的な資料を与えることとなろう。

多量の出土遺物は各時期にわたり、種類も豊富である。土器については、弥生時代前期の各段階で、尾張・三河地方における縄文時代晩期の土器との対応関係が確認されるとともに、この時期の地方色成立の実態解明に一つの見通しを与えることができた。弥生時代中期から古墳時代にかけての形式分類と編年については、自然流水路、溝址出土という資料上の制約があるにしても、研究が先行している畿内と尾張・三河地方との対応関係をいちおう設定することができた。なお、古墳時代前期の編年については不充分な点もあり、将来さらに詳細な検討を必要とすることを断っておきたい。

とりわけ、手焙型土器に描かれた文様ついては、奈良県纒向遺跡の弧文円板を通らない原単位系の直弧文であるとのことであり、当地方の独自性を示している。しかしながら、古墳成立前夜における畿内と伊勢湾西岸地域との文物の交流は、その足跡を明確に遺跡に留めてはいないにしろ着々と進行していたのであり、土器に表出した地方色の実態をさらに追究する必要があろう。その意味からも、畿内と伊勢沿西岸地域の中間に位置する上野盆地における調査研究の深化が待たれるものである。

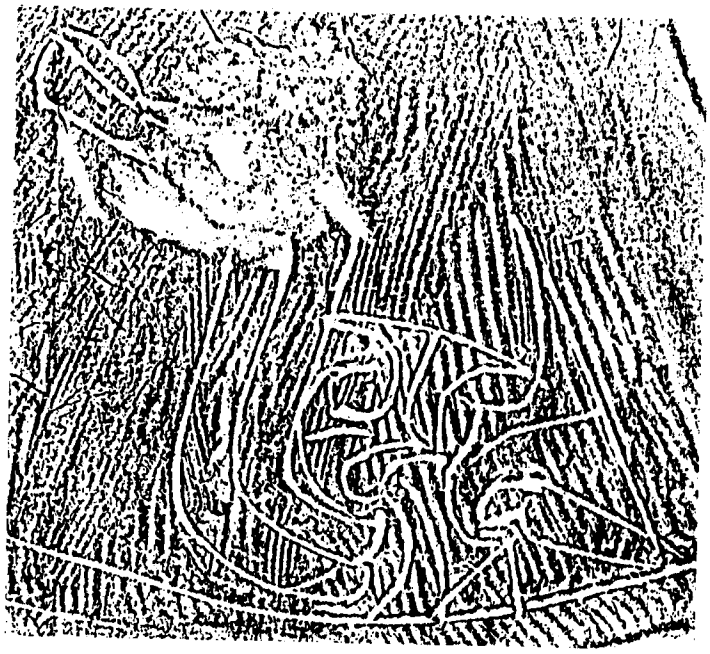
木製遺物のうち、「琴型木製遺物」は従来全く知見になかったものである。我国の原始古代における音の世界はなお暗冥の境にあるが、近年相次いで古代琴が発見され、音と人との織りなす世界に曙は近い。「納所琴」の解明も、他日にその類例の出土を期待するものである。

木製農工具の出土量も多い。当地方における初期稲作文化としての弥生時代農業の発展に、木製農具の変遷がどのように対応するかについての究明は、本書では全く触れるところがなかった。石製遺物の原材の獲得と生産と消費とも関連して、木製遺物の実態については今なお水田下に良好な状態で埋没していると想定される水田址の調査に待つところが多い。

今回の調査においては、自然科学的分野の調査を各機関に委託し、その成果は本書の分冊として刊行している。花粉分析による古地理環境の復元や、炭化米をはじめとする植物種子・実の同定、出土動物遺体の同定、石製遺物の材質鑑定の結果は、弥生時代から古墳時代における納所遺跡をめぐる自然と人間の動向が地理的にも広範囲にわたっていることを明瞭にした。

本書において、これらの自然科学的調査の成果を充分に踏まえることはできなかったが、いわば古伊勢湾文化の源流ともいうべき納所遺跡の概括的な位置づけは果しえたと考えるものである。

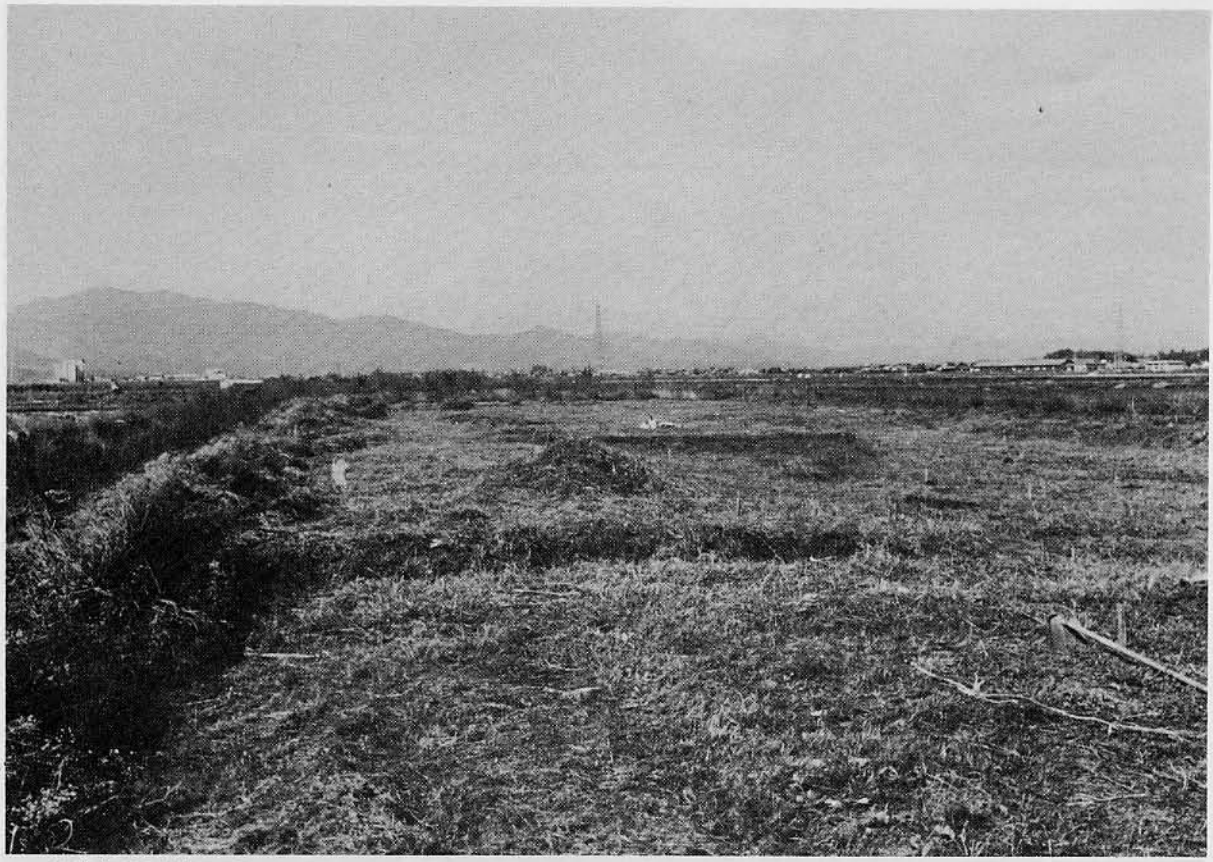
図　　版



手焙型土器の特殊文様（１：１）

図版 1

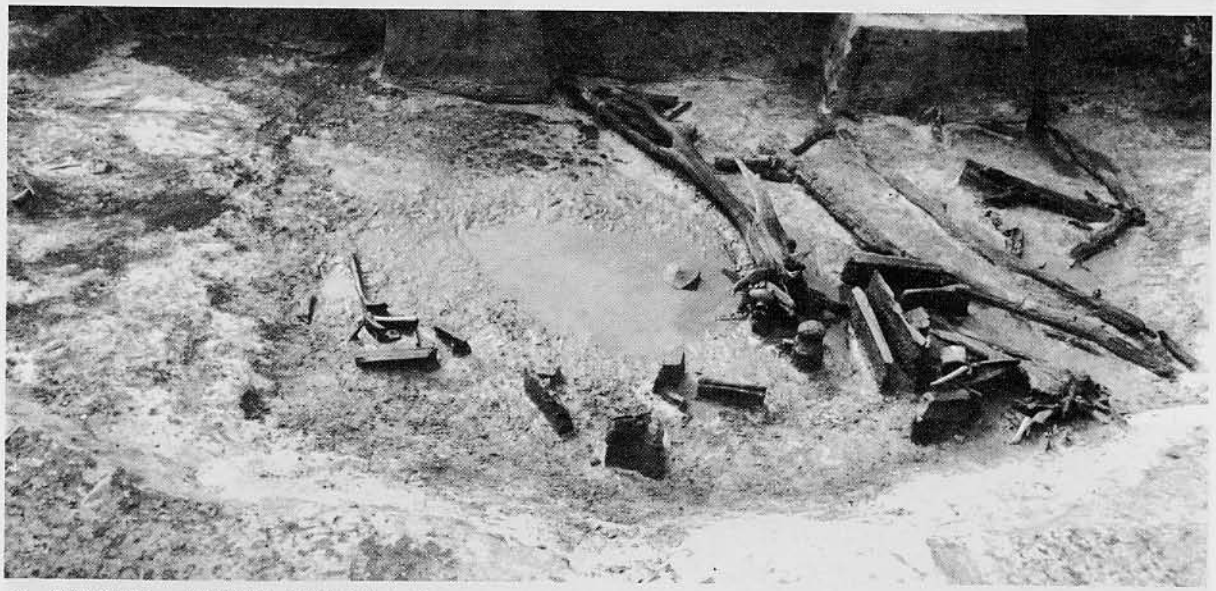
納所遺跡全景（西上空より・昭和46年）実線は調査地域、点線は遺跡範囲



１．調査前近景（東から）

２．調査中遠景　中央はＣ地区下層（西から）

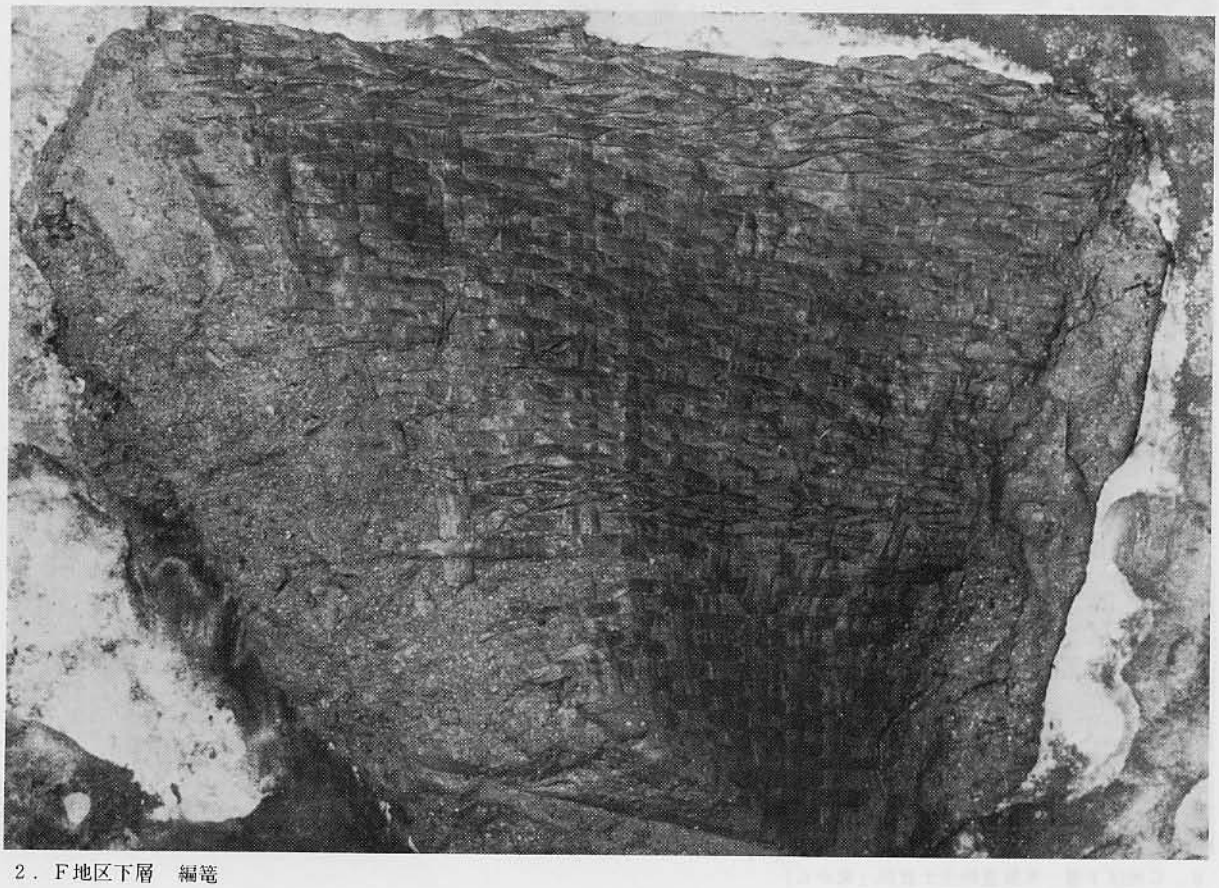
1．B地区下層　杭列（北から）



2．D地区下層　木製遺物出土状況（北から）

3．G地区下層　木製遺物出土状況（東から）

１．Ｂ地区下層　杭列出土状況（北から）



２．Ｆ地区下層　編篭

1．B地区下層　木製遺物出土状況（南から）

2．F地区下層　木製遺物出土状況（南から）

3．D地区下層　木製遺物出土状況（南から）

１．Ａ地区　全景（東から）

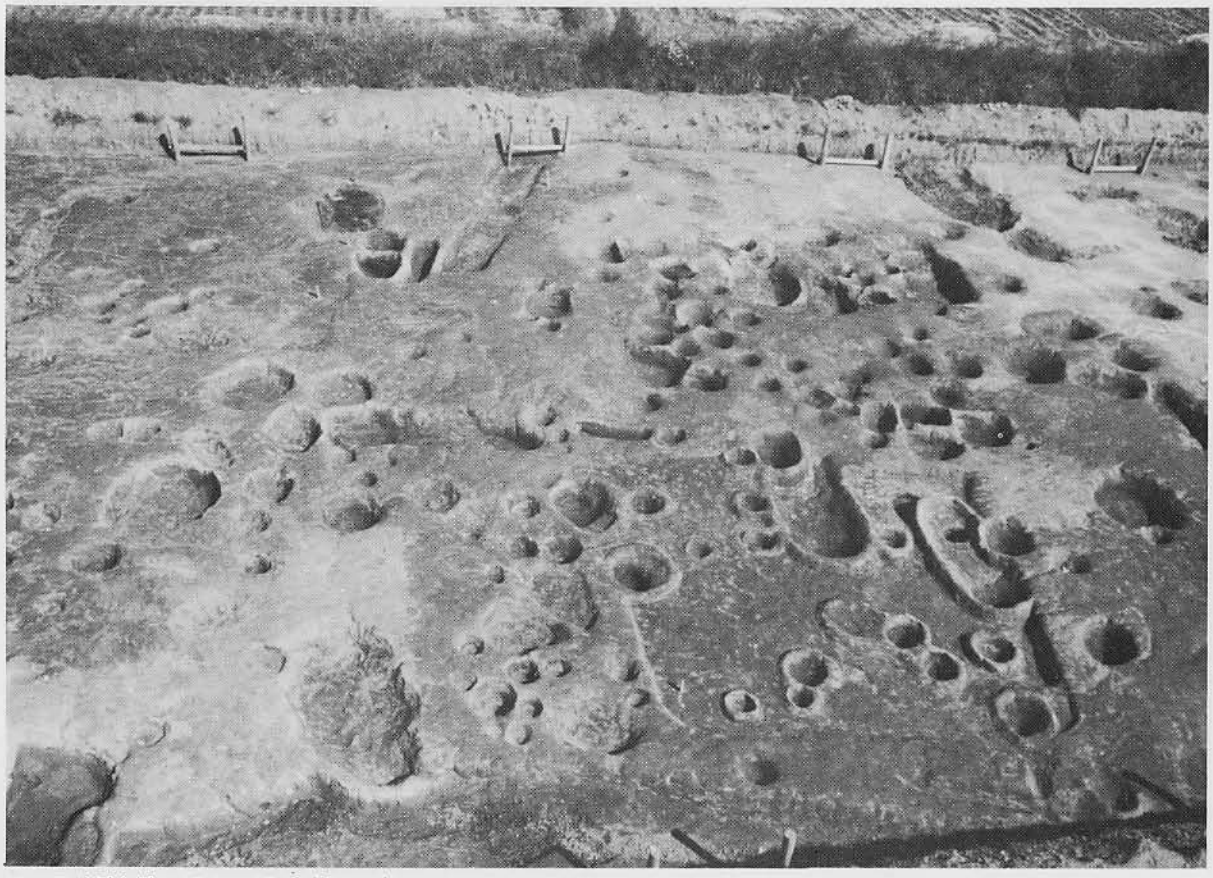
２．Ｂ地区上層　全景（西から）

１．Ｃ地区上層南側　ＳＤ８（西から）

２．Ｄ地区上層南側　ＳＤ８・ＳＢ６（東から）

1．C地区上層　SD8（東から）

2．C地区上層　左隅はSB4（西から）



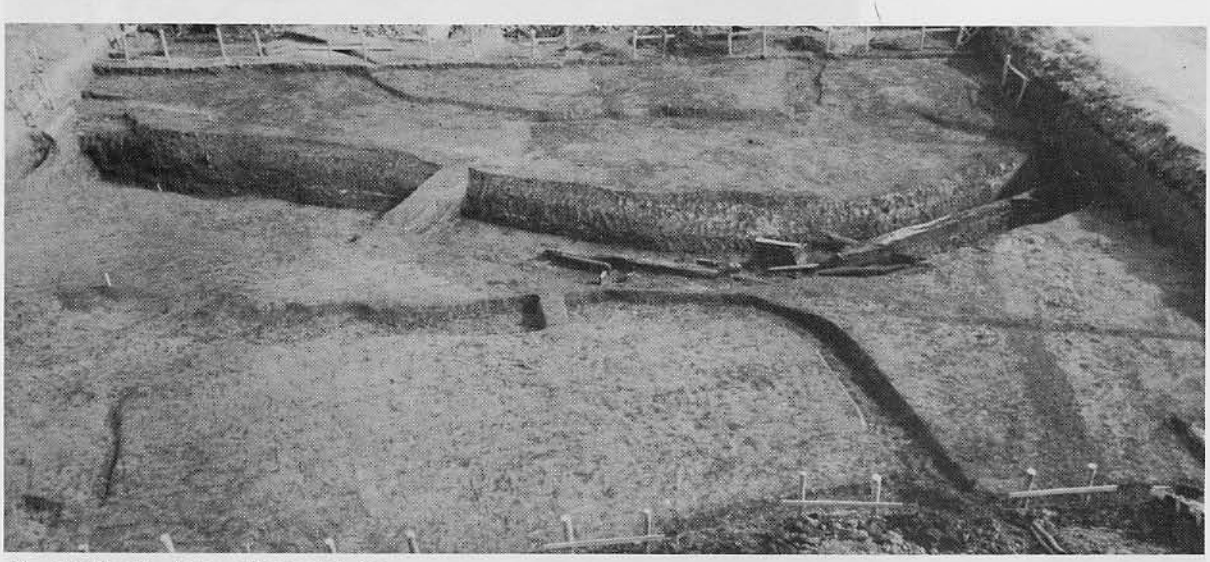
１．Ｂ地区上層　ＳＢ１・ＳＢ２（南から）

２．Ｄ地区上層　ＳＤ８（西から）

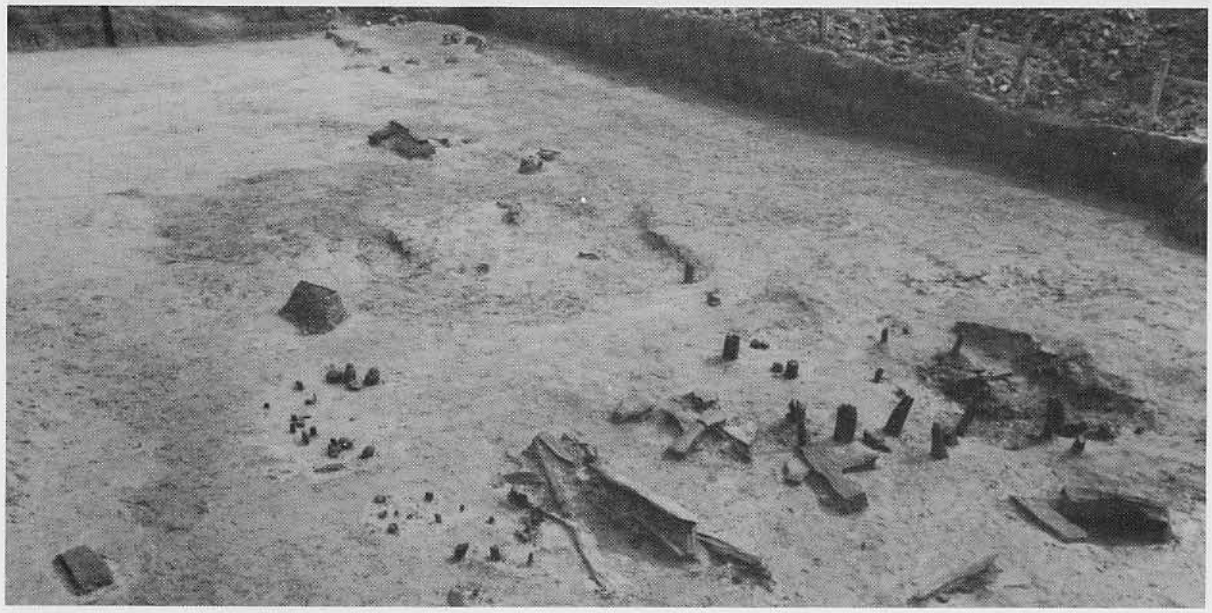
1．E地区上層　SX1（西から）

2．F地区上層　SB8・9、S×2～5（東から）

1．H地区最上層　全景（西から）



2．H地区上層　近景　SD13（西から）



3．H地区下層（西側）木製遺物出土状況（南から）

1．Ⅰ地区　全景（北から）

2．Ⅰ地区　近景　SD3・4（東から）

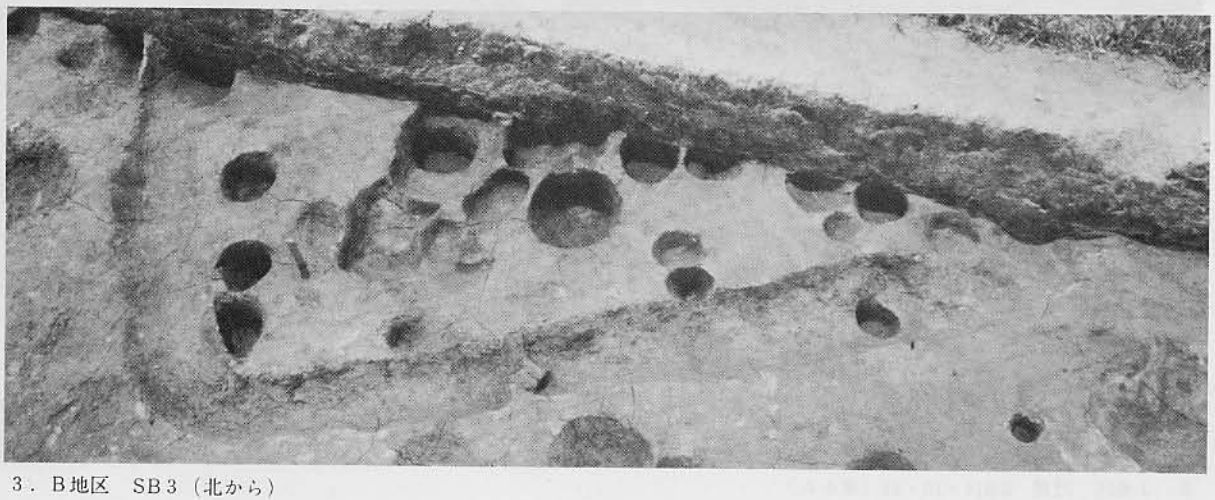
1．J地区　全景（南から）

2．J地区　近景（北から）

3．J地区　近景　SB14・13・12（東から）

1．B地区　SB1（南から）

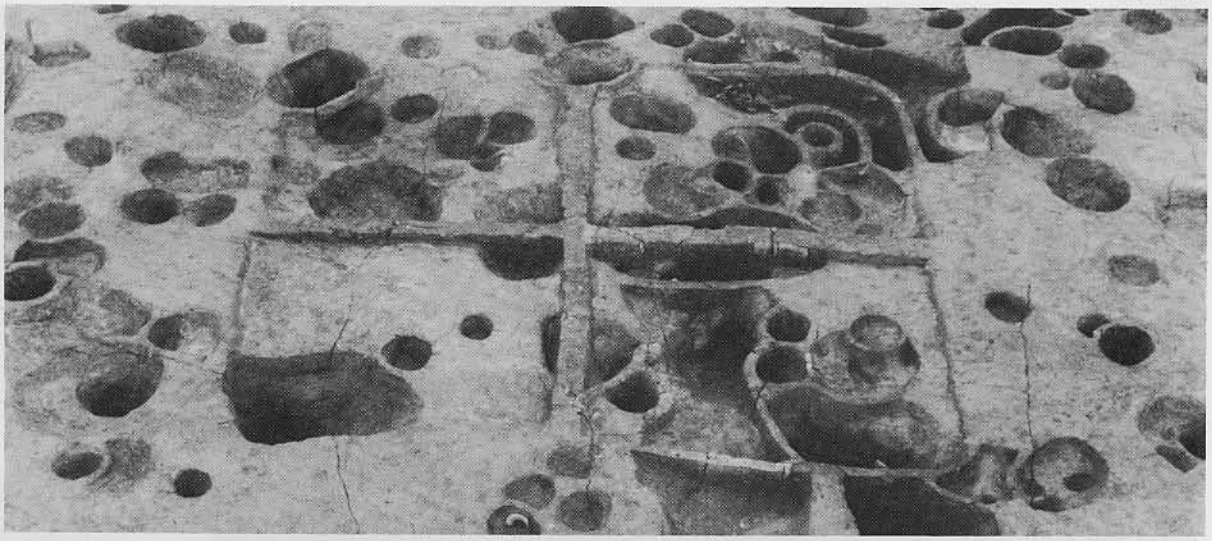
2．B地区　SB2（南から）



3．B地区　SB3（北から）

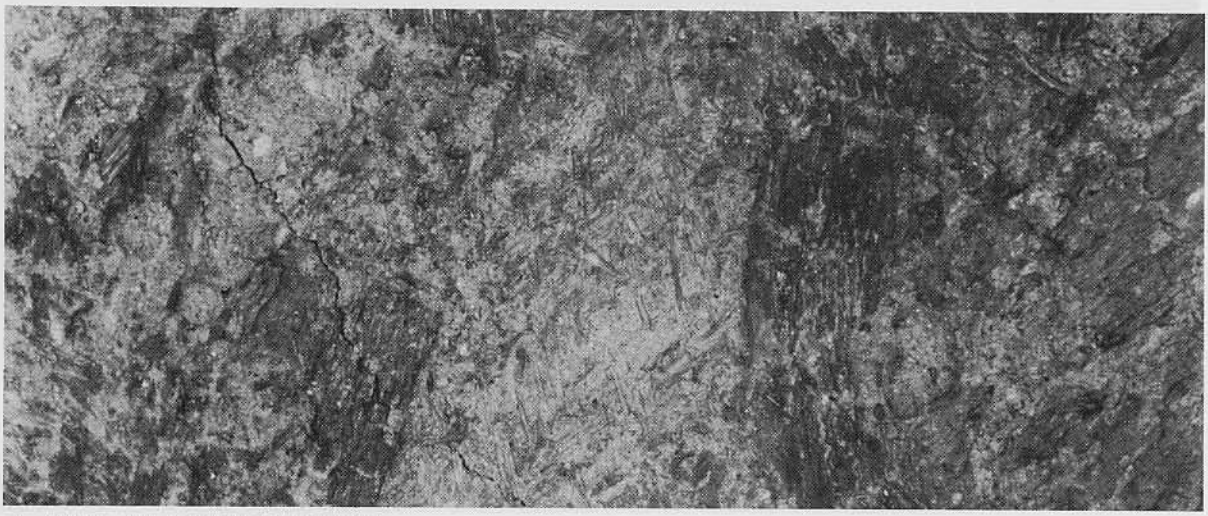
1．C～D地区　SB6の南側（西から）

2．F地区　SB8・9の北側（東から）



1．J地区　SB13（東から）

2．F地区　SB8内の土器群（南から）

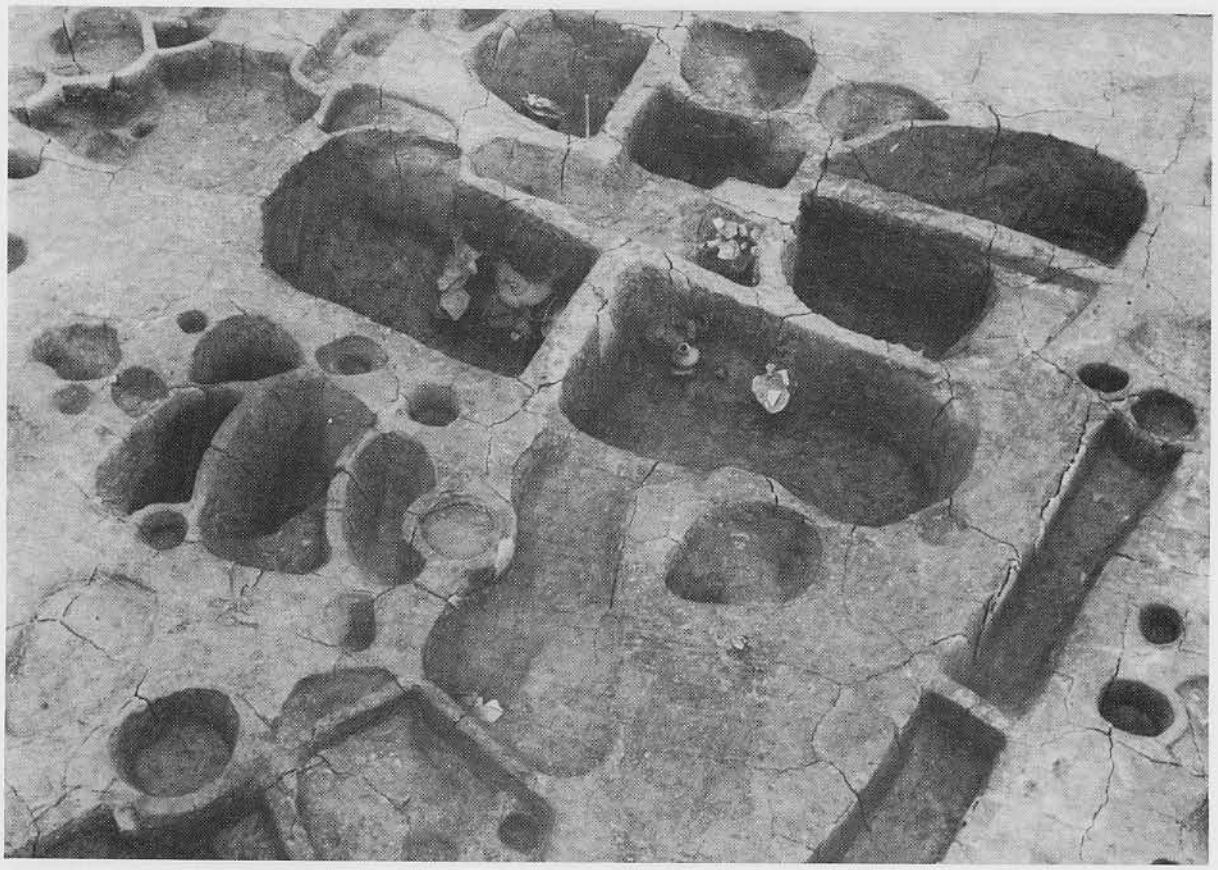


3．B地区　SB1東辺部の炭化材と網物

1．B地区　SK1（西から）

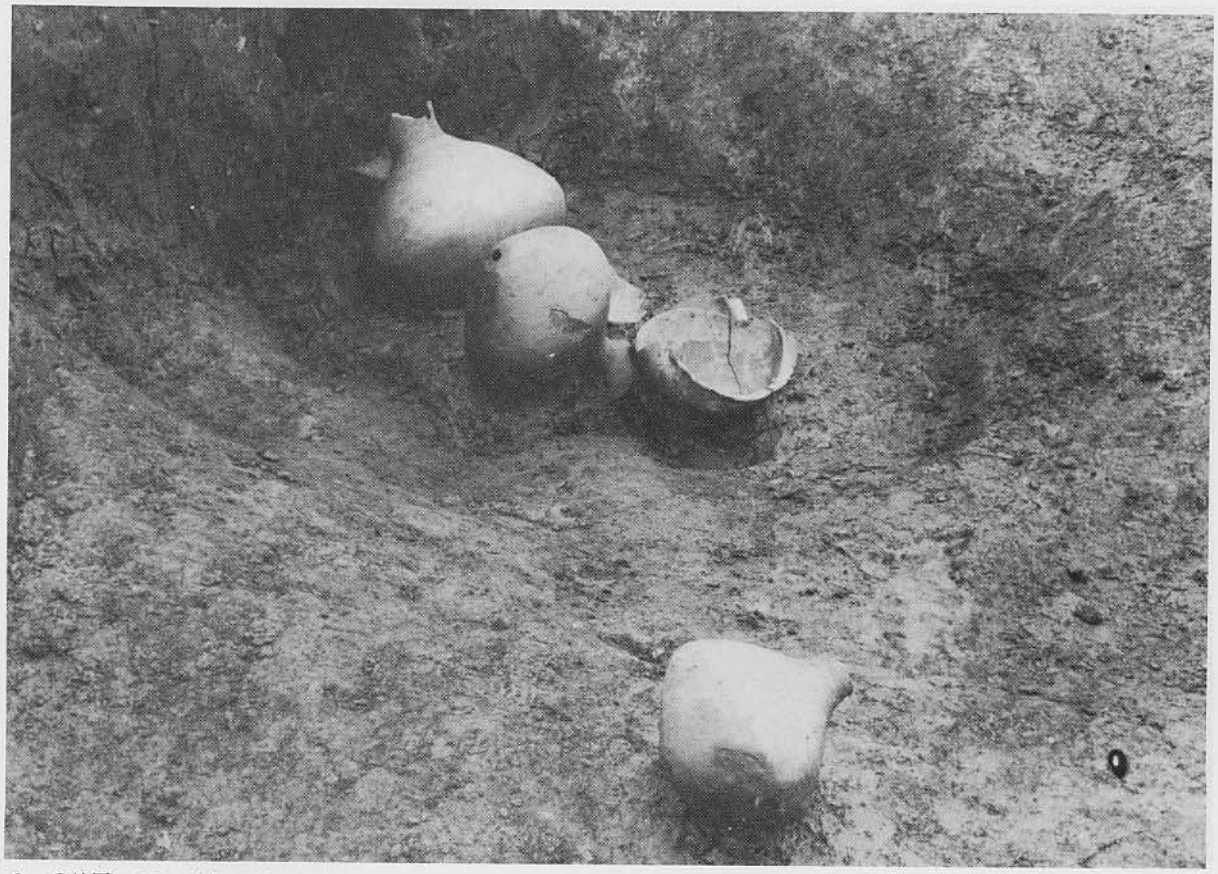
2．B地区　SK2（北から）

1．F地区　SK4（東から）



2．J地区　SK14（西から）

1．G地区　SK５（南から）



2．G地区　SK６（東から）

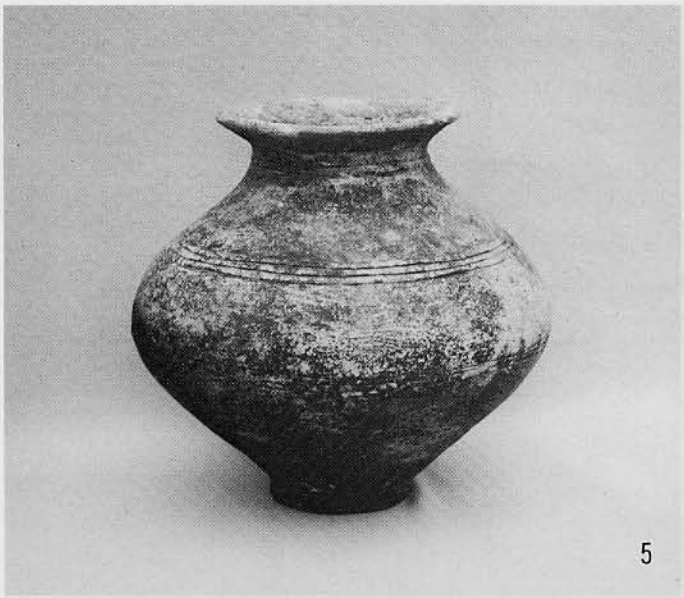
1．Ⅰ地区　SK11と土坑群

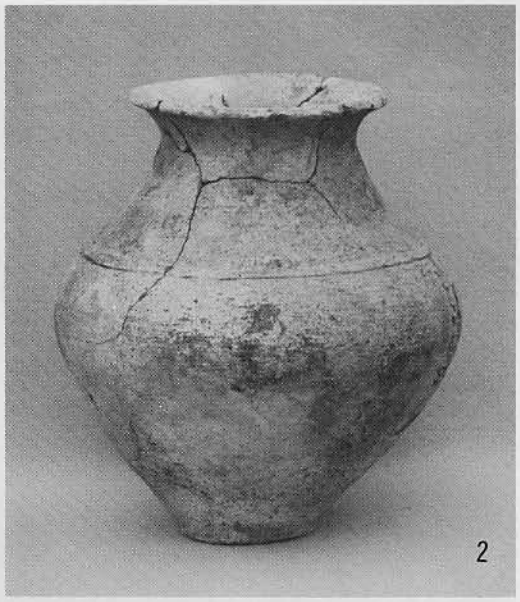
2．Ⅰ地区　SK10（西から）

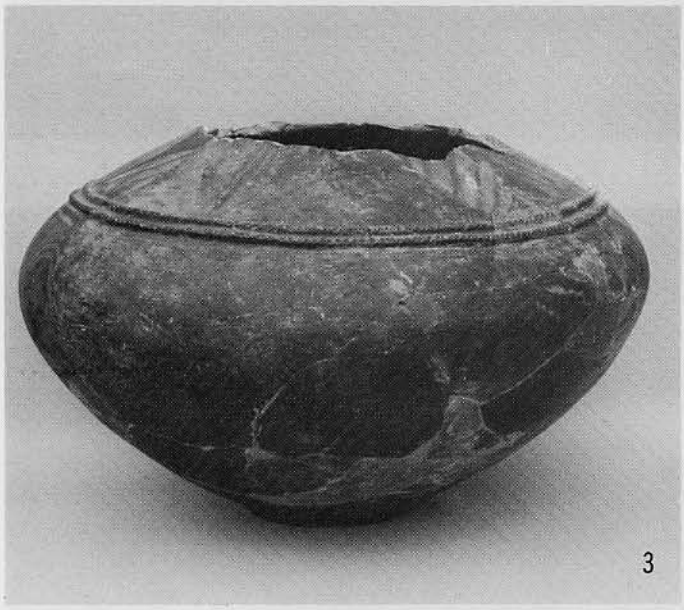
1．A地区　自然流水路の建築部材出土状況

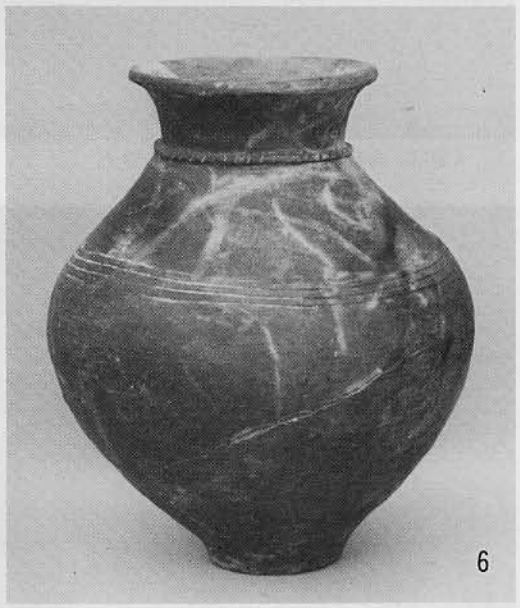
2．A地区　自然流水路の建築部材出土状況

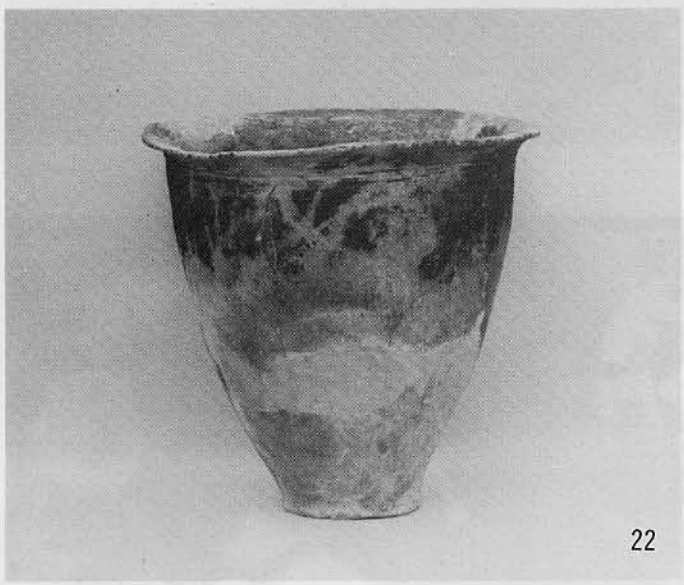
3．B地区　自然流水路の調査風景

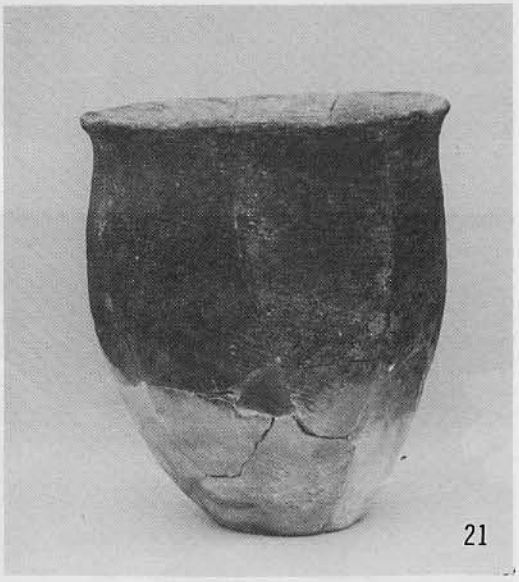




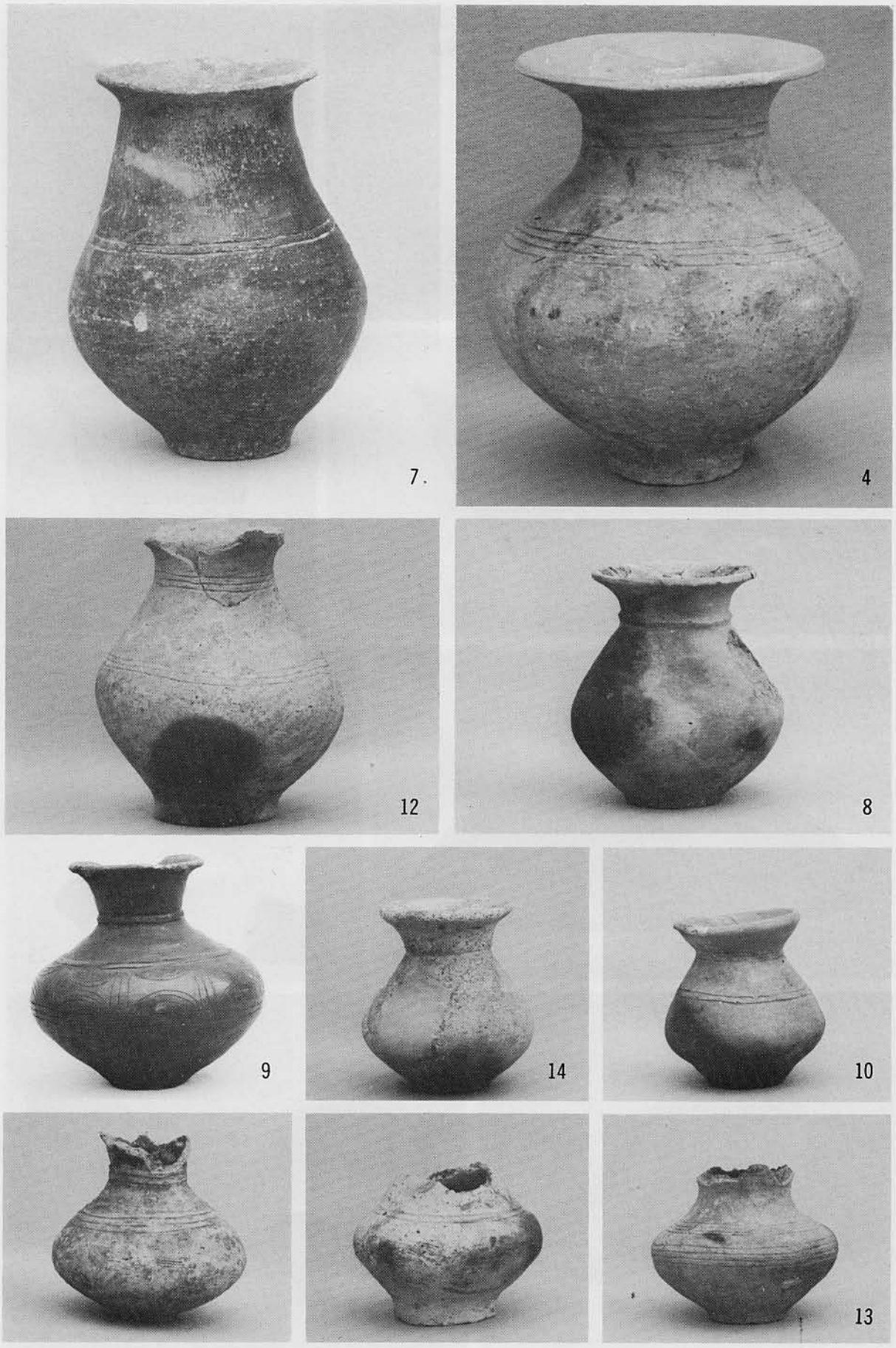






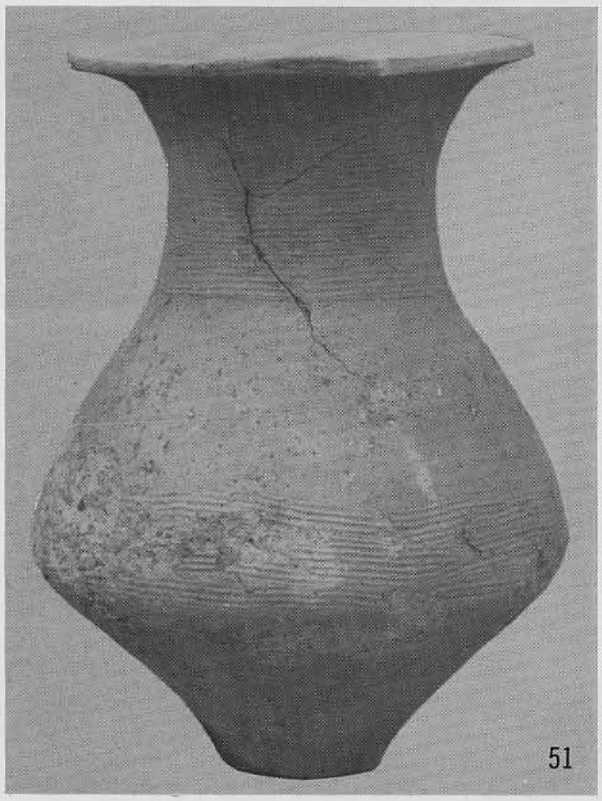


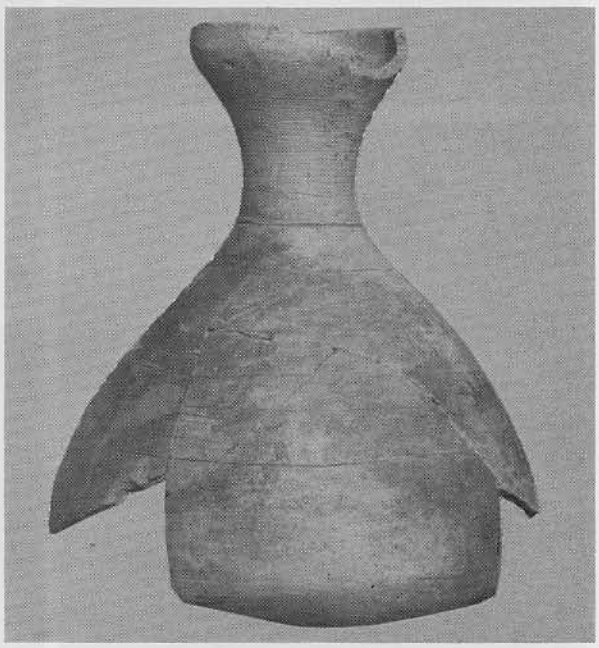
弥生土器　第1様式（1：5）

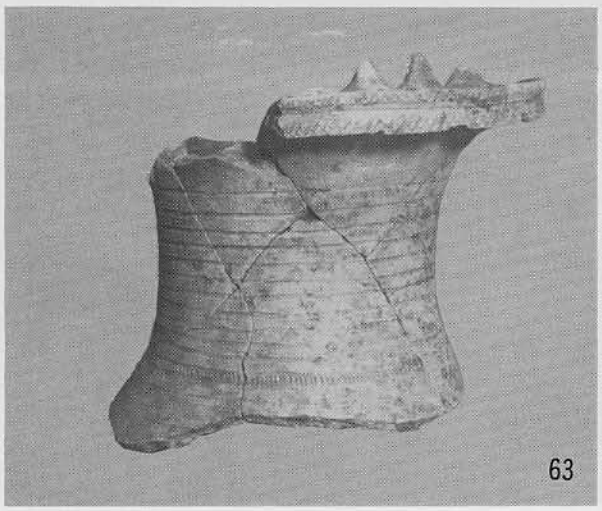


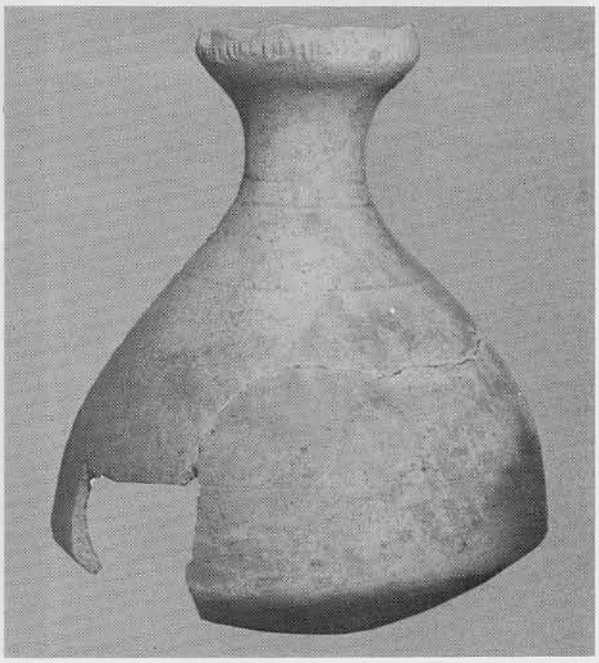
弥生土器　第1様式（1：3）

弥生土器　第１様式（１：３）

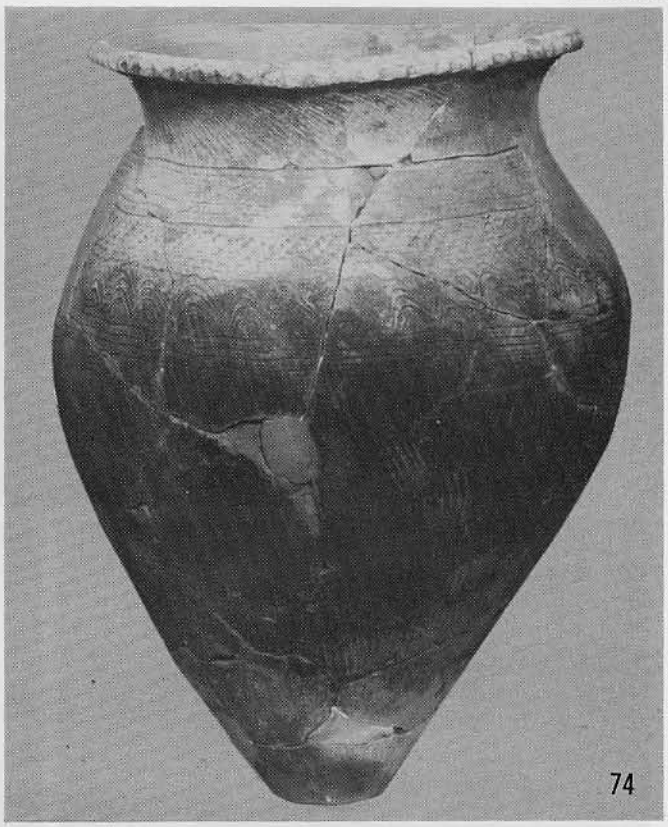


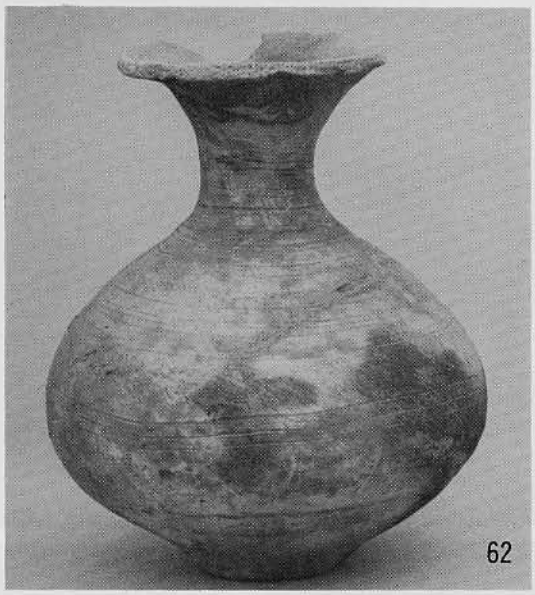


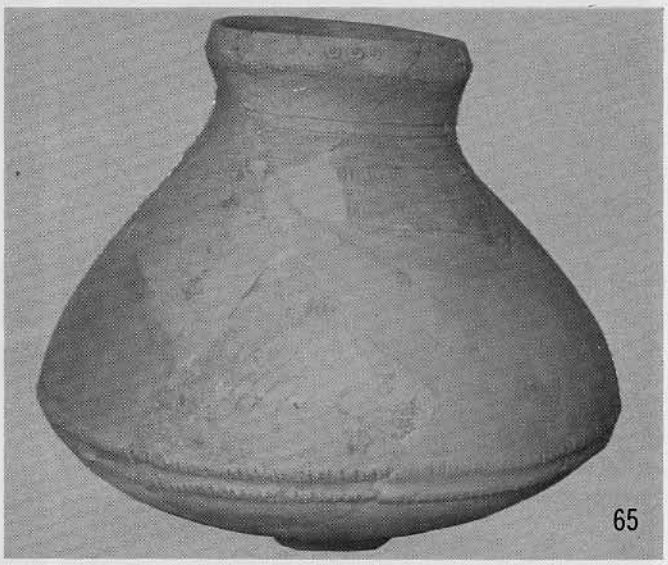


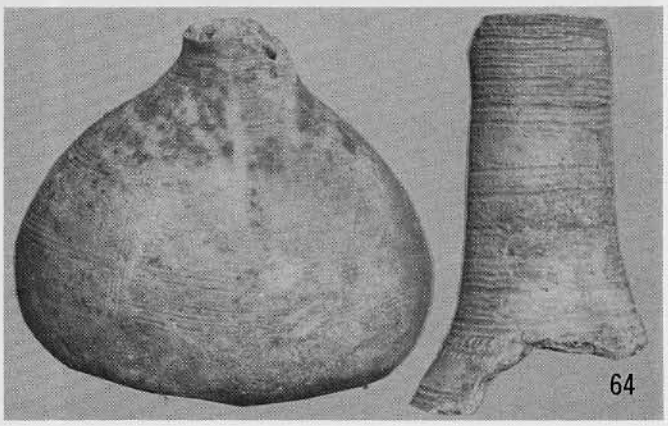


弥生土器　第１・２・３様式（１：３）

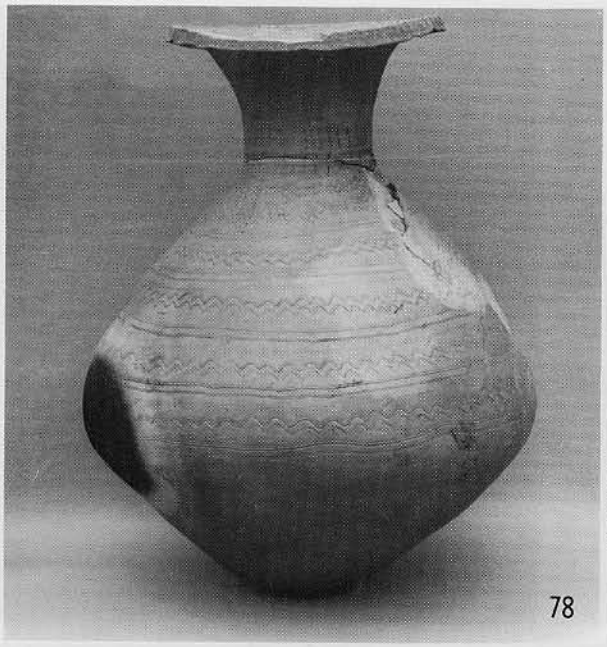


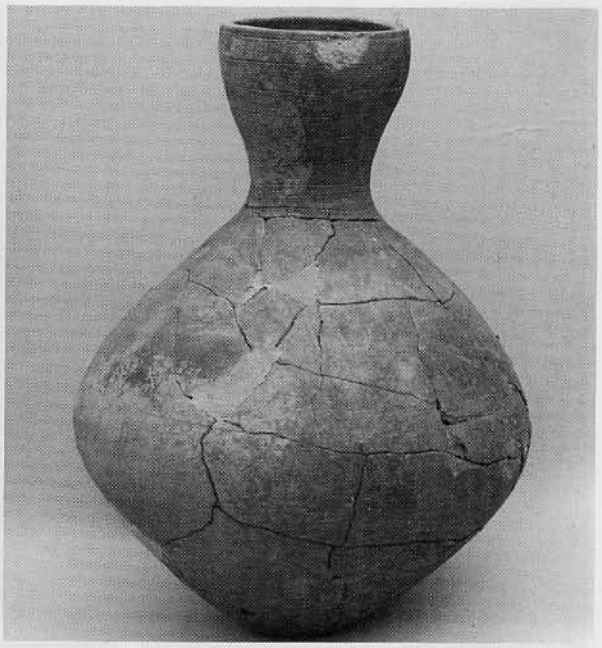


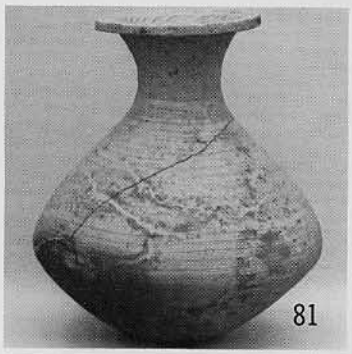


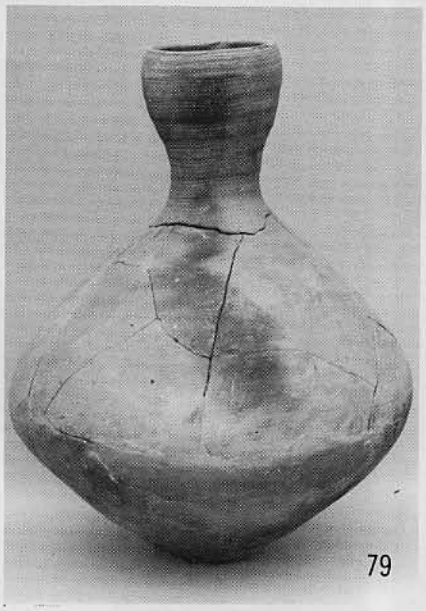


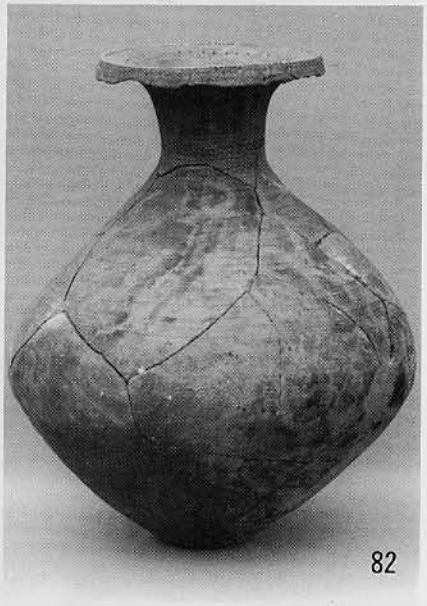
弥生土器　第３様式（１：３）

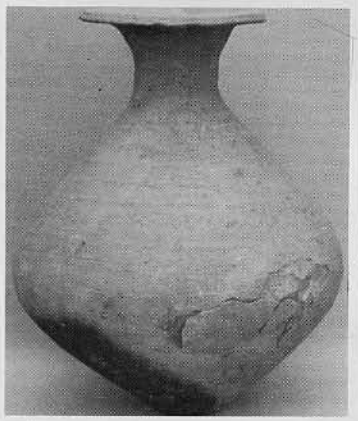


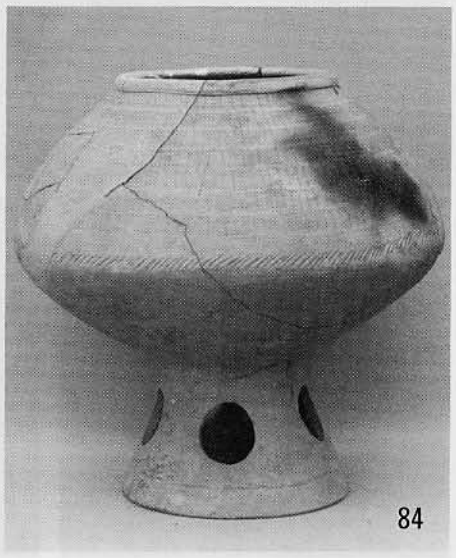




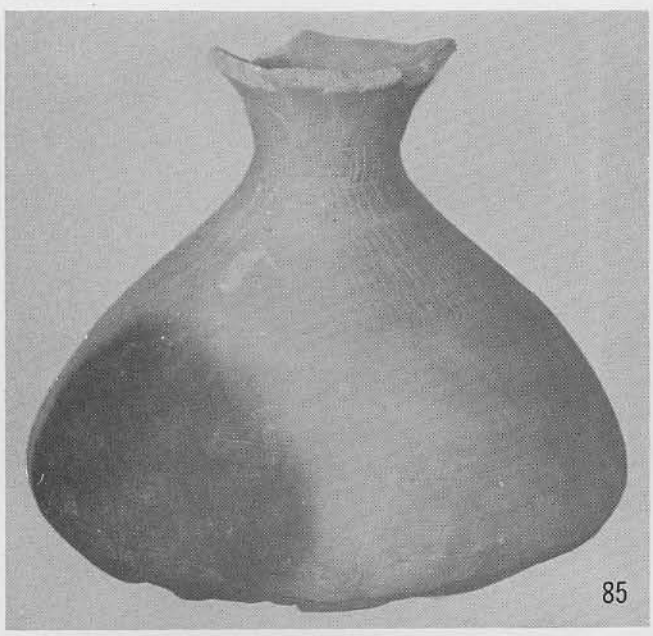


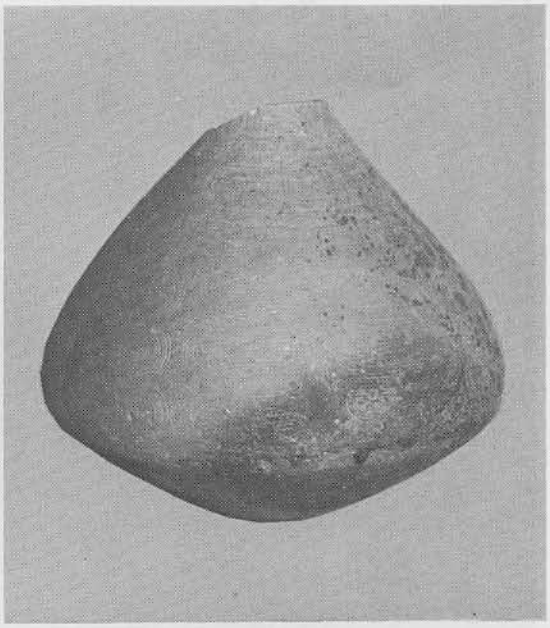


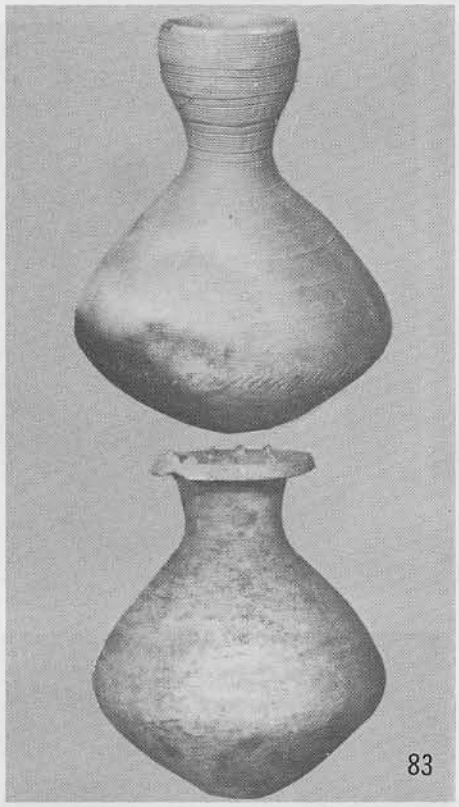


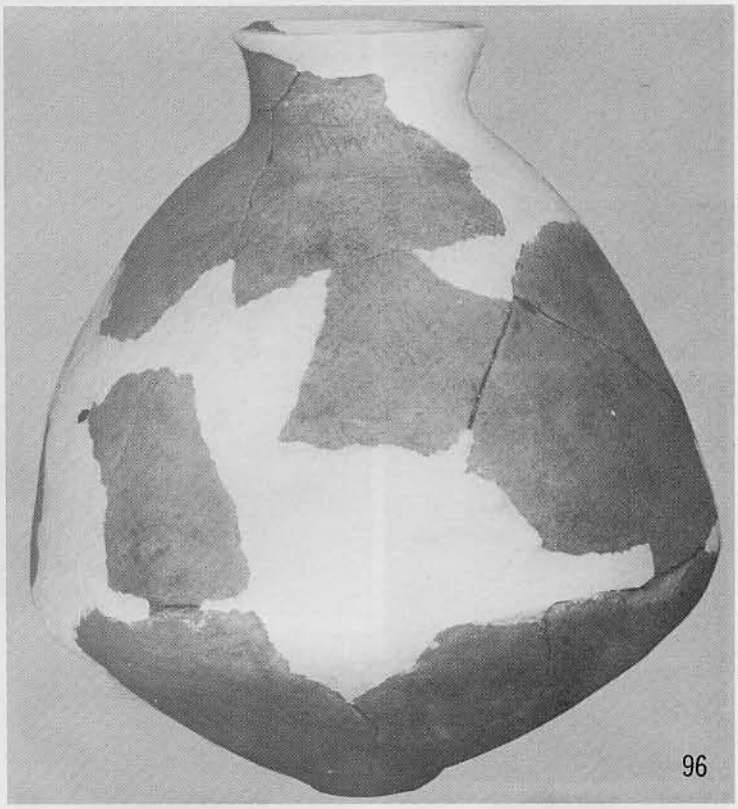


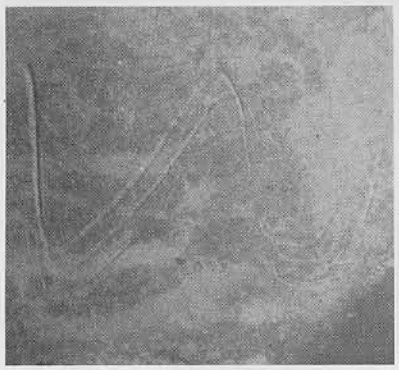
弥生土器　第３・４様式（１：６）

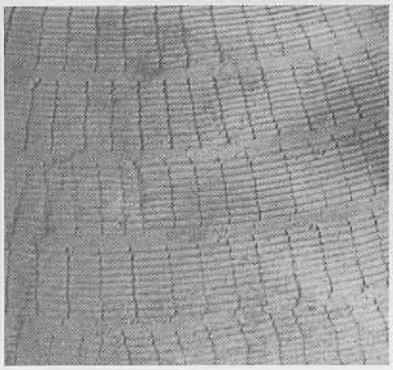


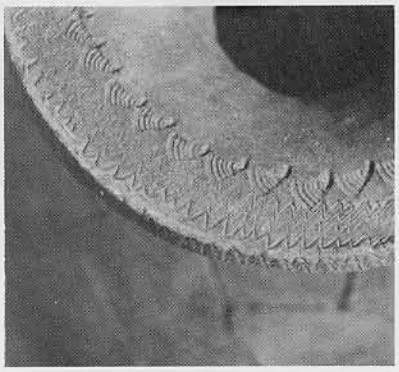




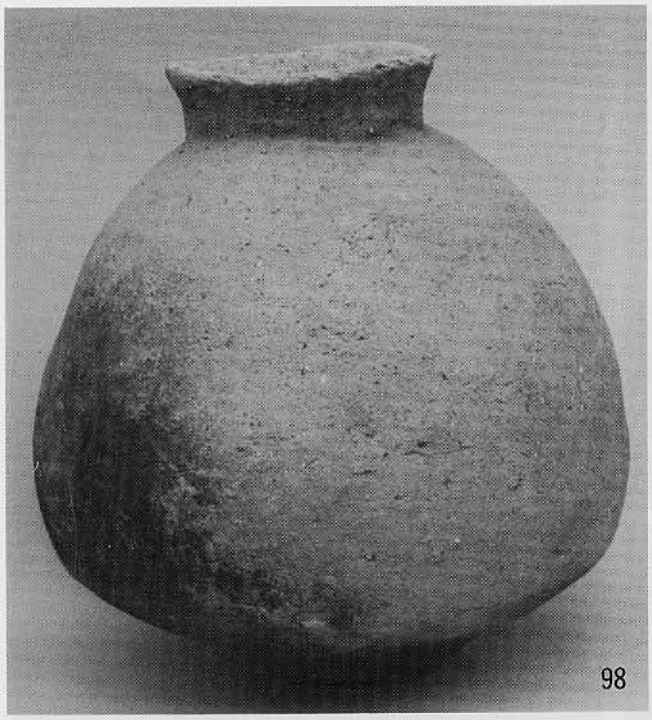


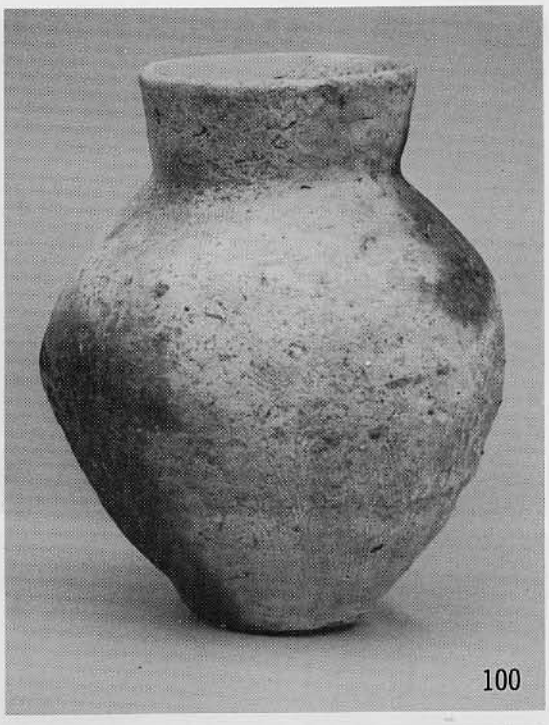


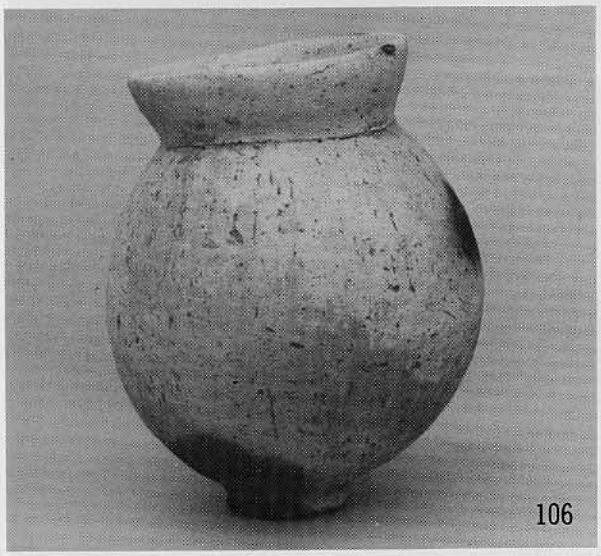


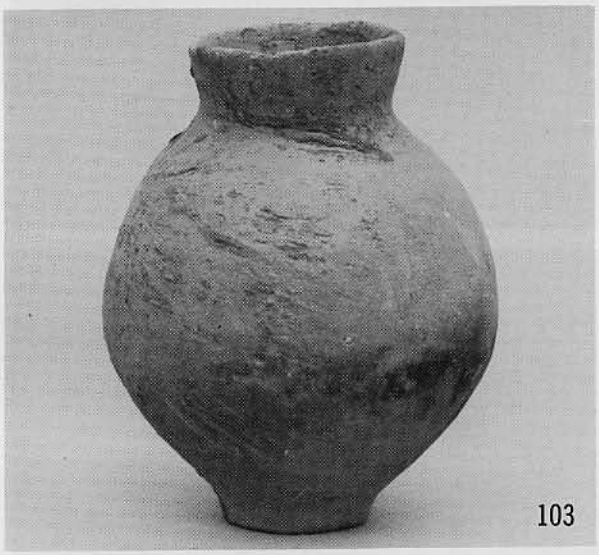


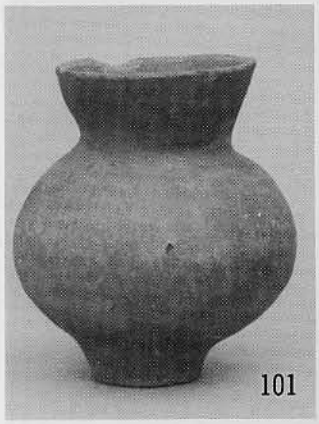
弥生土器　第３様式（１：３）下段は細部文様

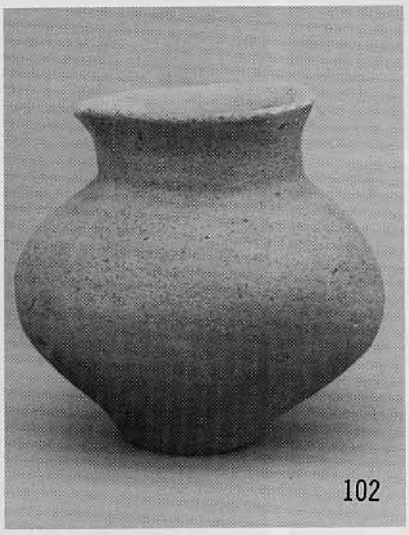


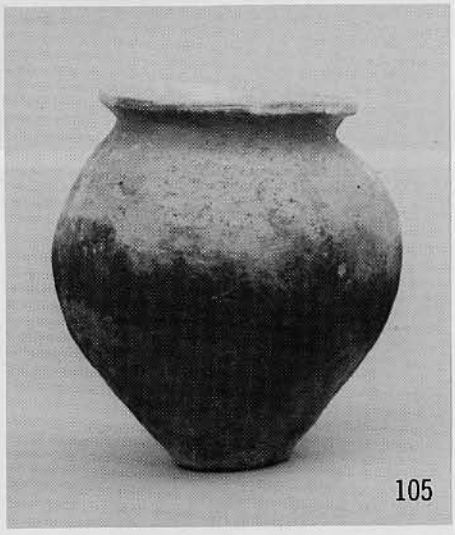




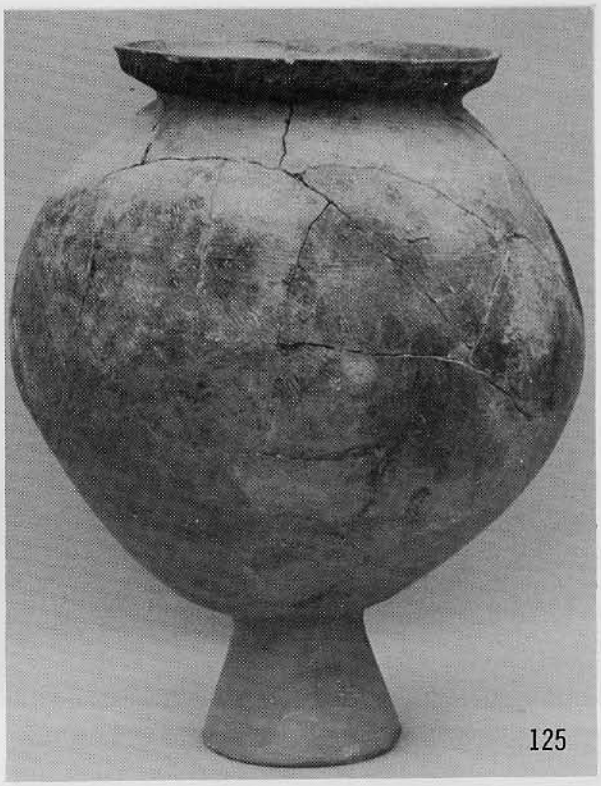


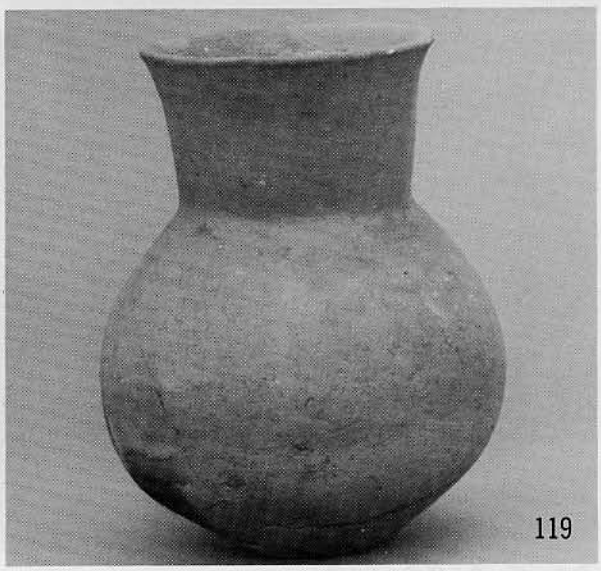




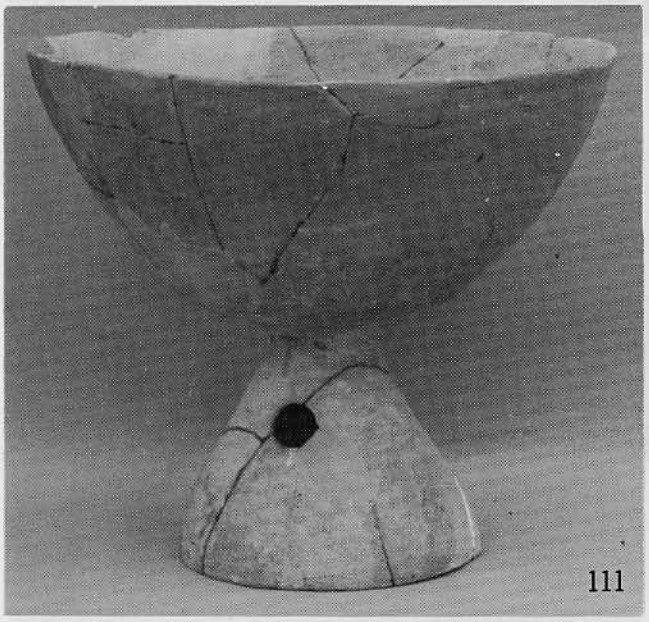


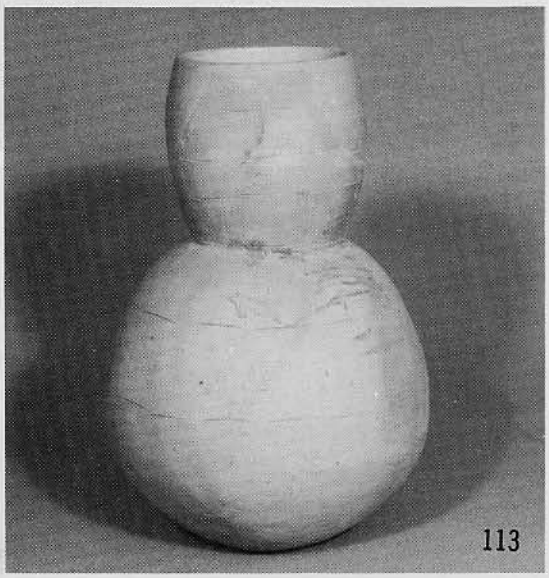
弥生土器　第５様式（１：３）

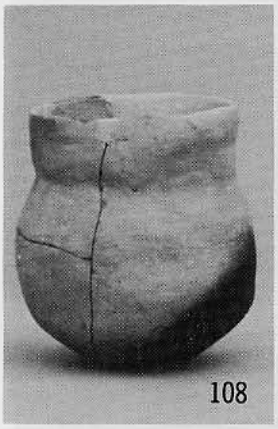


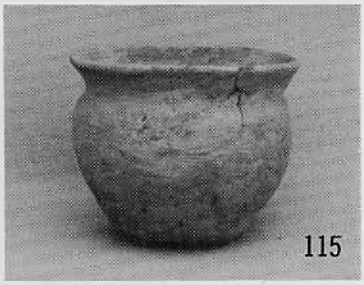


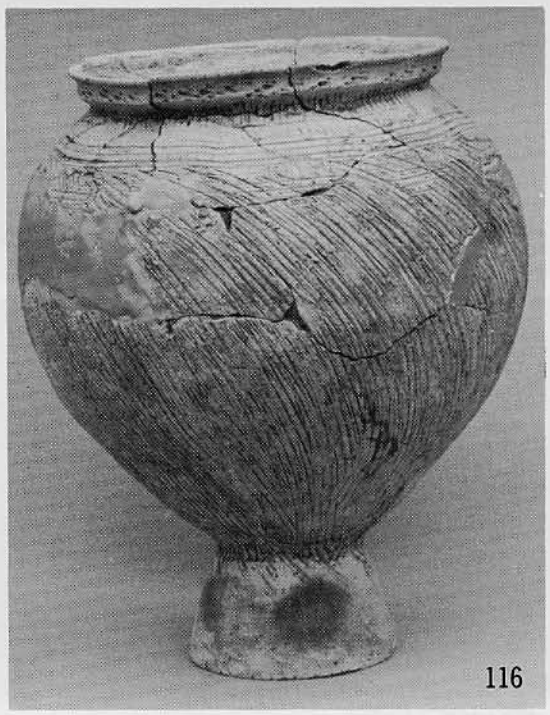
弥生土器　第５様式（１：３）



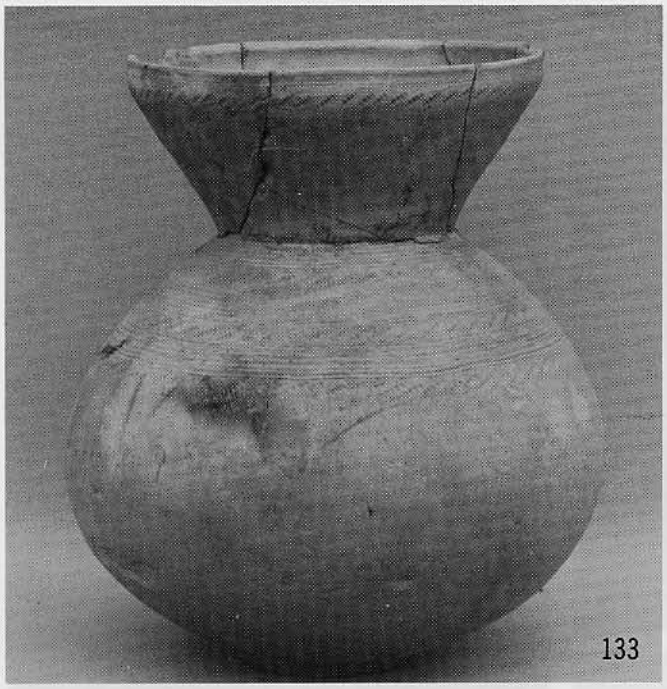


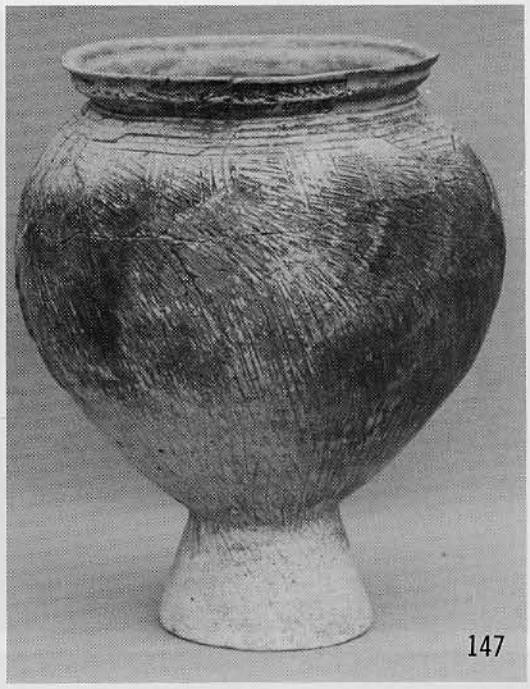


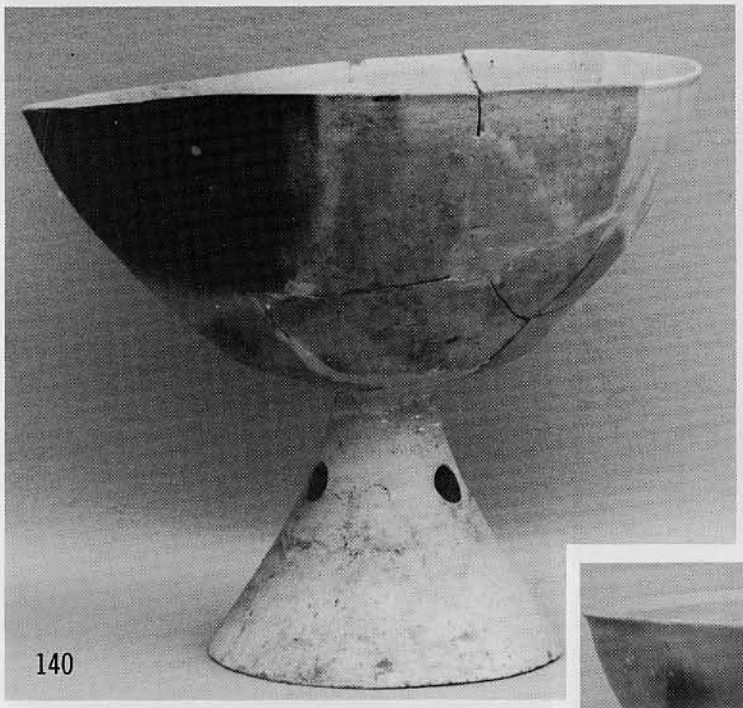


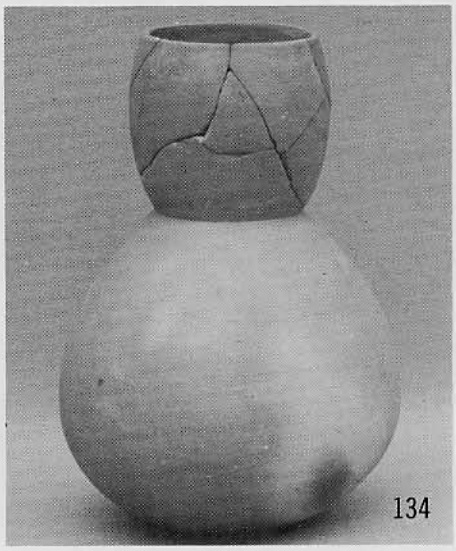


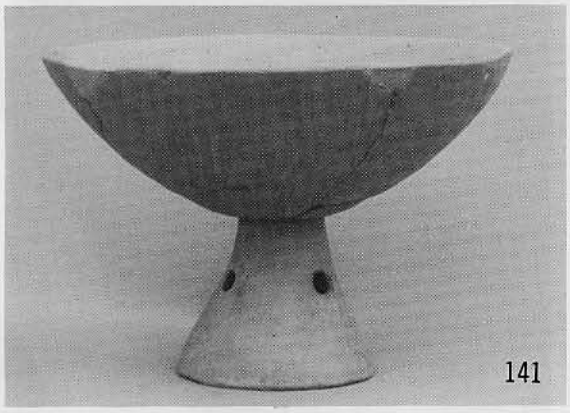
弥生土器　第５様式（１：３）



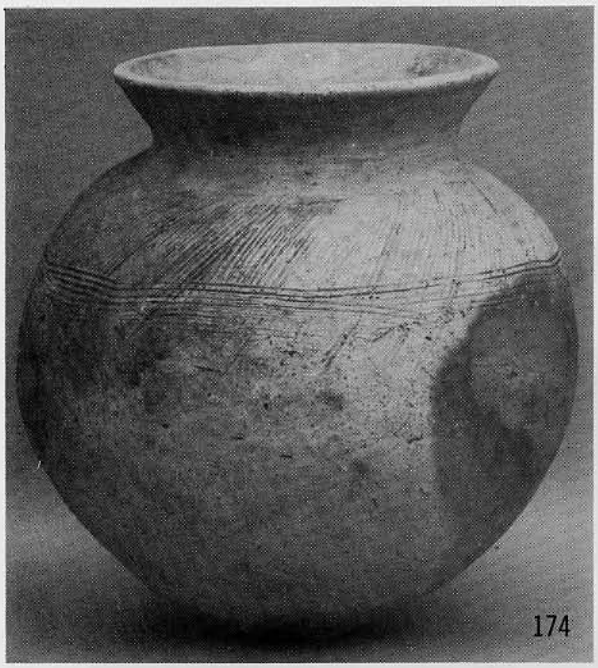


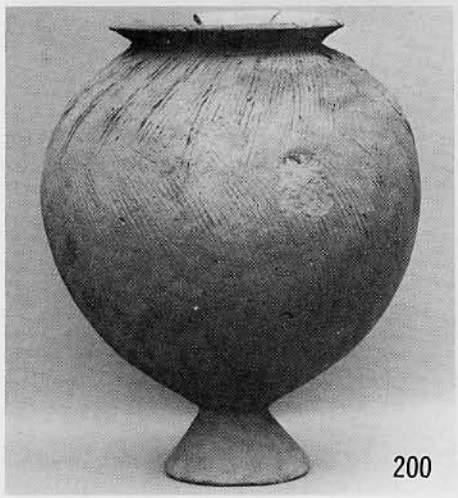


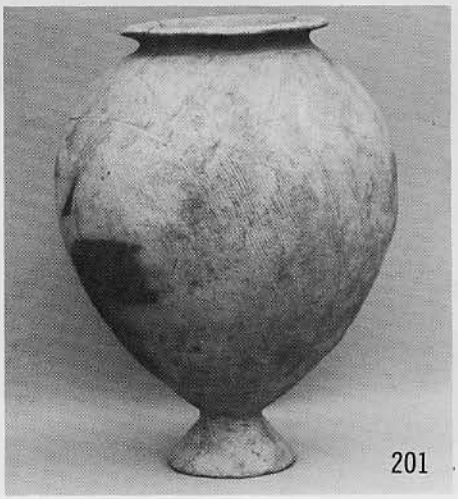




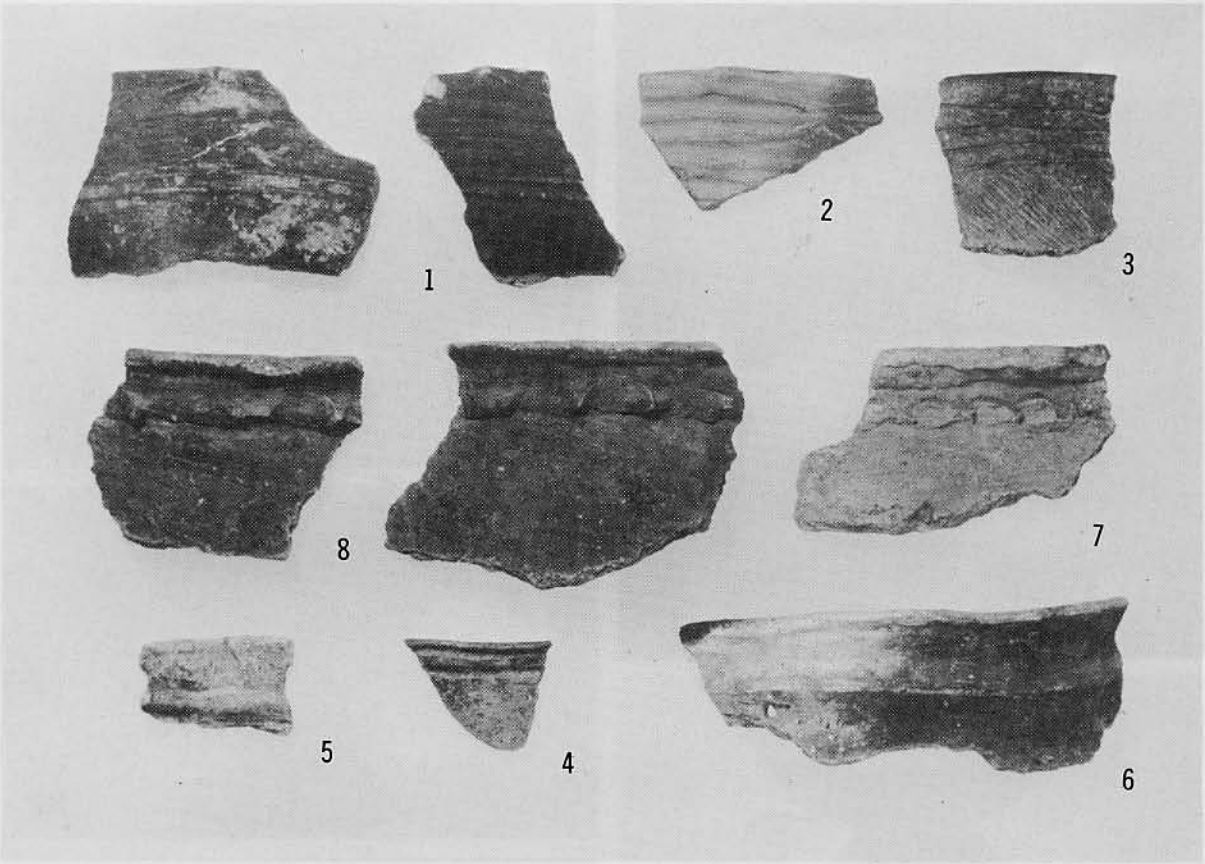
古式土師器（1：3）



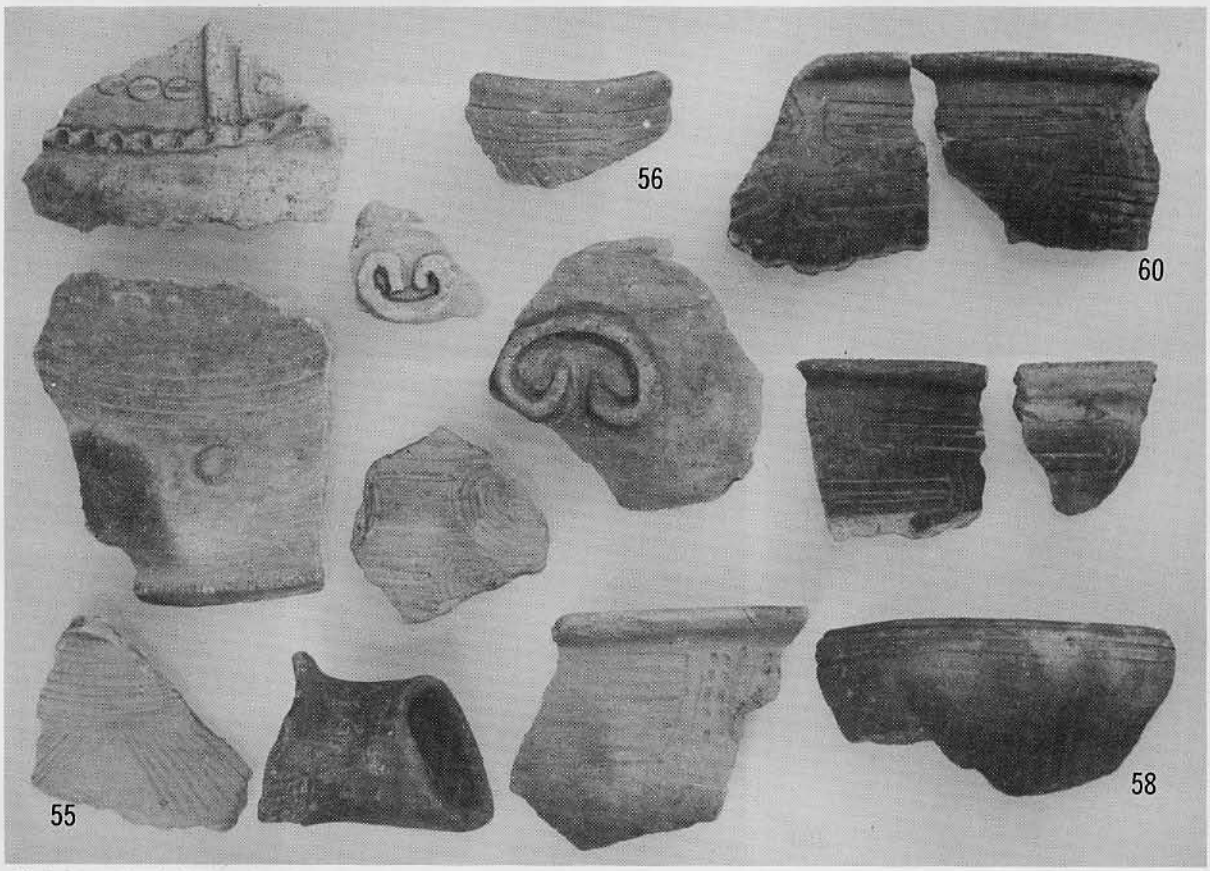




古式土師器、須恵器（1：3）200･201は（1：6）



縄文土器（1：3）



弥生土器　第1様式(亜式)（1：3）

弥生土器　第１様式　最下段右から２・３番目は朱彩土器（１：３）

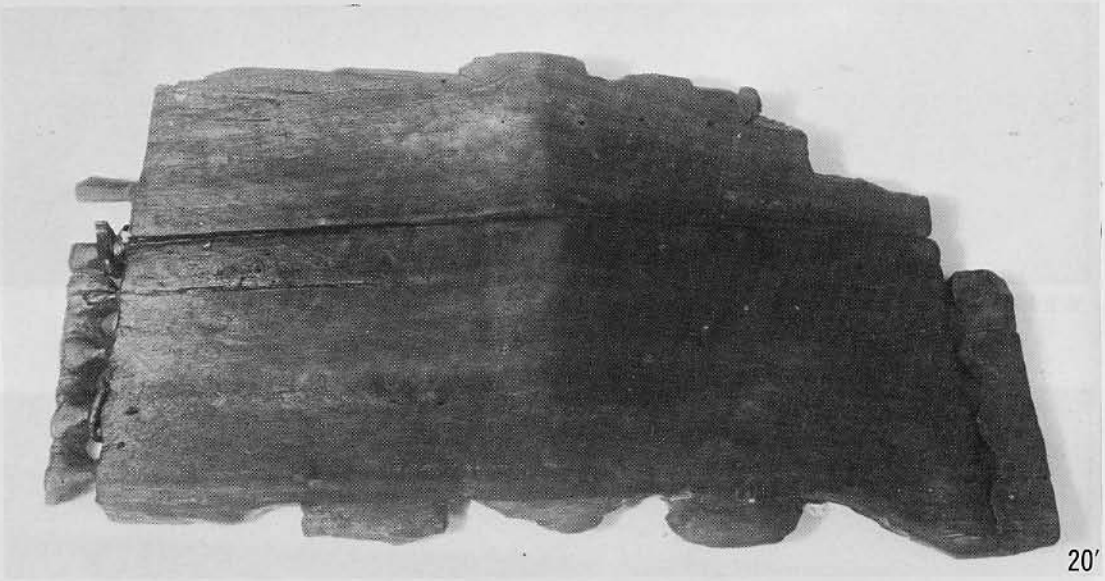
弥生土器　第１様式　底部文様（１：３）

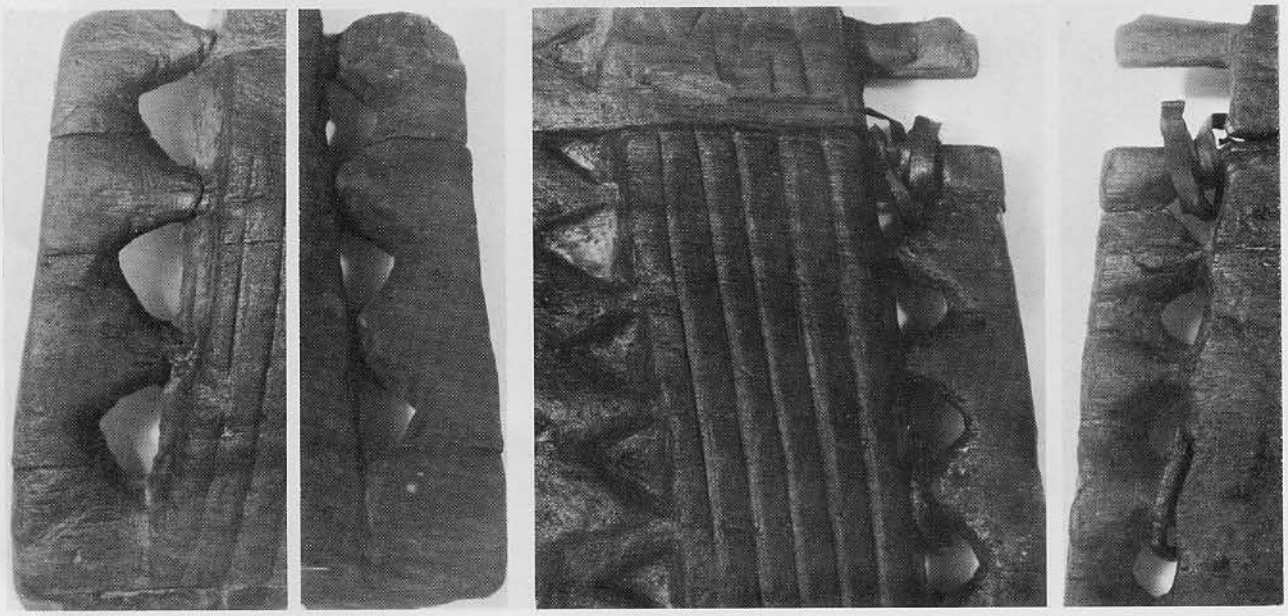
弥生土器　第１様式(亜式)・第２様式（１：３）

弥生土器　第１様式(亜式)　54は水神平Ⅰ式（１：３）

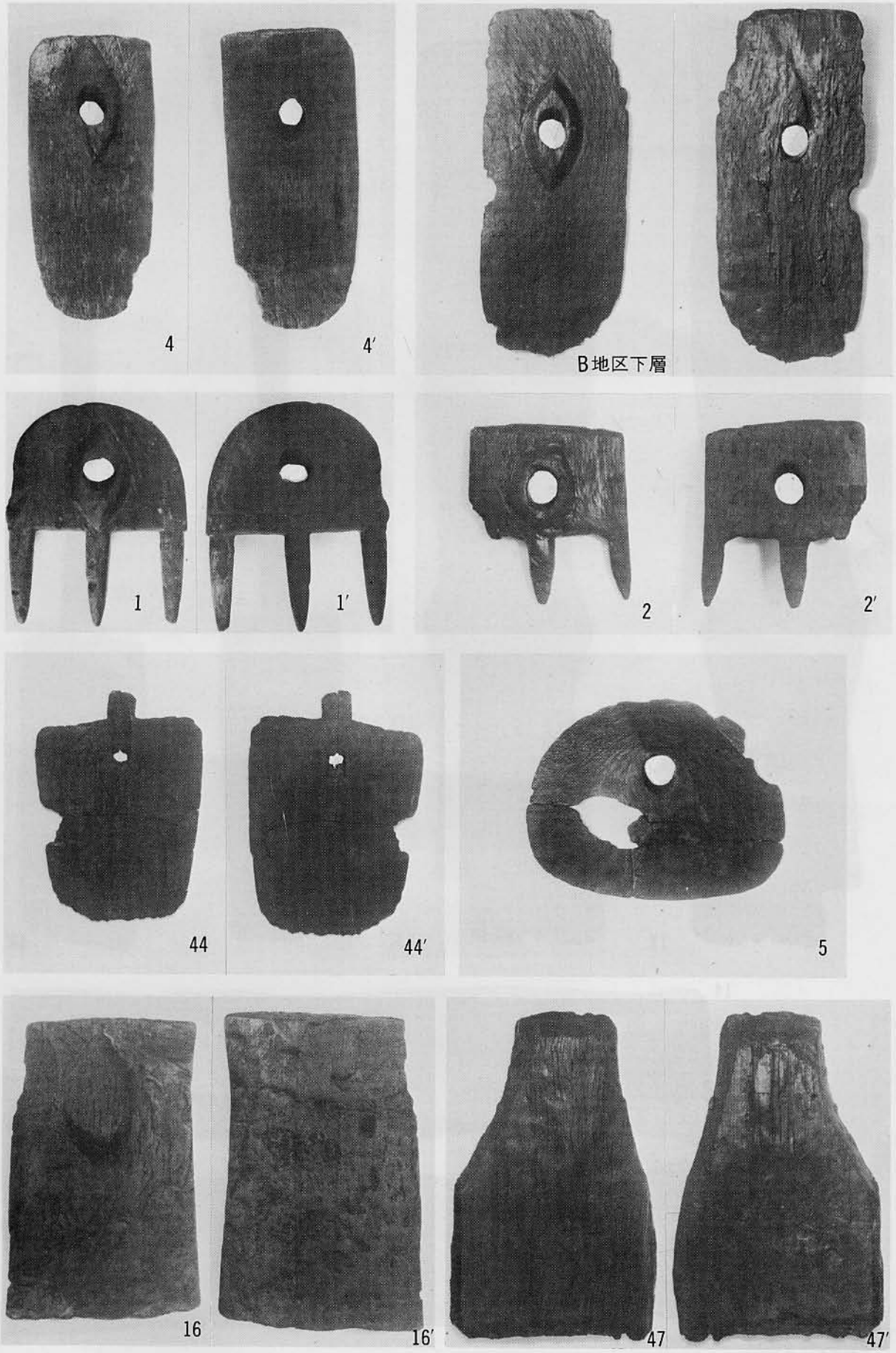
弥生土器・第３様式、右下はSX１の周溝内出土（１：３）

手焙型土器の特殊文様（約１：1.2）

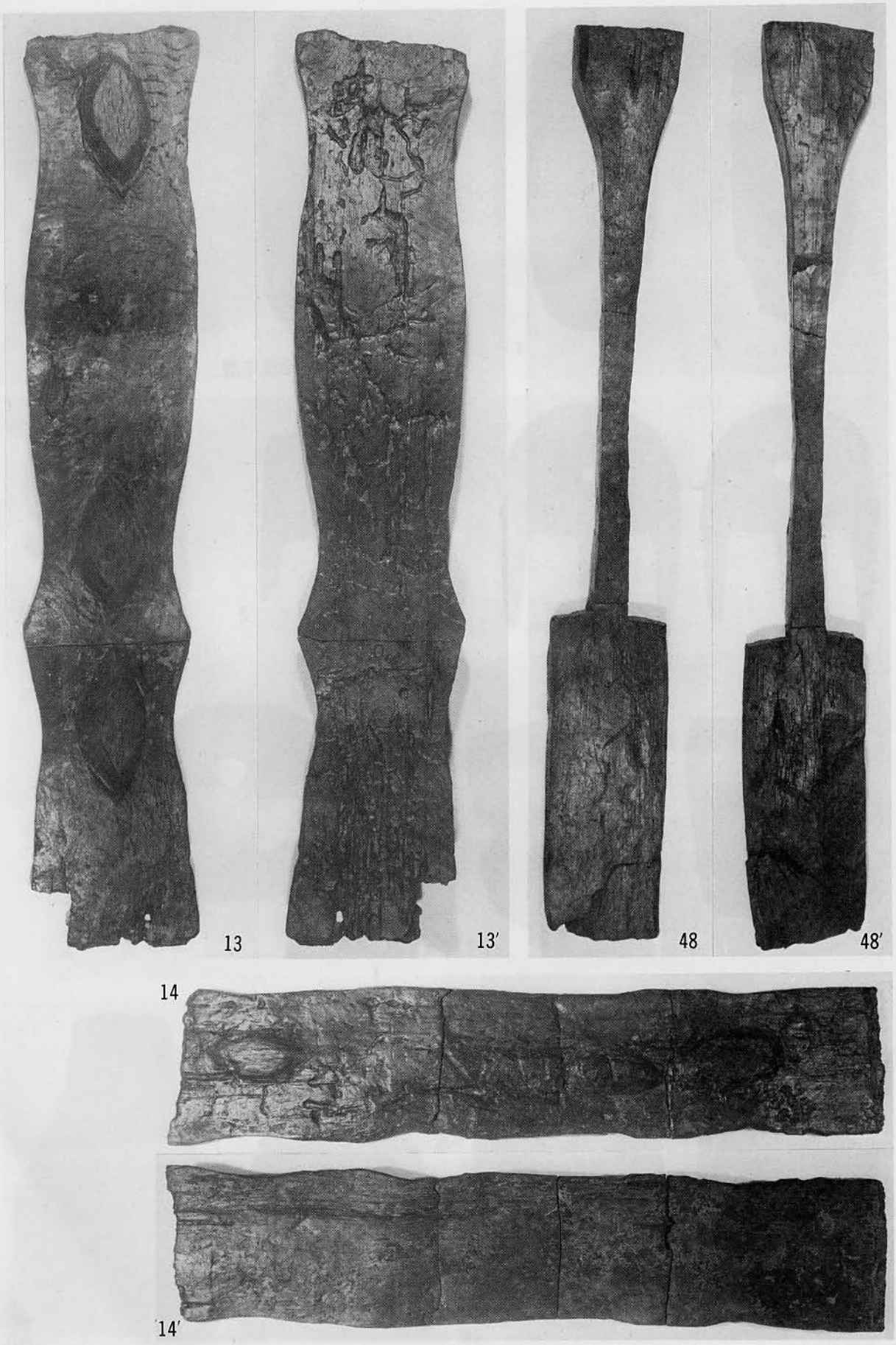




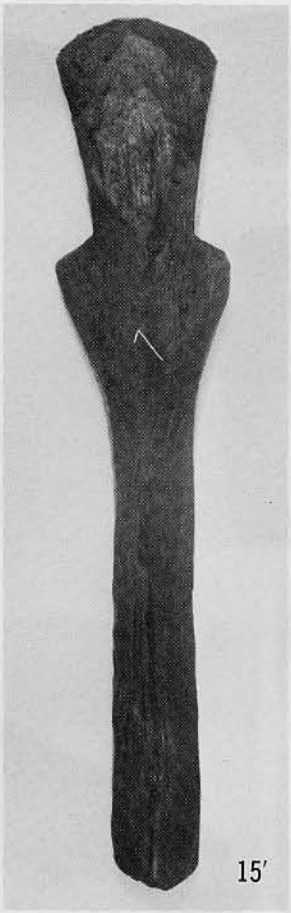
琴型木製遺物　上段（1：4）、下段細部拡大

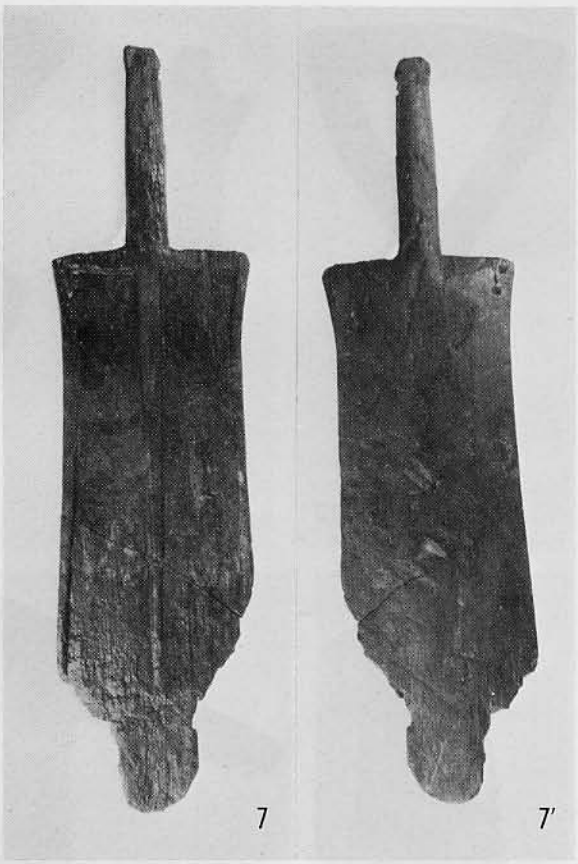


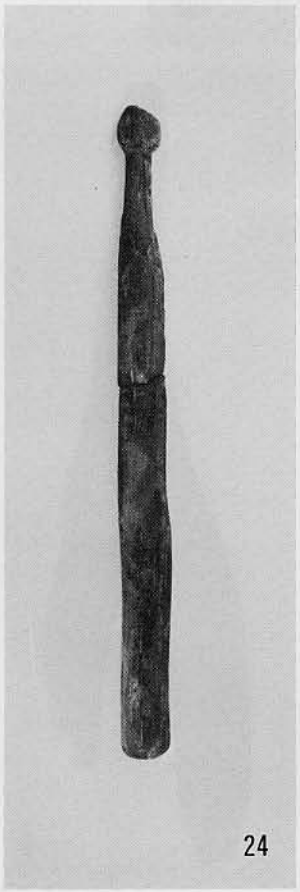
木製遺物　農具（約1：3）

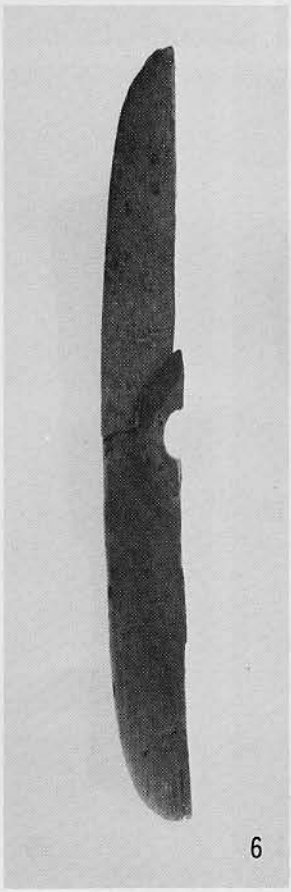


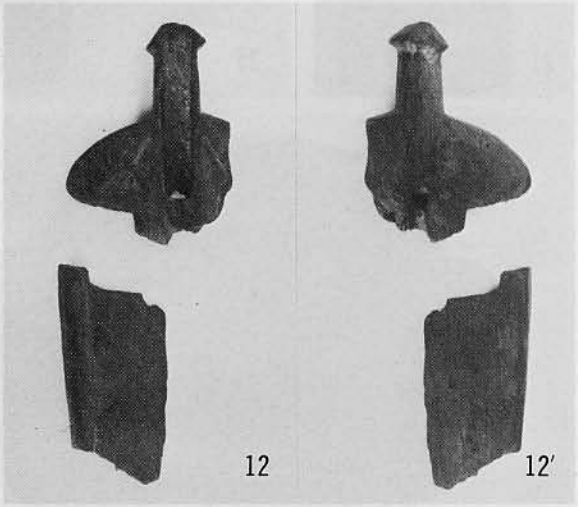
木製遺物　農具（約1：8）

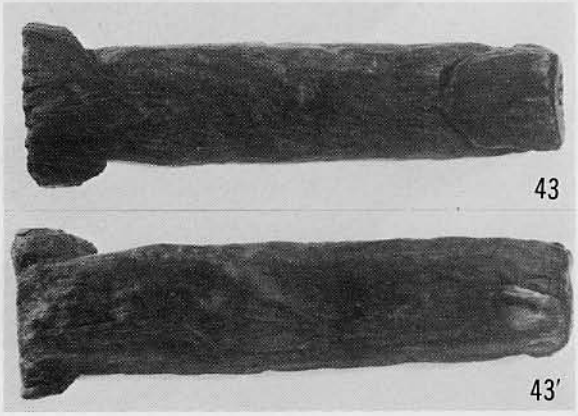




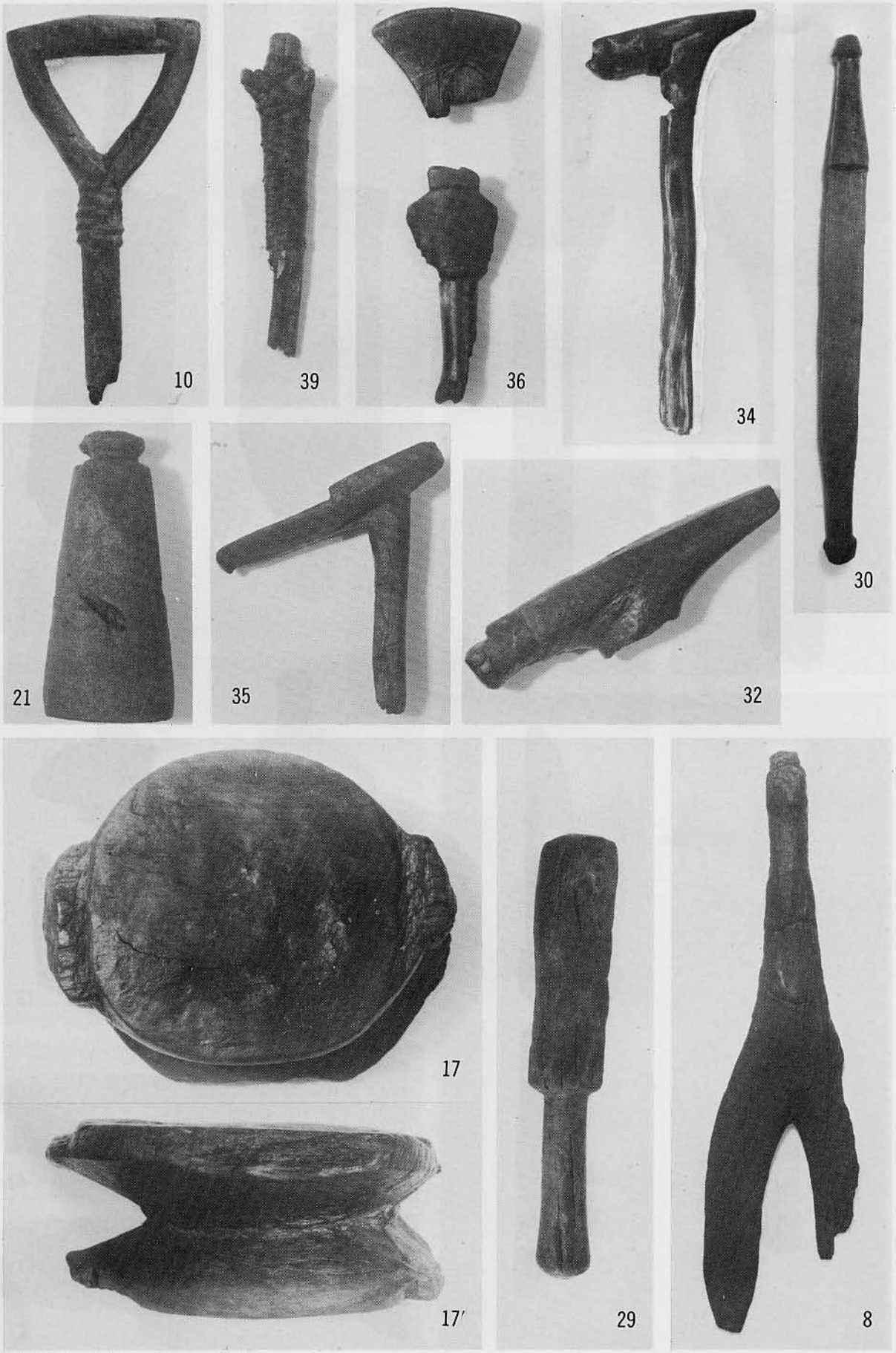






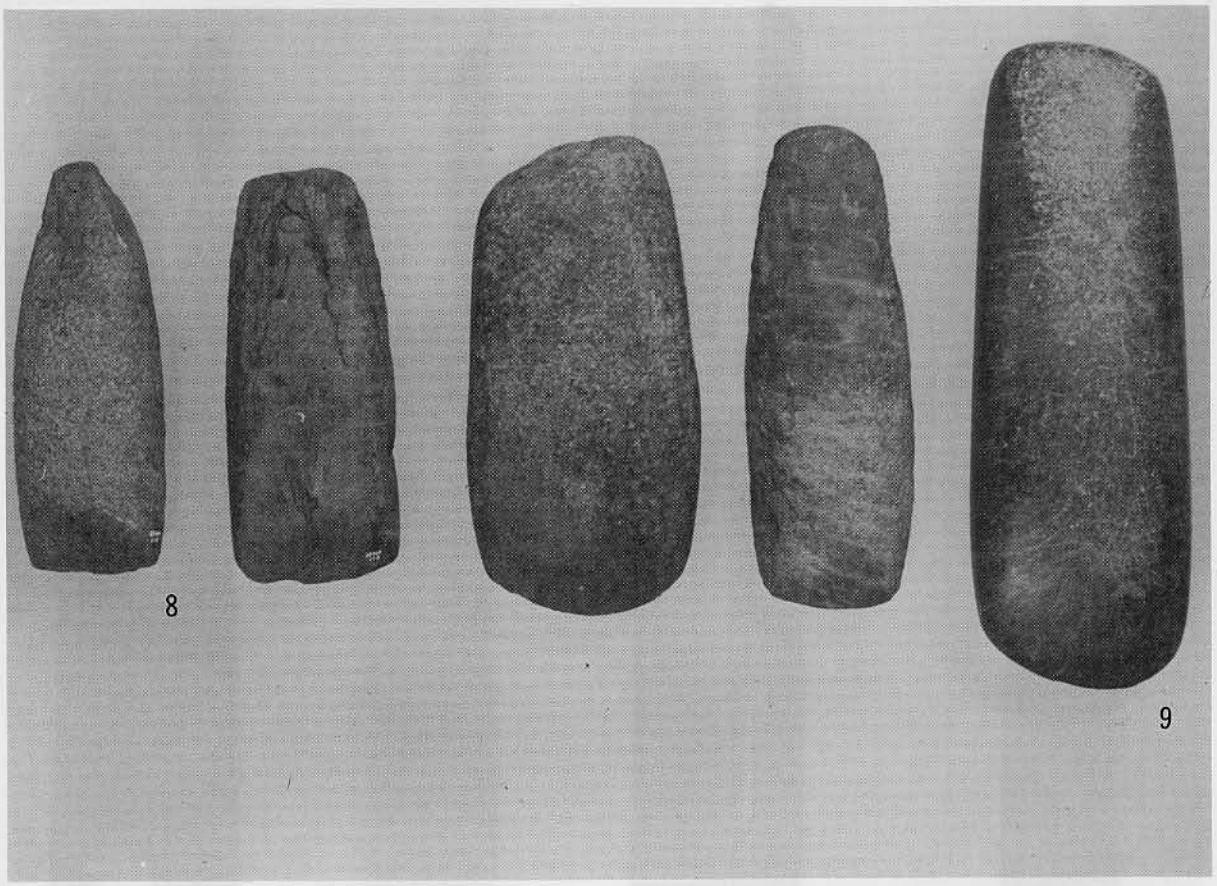


木製遺物　農具・工具・その他（約1：6）

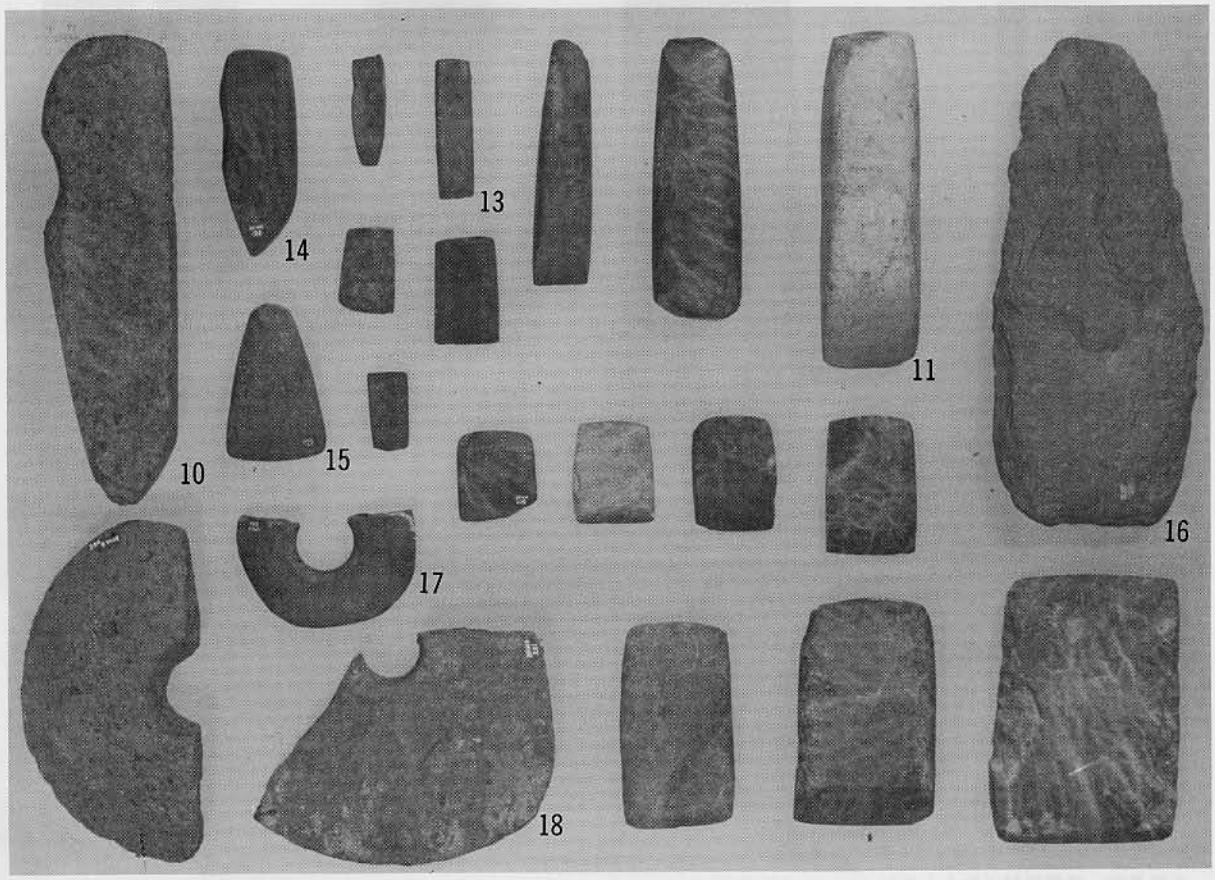


木製遺物　農具・工具・その他（約1：4）

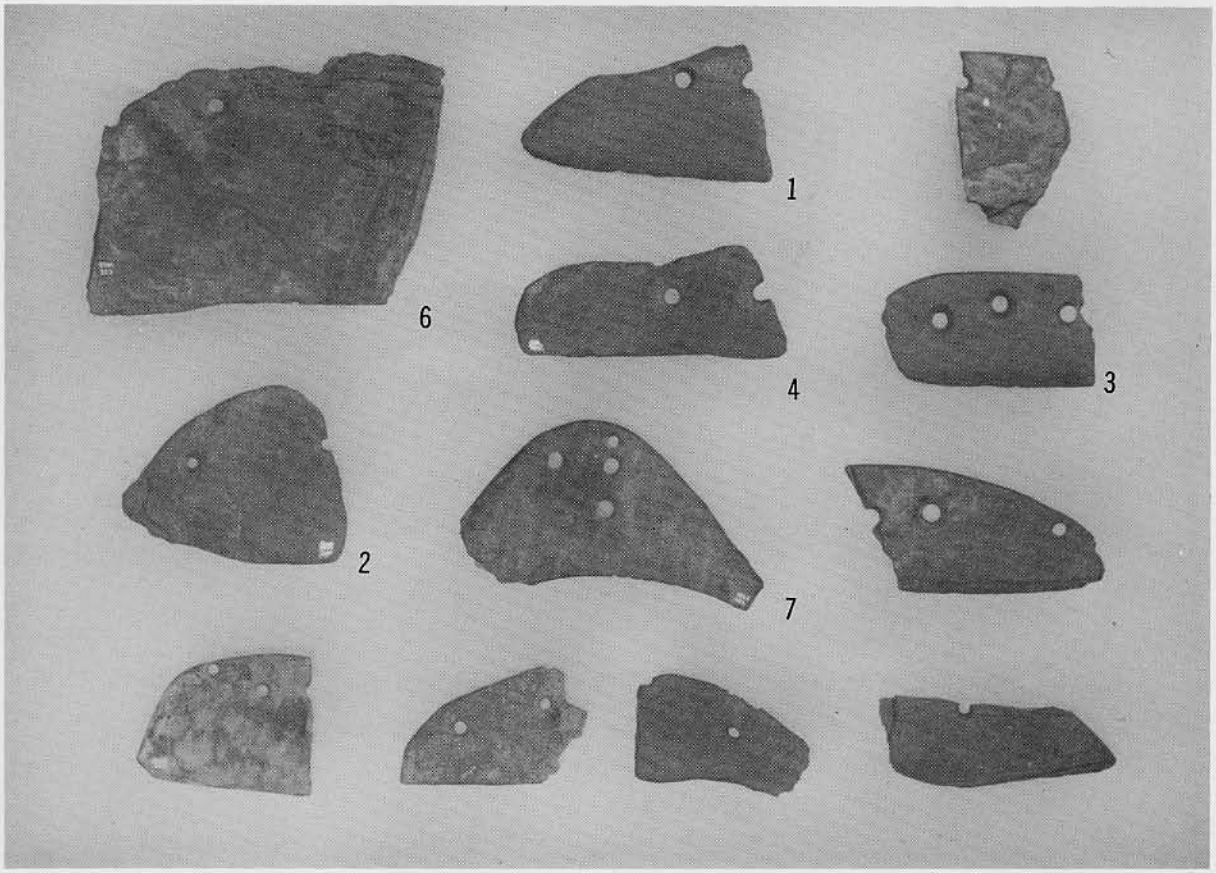
木製遺物　建築部材（約１：８）



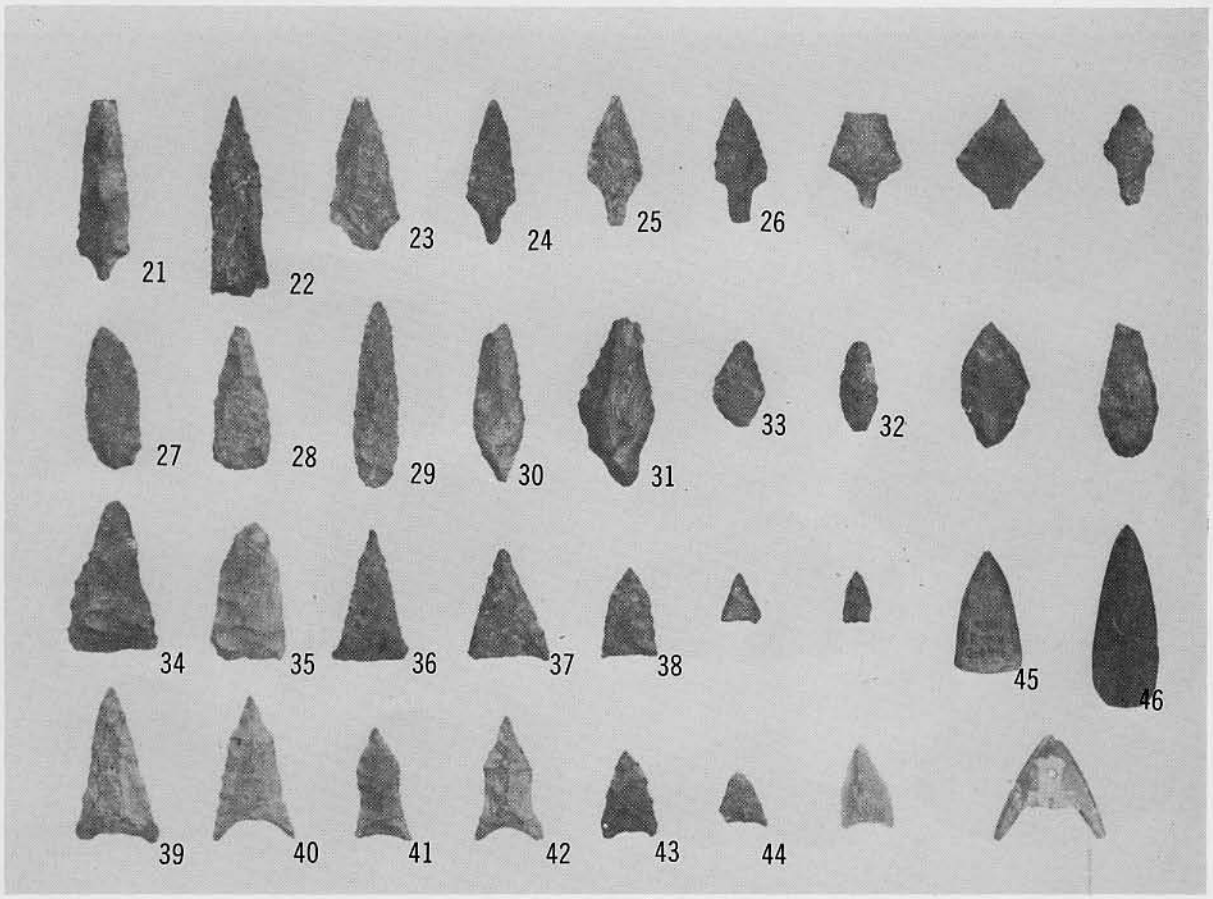
1．太型蛤刃石斧（1：3）



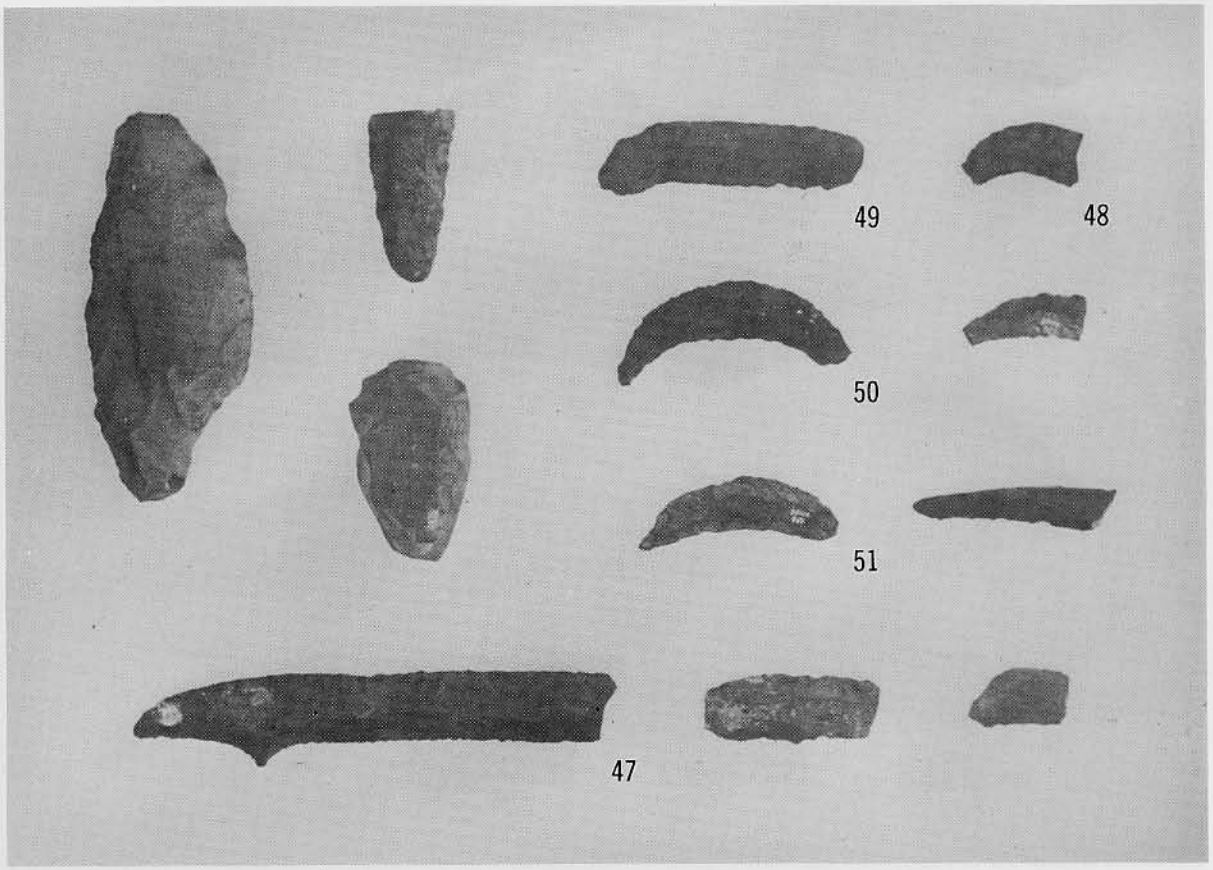
2．打製石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・環状石斧（1：3）



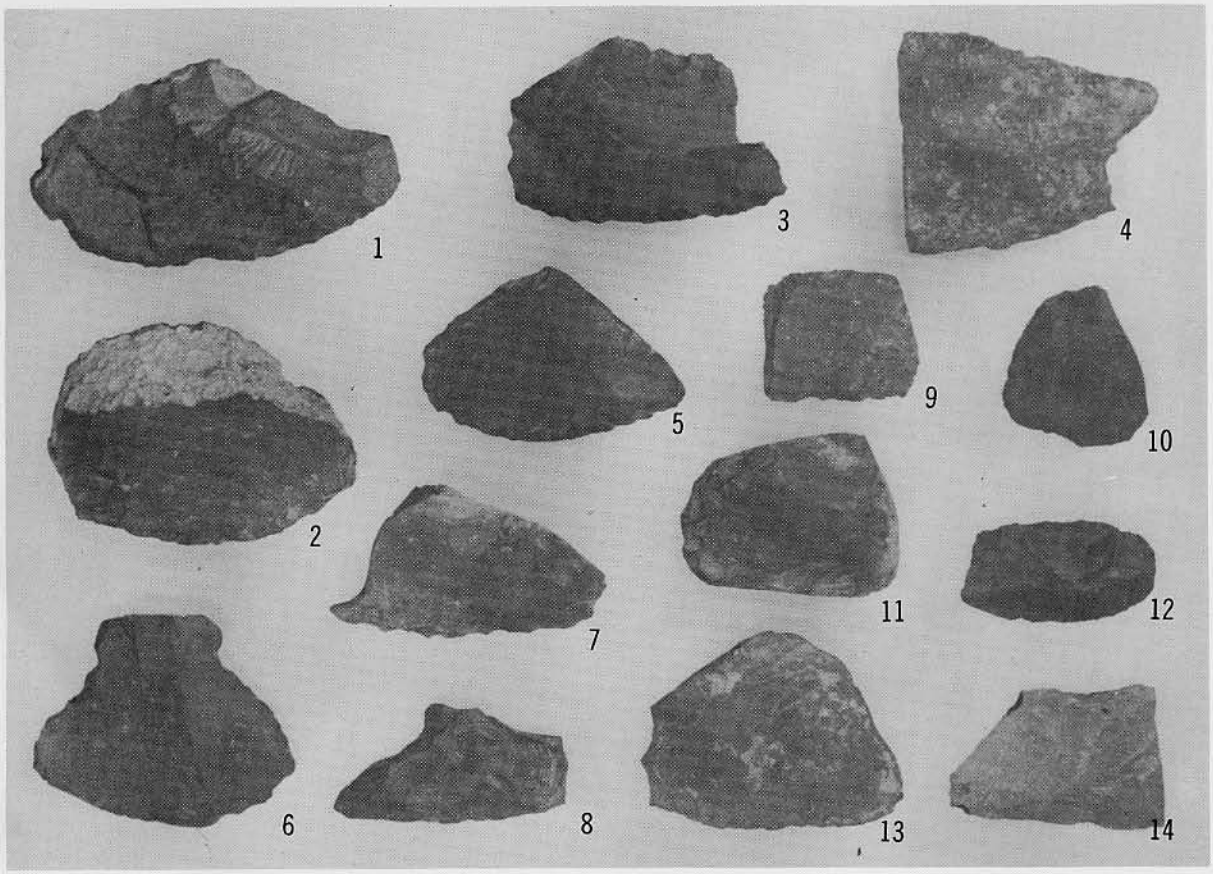
1．石庖丁（1：3）



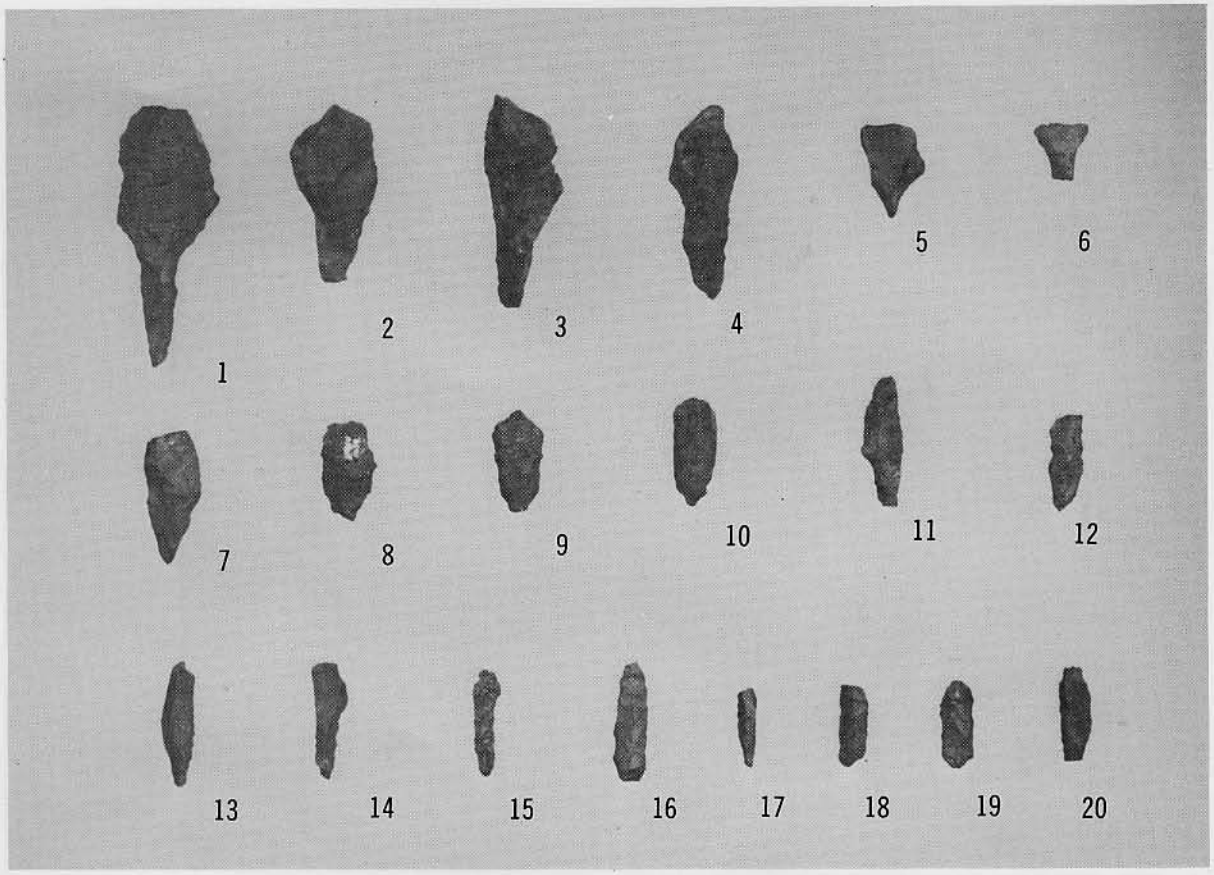
2．石鏃（打製・磨製）・銅鏃（2：3）



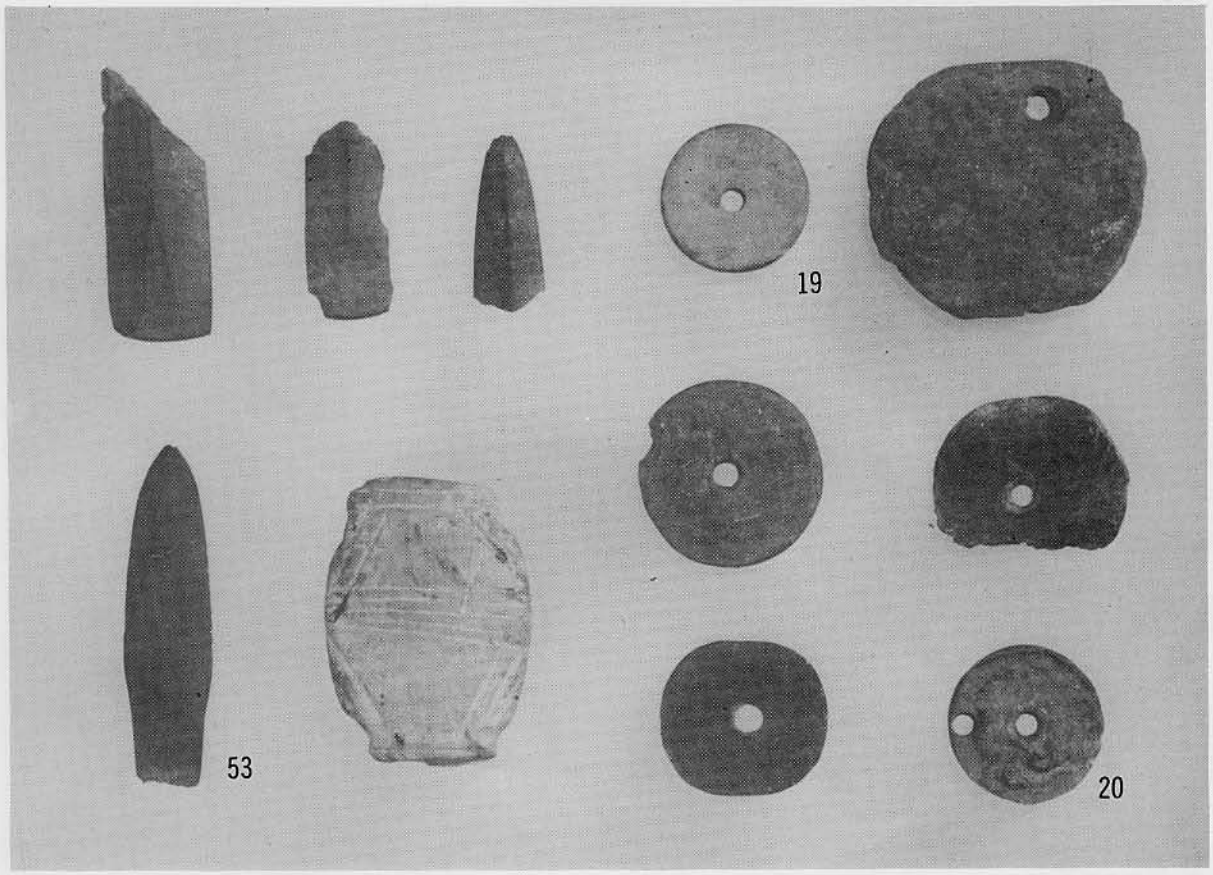
1．石槍・石小刀（2：3）



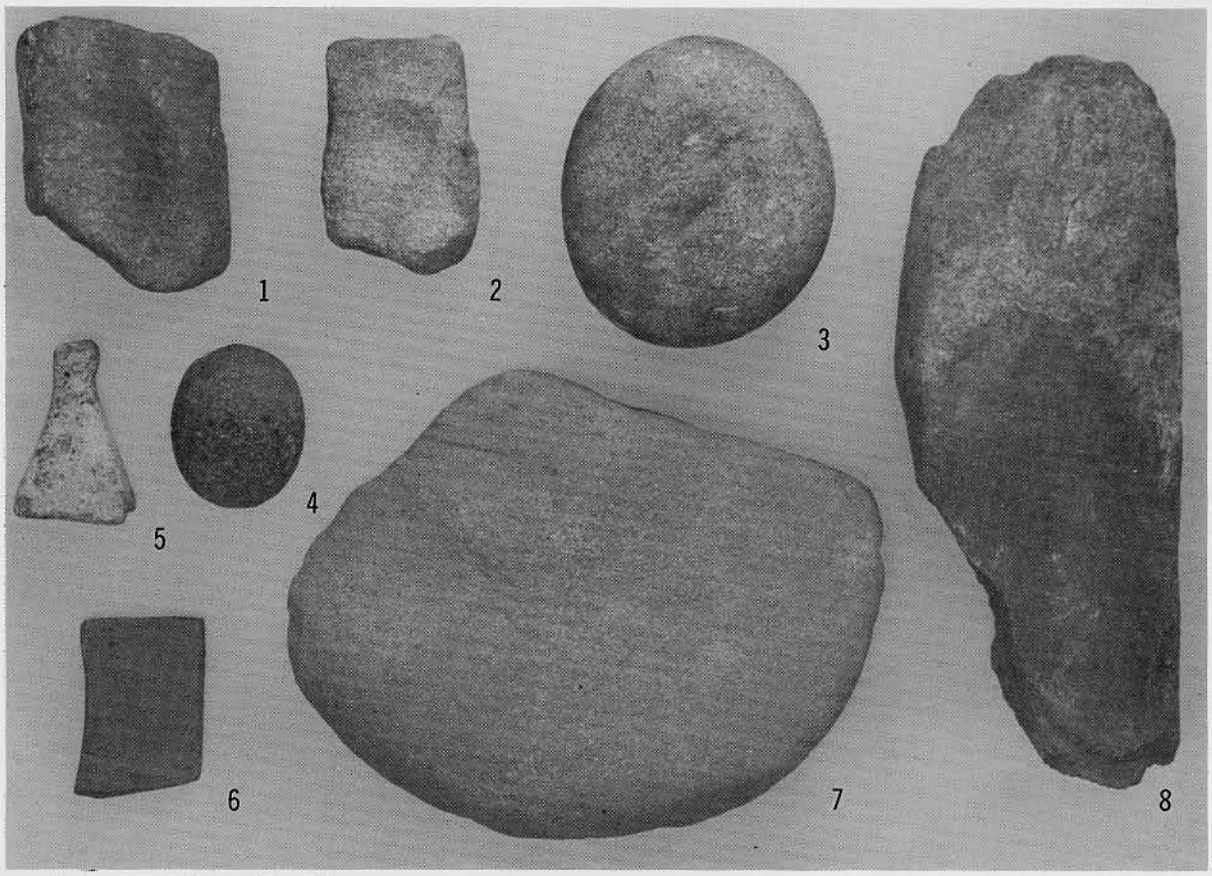
2．刃　器（1：2）



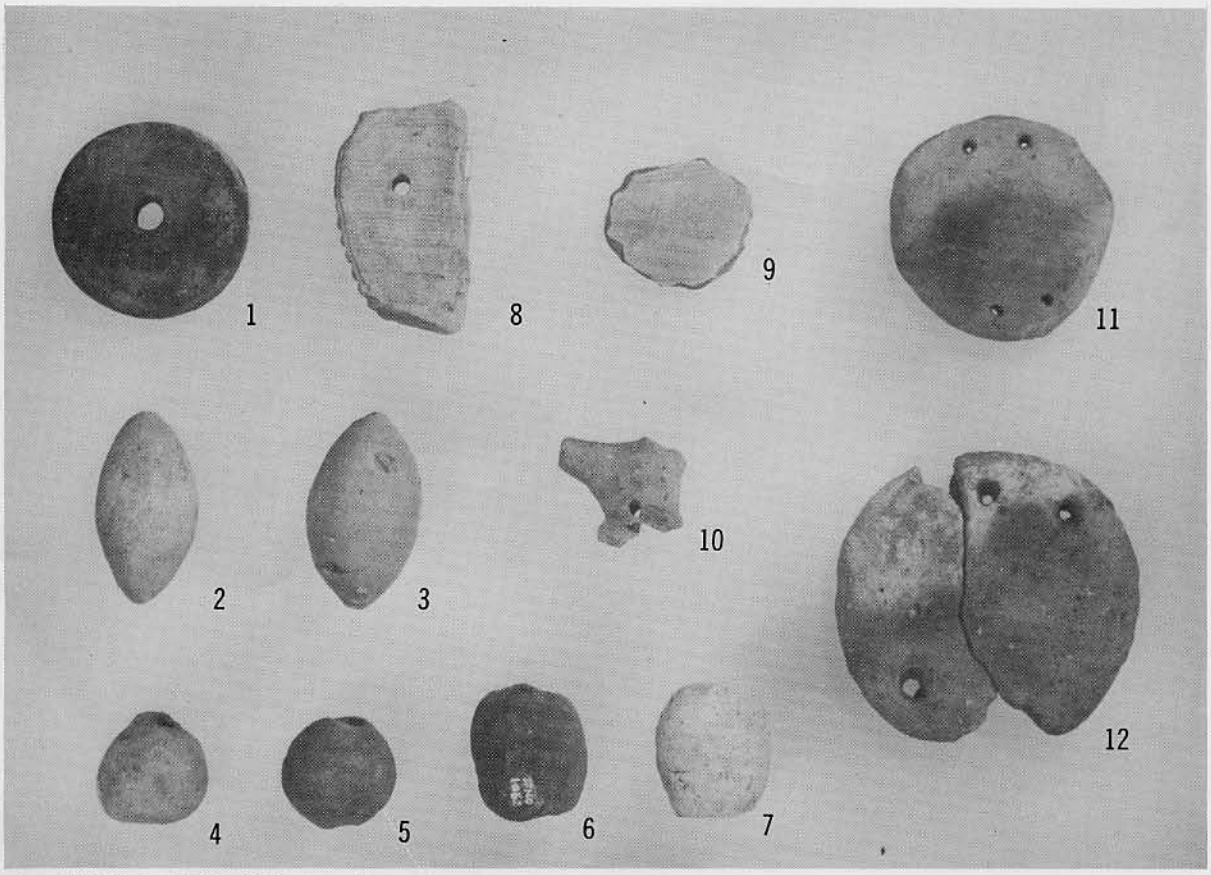
1．石　錐　（2：3）



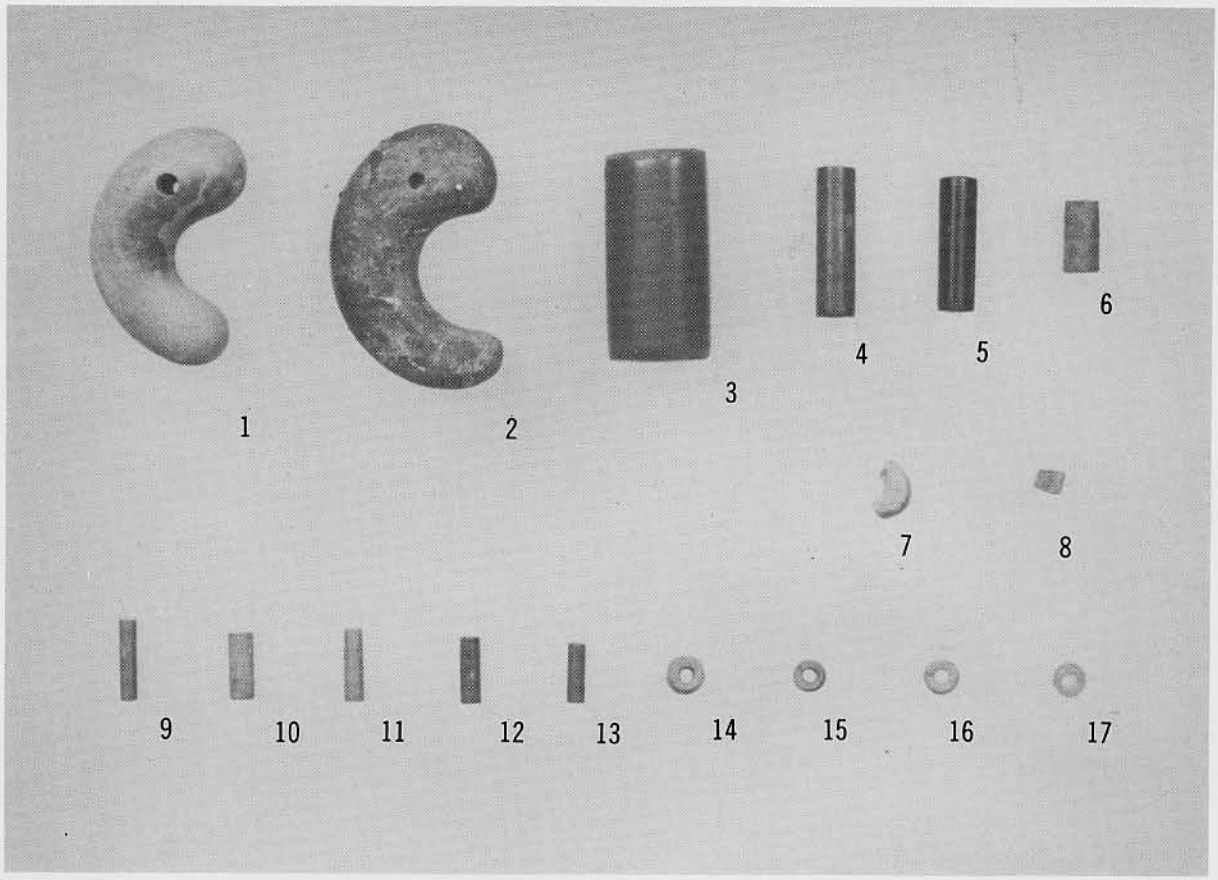
2．磨製石剣・磨製石鏃・垂飾・紡錘車　（2：3）



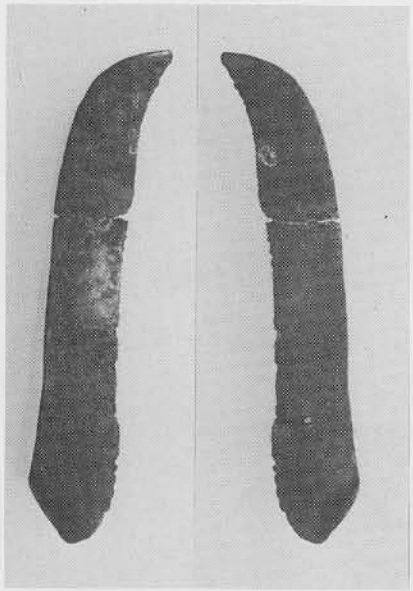
1．叩石・凹石・砥石　（1：3）



2．土製紡錘車・投弾・土錘・蓋　（2：3）



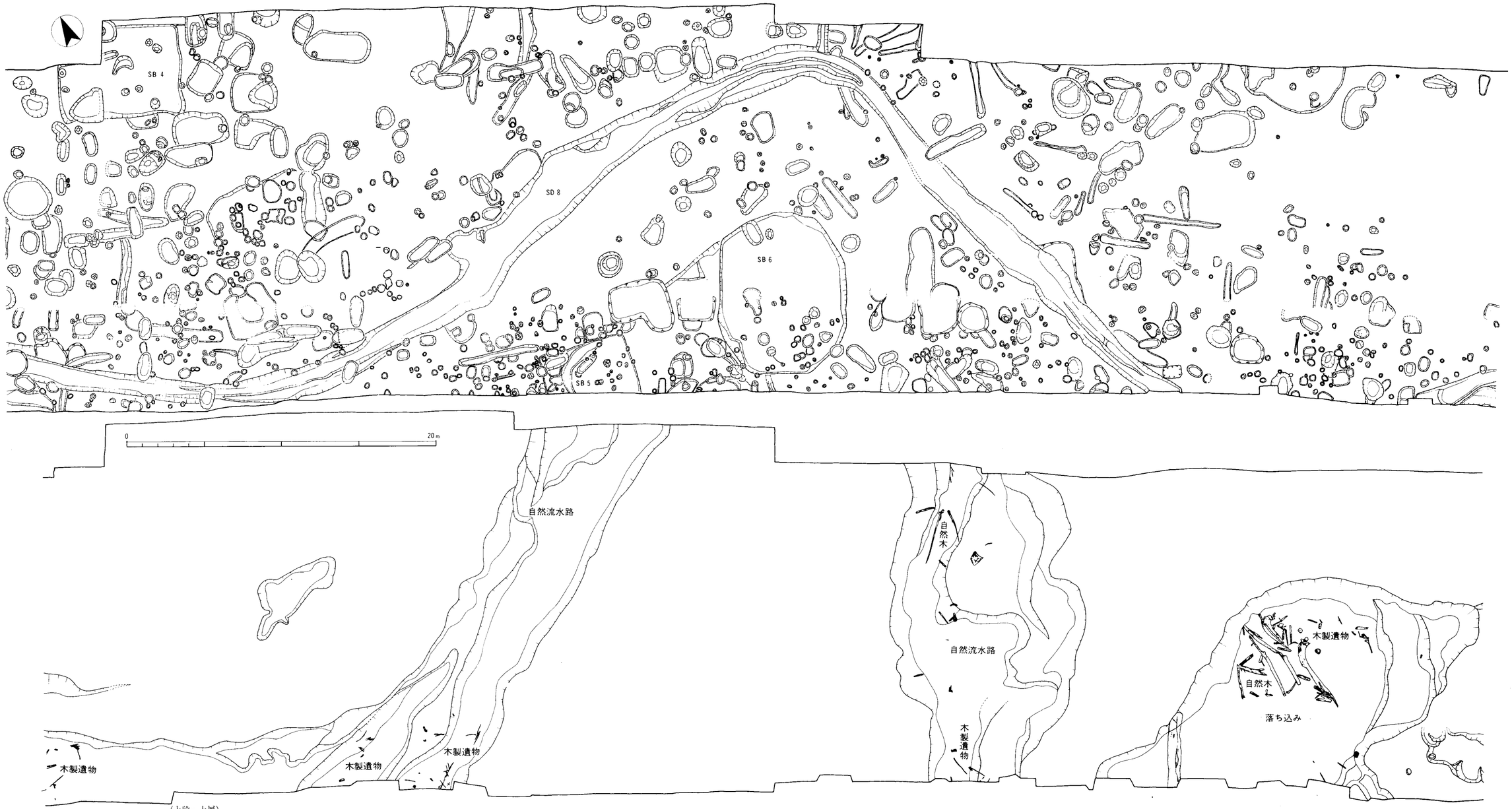
1．玉　類　（1：1）



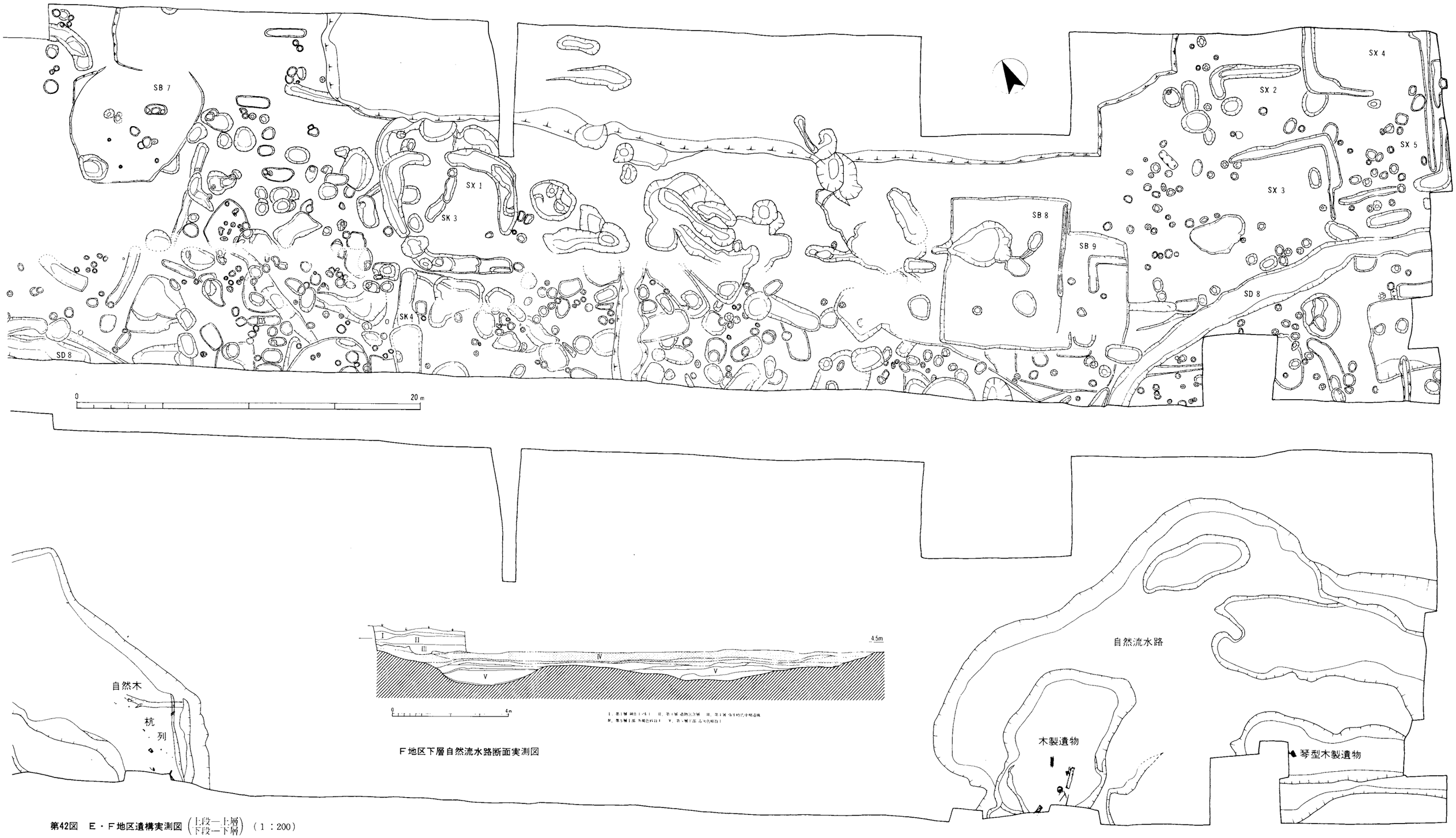
2．鉄　鎌　（2：3）

3．軒丸瓦　（1：2）

第40図　A・B地区遺構実測図 (上段―上層 / 下段―下層)　(1：200)



第41図　C・D地区遺構実測図（上段―上層 / 下段―下層）（1：200）

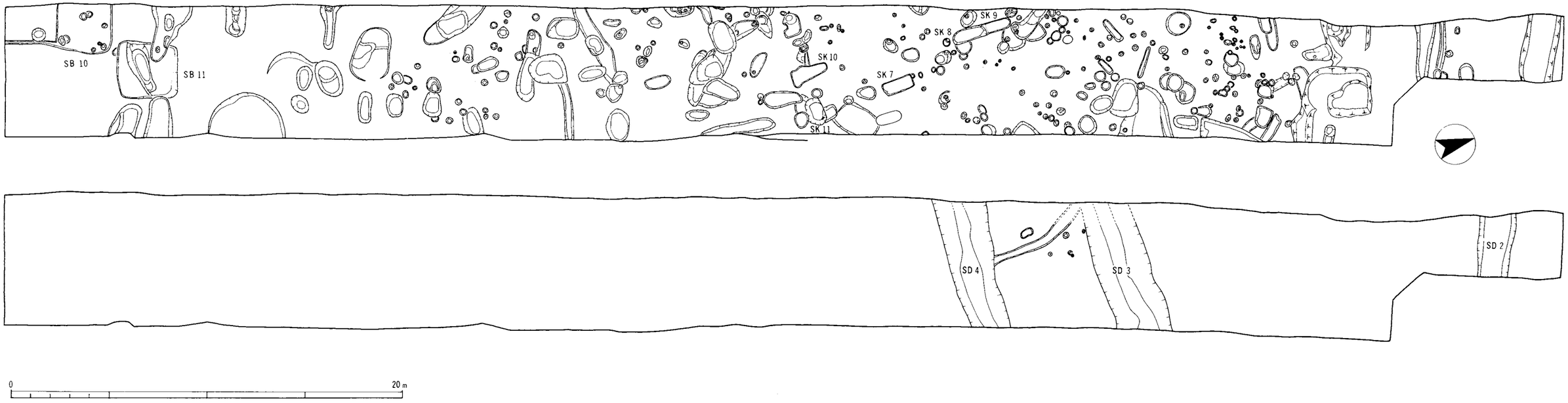


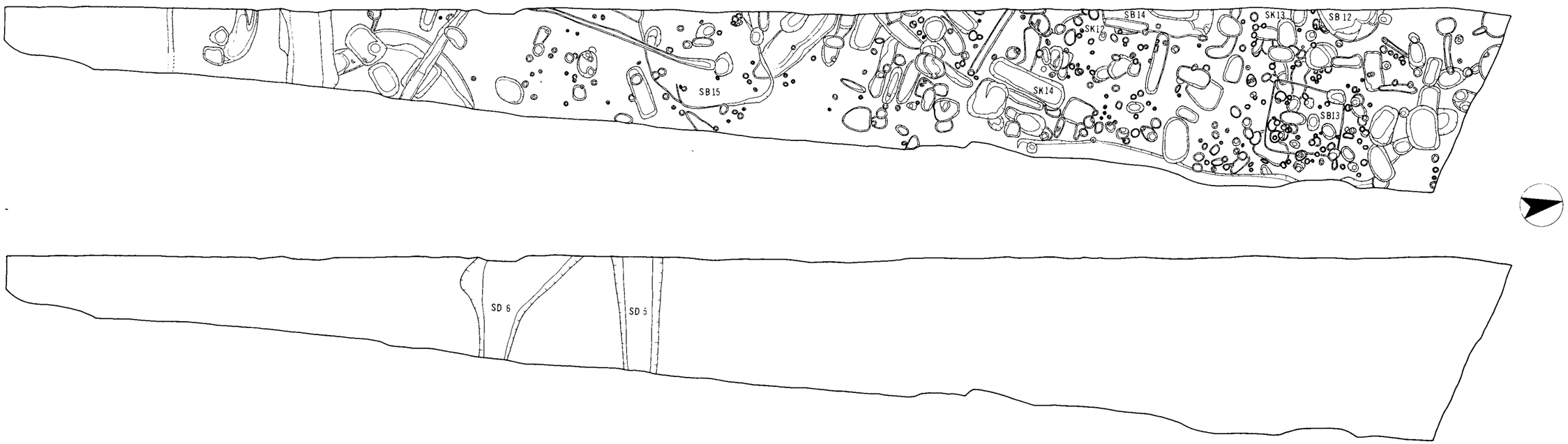
第42図　E・F地区遺構実測図（上段―上層／下段―下層）（1：200）

H地区ＳＤ14断面実測図（１：40）

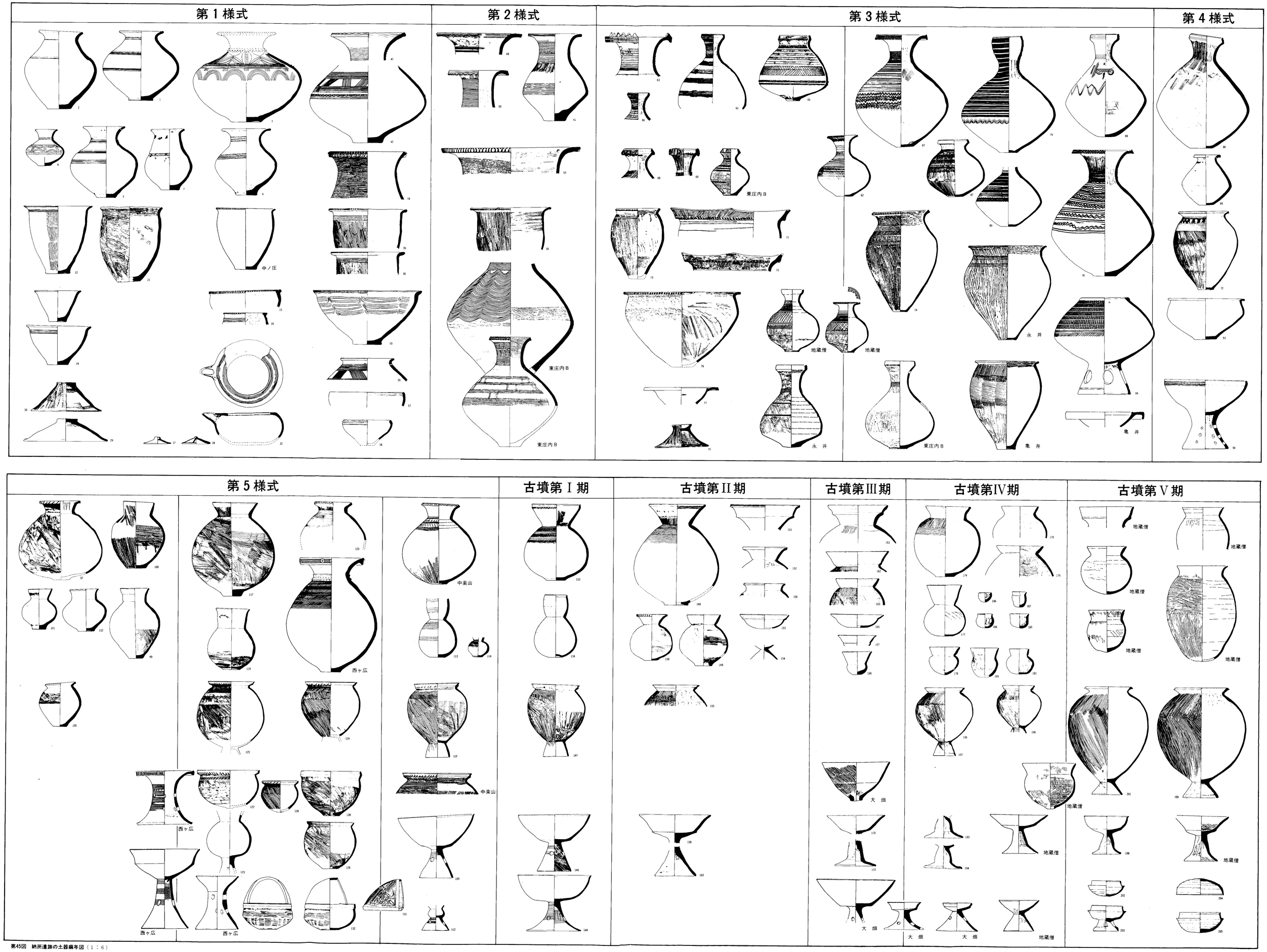
1. 黄褐色砂質土　2. 青灰色粘土　3. 黄褐色砂質土　4. 暗灰色粘質土　5. 暗灰色粘土　6. 暗灰褐色粘質土　7. 暗青灰色粘砂土　8. 黒灰色粘砂土　9. 黒褐色粘質土　10. 青黒色粘土　11. 黒灰色粗砂混り粘質土　1～4. 古墳時代前期　5～11. 第Ⅰ様式前半の土器を含む

第43図　Ｇ・Ｈ地区遺構実測図（上段―上層／下段―下層）（１：200）





第44図　Ⅰ・Ｊ地区遺構実測図（上段―上層　下段―下層）（1：200）



第45図　納所遺跡の土器編年図（１：６）